

昭和日本語方言の総合的研究

第三卷

方言文末詞〈文末助詞〉の研究
(中)



広島方言研究所

藤原与一

春陽堂

序

もともとは、上巻稿に、感声系の（ないし感声的な）文末詞をすべてとりあげていた。しかし、その印刷分量が夥多になったので、出版上、それが制限され、第四章ヤ行音文末詞の第二節までが上巻に収められることになった。

本巻は、第四章の第三節からはじまる。この巻を第七章の「カ・カイ」文末詞までとしたのは、しかるべきくぎりかたとされる。

下巻は、転成文末詞全般をあつかうものである。

凡 例

- 1) 略
 2) 略 } 上巻凡例参照
 3) 略 }

4) 本文中の実例には、通常、アクセント符号がつけてある。傍線部が、より高く発音されるべきものである。傍線部分に「〇〇〇〇〇〇〇〇」のようなくぎれのあるばあいには、のちの傍線部分がより高めに発音されることをあらわす。

5) 実例を現代共通語で言いかえているものに“ ”があれば、その部分は、土地人の説明のことばか、それに準じうるものかである。

この“ ”が、通常の説明本文の中に出ることもある。すべて、引用であることを明らかにしたものである。

6) 書中、他文献を引用し恩借するばあいに、著者名・発行所名、巻号・年月などを、省略することが多い。この『昭和日本語方言の総合的研究』の第一巻・第二巻の作業をおえてきたので、第三巻以降では、初二巻に依拠しつつ、本文中の文献出所記載の作業を簡略にする。委細については、『方言文末詞<文末助詞>の研究』下巻末の「引用(恩借)文献一覧」を参照せられんことを乞う。

一覧は、地方別(→県別)に整理してあり、各県内では、ものが、著編者アイウエオ順に排列されている。

目 次

序	i
凡 例	iii

上巻 簡目次

序 編	昭和日本語方言文末詞〈文末助詞〉研究 総論
本 編	昭和日本語方言文末詞〈文末助詞〉の統合的記述
序 章	記述方法
第一章	文末訴え音
第二章	文末詞「ヲー(オー)」
第三章	ナ行音文末詞
第四章	ヤ行音文末詞
第一節	総 説
第二節	「ヤ」の属

<以下 中巻>

第四章 ヤ行音文末詞	2
第三節 「ヨ」の属	2
一 はじめに	2
二 南島地方の「ヨ」	6
三 九州地方の「ヨ」ほか	9
四 中国地方の「ヨ」ほか	24
五 四国地方の「ヨ」ほか	36
六 近畿地方の「ヨ」ほか	44
七 中部地方の「ヨ」ほか	59

八 関東地方の「ヨ」ほか	75
九 東北地方の「ヨ」ほか	90
十 北海道地方の「ヨ」ほか	97
十一 おわりに	100
第四節 「エ」の属	102
一 はじめに	102
二 南島地方の「エ」ほか	103
三 九州地方の「エ」ほか	103
四 中国地方の「エ」ほか	111
五 四国地方の「エ」ほか	115
六 近畿地方の「エ」ほか	119
七 中部地方の「エ」ほか	132
八 関東地方の「エ」ほか	145
九 東北地方の「エ」ほか	148
十 北海道地方の「エ」ほか	156
十一 おわりに	157
第五節 「イ」の属	158
一 はじめに	158
二 南島地方の「イ」ほか	161
三 九州地方の「イ」ほか	164
四 中国地方の「イ」ほか	171
五 四国地方の「イ」ほか	176
六 近畿地方の「イ」ほか	178
七 中部地方の「イ」ほか	184
八 関東地方の「イ」ほか	190
九 東北地方の「イ」ほか	193
十 北海道地方について	196

十一	おわりに	197
第五章	サ行音ザ行音文末詞	199
第一節	総説	199
第二節	「サ」の属	200
一	はじめに	200
二	南島地方の「サ」音形文末詞	201
三	九州地方の「サ」ほか	204
四	中国四国地方の「サ」ほか	212
五	近畿地方の「サ」ほか	215
六	中部地方の「サ」ほか	221
七	関東地方の「サ」ほか	230
八	東北地方の「サ」ほか	236
九	北海道地方の「サ」ほか	249
十	おわりに	250
第三節	「ザ」の属	251
一	はじめに	251
二	九州地方の「ザ」ほか	252
三	中国地方の「ザ」	259
四	四国地方の「ザ」ほか	261
五	近畿地方の「ザ」ほか	262
六	中部地方の「ザ」ほか	264
七	東国地方の「ザ」ほか	268
八	おわりに	270
第四節	「ゾ」の属	270
一	はじめに	270
二	南島地方について	273
三	九州地方の「ゾ」ほか	278

四	中国地方の「ゾ」ほか	298
五	四国地方の「ゾ」ほか	305
六	近畿地方の「ゾ」ほか	318
七	中部地方の「ゾ」ほか	330
八	関東地方の「ゾ」ほか	343
九	東北地方の「ゾ」ほか	349
十	北海道地方の「ゾ」ほか	358
十一	おわりに	359
第五節	「ソ」について	359
第六節	「ゼ」の属	361
一	はじめに	361
二	南島方言の中の「ゼ」	365
三	九州地方の「ゼ」ほか	366
四	中国地方の「ゼ」ほか	370
五	四国地方の「ゼ」ほか	374
六	近畿地方の「ゼ」ほか	378
七	中部地方の「ゼ」ほか	383
八	関東地方の「ゼ」ほか	390
九	東北地方の「ゼ」ほか	393
十	北海道地方について	397
十一	おわりに	397
第六章	感声的文末詞「ダ」	399
一	はじめに	399
二	分布と生態	399
	付記 「ヒー」「ヒャー」	407
第七章	「カ・カイ」の属	409
第一節	総説	409

一 「カ・カイ」文末詞	409
二 原 態	410
三 今日の段階での「カ・カイ」	411
四 特定詞	412
五 「カ」形態の展開	412
六 用 法	413
七 「カ」に関する複合形	414
第二節 「カ・カイ」の存立と活動	415
一 南島地方の「カ・カイ」ほか	415
二 九州地方の「カ・カイ」ほか	418
三 中国地方の「カ・カイ」ほか	442
四 四国地方の「カ・カイ」ほか	447
五 近畿地方の「カ・カイ」ほか	457
六 中部地方の「カ・カイ」ほか	477
七 関東地方の「カ・カイ」ほか	489
八 東北地方の「カ・カイ」ほか	494
九 北海道地方の「カ・カイ」ほか	499
十 おわりに	501
付 章 命令表現文での「ロ」と 禁止命令表現文での「ナ」と	502
一 はじめに	502
二 「ロ」について	502
三 「ナ」について	507
索 引	509
I 方言事象索引	509
II 事項索引	525

下 卷 大 綱

第八章 転成の文末詞

第九章 助詞系の転成文末詞

第十章 助動詞系の転成文末詞

第十一章 動詞系の転成文末詞

第十二章 形容詞系の転成文末詞

第十三章 形容動詞系の転成文末詞

第十四章 名詞系の転成文末詞

第十五章 代名詞系の転成文末詞

第十六章 副詞系の転成文末詞

第十七章 感動詞系(文系)の転成文末詞

上巻末に収載されている「第四章 ヤ行音文末詞」第一節・第二節の内容

第一節 総説

第二節 「ヤ」の属

- 一 はじめに
- 二 南島地方の「ヤ」ほか
- 三 九州地方の「ヤ」ほか
- 四 中国地方の「ヤ」ほか
- 五 四国地方の「ヤ」ほか
- 六 近畿地方の「ヤ」ほか
- 七 中部地方の「ヤ」ほか
- 八 関東地方の「ヤ」ほか
- 九 東北地方の「ヤ」ほか
- 十 北海道地方の「ヤ」ほか
- 十一 むすび

<上巻をうけて>

第四章 ヤ行音文末詞

第三節 「ヨ」の属

一 はじめに

ナ行音文末詞とヤ行音文末詞とは、どちらも、基本的な感声系文末詞とされる。ともに、歴史的に見ても由緒あるもの、あるいは、古典性をそなえているものと見ることができよう。古来のものであって、しかも、現代諸方言上にあっても、その勢力のつよいのが、ナ行音文末詞・ヤ行音文末詞である。「ヨ」は、そういう歴史的な大勢の中に位置する、一つの有力な文末詞である。「ヨ」の特定の用法などが明治以降におこったとされるようなことがあったとしても、文末詞「ヨ」そのものの発生と展開とは、かなり幽遠のこととされるのではないか。

「ヨ」は、「ヤ」とともに、ヤ行音文末詞の双璧をなす。（「ヤ」「ヨ」の存立ゆえに、私どもは、ヤ行音文末詞を言うことができるのである。）

ナ行音文末詞では、[a] 母音の「ナ」が、[o] 母音の「ノ」よりも、しば

しば高品位のものとされている。なのに、ヤ行音文末詞では、[o] 母音の「ヨ」のほうが、かえって次上の品位のものとされがちである。どういふなりゆきでこうなったものであろうか。もとより、古風の「ヤ」には、高品位のものもあり、「ヤ」についての単純な品位論はきんもつである。しかし、「ヨ」は、古来、その品位に安定的なものがあるように思われる。

ともあれ、「ヤ」「ヨ」の不易流行のつよさに関しては、その伝統的な強勢ゆえに、[j] 音効果ということも、考えられてくる。今は、「ヨ」について見るのに、私どもには、よびかけ表現の「ヨー。」がある。「ねえ、きみ。」とか、「おい、きみ。」とかいった気分のものである。この「ヨー。」を、方言によっては、「ヨイ。」ともしている。よびかけの「ヨー」または「ヨイ」を文前に用いて、文表現上、発文（いわゆる発語である。）とすることもあり、また、終文とすることもある。（終文のばあいには、「ヤメロ ヨ。ヨー。」などになる。）こういう事例を見あつめるにつけても、「ヨ」での [j] 音効果というものが認められるようである。問いかえしの返事に、「ヤー。」というのがあるが、このばあいにしても、ずいぶん [j] 音効果が顕著であろう。

いわゆる [n] 音効果に対応するものとして、[j] 音効果が考えられてはどうであろう。

近来、といってもかなり前からであるが、関東っ子の若い男性たちは、「ヨー」の文末表現を愛好している。（一方では、「サ」の文末表現を愛好している。）「オレガ ヨー。」といったあんばいである。都内の車中などでも、私どもがすぐに耳にすることができる「アノ ヨー。」の頻用、高等学校生徒などに多い「ヨ」ことばを聞くにつけても、私どもは、今日の [j] 音効果とでも言いたいものを実感する。ただし、このばあい、その品位がどうであるかは、別の問題である。

ここには、かつて、柳田国男先生が私に語ってくださった、記念すべき「ヨ」論をかかげておきたい。以下は、だいたい、先生の口授のとおりである。「ワ

シガ ヨー。」「オレガ ヨー。」の「ヨー」は、もと、小田急の特徴だった。だんだん東京へはいった。「ヨー」は「ね」のかわり。「ね」よりなれなれしくて、いくらか気をゆるしたもの。力をいれる。「ね」の用いかたがたしかにへった。”先生の、「ね」との対比が注目される。“力をいれる。”と言われるところに、私は、力をいれることをゆるす〔j〕音効果を認めたい。

「ヨ」の用法のはばの広いことは、「ヤ」のばあいと同様である。「知らない ヨ。」「こまった ヨ。」などの、自己の意を言う「ヨ」があり、説明の「ヨ」があり、「そう ヨ。」といったような同意を表明する「ヨ」があり、「ハヨーセー ヨ。」といったような命令表現のばあいの「ヨ」があり、「いっしょに行こう ヨ。」といったような勧誘表現の「ヨ」があり、「たのむ ヨ。」「タム ヨ。」といったような依頼・たのみの表現の「ヨ」があり、単純よびかけの「ヨ」があり、といったありさまである。複合形ともなれば、たとえば「カヨ」は、問いの表現に役だてられている。

命令関係のことでは、一つ、動詞活用での命令形、「起きよ」などの問題がある。関西弁では、「オキー」などと言うのがふつうであって、命令形に「ヨ」はつかない。（「ハヨ オキー ヨ。」「マダ オキルナ ヨ。」など）この点では、活用形に「〜ヨ」形は認めかねることになる。しかし、関東系の言いかたでは、「早く しろ よ。」などの言いかたがおこなわれており、中部地方内にも、「…………… しろ ヤ。」などの言いかたがあるので、いきおい、「〜ヨ」形が命令形にとりたてられることになる。これに比定して「〜ヨ」形をとれば、これもまた、このままを命令形とせざるを得なくなる。「ヨ」は、もともと、文末詞であるのに相違はなかるうが、「〜ヨ」の形を、別のたちばで一活用形とするか。

「ヨ」文末詞に異形がある。「ヨー」のよびかけは、「イ」音尾をおこして、「ヨイ」ともなっていると、私は考える。私どもが、瀬戸内海の郷里方言で、

○オトツツァン ヨイ。

お父さん！

と言いならわしてきた少年時代を回想するのに、「ヨイ」は、まったく「ヨー」的なものであるように思われる。

異形に、「ヨン」もあるうか。『方言資料抄 助詞篇』の474ページには、
 埼玉県秩父地方 ○アリガタウ ガンス ヨン (逸見嘉一氏)
 との記事が見える。

異形というのではないが、関連形に、「ニーヨ」の「ニョ」となったものなどがある。また、「デヨ」からのものかと思われる「ジョ」がある。ところで、「ジョ」は、いわゆる音形からすれば、「ゾ」に近い。したがって、共時論的処置を重んじれば、「ジョ」は、「ゾ」の属に撰することができる。

「ヨ」に関する複合形が、全国的に見て多彩である。おおよその列挙をしてみるならば、

ナヨ ナンヨ ナシヨ ノヨ ノイヨ ネヨ ニーヨ
 ヤヨ イヨ
 サヨ ゾ(ド)ヨ ゾ(ド)イヨ ゼヨ
 カヨ カイヨ ケヨ
 ガヨ ガイヨ ゲヨ
 ノヨ ンヨ
 トヨ ツヨ テヨ デヨ
 ワヨ ワイヨ バヨ ラヨ
 ノシヨ ヨシヨ

などがあげられる。

(「ヨナ」「ヨネ」「ヨノ」「ヨヤ」「ヨサ」などの形式のものは、おのおの、下接部分の条項でとりあつかわれる。)

以下、南島地方からはじめて、地域を順次北にたどり、「ヨ」文末詞の存立・

生態を記述していく。

二 南島地方の「ヨ」

南島方言の文末詞では、「ヤ」「ヨ」がまず注目され、ついで、「ナ」がとりあげられるであろうか。「ナ」の用法には、九州のそれに通うものが見られやすいが、「ヨ」の用法には、南島方言独特のものが見られる。

沖縄本島の旧制女学校生徒の作文（戦前のもの。柳田国男先生からいただいた。）によると、生徒諸氏は、

○あいなー 面白いよー。

○あの人 すかないよー。

などの表現をしている。感嘆の「よ」と言いうるものであろうか。共通語の言いかたでものを書こうとしながらも、おのずから上のようなことばづかいにおもむいている。

国頭方面の辞去のあいさつの“下品”のものは、

○マタ クー ヨー。

である。

那覇市方面での「ヨ」の一例には、

○ヒジュルサ ヨ。

つめたいよ。（水に手を入れた時など）

がある。（大橋勝男氏の聞き書き例）

高橋恵子氏教示の、沖縄本島コザ方面の「ヨ」例は、つぎのようなものである。

○アヌヨー クネーダヨー シンシンカイ アータンドー。

あのネ。 この間ネ。 先生に 会ったヨ。

○ワンニン アトッカラ イチュンヨー。

私も あとから 行くヨ。

○ジーヤ クメーキテ カキヨー。

字は ていねいに 書けヨ。

○アヌ ハナヌ カバサヨー。

あの 花の かんばしきヨ。

なお、氏の教示に、「ヨーヤー」もある。

○アカサル エーマ ケーリヨーヤー。

明るい うちに 帰れヨネ (=帰りなさいヨ)。

生塩睦子氏は、「沖縄伊江島方言の文末表現」(『方言研究叢書』第5巻 三
弥井書店 昭和50年8月)で、

○ウチュクィ ハンティ ハミティ チー メーティ クー ヨー

ふるしきを かぶって かぶって きて まわって くる よ

○ウリ ユカ サチ ナイ ッウタスイガ ムル ピニガシュイ ヌー シ

それ より 先 に 居たが 全部 死なせたり 何 し
ユイ シー ヨ。

たり してね。

○ニバンナビー ディ ユースィ ヤ マミヌルイ ヨ。

二番なべ と いうの は 豆の 類 だよ。

などの「ヨ」例を示してられる。生塩氏は、“体言に文末助詞「ヨ (-)」
「ヤ (-)」 「ド (-)」 「ヂャ (-)」 が付加する時は断定の気持が強い。”
とも説いてられる。

宮良当壮氏は、「琉球民族とその言語」(『日本の言葉』第一巻第四号 昭和
22年9月)で、

バヌカイユー。(私にか?) [八重山]

というのを示してられる。「ユ」は、「ヨ」に該当するものか、どうか。

高橋俊三氏も、与那国島の比川方面の、

○イー ハイティ ク ヨ。

ごはんを食べて来なさいよ。 (中女→小男)

などを教示せられた。

沖縄本島に北隣する与論島には、「あのね。」の「アヌ ヨー。」などがある。
「さよなら。」も、「パイ ヨー。」である。

沖永良部島では、

○ウモーリ ヨ。

またいらっしゃいね。

○イチャ シンシヨチ ヨー。

どうしましたか？

などと言われている。問いの「ヨ」が、上中下の各品位につかわれるという。

徳之島の「ヨ」例には、

○キバテ[e] ベンキョー シ[sī]ー ヨー。

しっかり勉強おしなさいよ。

○イクィ ヨー。

さよなら。(子どものあいだでふつう一般におこなわれるもの)

などがある。

つぎには、喜界島の「ヨ」が見られる。

○アッシ シンチ ヨ。

そんなにするな。

これは、対等間での単純な言いかけの「ヨ」である。

○ヤスマンネン フェーク ウモーリ ヨー。

やすまないで早くお行きなさいよ。

「ウモーリ ヨー」の上等の言いかたに対する中等の言いかたは、「イキ ヤ

一」である。「ヨ」が「ヤ」に関連して存在している。

○オトーサ^ア ジャーカチ ウモーチヤ^スデン ヨ。

お父さんはどこへいらしたのですか。

これは、問いの言いかたでの「ヨ」である。「どうしたのでしょうか。」は、

○シャ^ツッ^ツ シャス^デー ヨ。

○サ^ツッ^ツ サス^デン ヨ。

である。問いの「ヨ」が、よくおこなわれている。岩倉一郎氏は、『喜界島方言集』で、「ヨ」について、

疑問の助詞。か。但し何、如何及び人、方角、場所等の疑辞、不定称に附いて強く問ひかける場合にのみ用ひる。

と述べていられる。なお、氏は、同書に、

シュラサー ヌカ イヨ 何と美しい事よ。

などの記述を示していられる。「イヨ」を、「感動詞。よ。」としていられる。)

奄美大島本島では、会話のはじめに、「アン ヨー。」(あのね。)の言いかたがよくなされるという。

○マ^タ イモリン^ショリ[i] ヨー。

またいらっしゃいませね。

は、人を送るあいさつでの「ヨ」である。

南島方言での「ヨ」を用いる生活の一般は、以上に明らかであろう。

三 九州地方の「ヨ」ほか

鹿児島県

かつて、瀬戸口俊治氏は、薩南の「ヨ」に関して、

「ヨ」系の文末部は、やはり同等以下に対して使われるもので、訴えかける力はかなり強い。しかし、「オ」、「ネ」系の文末部に比べて相当に下品に感じられるものが多い。「ナ」「ニ」系の文末部と共に非常に盛んに行われる文末部である。

と記述していただける。上村孝二氏の「南九州方言文法概説——助動詞・助詞——」(『国語国文 薩摩路』第17号)には、

強調の意には、トヨ・ヨを使うのが薩隅一般である。五時ジャットヨ・今度ワ俺ヨ。が、ぞんざいな言い方である。この助詞の代りにトオ・オを使うと丁寧になる。

と見える。「ヨ」におわる言いかたが“下品に感じられるものが多い”ことや、ぞんざいな言いかたとされるものになるのが注意される。

本県下に広くさかんにおこなわれる「ヨ」を用法別に見れば、よびかけの「ヨ」があり、感嘆の「ヨ」がある。推量の「ヨ」も、よくおこなわれている。説明の「ヨ」と言うべきものも、よくおこなわれている。自己の意を言おうとする「ヨ」も見える。命令・さそい・問いの「ヨ」もおこなわれている。

トカラ列島の宝島では、「さよなら。」の意で、

○サンバ ヨー。

と言っているという。これは、“目下に言うものだ。”とのことである。ともあれ、「ヨー」が自己の意を言うものになっている。薩摩半島南部での、

○ノッヂヨ。

「後よ。」

という、同等以下のものに言う別れのあいさつのことばも、「ヨ」のとめになっている。上畝勝氏の『九州方言辞典』上巻〔中南部篇〕には、

あつてよー／あしたよー 別れの挨拶。

というのがある。

感嘆の「ヨ」では、『大隅肝属郡方言集』の、

アライヨ あらまあ、婦人の用ひる驚歎の言葉。

などがあり、また、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久宮の浦」の条の、

fアノ ナンギサヨ

あの つらかったことよ。

などがある。

推量の「ヨ」の例は、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条の、

fオヨ ジャッタ モネーヨ

ええ、そうだった ものでしょうね。

薩南の「モ メサ クタロ ヨ。」(“もう、ごはんはたべたでしょうね。”)

などである。

説明の「ヨ」の例は、白沢龍郎氏教示の大隅東岸での例、

○ユタムンチャッヂヨ

行ったものだからね。

(“やム卑 チャッヂの下に更にヨをつけると確実な安心感を与える説明になる。”)

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」の条の、

mムカシノ カタモ ナカーヨ モー ハー

昔の 形も ないよ、 もう。ああ。

などである。吉町義雄氏の「吐噶喇諸島方言(宝島)」(『旅と伝説』昭和15年4月号)には、

蚊ガクッタンジヤヨ。

というのが見える。

自己の意を言う「ヨ」の例には、大隅の、

○キニ ツカンカッタ ヨ。

気がつかなかったよ。

上村孝二氏の「薩南諸島方言語法資料」(『鹿児島大学 文科報告』第7号)に

見える，種子島の，

イシャドソニー ハヨー ミテモローホーガ ヨカンドーヨ。

などもある。問いの「ヨ」は、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島」の条の，

f オトゴン マゴノ ソマレデー ウレヒカヨアー

男の 孫の 生まれて うれしいでしょう。

などである。上例は，むしろ，推量の意になっていよう。

「ユ」がある。上記の「鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島」の条に，

f エマノ ニシエドマ ワルードユ

いまの 青年たちは 笑いますよ。

というのが見える。

「ヨン」という形も見える。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条に，

f オーヨン

そうですね。

というのが見える。

※ ※ ※

本県下の，「ヨ」に関する複合形の文末詞には，「ナーヨ」「イヨ」「カヨ」「カイヨ」「ガヨ」「トヨ」などがある。

「カヨ」のおこなわれることは多く，

○ウヂ オイ カヨー。

うちにおるかね？

などの問い，

○ハヨ タタン カヨ。

早く立たないか。

などの命令，

○ワイガ テガンドン カッガナイ カヨ。

“おまえが手紙なぞ書けるものか。” (中男→幼女)

などの否定, その他の用法が見られる。

「ガヨ」も, よくおこなわれている。上村孝二氏の「薩隅方言問答」(『研究と実践』昭和34年3月)には,

イイガヨー (いいわ) 女性→

などの例が見られる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水」の条には,

f コイン アタラシ イオ チュワ ナガッタガヨー

こんな 新しい さかな って なかったよ。

などとある。

「トヨ」のおこなわれることはさかんである。以下, 九州地方を, 北部に順にたどって, 「トヨ」の盛行を見ることができる。本県下例は,

○ヨカ トヨ。

“いいんだ。”

○ヤットカ^ツット スマセダ トヨ。

“やつのことですませたのよ。”

などである。

○ワヤ ドケ イッ トヨ。

おまえはどこへ行くのか。

は, 薩摩伊集院での一例である。

○ア^アァ ハジメテ ゴザス トヨ。

ああ, はじめてでございますよ。(関門トンネルを通るのは——汽車
でのこと) (老男→藤原)

は, 種子島の人から聞き得たものである。

「トヨ」が, 南薩では, 「ドヨ」と発音されることもある。「トヨ」につれ
あうものには, 「トナ」や「トカ」がある。

宮崎県

本県下にも、「ヨ」がよくおこなわれている。よびかけの「ヨ」があり、命令の「ヨ」があり、問いの「ヨ」があり、自己の意を言う「ヨ」があり、説明の「ヨ」があり、さそいの「ヨ」がある。

よびかけの「ヨ」の特定化したものの例は、

○アア ヨー。ソレカラ ヨー。

あのねえ。それからねえ。

などである。上例は、日向中部西奥の米良地方のものである。土地の人は、「ヨー」を、“米良では古くからつかっている。”と言っている。役場で私が聞いた二例をそえれば、

○モシモン。ソームカノ ヨー。

もしもし。総務課のねえ。 (青男→電話)

○ナンカ ソレカラ ヨー。

なにか、それからねえ。(と話しかける。) (村長→総務課長)

があげられる。東京中心の関東語の特定の「ヨ」の頻用に似たものが、ここにも見られるありさまである。

命令の「ヨ」では、

○コッチヒネ クイ ヨー。

こっちへ来いよ。

とか、「どうどうして クリ(くれ) ヨ。」とかの、命令形使用の言いかたがふつうにおこなわれることは言うまでもないとして、別に、「かってに シヨ。」「ここへ 来^キ ヨ。」などの言いかた(連用形を「ヨ」で受けるもの)の、県下によくおこなわれているのが注目される。

問いの「ヨ」の例は、都城方面の、

○イケン シタッ ヨー。

○イケン シタッ ヨー。

どうした？（友だちどうしでの言いかたである。“「ヨー」と言うと、ますます聞がらがたくなる。”）

県南域の、

○ソインタ ナン ヨ。

それは何か。（目下に言う。）

などである。延岡家中弁には、

○ヤスヤン、ドコイ イクンダ ヨ。

安さん（人名）、どこへ行くんだよ。

といったような、関東系の言いかたが見いだされる。

自己の意を言いあらわす「ヨ」、説明の言いかたの「ヨ」などの実例は、省略する。

本県下に、「ヨ」に近い「ヨイ」も見いだされる。宮崎県中部では、

○オリモ シッチョル チヨ。

わしも知ってるんだよ。

などの言いかたとともに、

○コット コリャ ニチョーッ チヨイ。

これとこれは似てるよ。

などの言いかたがおこなわれている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ノヨ」「カヨ」「カイヨ」「ガヨ」「トヨ」「ツヨ」も）などがある。

○ウチノ オバサン ワガ アワザッタ カヨー。

うちのおばあさんにおまえは会わなかったかね。

は、「カヨ」の一例である。「カヨ」の、問いにおこなわれることは多く、これに関して、人は、“目下の者にはたいていのばあい「ヨー」をつける。”などと言っている。「ガヨ」の一例は、

○ワシガ イテ ミル ガヨー。

わしが行ってみるわよ。(忘れものはないかを) (初老女→中女)
である。

「トヨ」のさかんなことは、鹿児島県下でと同様である。日向中部西奥での例は、

○アソビー キヤッタ トヨ。

(この人はうちへ) あそびに来なされたのよ。(その人はだれかとの
問いに対する答え)

○タベン トヨ。

たべないんですよ。(老女→藤原)

などである。「トヨ」が、県南では、「ドヨ」ともなる。「トヨ」と説明して
いく言表態度は、人々にとって、なかなか重要なものであるらしい。

「ツヨ」例は、橋口巳俊氏教示、宮崎県中部の、

○ソソ クッシャ オリガ モロツ キタツ ツヨー。

その菓子は私がもらってきたんですよ。(青男→中女)

などである。

熊本県

白石寿文氏は、「熊本県八代市二見町方言の文末詞について」(『国語教育研
究』第二号)で、「ヨ」につき、“品位は上で、尊敬と親しみがこめられてい
る。”と述べていられる。

本県下の「ヨ」の用法では、おもに、次下のものがとりたてられようか。

自己の意を言う「ヨ」があり、説明の「ヨ」がある。天草例には、

○チョコレート コッキタ ヨ。

チョコレート買ってきたよ。

○オマイドガ ユータ コエ ヨ。

あんたたちがいま言った声よ。(録音を聞きながら言う。) (中女→子女たち)

などがある。

命令(→勸奨)の「ヨ」がある。県南辺での一例は、

○マ^ー アス^ーデ イキ^ーナイ ヨ。ヨカ ヨ^ー。

まあ、あそんでおいきよ。いいじゃないの。(中女間)

である。もとより、この地でも、ぞんざいな命令表現「ミテ ク^ーレ^ー。」(見てくれ。)などの言いかたもよくおこなわれている。

感嘆の「ヨ」がある。

アイヨウ 驚いた場合に発する語 (八代郡)

などは、『全国方言集』の「熊本県の部」に見られるものである。

※ ※ ※

本県下の、複合形の文末詞には、「カヨ」があり、「カヨ^ー」と言われがちである。

「トヨ」がよくおこなわれている。

○ゴ^ーハン^ーゴ^ータッ トヨ^ー。

“ごはんなどですよ。”(私が、「何をおてつだいしますか。」とたずねたのに対する返事。)

は、天草での一例である。阿蘇山方面の例は、

○イ^ーカン トヨ。

行かないよ。(友にさそわれてのばあい)

○ハ^ーヤッ^ーサンワ コン トヨ。

林さんは“時刻になっても来ないよ”。(中女→藤原)

である。

上村孝二氏の「天草南部方言覚書—崎津方言—」には、

ヒヤカターヨ、来タターヨ、ウレシカッターローターヨ

これは相手の同意・返答を求める気持ちが強くなる次第だが、タヨと短

くなることはない。

とある。「ターヨ」が見られる。“タヨと短くなることはない”「ターヨ」は、
 どういうものなのであろうか。もし、実質は「タヨ」とおなじものだったら、
 その「タヨ」が、「トヨ」に類するものかとも考えられることになる。(長崎県
 での「タヨ」参照)

長崎県

本県下での「ヨ」の用法には、およそ、次下のものが見られる。自己の意を
 言う「ヨ」がある。

○タマガッタ ヨ。

びっくりしたよ。

は、五島での一例である。北方の生月島での例は、

○オリャー スル ヒマン ナカ ヨー。

わしはするひまがないよ。

などがある。「ヨ」の言いきりにさらに「ナ」をつけた「ワタジャ シェン
 ヨナ。」(私はしないわよ。)などの「ヨナ」ことばは、上等のものであるとい
 う。「いいよ。」「いいですよ。」などの意の「ヨカ ヨ。」は、よくおこなわれ
 る言いかたである。

説明の「ヨ」が、ふつうにおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の
 「長崎県北松浦郡中野村」の条に見える、

m サクオイジモ タイーター ソリバツテ ヤリヨッタヨヨー

作じいさんも たいてい それでも やっていたよ。

は、「ヨヨー」の重なりを見せている。

○コンニ アスビン クットデス ヨ。

こんなに(毎晩人々が)あそびに来るのですよ。(老男——藤原)

は、五島での一例であるが、このような言いかたは、一般的である。

命令・勧奨の「ヨ」がある。県北の生月島での、

○アリバ ミロ ヨ。ミテ ミロ ヨ。

あれを見ろよ。見てみろよ。

では、「ミロ」という、「見る」動詞の命令形の言いかたを受けて、文末詞「ヨ」のはたらいていることが明らかである。ていねいな、勧奨と言うべき命令の一例、平戸ことばの、

○ハヨー ゴジェンバ タビヤッショ ヨ。

早くごはんをたべなさいよ。

では、「タビヤッショ」（たべヤッセう）という未来化表現法の特定形が見られる。

よびかけの「ヨ」がおこなわれている。

感嘆の「ヨ」がおこなわれている。橋浦泰雄氏の「肥前五島方言集」（『方言』第一卷第二号 昭和6年10月）には、

エズラッシャヨ こはい、又は愛相をつかした 崎山村
というのが見える。

「ヨイ」がある。『肥前千々石町方言誌』には、

ヨイ よ（花子ヨイ、花子よ）

とある。『壱岐島方言集』にも、

よイ 「誰々よイ」と人を呼びかくる言。対等以下に対する言。

とあり、『続壱岐島方言集』にも、

ヨーイ、ヨイ 目下の者に呼びかける声。「おい君」位の意。人の名に付する場合もあり。 虎公ヨーイ。

とある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形文末詞には、まず「ネヨ」がある。長崎市方面では、「ネヨ」が、説明するばあいの女ことばになっているという。（よいことばのようである。）「ネーヨ」は、幼児のねだりことばであるという。

桑」の条には、

f チョード ヒャッゴジュエーン アッタナヨ
 ちょうど 150円 ありますよ。

というのなどが見える。

佐賀県

本県下の「ヨ」の用法では、つぎのようなものがとりたてられる。

自己の意を言う「ヨ」がある。佐賀市での一例は、

○ソガ^ン コト スイギ デケン ヨ。

そんなことをするといけないよ。 (青女→小男)

である。唐津市神集島での一例は、

○アルドコジャ ナカデス ヨ。

あるどころじゃありませんよ。(たくさんありますよ。)

である。(岡野信子氏教示)

説明の「ヨ」がある。「……………です ヨ。」などの言いかたが、よくなされている。

命令の「ヨ」がある。「セ^ロ ヨ。」(しろよ。)などとも言っている。

よびかけ的な「ヨ」がある。

○買いに イタテ ヨー。

買いに行ってねえ。

は、県南、旧須古村での一例である。(このよびかけも、自己の意を言うものではある。)

「ヨ」文末詞の出現するばあいには、通常、文表現の品位がわるくはならない。

※ ※ ※

「ヨ」に関する複合形の文末詞では、「トヨ」のおこなわれかたが目だつ。

○オリャー シトラ^ン トヨー。

わしはしてないんだぞ。

は、唐津城外ことばでの一例である。

福岡県

本県下では、自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」、命令・勧奨の「ヨ」などがよくおこなわれている。

○シラン コタ ナカ ヨ。

知らないことはないよ。(老女が自己の思いを言う。)

は、県下の筑後で聞かれた、自己の意を言う「ヨ」の例である。

○ホーラ イキヨイ ヨー。

ほうら、行ってるよ。(中女→子幼男)

は、福岡市域で聞かれた、説明の「ヨ」の例である。

▽マツトキ ヨ。(女・青・子→同及び下) (待つておいてね) 命令に
念を押す

は、岡野信子氏の「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)に見える、
勧奨の「ヨ」の例である。

※ ※ ※

「ヨ」に関する複合形の文末詞では、本県下でも、「トヨ」の頻用が目だっている。

○イーズカノ ホー テガミ コソ トヨ。

飯塚のほうは手紙が来ませんのですよ。(初老男→藤原)

は、筑前糸島半島での一例である。おなじく糸島半島での例、

○イッパイ シゴト アル トヨ。

たくさんしごとがあるのよ。(友に電話で自分のことを告げる。)

では、「トヨ」と「タイ」との比較論を試みることもできようか。県下で、“いらんことをするな。”と叱りつける時に、“いらんことを セン トヨ。”とも

言っているのか。

大分県

本県下では、自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」、命令の「ヨ」、よびかけの「ヨ」、感嘆の「ヨ」などがおこなわれている。

自己の意を言う「ヨ」には、県南例の、

○キーチ ミリヤ ワガル ヨ。

聞いてみればわかるよ。

国東半島例の、

○ジッテーナ ヨ。

(あの娘は)まじめだよ。

などがある。

説明の「ヨ」の県北例は、

○ハタケ イッタラ アーチー ヨ。

畑へ行ったら暑いよ。(中女→子幼女)

などである。

命令の「ヨ」では、とくに勸奨の「ヨ」と言うべきものの、動詞連用形用法を受ける「ヨ」がさかんである。「ここへおいでよ。」の意の「コキ キ(来)ヨ。」などは、県下によくおこなわれている。「…………… 下さいよ。」の意の「…………… シ ヨ。」も、県下によくおこなわれている。『豊後方言集』には、

ヨーミリヨ よく御覧

というの見える。「お貸しよ。」などと「お」を言うことはなく、「貸し ヨー。」などのように言う。

○ヨカイ ヨ。

おやすみよ。

は、国東半島での一例である。

よびかけの「ヨイ」がおこなわれている。

○ヨーイ。シンチャン ヨーイ。

よおい。しんちゃんよおい。

など。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ノヨ」（「ノヨナー」「ノヨノー」も）「ンヨ」「カヨ」などがある。「トヨ」のおこなわれていないのが注目される。「トヨ」は、やはり、西がわ九州的なものなのか。

九州地方の「ヨ」では、どちらかという、中部以南方面に、「ヨ」の用法種別の比較的多彩なものがあり、また、複合形の、より多彩なさまが見られる。

南北にわたって、「トヨ」複合形の盛行のさまが見られる。ひとり大分県地方がこれの例外域になるのは、この方面が、もはや、「連中国四国」色をよく示すにいたっているということか。（「トヨ」に関しては、一方で、九州の「タイ」文末詞を思いよそえることも、してみたい。）

四 中国地方の「ヨ」ほか

山口県

自己の意を言う「ヨ」が、さかんにおこなわれている。

○ソリャ マー ソレ ヨー。

それはまあそうよねえ。

は、県西部での実例であり、

○アソタガ ユーケニ ヨー。

あんたが言うからよ。（と、相手を責める。）

は、県東部島嶼での実例である。周防の祝島で聞きとめられたことばづかいに、

「見てください。」の意のものとされる、

○ミシヨー ヨ。

がある。「しなさい。」も、「シヨー ヨ。」と言われている。「どうどうするんではない ヨ。」との言いかたで自己の意を言うばあい、表現の実質は、きつい命令になることがある。

説明の「ヨ」のおこなわれることも多い。

○ゴジツポン ウエタラ ハタケワ フタグ ヨー。

五十本植えたら、もう畑はいっぱいになるよ。

は、東部での例である。

○ヒトツキト フツカイ ヨ。

ちょうど、ひと月と二日なのよ。

は、県西部での一例である。

命令の「ヨ」も、よくおこなわれている。県西部での例は、

○アスバツト イケー ヨー。

あそばないで行けよ。

○ニワトリゴヤノ シゴー シチヨケ ヨー。

にわとり小屋のせわをしとけよ。

などである。県東部での例は、——ていねいなものであるが、

○シニマスナ ヨ。シンドモ シマスナ ヨ。

死になさんなよ。死になんかしなさんなよ。(孫が言ってくれることばだと、老女が語ったもの。)

などである。さきの祝島の、「アリヨー ミュー ヨ。」(あれを見なさい。)とか、「ネヨー ヨ。」(“ねなさい。”)の言いかたは、ここに、命令表現のものとしてもあげることができよう。「クリヨー ヨ。」(“くださいよ。”)が、よくおこなわれている。

ていねいな命令、すなわち、勸奨の「ヨ」が、もとよりよくおこなわれており、県東部では、

○アソーヂ オアゲー ヨ。

あそんであげなさいよ。

などとも言われている。

問いの「ヨ」もある。『全国方言資料』第5巻の「山口県美祢郡秋芳町別府江原」の条には、

mコンヨー

来ないのか。

というのが見え、また、

mオランヨ

いないのか。

というのが見える。後者は、「fマダ ベントーン シタクガ デキテ オリマセンガノ」(まだ べんとうの したくが できて いませんけどねえ。)への返事である。問いとはいいいながら、上例の実質は、そのことを知って言いかける、問いぎみの「ヨ」というものであろうか。

よびかけの「ヨ」もある。

○アワクン ヨー。

阿波君よ。

などとよびかける。目上の人々には言わないことばづかいのようである。(よびかけられて、返事にも「ヨー。」と言う。)
「もしもし。」とよびかけるのに、「ヨー ヨー。」とも言っている。

県下の東西に、「ヨ」に相当する「ヨイ」もある。おおかたは、東部例の「オネーツェン ヨイ。」(“ねえさんよ。”)などのように、よびかけに用いられているようである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ナヨ」がとりたてられる。西部にこれが見られ、

○ソージャッタ ナヨ。

そうだったねえ。

などもある。「ナヨ」は、やや下品であるという。“自分の意見を相手につよく同調を求める感じである。”などとも言われている。

○アリ^ーャー ナー^ヨ。

あれはねええ。

などともある。人は、“「ナーヨ」「ネーヨ」を子どもがちかごろさかんに言う。”などとも言っていた。(昭和二十年代でのことである。)

「ゾヨ」がある。これは、おもに東部域内に見られるものか。祝島例は、

○ミ^ーミ^ーョートガ ソロー^ョルのは オ^リマセン ズ^ヨ。

三夫婦がそろっているのはいませんよ。(中男→老女)

○シラ^ダッタ ズ^ヨ。(“これが昔の純ことば。”)

知らなかったよ。

などである。同島では、「ゾヨ」が「ドヨ」とも言われている。「ドヨ」は、県西部にも見いだされるようである。

「カヨ」がよくおこなわれている。

○ジュン^{バン} ド^{ネー} スル カ^ヨー。

順番をどうするかねえ。

は、県西北部のものである。

○ヨ^ーイ。イ^{カン} カ^ヨー。

おおい。行かないか。

は、県東辺のものである。

「ガヨ」もある。

「ノヨ」もある。思いを言うものである。「ノヨ」の転「ンヨ」もある。

「デヨ」が、県下の広くによくおこなわれている。やはり、かなりつよく自己の思いを言うものである。

○アン^ト コ^トー シ^{チャー} イ^{ケン} デ^ヨ。

あんなことをしてはいけないよ。

は、県東辺の一例であり、

○コンゴト アル デヨ。

来ないようだよ。

は、県西部での一例である。

「コトヨ」もある。

広島県

自己の意を言う「ヨ」が、よくおこなわれている。

○ソーデ ガンス ヨ。

そうでござんすよ。

○シラン ヨー。

知らないよ。

などは、安芸での例である。安芸でも備後でも、「ヨ」のもとに、さらに「ノ」や「ネ」の加えられることがすくなくない。「シラン ヨーネ。」(知らないわよ。)など。『全国方言資料』第5巻の「広島県庄原市山内町」の条には、

*m*ホンニ イチニンイジョー チゴーヨーノー

ほんとに (働き手が) ひとり以上 違うようね。

とある。自己の意をいう「ヨ」が、反抗調になるものもある。

○イラン セワ ヨ。

よけいなせわだよ。

などと言われる。

説明の「ヨ」は、つぎのようにおこなわれている。

○トジャー クジューハチ ヨー。

歳は九十八ですよ。 (老女→老男)

これは、備後の島嶼で聞かれたものである。

○ゴケイリサン ヨードッタンダ ヨ。

“のちぞいさんに来てもらっていたんですよ。” (老男→藤原)

○コリヤ ナア オイー モア ヨー。

これは名まえの多いものですよ。 (老男→藤原)

これらは、安芸北部でのものである。説明のばあいにも、「ヨアー」などの言いかたがされがちでもある。

命令の「ヨ」は、つぎのようにおこなわれている。

○アンマリ オサエーナ ヨ。

あんまりおさえるなよ。

問いの「ヨ」のおこなわれかたには、つぎのようなものもあって、注目される。

○ホイタラ コンダ オクサンラ ミナ アッチ ヨー。

そしたらこんどは、おくさんらはみな、あっちへうつるのかい？

○アントーノ コト ヨ。

あのようなことかね？

これらは、やわらかい問いとして発せられたものである。「ヨ」には、本来、一種のやさしみがあろう。そういう機能的価値が、上例のような、問いことばの「ヨ」によく出ていようか。

本県下でも、「カッチャン ヨイ。」(勝ちちゃん!)などと、「ヨイ」が言われている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ゾヨ」があり(「ドヨ」も)、「ノヨ」があり(「ンヨ」も)、「デヨ」があり、「コトヨ」がある。

○ジョレントモ ゴミトリトモ ユー ズヨ。

ジョレンともごみとりとも言うよ。 (老男→藤原)

は、安芸での「ゾヨ」の一例である。

○オイ。コレオ オトイタ ズヨー。

おい。これを落としたぞ。(と、落とし物を知らせてやる。)

のような言いかたにもなる。

「デヨ」が、備後奥で、「ヂヨ」ともなっている。

○ヨーヨー スンダ チヨー。

やっとすんだぞ。

などとある。瀬戸口俊治氏は、広島湾頭の倉橋島を調査され、その南岸集落で、

○イッ[↑]タ ンリヨ。

行ったんリヨ。

○キ[↑]タ ンリヨ。

来たんリヨ。

というのを聞きとめていられる。氏は、この「リヨ」を、「デヨ」と解される。

——「リヨ」は、「ヂヨ（→ジョ）」に近いものか。

「コトヨ」の実例は、

○ソガナ コト ヨーテ ギゴクエ オチン コトヨ。

そんなことを言ってて地獄へ落ちないことよ。

などである。（上のは、安芸島嶼のものである。）『全国方言資料』第5巻の

「広島県佐伯郡水内村」の条に見える、

mイビセー コトヨー

恐しい ことですねえ。

は、「コト」が名詞であろうか。

岡山県

本県下では、「ヨ」のおこなわれかたが、さほどにはつよくも多彩でもないのか。——広島県下での様相との相違が見られるかのようである。

自己の意を言う「ヨ」は、備中島嶼では、

○オー[↑]キニ ヨ。

ありがとうよ。

などのおこなわれている。

説明の「ヨ」については、今、とりたてて言うほどのことを、私は持っていない。

命令（→勸奨）の「ヨ」の倉敷弁は、

○ハヨー カエリンサイ ヨー。

早く帰りなさいよ。

である。「カエリンサイ ヨー」のようなことば調子の言いかたは、岡山県下に根づいているものようである。広島県下では、通常、上のような調子の言いかたはなされてまい。

○オキサンスナ ヨ。

起きなさんなよ。

は、禁止命令（勸奨）のばあいの「ヨ」である。本県下でも、命令表現のばあいの「ヨ」のおこなわれることは、比較的いちじるしいものがあるうか。

問いの「ヨ」は、美作では、つぎのおこなわれている。

○コッチニャ ウシガ ヨロケドルゲダガ、ドガナ ヨー。

お宅には牛がよわってるそうだが、どんなふうかね。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ゾヨ」「カヨ」「ガヨ」「ノヨ」などがある。「ガヨ」は県北域、美作におこなわれており、

○ホンマジャ ガヨー。

ほんとうだよ。（中女→老女）

などとある。（今石元久氏教示）

作州西部で私が聞き得たものに、「トヨ」「トイヨ」もある。

○イチネンワ ハイレ トヨー。

○イチネンワ ハイレ トイヨー。

一年生は教室へはいれってよ。（小学生二男→小学生一男ら）

などと言われていた。——後者は、二回めの発言であった。

(音韻的には、「トイ」ではなくて「ト」であったかもしれない。)

島根県

本県下の「ヨ」の用法では、おもに、次下のものがとりたてられる。

自己の意を言う「ヨ」がある。

○アレ カタイ ヨー。

あれ、かしこいよ。(老女→孫幼女)

は、出雲南部での一例である。

説明の「ヨ」がある。

○クスリヤサンガ キタッタ ヨー。

薬屋さんが来られたよ。

は、石見東部での一例であり、

○ミチ アゲヂヨリマス ヨー。

みんなあのとおりですよ。(老男)

は、隠岐島後での一例である。(神部宏泰氏の「隠岐島五箇方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻による。)『全国方言資料』第5巻の「島根県大原郡大東町春殖畑」の条には、

*m*フガサ カベッテ モドリヤンコトダヨ

日がさを かぶって 帰らなければ(ならない)ことだ(った)よ。

とある。

命令表現のばあいの「ヨ」が、よく見られる。

○キョーツケテ インチハイ ヨ。

気をつけて帰りなさいよ。

は、石見東隅での一例である。——勸奨とも言うべきにいねいな命令表現にも、「ヨ」はよく出ている。「どうどうして ゴハッシャイ ヨ。」などというのは、出雲でよく聞かれるものである。加藤義成氏の「中央出雲方言語法考」(『方言』

第五卷第四号)には、

オソ^ナッ^タラ^ラ, エソ^エダ^ヨ
 (遅くなつたら急ぐんだよ)

というような命令表現が見られる。

感嘆の「ヨ」もおこなわれている。島根半島の北岸では、「アイヨ^ー」「アイヨ^ー」という感嘆詞を聞いたことがある。

○アイヨ^ー, アスヨ^ー ミ^ー。

あれまあ、あそこを見よ。

などの言いかたが聞かれた。人は説明して、“びっくりした時、予期しない時”，こういう感嘆詞をつかうと言っていた。「アイヨ^ー」のアクセントのばあいのほうが、いっそうの強調であるという。この感嘆詞が男ことばで、子どもは男女とも言うたされたのは、印象的であった。ちなみに、「ア^ーオ^ー」という感嘆詞のばあいは、“あまりおどろきは高くない。”とのことであった。

県下の「ヨ」ことばの品位は、およそ中等度以上のものであろう。

※ ※ ※

出雲・隠岐に「ジヨ」の類がおこなわれている。神部氏の上掲論文には、

○カワクチデモ オヨ^グ ジヨ。

川口でも泳ぐよ。

の例文が見える。「よ」にあたる「ジヨ」が見える。私が出雲で聞いた、

○イカー^ー ジ[i]ヨ^ー。

行こうよ！（“ちょっと、はりきる時のことば。”）

は、どういうものか。加藤氏の上掲論文には、

ソゲナコ^タスィ[〜]ダ^ネズィ^ヨ

(其麼事は為るではないぞよ)

などの例が見える。「ズィヨ」は、すくなくとも機能上では、「ゼヨ」に相当するか。隠岐では、「ジヨ」の形がふつうなのかもしれない。『隠岐島方言の研究』には、「ズヨ（ゾヨ）」とある。（「おらが手にやあわんずよ」などとある。）

同書には、「ズヤ」、「ズヨ」に関して、

出雲方言エケンジ（いけないよ）ダメダジのジは此のズと同じものであり、エケンジョのジョはズヨである。隠岐方言ではウ韻の音はオ韻となり勝ちで、その反対の場合は殆んどないことから推すと、このズはヅから近世に訛つたものとは思はれない。古くからのズであらう。

の記事も見える。広戸惇氏も、『山陰方言の語法』で、隠岐について「ずや」「ずよ」を指摘していられ、その説明には、

ズヤー島後に多く大人の言葉で丁寧と云われる。

ズヨー島後に多くズヤと同じく大人の言葉で丁寧と云われる。

というのがある。

「ジヨ」の類が「ジョ」的なものとも見られるようで、ただちには、複合形のあつかいをすることができなくなる。しかし、「ジヨ」の類が、おおかたは二音節ふうのようであるから、今は、これを複合形あつかいにしておきたい。

「デヨ」複合形なら、『全国方言資料』第5巻の「島根県那賀郡雲城村」の条に、

m ヨーヤク モドッタデヨ

ようやく 帰って来たよ。

などとある。

出雲弁には、「オヂ^ツチャンワ ロシ^ダ エワ^エタヂ。」（おじいさんはすだと言われたよ。）などの言いかたがあり（藤木敦氏教示）、「ヂ（ジ）」（「で」）文末詞がおこなわれている。「で」の「ヂ（ジ）」があるのからすれば、さきの「ジヨ」の類も、「デヨ」からのものかとも察せられる。

なお、出雲弁に、「コトヨ」などの複合形がある。

鳥取県

鳥取県下の、ことに因幡地方は、「ヨ」文末詞のおこなわれることのさかん

な地域である。関東地方内での「アノ ヨー。」「どう どうして ヨー。」などの「ヨ」の頻用に対応するほどのものがこの地方にも見られるのは、興味ぶかいことである。(ただし、用法上の微妙差は、別に注意しなくてはならない。)

自己の意を言う「ヨ」が、因幡地方でしきりにおこなわれている。

○ボニ^ニオドリガ ウラー スキデ ヨー。

踊りがわしはすきでねえ。(老女→藤原)

○どう どう セナ^ンダ^テド ヨー。

どう どう しなかつたけどねえ。

○ナン^デスガ ヨー。

あれですがねえ。

○サビ^ジーヨーナ キガ シマス ヨー。

さびしいような気がしますわ。(相手に言いかけて、「ヨー」と言う。)

(大女→青男)

といったようなあんばいである。因幡ことばの古来のあいづちことばにも、

○イカ^サマ ヨー。

ほんとにねえ。

というのがある。

県下に、命令(→勸奨)の「ヨ」がよくおこなわれている。

説明の「ヨ」もあり、よびかけの「ヨ」もある。

「ヨイ」形もある。『鳥取県方言辞典 後編』には、

よい〔感〕 命令 「せーよい」「見ーよい」

との記述が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞としては、第一に、因幡地方を本領域とする「ガヨ」がとりたてられる。おおかたは、「ガヨー」と発言されている。

○コド^モノ トキニ アッタ ガヨー。

子どもの時に、(そのように言うことが)ありましたわ。 (中女
→藤原)

○ホンニ アリマセナンダ ガヨー。

(中学校へあがるものは)ほんとにありませんでしたわ。 (老女
→老男)

などのように言われている。伯耆にはいると、「ガヤー」である。「イケン
ガヤー。」(いけないよ。)などである。(岡山県がわとなると、北部の作州に、
「ガヨー」はなくて、「ガヤー」が聞かれる。)「ガヤー」の言いかたと「ガヨ
ー」の言いかたとが、上記のように対存しているのは、注目すべきことである。
「ガヨー」も、まさに「ガヤー」的なものであるとしたら、「ヨ」の因幡地方
での頻用も、まさに地域的なものと解されよう。(一つのうたがいであるが、
伯耆地方の人々にも、「ガヤー」と「ガヨー」とを共有する人がありはしない
か。因幡地方では、「ヨー」と「ヤー」とが、ならびよくおこなわれている。
「アリマシヨー ヤー(よ)。」などと言われている。)

「ゾヨ」の複合形もある。『鳥取県方言辞典 後編』には、「ぞよ〔感〕
語気を強める云い方」とある。

五 四国地方の「ヨ」ほか

愛媛県

本県下に、「ヨ」がよくおこなわれている。

自己の意を言う「ヨ」がある。「ツー ヨ。」(そうなのよ。)は、伊予弁に
よく熟した、同意を言う表現形である。

説明の「ヨ」がある。

命令(→勧奨)の「ヨ」がある。禁止表現では、「ツラレン ヨ。」(「せら
れないよ。」してはいけないよ。)の言いかたが慣用されてもいる。

さそいの「ヨ」がある。

○オッ^カー、^ハヨ ^ヨハン タベ^ロー ヨー。

母ちゃん、早くごはんをたべようよ。

は、県南辺での一例である。

問いの「ヨ」があり、よびかけの「ヨ」があり、感嘆の「ヨ」がある。内海島嶼の大三島での、

○ヤレ ヨ。

は、くたびれたりくずおれたりした時に、しぜんに出る感動文である。ここではまた、「^ヨー アガ^チ コト ヨ。」(ようあんなことができたものだわ。)などの言いかたもされている。

県下に、「ヨイ」形がある。伊予本土北部では、

○^ハラガ ^ヘッタ ^ヨイ。

腹がへったヨイ。(青男間)

○^ヒデチャン ヨイ。

ひでちゃんよ。

○^サカナ ^タイタ カヨイ。

さかなをたいたかね。(中男→妻中女)

などと言われている。ところで、これらに見られる「ヨイ」は、単純に、「ヨ」からきたものとすることはできまい。相手によびかける「ヨイ。」ということばが、そのままここに転用されているのかと察せられる。私なども、少年時、「だれさん ^ヨイ。」と言って人をよんでき、また、「^ヨイ。」^ヨイコー。」と言って人によびかけてきた。そうして、「だれさん ヨ(ヨー)。」などという「ヨ」だけのよびかけことばは持たなかったのである。なお私どもは、「ねえきみ。」の意で、「^ノーヤヨイ。」と言ってもきた。そういえば、「^ヨイガ」(きみが)などと、「^ヨイ」を対称代名詞ともしてきた。語として、「ヨ」と「ヨイ」とは密接な関係にあることが明らかであるけれども、伊予事例「ヨイ」については、にわかには、「ヨ」>「ヨイ」の変化を考えることができまい。

※ ※ ※

「ヨナ」の言いかたがおこなわれている。

「ヨ」の下接するものでは、まず、「ゾヨ」のおこなわれることが、県下にさかんである。——一つの、特色文末詞とされよう。

○コーノ ヨ。オコッチャ イケン ズヨ。

河野よ。おこってはいけないよ。

は、県南、南予での一例である。「イケン ズヨ。」の言いかたがよくおこなわれている。「イケン ノズヨ。」もある。

○オラー セン ゾヨー。

おれはしないよ。

など、「ゾヨー」のアクセント形式になるものが、南予地方内に、一特色をなしてもある。そうかとおもうと、宇和島での言いかた、

○ソナ コト シタラ イケン ゾヨー。

そんなことをしたらいけないよ。

のようなものもある。内海島嶼方面では、

○ア ヒトワ ホンオ ヨ ヨム ゾヨー。

あの人は本をよく読むんだよ。

○エツト アッタ ゾヨー。

たくさんあったわ。

など、自己の意を言う「ゾヨー」がよくおこなわれており、対他の表現の「イケン ズヨ。」式のものはおこなわれていない。

県下に、「ズヨ」の「ドヨ」も、なくはない。

南予方面に、「ゼヨ」も見いだされる。

「カヨ」があり、「ガヨ」がある。後者は南予地方のものである。

「ノヨ」があり、「ンヨ」がある。これらは自己の意を言うのによく用いられている。

「コトヨ」もある。

高知県

自己の意を言う「ヨ」がよくおこなわれている。

○ソレ ヨ。

そうよ。(そうだよ。)

の言いかたが、一つ、慣用されている。『全国方言資料』第5巻の「高知県香美郡美良布町」の条から、当面の例をひくならば、

f コドモノ トキニ ハナシオ キーチャラヨ

こどもの ときに 話を 聞いていましたよ。

がある。『土佐方言集』などには、「ヨヨ」の指摘がある。左の書には、

よよ 私よよ そーよよ そりゃ反古よよ
ヨネ 左様ヨネ

と見える。「〜ジャ ヨ」の慣用が、県下に見られる。中部での例は、

○ウチャ ハジメテジャー ヨ。

(この南瓜を植えたのは) うちのはじめてだわ。

(この例では、「ジャ」が長呼になっている。)

である。

説明の「ヨ」も、よくおこなわれている。土居重俊氏の『土佐言葉』には、
 大方町に、ハシットーヨがあるが、これは「走ったよ」の意である。

との記述が見える。

命令の「ヨ」もまた、よくおこなわれている。ことに、「早う 行き ヨ。」など、動詞連用形の敬意表現法を受ける用法が目だたしい。こういう時、「ヨ」とともに、「ヤ」もよく用いられている。「行き ヨ。」の否定法は、「行きナ ヨ。」である。もとより、動詞命令形におわる通常の命令表現を受けて「ヨ」のはたらくことも多い。県西辺での言いかた、

○アレー ミ ヨヤ。

あれ見ろよ。

には、「ヨヤ」が見られる。土居重俊氏が『土佐言葉』で示していただける、

オンシラー モー ココエ クマイヨ（お前達はもうここへ来てはならぬぞ）

のような言いかたも、ここにとりあげられる。県西南、幡多郡下には、「どうどうせよ。」と命令する意の「どうどうシタ ヨ。」の言いかたがおこなわれている。

○ベンキョー シタ ヨ。

など。「シタ ヨ」が「ヒタ ヨ」とも言われている。『全国方言資料』第5巻の「高知県幡多郡大方町」の条には、

fチト アソビニ キターヨー
ちょっと 遊びに 来なさいよ。

の例が見える。

さそいの「ヨ」があり、問いの「ヨ」がある。

○ハタケ ナニン ナカ ヨー。

畑は何の中へ行くのかい？（“麦の中へ。”などの答えがくる。）

（中男）

は、問いの「ヨ」の一例である。

よびかけの「ヨ」もあり、感嘆の「ヨ」もある。

「ヨイ」形は、『土佐方言集』に、

「帰ったら皆によー云うて呉れよい」

などに見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞としては、はじめに、「ゾヨ」の盛行が指摘される。

○センセー。オマント ワシト ネル ズヨ。エーロー。

先生。あんたとわしと、この部屋にねるよ。いいだろう？

などと言われている。「ゾヨ」での、相手にうちこんでいく気もちはつよい。

(東京語の「ワヨ」は、自己にうちこんでいく気もちのつよいものであろう。)
「ゾヨノ」もあり、「ツゾヨ(というゾヨ)」もある。『土佐の方言』に見える一例は、

「も一帰って居るつぞよ。」(…帰って居るさうだよ)

である。

「ゼヨ」も、じつによくおこなわれており、土佐弁の大きな特色になっている。

○ツギノ フネター イツ デル ゼヨ。

つぎの船はいつ出るの?

などとある。「ゼヤ」と「ゼヨ」とが対立するらしい。“よわい者に対して「ゼヤ」と言う。”と説明する人もある。

「カヨ」がまた、よくおこなわれている。

○ウチエ キテ クレル カヨ[↑]。

うちへ来てくれるかね。

などとある。「ンカヨ」「ツカヨ」も見られる。『土佐方言集』には、

「行くかよ[○]い」(決シテ行カヌゾ)

などというのが見える。私が聞きとめた県中部海岸での例、

○ナイ カヨ[○]ーイ。

ないかね。(遠くへ問う。) (中女)

は、たんなる問いの「カヨ[○]ーイ」である。もっともこれは、「ナイカ ヨ[○]ーイ。」のようなきみあい[○]で発言された。

「ケヨ」も、かなりおこなわれているようである。「カイヨ」からのものか。「ガヨ」も、

○ソレデ エイロー ガヨ[↑]。

それでいいでしょう? (中男→藤原)

などと、かなりよく聞かれる。

「ノヨ」があり、また「ワヨ」もある。

徳島県

自己の意を言う「ヨ」がおこなわれている。金沢治氏は、『阿波言葉の辞典』で、「ヨ」の用法を細別してられるが、その多くが、自己の意を言うものとされる。

説明の「ヨ」がある。

命令の「ヨ」がある。もっとも、

○ヤスマント ハヨー イキ ヨー。

やすまないで早くお行きよ。

など、動詞連用形用法の見られるものは、ていねいな命令で、勸奨とされる。

「どうどうしナシテ ヨー。」の言いかたこそは、もっとも勸奨の名にふさわしいものであろう。一方に、

○ヌーテ クレ ヨー。

縫ってくれよ。

など、単純な命令表現のあることはもちろんである。

問いの「ヨ」もおこなわれており、単純よびかけや感嘆の「ヨ」もおこなわれている。

金沢治氏の『阿波方言語法』には、

ワタイガ モッテ キタンニョー わたしがもって来たのですよ
などの言いかたが見える。「ンニョー」は、「ンヨー」に比照しうるもの
のようである。この種の言いかたは、県南の“海部郡・下灘地方”にあるという。
金沢浩生氏も、上の事実を指摘され、かつ、

海部郡下灘にある。この地方は一般に〔j〕が〔n〕をとりやすく、犬や
猫はイヌニヤネコ、パン屋はパンニヤのようになる。

と教示された。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ゾヨ」（「ノゾヨ」も）があり（「～ます ゾヨ」は、「マッ ソヨ」にもなっている。）、「デゾヨ」があり、「デヨ」がある。「デヨ」のおこなわれることが特色的であろう。

○ツスオ タノム デヨー。

るすをたのむよね。

などと言われている。

「ガヨ」も「ノヨ」「ンヨ」も「ワヨ」もある。

○ココノ オキ トッテ イク ワヨー。

ここの熾とっていくわよ。（中学生女→母中女）

というのは、県南奥地での一例である。

香川県

自己の意を言う「ヨ」が、つぎのようにおこなわれている。

○サヨ ヨー。

「左様よ。」（そうなんですよ。）

○ショー コト ナシ ヨ。

しょうことなしだよ。

説明の「ヨ」が、つぎのようにおこなわれている。

○ナカ ヨー。

その中よ。（中にあるのよ。）

命令ないし勸奨の「ヨ」が、つぎのようにおこなわれている。

○ガイン モジ ナラエ（ガイン ナラエ） ヨ。

しっかり勉強しろよ。

○ガイニ ベンキョ シマイ ヨ。

しっかり勉強をしなさいよ。

「起きるな。」が、ていねいには、「オキマスナ ヨ。」とも言われている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ゾヨ（ドヨ）」、「ノヨ」「ンヨ」などがある。

県下西方の伊吹島には、「ジョ」文末詞もあるのか。——それが「ゾ」的なものか「デヨ」的なものなのか、よくわからない。

六 近畿地方の「ヨ」ほか

兵庫県

兵庫県下にも、問題の事象がさかんである。

自己の意を言う「ヨ」が、さかんにおこなわれている。淡路北部の北淡町畑を調査したさいは、各階層で、「ヨ」がさかんにつかわれているのを見ることができた。——「ヨ」の用法の諸態が見られ、もとより、自己の意を言う「ヨ」のおこなわれることもさかんであった。

○イン^テ ヨー ヨー。

帰ってくるわよ。

というのは、その一例である。淡路東南部の由良の例には、

○ツラ^カッタ ヨー。

つらかったよ。

などがある。淡路で、返事の「ハイ ヨー。」「へー ヨー。」「エー ヨー。」

も、よく聞かれる。「イーヤ ヨ。」は、「いやよ。」である。

県下に、説明の「ヨ」がよくおこなわれている。

○ト^オイ トコヤ^デ ヨー。

遠い所だからよ。

○モ^ー ロク^{ジュ}ーカラン ナル ヨ。

もう六十からになるよ。(自分の年がもう六十をすぎたことを言う。)

などは、その例である。

命令・勸奨の「ヨ」が、よくおこなわれている。清瀬良一氏の「神戸方言の
文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)には、

○アケ ヨー。(小男——小男)

…命令…。男性のぞんざいなくいかたである。女性は(もっとも男性
もいうが)、「のき ヨ(ー)」という。

との記述が見える。当地方の通常の命令表現のばあい、たとえば「起き ヨ。」
は、「オキー ヨ。」と言われがちである。また、「気をつけよ。」は、「キーツ
ケイ ヨ。」と言われがちである。(山本俊治氏にもよる。)淡路で私が聞いた
ものには、

○イレレー。イレレー ヨ。

(かなだらいに水を)入れろ。入れろよ。

というもある。

○ソンナ コト シタラ アカン ヨー。

そんなことをしてはいけないよ。

○ワルイ コト シタラ アカヘン ヨ。

わるいことをしてはいけないよ。

などの打消表現は、特定の命令表現になっている。

上の清瀬氏の「のき ヨ(ー)」は、動詞連用形の言いかたを「ヨ」で受けた
ものである。この種の言いかたは、近畿弁の一特色になっていよう。かんたん
に言う「しなさいよ。」は、「シー ヨ。」である。「シテ ヨ。」は「しなさい
よ。」にあたる。が、これが、敬意度では、「シー ヨ。」に近かろう。つぎの
例は、「シナ ヨ。」が出てふさわしい環境を、よく示すものである。『全国方
言資料』第4巻の「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」の条には、

f ソー ハヨ シマワー (ソ一) ワシモ ポチポチ スルハケ¹⁾
うん、早く しまいましょう。 (m) わたしも ゆっくり しますから

オッサンモ ボチボチ シナヨ
おじさんも ゆっくり しなさいよ。

1) 「ハケ」のあたりははっきり聞き取れない。

というのがある。

勸奨の、尊敬法助動詞の出るものを見る。今石元久氏の教示せられた、播磨
竜野市域での一例は、

○ダシナハンナ ヨー。

である。和田実氏の「兵庫県高砂市伊保町」(『日本方言の記述的研究』に寄せ
られたもの)には、

モー寝ナイヨ； 氣ツケナヨ。

の実例記述が見える。

さそいの「ヨ」がある。

問いの「ヨ」がある。淡路では、「どれ ヨ。」「何 ヨ。」などの問いこと
ばが、よくおこなわれている。ところで、増田欣氏は、私に示された『淡路方
言覚書』稿で、

コリヤ ナンノホンヨ (これは何の本か)

などについて、「所で、この疑問表現のヨは、本来、ジヨであり、それから転
じたものであらうと思う。」と述べていられる。「ジャ」が「ヤ」になることを
思えば、「ジョ」が「ヨ」になることも、音転訛としては、おおいにありうる
こととされる。しかしながら、上例などの「ヨ」は、「ジョ」までさかのぼっ
てみなくてもよいものではなからうか。

よびかけの「ヨ」がおこなわれている。

感嘆の「ヨ」がおこなわれている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞を見る。

はじめに、「ヨナ」形もよくおこなわれていることを指摘しておきたい。(和
田実氏の上記報告にも、その指摘がある。)

「ナヨ」がある。「ナーヨ」などとも言われている。

○ホンマニ ナーヨ。

ほんとにねえ。(中女→老女)

は、淡路北部での一例である。

○ホンマ ナヨ。

ほんにねえ。(中女→老女)

は、そのかんたんな言いかたのものである。北淡町畑で聞いたのには、「ナーヨ」は女の人に多く、男は「ナーレ」をよく言うよしである。“「ナーヨ」のほうが相手にやさしい。”ともあった。(なお、“「ナーレ」は、自分をおもにしている感じ”で、“「ナーヨ」は、相手を主にしている。”ともあったのは、興味ぶかいことである。「レ」は、「ワレ」的なものかと思われるので、この説明が納得しやすいもののように感じられる。——当地で小男たちは、「ナヨ」を連発して、「ナレ」を言わないありさまだった。「ナレ」は、しだいに、過去のものになろうとしているということなのだろうか。)

「ゾヨ」、「ノヨ」、「ソヨ」、「カヨ」、「ガヨ」、「ワヨ」なども、それぞれよくおこなわれている。

○ソラ シラン ガヨー。

それは知らないよ。

は、播磨での「ガヨ」例である。「ガヨ」は、つよい訴えの力を持っている。当方の「ガヨ」の分布は、山陰、因幡地方のそれに関連している。

『全国方言資料』第4巻の「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」の条に見える、

*m*オラー モド¹⁾ッテキタデヨー

おれ 帰って来たよ。

1) 「f」の「d」の閉鎖が弱く、「モーッテ」、「モーッタ」のように聞こえる。

は、文末詞「デヨ」をとらえしめるものなのだろうか。

淡路北部で聞かれる、

○アノ ヒトワ もとから アナイ ヨワイ ンジョー。

あの人はもとからあんなによわいんだよ。

などの「ジョ」は、「ゾ」に近いものなのか、それとも、「でヨ」に近いものなのか。(老男の言、その八十一歳であることを言ったことは、「イチ ジョー。」では、「ジョー」に「ゾ」が考えられるよりも、「じゃ ヨ」が考えられるとされるかもしれない。が、なにぶんにも、方言でのことである。なんらかの機縁で「ジョ」形が成りたつと、やがてこれが、自在に転用されるもする。)

大阪府

自己の意を言う「ヨ」か、

○イノ^テ イクノガ タイソダヒタ ヨー。

になっていくのがたいへんでしたよ。(老男)

○ソラ オレカテ イク ヨ。

それは、おれだって行くよ。(高校生男子間)

などのようにおこなわれている。(後例 山本俊治氏教示)

説明の「ヨ」が、

○アガッテ オクレ ヨー。ウチニ オル ヨー。

上がっておくれよ。うちにいますよ。(来訪者への返事)

のようにおこなわれている。

命令・勧奨の「ヨ」が、よくおこなわれており、「掃キ ヨ。」など、例の動詞連用形を受けるばあいが、一特色をなしている。人は、この命令表現のやさしさあるいはあたたかさを見て、“勧誘的な命令”などとも言っている。山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、「ヨ」に関する、

おんなことばでは「連用形 ヨ」、おとことばでは、「命令形 ヨ」のいいかたをとる。ていねいになると、「ナハレ ヨ」のかたちをとる。「ヨ」の待遇価のはばはひろい。

との記述が見える。

※ ※ ※

府下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞に、「ンヨ」などがある。佐藤虎男氏の「大阪府方言の研究(3)——泉南郡岬町多奈川方言の文末詞(二)——」(『大阪教育大学 学大国文』第十八号 昭和50年2月)には、「ヨ」に関する複合形の「ノヨ・ンヨ」「カイヨー」「カйнаヨー」「ワシテヨー」「ワイヨー」「ワイショ」「ラヨー」「ライヨ」「ラニヨ」が見える。

和歌山県

本県下全般に、「ヨ」のおこなわれることがさかんである。

自己の意を言う「ヨ」がある。

○ソーダンニ イッテ クラ ヨ。

相談に行ってくるよね。

○クサタゲナ コトナラ キケテ アグル ヨ。

変なことばなら、聞かせてあげるよ。(自己のことばのことを謙遜して言う。)

などは、県中部での事例である。

○コリャ ワタシンヤ ヨー。

これはわたしのよ。(したしい間がらでのことば)

は、新宮市での一例である。県下に、この種の「ヨ」を用いることがいちじるしく、県南部内では、

○オー ユイヤイ スル ヨー。

おお、言いいいするんだなあ。(あねいもうと二人の言いいいを見て言う。)

のようにも言っている。

説明の「ヨ」がある。

○マ^ー イシ アルサカ ヨ^ー。

まあ石があるからねえ。

は、県南での一例である。説明の「ヨ」も、全県下によくおこなわれており、「そうだ ヨ。」式の言いかたでの「～ヤ ヨ。」の言いかたが、一つ、注目される。『全国方言資料』第4巻の「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条には、

*m*ソーヤヨ $\left(\begin{matrix} \text{ンー} \\ f \end{matrix} \right)$ ンー ワシラモ ソノ オドリコミノ レンチ
 そうだよ。 わたしたちも その 踊りこみの 仲間
 ユーイ イテキタンジャヨ

はいつてやってきたんだよ。

とある。これには、「～ヤ ヨ」とともに「～ジャ ヨ」が見えておもしろい。(県下一般に、指定断定の「ヤ」助動詞が用いられ、かつは、中部以南に「ジャ」助動詞も認められる。)

命令・勧奨の「ヨ」がある。「どうどうせ ヨ」式の言いかたが一般的であり(「……………行ケ ヨ。」「……………するな ヨ。」など)、その上に、勧奨の言いかたが栄えている。「行かんし ヨ。」(行きなさいよ。)
 「おコライ ヨ。」(「こらえてね。」ごめんね。)などと言われている。『和歌山県方言』には、

シイヨ しなさい

というのが見える。動詞連用形の言いかたを受けた「ヨ」である。やはり、ここに、ていねいな勧奨表現法が見られる。——さきの「おコライ ヨ。」といい、これといい、近畿になじみぶかいものである。

○マ^ー アガラ^ンセ ヨ^ー。

まあお上がりなさい。

○ハ^ヨー ^ゴンセ ヨ。

早くおいでよ。

は、紀州中部でのものである。なお、本県下でのていねいな命令表現の一種ともしてよいかと思われるものに、「読んで 欲シ ヨ。」などの「～て 欲しい」式の言いかたがある。(あるいはこれを、依頼の表現ともしうるか。が、

じっさいは、むしろ、ていねいなあつらえとすべきことが多いかもしれない。）

さそいの「ヨ」がある。

たのみの「ヨ」がある。

問いの「ヨ」がある。本県下に、この用法の、とくにと言ってもよいほどにさかんなのが注目される。「それは何か。」と問うのに、「ソエ ナン ヨー。」と言っている。「どうしたの?」と聞く時には、「ドー シタ ヌヨー。」と言っている。

よびかけの「ヨ」がある。新宮ことばでは、「アニ ヨー。」(兄よ。) <“下男に言うことば”> 「ンネサ ヨー。」 <“女中に言うことば”> などの言いかたがされている。県下の南北にわたって、よびかけの「ヨ」のいちじるしいものが見られる。『和歌山県方言』の、

オウヨ はいさうです

オウヨウ さうです

サアヨ さあどうでせう

なども、よびかけのである。県南の、新宮市を出ての北方で聞いたものには、「さようなら。」の「アーバ ヨ。」などがある。やはりよびかけのでもある。

反撥表現とでも言うべきものに見える「ヨ」がある。『和歌山県方言』には、「スルカヨウ しませんよ」が見え、また、「インダイシヨ」「インドインヨ」(帰ったではないか)というもの見える。ついでに、私が県南で聞いたものをあげるならば、

○ソガナン コト ユーテモ、ヒツツイトン ドガヨー。

そんなことを言っても、ひつついてるじゃないか。

などというのがある。

感嘆の「ヨ」がある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ナヨ」がとりたてられる。いくらかのやさしみをもってこれが言われているか。私の県南経験には、

「アア ナイヨ。」(あのねえ。)
「ホン ナイヨ。」(ほんとにねえ。)というのがある。

「どうどうしてオクレナヨ。」とのことばならびのばあい、「オクレ ナヨ」のばあいもあれば、「オクレナ ヨ」のばあいもある。

「ネヨ」も聞かれる。(「ネーヨ」ともある。)『全国方言資料』第4巻の「和歌山県東牟婁郡古座町」の条には、

m トーカラ スマンケドニー (ハイ) キノ ケンケンズナ キッ
早くから すまないけれどねえ、 (f) きのう けんけん綱を 切っ
タッテキテネヨ
てしまつてねえ、

とある。

「ノヨ」もある。私はかつて、南紀の鉄道線上で、中年男子間の、

○サ[↑]ンカクニ トッテ [↑]ア[↑]ーヨ[↑]ー。

↓ 三角にとってね。

○ナニ ヨ[↑]ーア[↑]ー。マ[↑]ー セ[↑]ンエン カイ。

あれだねえ。まあ千円かい。(自分の見つもりを言う。)

の会話を聞いた。前田勇氏は、『和歌山方言』5の「ポスト」欄で、

享保20年大阪豊竹座上場「苺萱桑門筑紫轢」の第四で、紀州学文路の庄屋がこんなことばを使っている。

「コレ皆の衆、此所の殿様、大内之助義弘様がノヨ、遙々の海山を越え直に登って絵図をみんなに一枚づつ渡してノヨ、(以下略)

と述べていられる。

県南辺の古座町などの、例の「ニー」ことばの地には、「ニーヨ」もおこなわれている。

『和歌山県方言(其二)』には、

ソウヨウヨ そうよ、そうでございわ 「日高女」

との記述が見える。「中部地方(日高郡)」に、こういう言いかたがあるのだと

いう。「ヨウヨ」の言いかたはめずらしい。

「ダヨ」の複合形がある。『和歌山県方言』には、「アラダヨ あるのにな。」が見え、『南紀土俗資料』には、「あらだよ（あるのに、あるではないか）」が見える。和歌山県下独特の「ダ」がここに見える。この「ダ」は、なら指定断定に関するものではなくて、いわば、感声系の文末要素である。私が県南域で聞いた例をあげるなら、

○アッチ イケ ダヨー。

あっちへ行けたら。

○ソーヤ ダヨー。

“そうだそうだ。”

などがある。「ダヨ」のおこなわれる所には、「ワダヨ」も聞かれる。

「カヨ」があり、「カイヨ」があり、「ガヨ」がある。

「ワヨ」がよくおこなわれている。

○ルスデ アッタ ワヨー。

るすだったよ。

は、県中部北寄りでの一例である。

「ワヨ」ならぬ「ラヨ」もある。——本県下の特色と見られるものである。「ちがいます。」が「チガワ ラヨ。」と言われている。『和歌山県方言』には、「ユキマシヨラヨ 行きませう」「シトイデラヨ して来なさいよ」などが見える。「ソウヨラヨ さうですわ」というのも見える。これらでの「ラヨ」認定は、容易であらう。「ラ」は、「ワレ」の「レ」に相当するものらしい。（「レ」が「ラ」になった、[a] 母音への音転訛は、やはり、文末の訴えことばの聞こえをよくしようとしてのことであつたらう。）

「シヨ」という複合形もまた、本県下に注目される。『和歌山県方言』には、「イクナシヨ 行くな」があり、「アカナシヨ 駄目ですよ」がある。「イクナ」と禁止の言いかたをしておいて、そのもとにつけた「シヨ」は、まとまった文末詞に相違なく、この「シ」は、「もし」系のものと解される。「ノシ

ヨ」の形のものできている。「ノ」は、ナ行音 文末詞の「ノ」であろう。)「ヨシヨ」という複合形もできていて、これがかくべつよくおこなわれているようでもある。県中部で聞いた、

○オ[↑]チャ タベ ヨシヨ。

ごはんをおあがりよ。

は、母が子へなど、やさしみぶかく言う時のものである。

「ヨシヨ」のおこなわれる所に、「ヨシ」もよくおこなわれている。

「ワシヨ」の言いかたもある。『和歌山県方言』には、「ナイワシヨ ないでせう」というのが見える。

三重県

本県下にも、「ヨ」がよくおこなわれている。自己の意を言う「ヨ」がある。

○オーキニ、ゴクローサン。スマナ[↑]ンダ ヨ。

ほんとにごくろうさんね。すまなかったよ。

は、県西南部、和歌山県寄りでの一例である。

説明の「ヨ」がある。県下紀州での例はおくとして、伊賀例をあげるなら、

○ホン[↑]チ ヨト ア[↑]ラヘンデ ヨー。

そんなことはありゃしないよ。(老女→中女)

○オゼン コシラエマシテ ヨー。

おぜんをこしらえましてね。(中女→藤原)

などがある。「〜ジャ ヨ」の言いかたは、紀州分によく見られる。

命令の「ヨ」がある。

○イエー [↑]ヨイ ヨ。

うちへ来いよ。

は、志摩半島東岸での一例である。この方面には、「タモレ [↑]ヨー。」などの言いかたもおこなわれている。ただの命令もあれば勸奨の言いかたもあるのは、

多く言うまでもないことである。

依頼の「ヨ」がある。

問いの「ヨ」がある。しかし、これのおこなわれることは、和歌山県下の比ではない。『三重県方言資料集 南勢篇 上』には、「なっとよー 何と＝詰問するに用いる（地方）」がとり上げられている。

よびかけの「ヨ」がある。これは、県下に広く見られる。

感嘆の「ヨ」がある。

○キノドクナ ヨー。マー ヨー。

きのどくだわ。ほんとにねえ。 （老女）

は、紀州分での一例である。

「ヨ」の「ヨイ」形もあるのか。鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」（『三重県方言』13 昭和36年12月）には、

大掃除よい。（大掃除よ。

との記事が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」（おもに「ナーヨ」）「ネヨ」（おもに「ネーヨ」）があり、「サヨ」「ゾヨ（ドヨ）」がある。「ナーヨ」は、おもに志摩に聞かれるものらしい。

○ソレガ サヨー。

それがさ。（説明にかかる時のことばである。）

は、伊賀での「サヨ」例である。

「カヨ」がよくおこなわれており、問い・さそいや応答や反語表現などに用いられている。「カイヨ」もある。

「ガヨ」もある。

「ワヨ」「ワダヨ（ワラヨ）」もある。

奈良県

本県下での「ヨ」の用法は、およそ、つぎのようである。

説明の「ヨ」がある。中に、「〜ジャ ヨ。」の言いかたがある。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条に見える例は、

mカワグチニ オッタ^ニンジャヨ
川口に いたんだよ、

などである。

自己の意を言う「ヨ」がある。「ソートモ ヨー。」(そうだとも。)
「エラカッタ ヨー。」(たいへんだったよ。)などは、県東南部での例であり、

○オーキニ、ゴツツォー^ニジャッタ ヨー。

ありがとう、ごちそうだったよ。(辞去にさいしてのあいさつ)

○カタジケノー ゴザッタ ヨ。

ありがとうごさ^ニんしたね。

は、十津川での例である。県南地方に「ヨ」のおこなわれることはさかんである。

命令の「ヨ」がある。もとより、ていねいな勸奨のばあいもある。「どうぞしなさい ヨ。」など。

さそいの「ヨ」が広くおこなわれている。『奈良県宇陀郡方言集』には、「も^ニうイカントコよう」(「イカントコ 行くまい」)とある。

たのみの「ヨ」がある。

問いの「ヨ」がある。

よびかけの「ヨ」がある。十津川ことばには、

○オイオイ、オマイ ヨー。

おいおい、おまえよ。

というのがある。ちなみに、『中和郷土資料』には、「アノヨウ アノネ」が見えている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、「ナヨ」がまず注目される。

「ナーヨ」と言われていることが多い。諸家の方言集には、「あのノーヨ」も見えている。

「サヨ」がある。『奈良県宇陀郡方言集』には、「ちっとナット呉れさよ」(「ナット …でも、なりと、」)とあり、県東南隅例では、

○オリャ イマ ソンクワイギイン シトル ンサーヨ。

おれはいま村会議員を“しとるんだ。”

などとある。「ゾヨ」もあり、「ドヨ」ともなっている。「ゼヨ」もある。

「カヨ」のおこなわれることがいちじるしい。

○病気は ヨー ナッテ ヨン カヨー。ホンマニ フーラー。

病気はまだよくなってこないか。ほんまにねえ。(こまったことだとの気もち)

は、十津川での一例である。

おなじく県南で聞きとめたことばに、「アロー ニヨー。」(“ない。”)「フンジャロ ニヨー。」(“そうではない。”“ちがう。”)などというのがある。

「カイヨ」に相当する「ケヨ」がある。『奈良県宇陀郡方言集』には、「ほんまけよ 本当かい」などがあり、『大和方言集』には、「本当ケヨ。夫をしてんケヨ。」というのが見える。

「ガヨ」がある。県南での例は、「相手が米人なら、ナオ エー ガヨ。」(相手が米人なら、なおいいじゃないの。)などであり、「ガヨ」は、「ガヨ」ともある。「ガヨ(ガヨ)」も、県下によくおこなわれている。「フヤ ガヨー。」(そうなんだよ。)は、とおりの文句であろう。若い人たちも、たがいにこの「ガヨ」を言いあっている。「ガイヨー(ガイヨー)」もおこなわれている。『大和方言集』には、「ナンテヨ、わからひんげよ」と見える。

「デヨ」があり、「ワヨ」がある。

○ダヒテ クル ワヨー。

出してくるわよ。

と言われている、大和のことば調子は、関東弁での「ワヨ」とは、およそおも

むぎを異にするものである。

京都府

「ヨ」に関して記述すべき事項が、今の私には、多くない。

自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」、命令・勸奨の「ヨ」などが、まずはとりたてられる。

○ツヤケド ヨー。

そうだけだね。

などの、自己の意を言う言いかたは、広く通用しているものであろう。井上正一氏の『丹後網野の方言』には、「その持ち方はヒッチャコッチャだよ」（あべこべ。反対。）とある。もとよりのこと、この「～だよ」は、山陰路のことばそのままのものである。

命令・勸奨の「ヨ」の、勸奨の例では、

○アンパイヨー ミナレ ヨ。

よく見なさいよ。

などの言いかたが、府の北部に一般的である。「ナカント ハヨ イキナ ヨ。」（泣かないで早く行きなさいよ。）などは、さらに広くおこなわれていよう。

※ ※ ※

府下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ケレヘン デヨー。」（蹴りやしないよ。）などの「デヨ」があり、また、

○ダツェル ガナヨー。

出せるわよ。（初老女→中女）

などのようなものもある。

滋賀県

自己の意を言う「ヨ」があり、『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

f ホラ ホヨ ワタシラモ ホーヨン

それは そうですよ。わたしたちも そうですよ。

のように、「ヨ」が「ヨン」ともある。

説明の「ヨ」がある。つぎのは、湖西での一例である。

○アノ ヨー。オマイ トコノ ムスコワ ヨー。

あのねえ。あんたのうちのむすこはねえ。(説明していくところである。)

が、これは、一種のよびかけになっている。

命令・勧奨の「ヨ」がある。

よびかけの「ヨ」がある。

「ヨ」相当の「ヨン」形のは、すでに上に見た。「ヨイ」形もある。佐藤虎男氏教示の湖東例は、

○ホー ヨイ。ワシモ トラックニ ノッテ キタ、アノ トキ。(青女→中男)

である。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ(ナーヨ)」「ゾヨ」「カイヨ」「ノヨ」などがある。

○アカン [↑]ゾヨ。

いけないよ。(“やさしくたしなめるばあい”)

は、湖西での「ゾヨ」の一例である。

近畿地方にも、地域によって、「ヨ」の流行に精粗があるか。

七 中部地方の「ヨ」ほか

まず、北陸道を見るのに、この地域には、「ヨ」の使用の、さほど複雑な状況は見うけられない。近畿東北部の状況と北陸道の状況とは、よくつながるものであるだろうか。

福井県

自己の意を言う「ヨ」が、

○ビツクリシタヨ

などとおこなわれている。『大野郡口語法並音韻調査』「アバ[↑]ヨ。」(さようなら。)などというのものもある。

説明の「ヨ」が、

○オト^ーサン ク^ビガ ヌ^ケマス ヨ^ー。

お父さん首がぬけますよ。(人形ごっこ)

などとおこなわれている。

命令・勸奨の「ヨ」が、「どうどうせ ヨ。」

○ソ^コ イ^ゴカント オ^カンジェ ヨ^ー。

そこをうごかないでおきなさいよ。

などとおこなわれている。『大野郡口語法並音韻調査』には、「ソ^ンネアスバ^シト勉強シヨ(そんなに遊ばないで勉強おし)」というのも見える。「勉強おし」の言いかたが注意される。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ネヨ」「ゾヨ」「カヨ」「ノヨ」「テヨ」「デヨ」などがある。

『福井県方言集』には、「ウラシランケド、アノネヨ、……………」(「私は、知らないけれどね、……………」)というのが見える。若狭三方郡のことばであるという。若狭の永江秀雄氏の教示によれば、三方郡を出ての西方地域にも、「ネヨ」のあることが知られる。その方面に、“皆^{みんな}笑うさけもうネヨて云わんと置^おこネ

ヨ”との言いぐさもあるという。

「デヨ」も若狭に見られる。だいたいこれは、近畿系のもものではなからうか。

石川県

自己の意を言う「ヨ」が、能登では、

○コーテ クレル ヨ。

買ってあげるよ。

などとおこなわれている。

説明の「ヨ」が、加賀東南では、

○ミズガ キンソ ナッテ キテ ヨー。

水が岸になっておし寄せてきてねえ。

などとおこなわれている。能登半島西岸例をさらにあげるならば、

○オラガ トコノ ヂヂワ, カラダ ダイジニ シェル ヒト ヨ。

わたしのうちのじじは、からだをだいにする人だよ。

などがある。

命令・勧奨の「ヨ」が、ふつうにおこなわれている。

問いの「ヨ」がおこなわれている。私は、能登半島西岸で、「テンキ ヨー。」(天気かね。)「イク ヨー。」(行くか。)「センセ アシタ エンソク アル ヨー。」(先生、あした遠足ある?)などの言いかたを聞いた。「ヨ」がよくつかわれ、こうして問いにも用いられている。

よびかけの「ヨ」もおこなわれている。

「ヨ」相当の「ヨイ」が見られる。馬場宏氏の『木郎方言考』には、「どうしたよ=ナシタ ヨイ」「来たわ よ=来たわ ヨイ」が見える。氏は「ヨイ」を、“柔和な感じ”のものとしていられる。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ネヨ」「イヨ」「ゾヨ」があ

り、「カヨ」が多くおこなわれており、「カッチャヨ」というものもあり、「カイヨ」相当の「ケーヨ」があり（「ケーヨー」とも言われており）、「ガヨ」「トヨ」「ワイヨ」もある。「トコトヨ」というものもあるか。

○マンダ キマシエン カヨー。

まだ来ませんかね。

は、「カヨ」の一例であり、

○チーシャ フンムキ ナイ カッチャヨー。

小さい噴霧器はないかって言うんだよ。

は、「カッチャヨ」の一例である。ともに、加賀白峰のものである。

石川県下は、能登半島の特色地域をふくむだけあって、「ヨ」文末詞生存の状況が、やや複雑である。

富山県

自己の意を言う「ヨ」が、県南がわでは、

○ナニガ オソガイ コト ヨ。

なにがこわいことか。（「こわくはないか？」との問いへの返事）

などのおこなわれている。

説明の「ヨ」がおこなわれている。

命令・勧奨の「ヨ」が、県南例、「マタ ゴザイ ヨー。」（またおいでよ。）、
「スズカニ サッサイ ヨー。」（静かになさいよ。」辞去のあいさつ，“おじ
ゃまでありました。”）などのおこなわれている。本県下での特色ある勧
奨表現法は、

○ヤスマズト ハヨ イカレ ヨー。

やすまないで早くお行きよ。（大人→小人）

に見られるものである。

○アンタ オソナッテモ コラレ ヨ。

あんた、おそくなくてもおいでよ。(初老男 電話)

は、富山市西北郊での一例である。

よびかけの「ヨ」もおこなわれている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「カヨ」「ケーヨ」「ガイヨ」「トヨ」などがある。

新潟県

自己の意を言う「ヨ」が、直江津例、

○オラ シラン ヨー。

わしは知らないよ。

などのおこなわれている。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡相川町大倉」の条に見えるものは、

*m*ニヤカナ モンラッタヨ

にぎやかな ものだったよ。

などである。県下に、「アバ ヨ。」の言いかたもある。

説明の「ヨ」がおこなわれている。

命令・勸奨の「ヨ」がおこなわれている。押見虎三二氏が「佐渡方言の文末助詞について——両津市大字片野尾における——」(『方言研究年報』第一巻)の中にかかっているものには、

○イッテコイ ヨ。ヨロシュ ユーテクリー ヨ。

行ってらっしゃい。よろしくもうしてくださいよ。

がある。

よびかけの「ヨ」もおこなわれている。

「ヨ」に相当する「ヨイ」の形もある。上掲の押見氏の論文には、

「ヨイ」は、同輩間での、もっと粗略な言いかたである。

○イク 下キ ヨボッテ クッリヤイ ヨイ。

行くときよばわってくださいね。

は、多少品のさがった感じをともなう。

との記述が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」「ゾヨ」「カヨイ」「ガヨ」「チャヨ」などがある。

○ハンタイガワモ アルシ ナヨー。

反対がわもあるしねえ。

は、佐渡で私が聞きとめたものである。——「ナヨ」は、越後でよりも佐渡で聞かれるものか。

『佐渡昔話集』には、「婆^ば戻^もつたりヨよー（戻^もつたぞよ）」が見える。

押見氏の上記論文には、

○コリユー クリッチャ ヨ。

これをくださいね。

との、「チャヨ」例が見える。——「チャ」は「と言やあ」を思わせる。

北陸道では、自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」、命令・勧奨の「ヨ」、よびかけの「ヨ」が、通有のものになっている。つぎに岐阜県以降を見よう。

岐阜県

本県下では、つぎのように、北陸でのとはいささか変わったおもむきが見られる。

自己の意を言う「ヨ」がおこなわれており、それに、『北飛驒の方言』に見られる「ザマヨ さま見ろ。『罵』」「ザマノカワ(ヨ) 同。『罵』」などがある。

ちなみに私は、高山市で、「ヨー キトクレタ ヨー。」(よく来てくださったねえ。)
「ヨー キテクレタ ヨナ。」(よく来てくれたわね。)などを聞き得ている。

説明の「ヨ」が、広くよくおこなわれており、ことに、

○何々モ ヨー。ホレカラ …… ヨー。 …… ヨー。

のような、「ヨ」重出の言いかたも聞かれる。「アノ ヨー。」(あのねえ。)などのセンテンスも、よくおこなわれている。美濃にも飛騨にも、この種の「ヨ」のおこなわれるのが見られる。岐阜市の一老女は、“木曾川を越して尾張の国にはいると、「アノ ヨー。アノ ヨー。」と言う。”と説明してくれ、「ソウシテ ヨー。アノ ヨー。」(そうしてねえ。あのねえ。)との言いかたも示してくれた。美濃中央北部では、「アノ ヨー。」の多くおこなわれることについて、“アノ ヤー。”よりも「アノ ヨー。」のほうがやさしいでしょう。”との説明が聞かれた。

「アノ ヨー。」などの「ヨー」を、「よびかけの『ヨ』」ともすることができよう。しかし、今は、「だれだれさん ヨー。」というようなのを、単純よびかけの「ヨ」と見て、「アノ ヨー。」式のは、説明表現のためのよびかけ性の「ヨ」と見る。

「アイガ カカットルンダ ヨ。」など、「……ダ ヨ。」形式の言いかたは、よくおこなわれている、一般的な説明表現法である。

命令の「ヨ」がふつうにおこなわれており、「コッチ ヨイ ヨ。」(こっちへ来いよ。)などとある。「どうどうすると アカン ヨ。」などの、制止の表現法もまた、ここにあげておいてよからう。命令の、ていねいなばあい、

○ミヨチャン。ハヨ オイデ ヨ。

みよちゃん。早くおいでよ。

などのばあいの「ヨ」のおこなわれることも、もちろんである。「オクレ ヨ。」も、よく聞かれる。

つぎに、

きいよう [句] 来なさい。

のようなものもある。(『岐阜県方言集成』「養老郡」同書にはまた、「くりょ [句] ください。下さい。」式の言いかたも多く見えているが、これは本来、「くれう」的な未来化表現法のものであろう。それが、一種婉曲な命令表現法に役だつことになっている。——あるいは、「くれ ヨ」が「くりょ」ともなっているのか。「かしょ [句] 貸せ。」などともある。ところで、『郡上方言』の「コリャ ツー イソガンデ アイマ=コーマニ ヤツテクリョヨ (これはそう急がないから、仕事のひまひまにしてくれ)」などは、「クリョ」の言いかたをさらに「ヨ」が受けていて、「クリョ」命令表現のばあいの「ヨ」が明らかである。

たのみの「ヨ」もおこなわれており、『岐阜県方言集成』には、「てえよ [句] て下さい。」や、「かによろ [句] 堪忍して下さい。」などが見える。

問いの「ヨ」がおこなわれている。

○ドー シタンジャ ヨー。

どうしたんだね。 (大人→小人)

は、飛騨、高山市での一例である。

○オカーチャン。コレ ワッタノ ドー スル ンヨ。

お母ちゃん。これを割ったのを、どうするの？ (割った茶碗のことを問う。)

は、美濃北部での一例である。(これは、「ンヨ」複合形の例である。) 問いの「ヤ」に、問いの「ヨ」が対立している。

「ヨ」相当の「ヨン」があるか。『岐阜県方言集成』の「可児郡」の条には、「ほうかよん [句] さうですか。」「よん [助] ですか。どうよん=どうですか。」などとある。

「ヨ」の「ヨイ」形もあるか。上書の「揖斐郡」の条には、「よみんよい [名] 読みなさい。」とある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」「ゾヨ」「カヨ」「ンヨ」「トヨ」「ワヨ」などがある。福井県下などに見られた「デヨ」は、当方には見られないらしいのが注意される。（「ゾヨ」は、本県下によく見られ、かつ、西隣の滋賀県下にもある。）

トマッテットクレヨ，ナヨ。タマニキトクレタンジャネ（泊つて下さいよ、ねえ、たまに来て下さつたんだもの）
は、『郡上方言』に見られるものである。「ナヨ」の出かたが注目にあたいる。

愛知県

愛知県下の状況は、全般に、岐阜県下のに類同するところが多い。「ヨ」がさかんにおこなわれている。その品位は、やはり、「ヤ」の上をいくものであろう。

自己の意を言う「ヨ」が、渥美半島での例、

○マ^ー フランダ^ラー ヨ。

もう降らないだろうよ。

などのおこなわれている。

説明表現に関するよびかけ性の「アノ ヨー。」など、岐阜県下で指摘したのとおなじもののおこなわれているのが注目される。（「アノ ヨー。」が、“ていねいになると「チモ」であるという。）「アノ ヨー。」の言いかたも、ふつうにおこなわれている。ところで、芥子川律治氏は、「アノ ヨー。」について、“上町出身の人はつかわぬ。下町のもののみ言う。「ヨー」はひじょうに下品。”と、私に説明せられた。尾張西部の農村で、私はかつて、幼男が、物をとってくれたのむのに、

○ア^ア ヨー。

と言ったのを聞いたことがある。父おやは、答えて、“これかね？”と言って、その物をとって渡した。「アノ ヨー。」などの言いかたは、今は、単純な入来物とはしがたいようである。土地にかなり根づいているのではないか。

○ネトルトサイガ ヨー。

(うちへ帰った時、子どもらが)ねてるとヨー。“こいつらのためにおれはやらなくてはと思う。”

は、名古屋駅で中央線に乗りこんだ通勤男性のことばである。『方言』第二巻第十一号の「名古屋言葉(方言絵ハカキ)」第二輯に見られることばには、

今日わま休みのこったでよー、ちょこっとお邪魔させて貰いに来ましたわいも。

がある。岡田稔氏の「名古屋弁の移り変わり」(『NHK国語講座』昭和32年刊12・1月「方言の旅<方言の歴史>」)には、

そでヨウ、きんにようのあさヨウ、銀行へヨウ行って来たでヨウ。

とある。かつて、三河北部の北設楽郡の人にものを聞いた時は、“「ヨー」は言はぬ。”とあった。

一般的な説明の言いかた、「……ダ ヨ。」も、よくおこなわれている。

○マ^ー ヒ^トサ^メ ア^ッテ エ^ー コ^ロダ ヨ。ハ^タワ ガ^リガ^リダ^デ。

もうひと雨あっていいころだよ。畑はがりがりだから。

は、三河弁での一例である。

命令の「ヨ」が、ふつうにおこなわれている。「ソ^ノ キ^モチ^オ カ^ッテ ク ヨー。」(その気もちを買って“くれよ。”)などの「ク ヨー」は、「クレヨー」なのかどうか。高瀬徳雄氏が「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」との題のご手稿であげていられる、

○オ^ジサ^ン イ^レト^イト^クレ^ンヨ。(小・男→大・男)中<全>

おじさん いれといてよ。

は、「クレン ヨ」を見せている。渥美半島の田原町で聞いたものには、「コノ手紙ワ ト^ット^キン ヨ。」(この手紙はとっておきなさいよ。)がある。「取ッ

トキ」の、動詞連用形利用のていねいな命令表現法が見られる。「どうどうして $\overline{\text{チョー}} \text{ヨ}$ 。」(どうどうしてちょうだいよ。)の「 $\overline{\text{チョー}} \text{ヨ}$ 」のばあいも、命令表現と見ることができ、また、たのみとも見ることができる。

○ $\overline{\text{マタ}} \text{イ}$ $\overline{\text{リャー}} \text{ヨ}$ 。

またおいでよ。

は、名古屋弁の、例のていねいな言いかた(親愛の表現)である。柴田武氏編『方言の旅』の同氏「東海道の巻」の「東三河と西三河」の条には、

ソレデ 御飯 食ベテ デカケニャ 幼稚園 イケヤヘンゾ 早く 起キ
 ョーヨ

というのが見える。この、「起キ ョーヨ 」の未来化表現法の言いかたのばあいのも、一種の命令表現のばあいとして、ここにとりあげることができる。私の聞いた三河奥の例には、

○ $\overline{\text{サー}} \text{ソ}$ $\overline{\text{ゴト}} \text{シ}$ $\overline{\text{ョー}} \text{ヨ}$ 。

さあしごとをするんだよ。

というのがある。

さそいの「ヨ」があり、問いの「ヨ」がある。

「ヨ」の「ヨン」形があるか。『名古屋ことば』には、「まあ行くよん(まあ行かんの意、まあ行くのかの意)」というのが見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ネヨ」「ゾヨ」「カヨ」「トヨ」などがある。高瀬氏の上記ご手稿には、

○ $\overline{\text{ヤイヤイ}} \text{ゼン}$ $\overline{\text{ショー}} \text{セ}$ ヨヨ 。(青・男→同) 下<男・主に青以下・学生に多い>

おい、全勝しろよ。

というのが見える。私はかつて、知多半島で、「どうどうセ $\overline{\text{ヨヨー}}$ 。」というのを聞いたことがある。——発言は、「セ $\overline{\text{ヨ}} \text{ヨ}$ 。」的なものであった。

静岡県

東海がわは、北陸道とは異なるようすを見せている。

本県下には、自己の意を言う「ヨ」が、ごくふつうにおこなわれている。

○イエー ヨー。オレン カタズケルデ。

いいよ。おれがかたづけるから。

など、いわば東京語流に、ふつうに「ヨ」がおこなわれている。「ダメダ ヨ。」
などともある。

○オリャー コンバン ドコイモ イカナエター ヨ。

おれは今晚どこへも行かないよ。

は、熱海沖の初島での一例である。

○コンヤ ユキズラ ヨ。

今夜は雪だろうよ。

は、伊豆半島内での一例である。大井川奥で聞いたことばには、辞去のあいさ
つの、

○サイチ ヨー。

さよならね。

があり、去る人を送る「マダ オイデ ヨー。」(またおいでね。)がある。

説明の「ヨ」が、伊豆半島南端では、

○アッチ マギッタ ヨ。

あっちへ曲って行ったよ。(通って行った人のこと)

などとおこなわれている。「何々ダ ヨ。」の言いかたは、県下にいちじるしい
ものであろう。「アッケ ヨ。」(あったよ。)というようなことばづかいも、広
くに見られよう。徳田政信氏の「静岡県岳南語法一助辞之部一」(『方言』第
六巻第五号)には、

「ドッ コニモイマセシテ ヨ」→「何処にも居ませんでしたよ」

との記事が見える。『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条には、

*m*イッシューカンヤ トーカー ヤルモンダッケヨ。
一週間や 十日は やるものだったよ。

などというのが見える。

『静岡県島田方言誌』には、「イクツチャー いくそうだ 行くそうだ」,
「ダツチャー であるそうな 静岡へ行くダツチャー」,
「ソーダツチャー さようだそうで」というようなことばづかいが見える。「チャー」は何か。これがもしも「〜て ヨ」の言いかたからのものであったとしたら、この「チャー」の言いかたも、今の「ヨ」の問題の末にかかげるべきことになる。

命令の「ヨ」が、広くおこなわれている。

○ガツコイ オクレルデ、ハヤク オキョー ヨ。

学校におくれるから、早く“起きなさいよ”。

は、御前崎での一例である。「オキョー」の未来形の言いかたが注目される。(愛知県下にも見られたことである。)大井川奥の例は、「ヤメョー ヨー。」(やめなさいよ。), 「ベンキョー ショー ヨー。」(勉強をおしよ。)である。この種の未来表現化したの命令の言いかた、勧奨の言いかたは、だいたい、東国系のものであろう。(ちなみに、完了表現法による命令の言いかた、「退けよ。」の「ドイタ。」などは、関西系のものとされるか。)

○オヤメニ オシ ヨ。

おやめにしなさいよ。

というのも、大井川奥で聞いたものである。「オシ ヨ」の言いかたは、一般には、よい(あるいはいていねいな)言いかたになっていよう。未来表現化の「オキョー ヨ」などの言いかたは、ややよい言いかたのものとされていてがちか。伊豆半島の北部で聞いたものには、ぞんざいな命令の「ハヤク イケ ヨ。」(早く行けよ。)があり、勧奨表現の「ハヤク イキテ ヨ。」(早くお行きよ。)
「ハヤク イキニャン ヨ。」(早く行きなさいよ。)がある。ここではまた、

「ベンキョー シロ ヨー。」(勉強しろよ。)とともに、「ベンキョー シニャ
ン ヨー。」(勉強しなさいよ。)などというのも聞くことができた。

さそいの「ヨ」が、「行こう ヨ。」などとおこなわれている。「行かず
ヨ。」などともある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「カヨ」があり、「ノヨ」が
あり、「ダヨ」があり、「ワヨ」がある。伊豆半島などの「ワヨ」の用法は、関
東地方のそれにおなじである。

○アノ テンコージャ ナー。 デラレナイ ダヨ。

あの天候ではね。出られないわよ。(てんぐさとの海女) (老
女間)

は、「ダヨ」の一例である。

「カイヨ」もあるらしく、『全国方言資料』第3巻の「静岡県吉原市吉永」
の条には、

*m*エー タマゴ アルケャヨ
卵が あるかね。

とある。

長野県

自己の意を言う「ヨ」が、「ハイ ヨー。」(はいよ。)などとおこなわれてお
り、謝辞の「オカタシケ ヨー。」(ありがとうよ。)などというものもある。北
信では、「ゾ」と「ヨ」とについて、“「ゾ」のほうがむかしからのことば”と
いう説明を聞いたことがある。県下で、「〜ズラ ヨ」「〜ズ ヨ」も聞か
れる。

説明の「ヨ」が、

○カミシロシヨーガッコーノ コーカダ ヨ。

神代小学校の校歌だよ。

などとおこなわれている。

命令の「ヨ」が、「………… ユツトクレ ヨー。」(…………言っておくれよ。)などとおこなわれている。『上伊那方言集』には、「くださいよ」の意の「くりよよー」が見える。

『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」に、

f アーア オジーガ ヤッテタヨイ

ええ、ちちが やってましたよ。

というのが見える。「ヨ」相当の「ヨイ」もあるのか。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞に、まず「ヨヨ」が見える。前引文献に、

f ハジメワ ソーヨヨー

初めは そうですよね。

との言いかたがあがっている。

「ゾヨ」があり、「ドイヨ」があり、「ゼヨ」がある。「ノイヨ」もある。『信州方言読本』には、北信、松代のことばとして、「ちっともこねのいよ(ちっとも来ないのですよ)」というのがあげられている。山崎栄雄氏も、「信州松代のことば」(『言語生活』第五十二号)で、「イクラマッテモチットモコネエノイヨ。」などの文例をあげていられる。

山梨県

自己の意を言う「ヨ」が、県西南での例、「コ^テラーゲー ヨー。」(ごくろうさんでした。)などのおこなわれている。『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条には、

f イマヨリカ モンダヨ タノシミダッタヨ

いまよりも なんですよ、 楽しみでしたよ。

の実例が見える。「タノシミダッタヨ」の言いかたのほかに、「モンダヨ」の間投句も見える。おなじく、上記文献「奈良田」に、

f アノ ⁴⁾モンダッケヨ ………

あの あれでしたよ。 ………

4) 「モンダ」は適当な語句を思いつかないときに使う語句。

ともある。「モンダヨ」「モンダッケヨ」は、説明の「ヨ」を見せているとも見られようか。甲府市の「オラー コースル ヨ。」(おれはこうするよ。)など、自己の意を言う「ヨ」が、県下に広くおこなわれている。県西部の言いかたに、「ヨモー ヨ。」(しかるよ。)との言いかたもあるという。甲府市で聞いたことばには、「行かないよ。」の意の「イカナシ ヨ。」がある。同等間のことばであるという。——「した？」と問われての答え、「シナシ ヨ。」は、“しはしません。”であるという。

説明の「ヨ」が、「〜ダ(デス) ヨ」と、ふつうによくおこなわれている。『奈良田の方言』の「奈良田ことばの語法」には、「白イハ ダイコドーヨ。(白いのは大根だ)」との言いかたが見える。

命令の「ヨ」が、「シロ ヨ」(しろよ)「タベロ ヨ」(たべろよ)などとおこなわれている。県西南部での言いかたには、

○ツレテッテ ヨー ヨー。

つれてってきなさい。

などというものもある。

さそいの「ヨ」が、「サー エベ ヨ。」(さあいっしょに行こう。)などとおこなわれている。

「ヨン」の形もあるのか。田中清昭氏の「新らしい形容詞」(『言語生活』第三十八号)には、「山梨県富士吉田市」に関してか、

○アクモン ジャーチャーシヨン。あえて訳せば「あの人は何と横着な

んでしょう」ぐらいに受け取れる。
 などの記述がなされている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」（「ナーヨ」も）「ネーヨ」「サヨ」「ガヨ」「ダヨ」などがある。「ナーヨ」「ネーヨ」は、主として県西南方に認められるものか。

○アノ ナーヨ。ホーシテ ナーヨ。

あのね。そうしてね。

などと言われている。

『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」の条には、

f シゴトモ シルニャー $\left(\begin{array}{c} \text{アー} \\ m \end{array} \right)$ スクイガーヨ ……………。
 仕事を するのには $\left(\begin{array}{c} \text{アー} \\ m \end{array} \right)$ 暖かいですがね, ……………。

f サゲアルッテルダーヨ

盗み歩いているんですよ、

などとある。

山梨県東部の状況は、関東地方の状況によくつながっている。

八 関東地方の「ヨ」ほか

この地方には、「ヨ」のおこなわれることがいちじるしい。老若男女の生活語に、「ヨ」が定着している。女ことばの「ノヨ」「ワヨ」、男ことばの「ヨ」は、通有のものであろう。

主として東京方面で聞かれがちな話柄であるが、“戦後は、「どうして ヨー。」「こうして ヨー。」などという「ヨ」が、若いものに広まった。”とされている。神奈川県方面から伝播してきたと見るむきがある。神奈川県下にいちじるしいものがあるのは、事実であらう。しかし、千葉県下にも、ずいぶんいちじるしいものがある。

関東に広く、「ヨ」は生きてきたのではなからうか。「アア ヨー。」「ソレデ ヨー。」などの表現法そのもの（人はこれを、「ヨーヨーぶし」などともよんだりした。「こうして サー。」「そうして サー。」と、「サ」を頻用することに関して、「サノサぶし」の呼名があった。）の来歴はともかくとして、文末詞「ヨ」そのものが存在し得たのは、関東に一般的なことであったかと思う。大橋勝男氏の『関東地方域方言事象分布地図』第二巻〈表現法篇〉によるのに、Map 15には、「あのねえ。」の「ねえ」相当の文末詞「YO(O)」の、関東に一般的な分布が見られる。なお、Map 19「おれではないぞ。」の「ぞ」相当の文末詞としても、「YO(O)」が、関東に一般的に分布している。

青少年には、「おしかけの『ヨ』」とでも言いあらわしうる「ヨ」が、よくおこなわれていよう。男性がこういう「ヨ」を用いたばあい、その表現品位は高くない。いわゆる「ヨーヨーぶし」のばあいは、もちろんそうである。中年男性が、「知ラネー ヤ。」「知ラネー ヨ。」などと言ったばあいには、「ヨ」と「ヤ」とに、どういう品位差があるのであろう。関東地方を旅行していて、ことばの男女差の、ほとんどないありさまに接することがある。そういう時、「ヨ」の発言もまた、男性・女性、どちらが言ったのかと、それをいぶかることもある。「コッチダ ヨー。」（こっちだよ！）、これは、女性の言であった。

神奈川県

さきにもふれた。本県下には「ヨ」がよくおこなわれている。

自己の意を言う「ヨ」が、「〜ダ ヨ。」「イー ヨ。」などと、男女老若によくおこなわれており、かつ、

○オレーオ ケーライルヨリモ ヨー。

お礼をくれられるよりもね。

○デカケテ スミマセン ヨー。

こうして出かけるんで、すみませんねえ。

のような言いかたが、めずらしくない。

説明の「ヨ」も、ふつうにおこなわれている。

○ダ[↑]メ[↑]ダ セー[↑]ッタ ヨ。

だめだって言ったよ。

は、県西部での一例である。「セー[↑]マス ヨー。」(そう言いますよ。)というのものもある。

命令の「ヨ」も、よくおこなわれている。「オ[↑]チャ[↑]オ ヤッ[↑]テ イ[↑]キ[↑]ナ ヨ。」(お茶を飲んで行きなよ。)などとあれば、こういうのは、勸奨表現とされる。「言いなさんなよ。」の意の「イ[↑]ワッ[↑]ジャン[↑]ナ ヨ。」というのも、県下に見いだされる。

さそいの「ヨ」、問いの「ヨ」、感嘆の「ヨ」もある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」(「ナーヨ」も)があり、「ゾヨ」があり、「カヨ」がある。「カヨ」は、問いにも返事にも用いられている。「ノカヨ」もある。

「ノヨ」があり(「ノ」は助詞系の文末詞)、これが、問いにも説明その他にも用いられている。つぎの二例は、県西部で聞いた、問いと説明との例である。

○ド[↑]ケー イ[↑]ガイ[↑]タ ノ[↑]ヨ。

(○○ちゃん、母さんは)どこへ行かれたのね?

○…………。コ[↑]ー[↑]ユ[↑]ー コト[↑]ニ ナッ[↑]チャウ ノ[↑]ヨ。

こういうことになってしまうんだよ。

「トヨ」もあり、県西部では、

○ト[↑]ー[↑]キョ[↑]ー[↑]エ イ[↑]グ[↑]ダー ト[↑]ヨ。

東京へ行くそうだよ。

などとも言われている。

「テヨ」もある。「ダヨ」(「ダーヨ」も)もある。

○ト[↑]ショ[↑]ー カ[↑]グ[↑]シテ[↑]タ ダ[↑]ヨ。

年をかくしてたよ。
は、「ダヨ」の一例である。

東京都

はじめに、伊豆諸島を見る。

自己の意を言う「ヨ」が、つぎのようにおこなわれている。

*m*イマト ナッチャヨ一

このごろと なってはねえ。

これは、『全国方言資料』第7巻の、「東京都三宅村坪田」の条に見られるものである。諸島に、辞去のあいさつの「イロ[↑]ヨ一。」などがおこなわれている。(これに対する応答のあいさつは、「イキ ヨ一。」などである。)『三宅島・御蔵島方言全集』には、「御免なさいとあやまるとき用ふ。」ところの、「カンニヨウ」などがある。

○コリ[↑]ャー オレガダ ヨ一。

これはわしのだよ。

は、大島での言いかたである。

*m*ウラノー ヨコ オジャラダヨ一

あれはまた いい ですよ。

は、『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条に見えるものである。

説明の言いかたも、よくおこなわれている。新島のことばには、

○シンセーサマガ オジャッタ ヨ一。

先生さんがいらしたよ。

などがある。

命令の言いかたが、つぎのようにおこなわれている。

○マ一 アガイ ヨ。

まあ上がれよ。

○コノ テガミヨー ヨンディ キーロ ヨ。

この手紙を読んでくれろよ。

これらは新島での例である。大島のうちでは、「こっちへ来い。」と命令する時、「喧嘩などの時のことば」では、

○コツチエ キヤガンナイナヨ。 <「キヤガンナイナヨ」の分別のしかたがわからない。>

と言うよしである。「〜 キヤガレ。」の言いかたもあって上記の言いかたもあるという。——“早く来い！ 何をうろ〜してるか！”との気もちであるという。おなじく大島で、「こっちへ来い。」が「コツチエ ヨイ ヨ。」と言われており、「そんなにするな。」が「ゾータニ シンナ ヨ。」などとも言われている。『八丈島三ッ根村方言集』には、「ヒツカスルナヨー 忘れるなよの意。」の記載が見える。『三宅島・御蔵島方言全集』には、「カンベンシテ クリヨー（御蔵）御免なさいとあやまるとき用ふ。」の記載が見える。金田一春彦氏の「伊豆列島の言葉」（『方言と文化』）には、利島での若い男女の会話の、女性のことば、

ソレデー オレー ココダンッテ モシー イッテコーヨー 「それでは、私はここだから、あなたは、上まで行って来いよう」

というのが見え、「来いよう」が「コーヨー」とある。飯豊綴一氏が「八丈島方言の語法」（国立国語研究所論集1『ことばの研究』）の中にあげられたものには、「カシテタモオレ ヨオ。貸して下さい、どうぞ。」がある。

たのみの「ヨ」もおこなわれている。

問いの「ヨ」が、大島では、

○ナーシタ ヨー。

どうしたの？（女ことば “なめらかな言いかた”）

新島では、

○オトッタンワ ドキー イッタ ヨ。

お父さんはどこへ行ったの？

などとおこなわれている。

単純なよびかけ性の「ヨ」もおこなわれている。

八丈島に「ヨーイ」がある。飯豊氏の先掲論文には、「マケルナ ヨオイ。負けるなよ。」が見える。——「ヨイ」の形もおこなわれているらしい。早期の方言調査物にもこれが見え、『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町宇津木」の条にも、

*m*ガマンシャレヨイ。

精出して下さい。

(藤原注 途上、相手へのねぎらい)

が見える。同巻の「八丈町大賀郷」の条には「ヨーイ」が見え、「宇津木」の条にも見え、同巻「東京都三宅村神着」の条にも、

m………… ソンナコトワ アレダカラヨーイ

そんなこと 知らなかったから。

が見える。(三宅島には、「ヨーイ」がよくおこなわれているらしい。)

※ ※ ※

伊豆諸島での、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、新島・三宅島などに、「ナーヨ」「ナヨ」がある。大島には、「ネーヨ」「ネヨ」がある。——「ネーヨ。」と言うと、相手も「ネーヨ。」とあいづちをうつのだという。

諸島に「カヨ」があり、「ダヨ」がある。八丈島には、「ワヨイ」もある。

*m*ラレア イナイダヨ

おれは いないよ。

は、『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条に見える「ダヨ」である。

東京都の、旧東京中心の本土部を見る。

自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」がおこなわれている。

ヨイラ デ ナクシタッテヨ こゝいらでなくしたとき

は、『東京方言集』に見えるものである。

命令・勸奨の「ヨ」も、よくおこなわれている。

○イッテ キナ ヨ。

行っておいでよ。

は、やさしい言いかたになるものである。「どうどうしろ ヨ。」も、通用のものであろう。『東京方言集』には、「さうオツナサイヨ。」「オヤンナサイヨ。」などが見える。

「アノ ヨー。」(あのほら。)とか、「どうどうして ヨー。」とかの、よびかけ性の「ヨ」の頻用のことは、あらためて言うまでもなからう。ただし、この「ヨ」ことばの戦後入來說、都外の地方から流入したと見る考えについては、多少の考慮を加えたく思う。旧東京語で、念をおしたり強調したりする時に、おもにおとなの男性などが、「何々 ネーヨ。」とも言ったとすれば、この「ヨ」と「アノ ヨー。」などの「ヨ」とは、あい近い。「アノ ヨー。」式の言いかたが生起する地盤は、東京都内にもあったのではないか。「アノ ヨー。」ほどの単純な言いかたの「ヨ」ではなくても、これに近い程度の「ヨ」は、どのようにか、しぜんにおこり得ていたかとも察せられる。(——関西の鳥取県因幡域などでは、「どうどうして ヨー。」のすなおな言いかたが、古来<早くからしぜんに>おこなわれてきたらしい。)——よそから入来しなくても、本来、存在しきたった「ヨ」の、用法の転が、いつにても、しぜんにおこり得たことだったろうと解される。

※ ※ ※

東京都本土部での、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、「ノヨ」「ワヨ」「カヨ」などが、比較的よく聞かれるものであろうか。「ゼヨ」などもある。

「ワヨ」に関しては、稲垣史生氏の説もある。(「“ござる”言葉考」『放送文化』第24巻第9号)

自己の意を言う「ヨ」が、「アバ ヨ。」(さよなら。)
「ソー イッテ ヤル
ズ ヨー。」(そう言ってやろう。)などとおこなわれている。「何々だ ヨ。」
の言いかたが慣用的である。

説明の「ヨ」が、

fダケン オラ イチド コーユー コトガ アッタッタヨ
 だけど、わたしは 1度 こういう ことが ありましたよ。

などとおこなわれている。(『全国方言資料』第2巻 「千葉県安房郡富崎村
 布良」)

○アソコエ ショッチュー デマンタッケ ヨ。

あそこへしょっちゅう出たんですよ。

は、香取町で聞いたものである。『千葉方言 山武郡篇』では、「落チッよ」
 「枯レッよ」「来ルよ」などにつき、「よ」を、「断定ヲアラハス助詞」として
 ある。

命令・勧奨の「ヨ」がよくおこなわれている。上の書、『千葉方言 山武郡
 篇』には、「エッタェよ 行け」「マカセタェよ 任せよ」などの「ヨ」につい
 ての、「命令ヲアラハス助詞」との説明が見える。本山桂川氏の『千葉県郡別方
 言集 上篇』には、「クッタイヨー 食ひなさい」「ケヨー 食ひなさい」
 (千葉郡)「コオヨ 来れ」(東葛飾郡)が見え、同中篇には、海上郡の「コ
 ウヨ 来なさい」が見える。「来い」の「コー ヨ」は、県下によくおこな
 われているものか。悪罵の「キヤガレ ヨ」などもある。ていねいなものでは、

○マー アガンナ ヨ。

まあお上がりよ。

などがある。「どうどうして クレロ。」に対する「どうどうして クンナ
 ヨ。」が流布している。

○ハヨ イッテ キヤッシュエー ヨ。

早く行ってきなさいよ。

は、上総南部の、安房境近くでの一例である。

さそいの「ヨ」もおこなわれている。

○ミニ イグバー ヨー。

見に行きましようよ（行こうよ）。

は、銚子で聞いたものである。

「オーブロンキ ショッテ ヨー。」（大ぶろしきをせおってね。）といったような言いかたが、県下のどこでも聞かれよう。

m………… オエネーデヨー

だめだぞ

（『全国方言資料』第2巻 「千葉県安房郡富崎村布良」）などとあっても、「ヨー」は、同類の「ヨー」であろう。私は、安房近くの上総で、

○ソーデッサデ ヨー。

“左様である！”

というも聞いたことがある。かんたんな言いかた、「デモ ヨー。」（でもねえ。）「アラ ヨー。」（あらあら。）なども、県下でよく聞かれよう。

早くから、しぜんに、このような単純な「ヨ」がおこなわれてきただろうと察せられる。「いつもおせわになります。」の意で、「イズモ オセワサマデス ヨー。」<アクセント失>と言っているのを、私は、銚子市内で聞いたことがあるが、このように自由につかわれる「ヨ」が、ことばづかいのはしばしで、わけなく流用されれば、「アラ ヨー。」などのようにつかわれることになる。 「ヨー。」と話しかけることは、けって異例のことではあるまい。（「ねえ。」と話しかけると同趣である。）そのような「ヨー」は、どこへ出てきてもよいはずである。本県下の男女老若に、単純よびかけ性の「ヨ」がよく聞かれる。——小学生たちに、この種の「ヨ」のさかんなありさまを見ていると、このことばづかいのしぜんさもわかれば、また、このことばづかいの生きのよさも、よくわかるような気がする。

感嘆の「ヨ」もおこなわれている。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」「ナーヨ」があり、「ネヨ」「ネーヨ」がある。「カヨ」がよくおこなわれている。「ケヨ」もある。

○イー ンケヨ。

いいんかい？（いいんですか？）

などとある。「ノヨ」もある。「ダヨ」もある。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

*m*オテントサマ シッコンダダヨ

お日さまは 引っ込んだんだよ。

などとある。

『千葉方言 山武郡篇』には、「来ルつよー 来るさうな」「死ンダつーよ 死んだとさ」などでの「つよ」が見え、また、「イーってよ 善いとさ」などの「てよ」が見える。「ワヨ」複合形もある。

千葉県下に関して補説してみたいことがある。上総東南部では、

○アンダ オー。

何だえ？

○アンダ オー。

何だよ？

などの言いかたを聞いたことがある。「ア^ーンダ オー。」とともに、「ア^ーンダ ヨ。」が示された。こうあわせ示されてみると、私どもには、「オー」が「ヨ」の転訛と思われてこないではない。——じっさい、そのような転もあり得たことではなかるうか。（なお、この地方では、「何だよ？」の意の、「ア^ーンダイ ヨ。」も聞かれた。）銚子方面にも、「ア^ーンダ オー。」のような言いかたがあるという。

ひるがえって、中部地方のことであるが、長野県西北部では、

○……………，ナ^ンダオ，……………。

……………，なんだよ，……………。

の間投句を聞いたことがある。「ナンダ^ダ オ」の「オ」がまた、「ヨ」に該当するもののである。

埼玉県

自己の意を言う「ヨ」が、

○シンナイ[↑] ヨ。

知らないよ。

のようにおこなわれている。「さよなら。」の「アバ[↑] ヨ。」も、県下によく聞かれるものである。

説明の「ヨ」も、ふつうによくおこなわれている。「何々ダ ヨ。」「何々デス ヨ。」の言いかたも多い。

f………… ハー キチャ ネーシヨ

もう 来手は ありませんしね。

は、『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条に見られるものである。

命令・勸奨の「ヨ」が、

○シメテケ[↑] ヨー。

しめて行けよ。

○イッショニ[↑] イカッセ ヨー。

いっしょに行きなさいよ。

のようにおこなわれている。(これらは、東部での事例である。)
「来い。」と命令するのに、「コー ヨ。」とも言っている。

○ハイク[↑] オキロ ヨー。

早く起きろよ。

これは、県西、秩父地方での一例である。

問いの「ヨ」が、

○ドヨイ イッタンダ ヨー。

どこへ行ったんだ？

のようにおこなわれている。

単純よびかけ性の「アノ ヨー。」式の「ヨー」は、本県下にすくないのではないか。

「ヨ」に相当する「ヨン」が、秩父地方にある。『秩父の伝説と方言』には、「きょうは都合でイガネーヨン」とある。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナヨ」（「ナーヨ」も）がある。「ナヨ。」のセンテンスが単独におこなわれてもいる。「ネヨ」（「ネーヨ」も）も、県下に見える。「アノ ネーヨ。」（あのね。）などと言っている。

「カヨ」「ガヨ」「ノヨ」などがある。また、「トヨ」がある。「ダヨ」がある。

f …… クロク ナルノー マッテルダヨ

黒く なるのを 待っているんですよ、

は、『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条に見える。

群馬県

自己の意を言う「ヨ」が、「アバ ヨ。」（さよなら。）「ツマンナイ ヨ。」などとおこなわれている。——「ヨ」が「ヨー」にもなっている。

説明の「ヨ」が、

○ヘビ ヘビ。ヘビガ イタ ヨー。

へびへび！ へびがいるよう。

などと、広くよくおこなわれている。「〜ダ ヨ」の言いかたも多い。

命令・勧奨の「ヨ」が、

○ウケリー ヨ。

(試験を)お受けよ。

のようにおこなわれている。『^{桐生地方}方言訛語^調』には、

きいよ(句)「来なさい」といふべきにいふ訛りなり。児童に多く使用する。

との記事が見える。この地方に、動詞連用形利用の勧奨表現法が、よくおこなわれているか。『全国方言集』には群馬県の「コーヨー 来なさい」が見える。『佐波方言之研究』には、「早くケレヨ」などが見える。

単純よびかけ性の「ヨ」は、本県下でも、さほどにはおこなわれていないのか。「だれだれさん ヨ。」などはともかくとしてである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、(「ヨナ」もよくおこなわれていて)、「ネーヨ」「サヨ」「ソヨ」「トヨ」「ツーヨ」「モンヨ」などがある。

○ビョーキン ナッタンダ ツーヨ。

病気になったんだってよ。

は、「ツーヨ」例である。

栃木県

本県下では、自己の意を言う「ヨ」が、

○アー、イッテ ヤル ヨ。

ああいとも、行ってやるよ。(老男→藤原)

のようにおこなわれている。

説明の「ヨ」が、

○ミナサンガ シンパイシテ、キテ クレマシタッタ ヨ。

みなさんが心配して、来てくれましたよ。

のようにおこなわれている。「～ダ ヨ」の言いかたも、よくおこなわれている。

命令の「ヨ」が、「クイ ヨ。」(くれる。)
「自分自分の イケンワ ノベロ ヨ。」
(自分自分の意見は述べてよ。)のよう
におこなわれている。——「ク
イ ヨ」の言いかたは、県下
にかなりよくおこなわれている
のか。「来う ヨ」の言いかた
もある。

さそいの「ヨ」が、
○インベ。インベ ヨー。

行こう！ 行こうよ。

のようにおこなわれている。

単純よびかけ性の「ヨ」が、本県下では、前二県下とは異なり、ややよくおこなわれているのか。

○アンチャントモ イエネーシ ヨー。

兄さんとも言えないしねえ。(老女→中男)

は、県北、黒磯町で聞いたものである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「カヨ」「ノヨ」「テバヨ」「ワヨ」などがある。

茨城県

自己の意を言う「ヨ」が、

○ソシナ ゴター アリヤンセン ヨー。

そんなことはありませんよ。

のようにおこなわれている。(上のは、県北部域での一例である。)

説明の「ヨ」が、

○ジンシエキナンデス ヨ。

親戚なんですよ。

のようにおこなわれている。(これは、県南西辺での一例である。)
「～ダ

ヨ」の言いかたもさかんである。

○………… イッタンダ ヨー。

…………行ったんだよ。(幼女→老女)

は、県北での幼女発言例である。

命令の「ヨ」も、「コレ クレ ヨ。」(これくれよ。)などとおこなわれている。

さそいの「ヨ」も、

f………… イッテキテ モラーベヨ

行って来て もらいましょうよ。

のようにおこなわれている。(『全国方言資料』第2巻「茨城県新治郡葦穂村」)

単純よびかけ性の「ヨ」が、かなりよくおこなわれているのか。上の「葦穂村」の条には、

f………… ヨース ミデ クベド モッテヨー

様子を 見て 来ようと 思いましてね。

などと見える。人によびかける「ヨー」はもとよりのこと、「どうどうしてヨー。」「何々だからヨー。」「アノヨー。」「ソレニヨー。」(それにね。)などと、「ヨ」が頻用されているおもむきである。千葉県下での、単純よびかけ性の「ヨー」の盛行について、本県下でのこのような状況が認められるのは、興味深い。——関東のこういう状況が、東北地方の内部にたどられるのも、興味ぶかいことである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」がある。長塚節氏の『土』にも、これが見えるか。

○ソーイツァ マタ、オッチョコチョイデ ナヨ。

そいつはまた、おっちょこちょいでねえ。(老男→中男)

は、県南西辺での一例である。「ナヨ」が「ナーヨ」ともある。「ホンデナーヨ。」など。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条には、

f………… ナンダガナヨ

どうですかねえ。

とあり、「ガナヨ」が見える。

「トヨ」がある。

○ヒトリデモ ヨゲガ エー トヨー。

一人でもよけいがいいんだってよ。

は、県北での一例である。「テヨ」に相当する「チヨ」も見られる。

「ワヨ」もある。

関東の、「ヨ」生息のもっともしぜんな状態につづいて、東北地方の「ヨ」の世界がひらけている。

九 東北地方の「ヨ」ほか

福島県

自己の意を言う「ヨ」が、

○イヤイヤ。キ [kçī] ノドク [ü] シ [ī] タ ヨー。

いえいえ。きのどくでしたわ。 (中女 電話)

などとおこなわれている。

説明の「ヨ」が、

○コンゲツ [ü] イッパイダ ヨ。

(申しこみは) 今月いっぱいだよ。

などとおこなわれている。

命令・勸奨の「ヨ」が、よくおこなわれている。

○モッテ ヨイ ヨ。

持って来いよ。

○ソーダガラー、ヤンナ ヨー。

そうだから、するなよ。

などは、会津内の例である。『全国方言資料』第2巻の「福島県阿沼郡勝常村」の条には、

fアー セーフロ ヘーッテ マー マンマ ハー シッセーヨ マンマ
 ああ すえぶろに はいって まあ 御飯に くださいね。御飯を
 カシェー
 お食べなさい。

というのが見える。『福島県方言辞典』には、

「呉れる」と言ふ動詞の命令形にはクロ・ケロの外にクイヨとヨを使用し
 て居る地方もある。

との記事が見える。「クイヨ」は、「クエヨ」に近いものでもあろう。「来う
 ヨ。」との言いかたもあるか。

問いの「ヨ」が、

○ドゴサ インギャンダ ヨー。

どこへ“行かれるんだ”ね？

などとおこなわれている。「ドゴサ イガンダ ヨー。」も、上のとともに、
 やさしい言いかただという。“「ヨ」がつくから上品になる。”“「ヨ」とか「シ」
 とかは敬語をふくんでいる。”とあった。——上二例については、“女ことば”
 との説明もあった。

単純よびかけ性の「ヨ」に関しては、“福島では「ヨー」は言わぬ。米沢の
 人が「アノ ヨー。」と言うと、いやな感じがする。”と説明する人があった。
 私が、会津のことばを、放送のうえで聞いたのには、

○オレ カヨー。

わしかね？

などというのがあった。のちに述べるように、山形県下には、単純よびかけ性
 の「ヨ」がさかんである。そのほうに関連する地域の福島県西部には、やはり、

単純よびかけ性の「ヨー」があるのか。

それにしても、福島市方面などに、茨城県下北部のにつづく、単純よびかけ性の「ヨー」のないのは、考えさせられる事態である。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞では、「カヨ（ガヨ）」がさかんである。「ソー ガヨー。」（そうかい。）「イガネー ガヨ。」（行かないか。）などと言っている。（いずれも会津例である。）

「ノヨ」があり、「ダヨ」がある。「ワイヨ」「ワヨ」もある。

宮城県

自己の意を言う「ヨ」が、

○オラ シェン ウ[ü]タ ネー ヨ。

わしは知らない歌はないよ。

などとおこなわれている。

説明の「ヨ」が、

○ス[ü]マネケンノ イズ[ü]モ。トーホク[ü]ト ソックリダ ヨー。

島根県の出雲。これは東北とそっくりだよ。

などとおこなわれている。

命令・勧奨の「ヨ」が、

○サー オキ[i]ロ ヨー。

さあ起きろよ。

○オツ[ü]カイニ イガイン ヨー。

おつかいに行きなさいよ。

などとおこなわれている。土井八枝氏の『仙台の方言』にも、勧奨の「ヨ」の好例が多く見える。

宮城県地方には、単純よびかけ性の「ヨ」のおこなわれることがないのか。

これは、福島県東部での状況によくつながる状況のようである。

複合形についても、今は、言うべきものを、私はほとんど持っていない。

山形県

自己の意を言う「ヨ」が、「アンバイ ヨー。」(きよならね。)などおこなわれている。『山形県方言集』には、

くわぶんよ kwabun-yo 形容詞 有がたう 庄内 此間はくわぶんよ。

(此の間は有難たう。)

との記事が見え、『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条には、

f アシタヨ

さようなら。

m ンダバ ナントモヨー

それでは どうもありがとう。

というのが見える。

説明の「ヨ」もおこなわれており、命令・勧奨の「ヨ」もおこなわれている。『荘内語及語釈』には、「よ ようと長音にも言ふ。命令法又は下に命令法を略した語、又は教訓的の語につく。」とあり、「早くえつて来えよ」「大人しぐしんだよ(大人シクスルンダヨより更に謙遜)」などの例が見える。

さきにふれたように、単純よびかけ性の「ヨ」が、本県下によくおこなわれている。「あそこの村で ヨー。」これは、男性が校長さんに語ったことばである。人々の会話を聞いていると、県下の方々で、指定断定助動詞の「ダ」と単純よびかけ性の「ヨ」とが、よく耳につく。

○イグ[ü]ドモウンダー。イッター ヨー。

行くと思うんだ。行ったらねえ。

などと話されていく。県中央部の小学校五・六年生男子が放送でアナウンサー

に答えたことばから「ヨ」例をひくならば、「イ^エノ^ナカニワ^ヨー。」(家の中にはねえ。)
「ボクノ^{ウチ}デワ^ヨー。」(ぼくのうちではね。)
「チ^[i]チ^[i]シボッテ^ヨー。」(乳をしぼってはね。)などがある。『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条には、

m^ドーモ^ヨー

どうも。

というのが見える。米沢近在の例は、

○ナニ^[i]モ^デキ^[kçi]ナイデ^ヨー。

何もできないでねえ。(もてなしについての謙辞)

などである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ナヨ」「カヨ(ガヨ)」「ノヨ」「トヨ(ドヨ)」などがある。

秋田県

自己の意を言う「ヨ」が、「アバ^ヨー。」(さよなら。)などとおこなわれている。『秋田方言』には、「えーたんばよ(連) [仙] いいことよ。」とあり、「さう馬鹿にするならえーたんばよ。」とある。

説明の「ヨ」が、

○ハル^[ü]モ^キ[kçi]レダス^[ü]ヨー。

(このお庭は)春もきれいですよ。

などとおこなわれている。

命令・勧奨の「ヨ」もおこなわれており、問いの「ヨ」もおこなわれている。単純よびかけ性の「ヨ」が、本県下にもまた、かなり見られるのか。田沢湖近くで私が経験したものは、「マエニ^[i]モ^ヨー。」(前にもね。)<「ね」と言いなおすほどでもない「ヨ」か。>、「ヤメヨート^モッテモ^ヨー。ソコサ^{イカネ}ーカ

ギリワ ヨー。」(やめようと思ってもさ。そこに行かないかぎりはさ。)(青男間)などである。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「カヨ(ガヨ)」「トヨ(ドヨ)」「ワヨ」などがある。

注意すべきものに、県南、横手で聞いた「アノッ ショ。」(あのね。女性に多く聞かれることばか。)
「ナンニ[イ]ッ ショー。」(なんですか。)
「ナンボン ショー。」(“いかほどですか。”)「ショッ コン ショ。」(“塩のことです。”)などがある。「ショ」は、「シ」と「ヨ」とに分析しうるものではないか。前者は、「モン」の「シ」であろう。——それゆえ、「ショ」がていねいな言いかたになるのであろう。「シ」に「ヨ」がそわって、やがて「ショ」の完態ができたのか。

岩手県

自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」がおこなわれている。

○ことばは イク ナッテル ヨー。

ことばはよくなってるよ。

は、八戸市での一例である。

命令の「ヨ」も問いの「ヨ」もおこなわれている。

単純よびかけ性の「ヨ」が、『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

f………… エマ ソー ワレマステ ムスコニヨ
いま そう 言われますよ むすこにね。

などに見える。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、「ノヨ」などがある。

宮城県下でも本県下でも、「ヨ」は、さして強勢のものではなさそうである。本県下にも、単純よびかけ性の「ヨ」は、すくなめなのではなからうか。

青森県

自己の意を言う「ヨ」が、「ワガン^ーネー ヨ。」(わからないよ。)などとおこなわれている。“「ヨ」は女性に多い。”と言う人もある。津軽・「南部」の両方に、「ヨ」がよくおこなわれている。

説明の「ヨ」が、

○サカ^アブ ワケ^エデス ヨ。

叫ぶわけですよ。(中男→藤原)

などとおこなわれている。

命令の「ヨ」が、

○ハヤ^アグ[ü] モド^レ ヨー。

早くもどれよ。

などとおこなわれている。諸県のばあい、一々ことわらないできているが、「命令」には、禁止命令もふくまれることである。なお、「命令」とていねいな命令「勸奨」とは、しぜん、あいともなうものである。

○イ^アロ ヨ。チャ^アント シ[i]ロ。

いろよ。ちゃんとしろ。(老女→幼孫)

は、いわゆる「南部」の南方でのものである。

問いの「ヨ」もおこなわれている。

単純よびかけ性の「ヨ」が、県東西に見られる。『津軽方言えはがき』第一輯には、

正吉「ホンダ、アレ、エンダバ、 マガヘルバテヨ」

そうだ、あの子がいゝなら、まかせるけれど

とのことばが見える。

○キョ^一ネンワ ヨー。ナー。

去年はさ。ねえ。 (中男)

は、弘前弁での一例である。いわゆる「南部」の南方での实例は、

○アイダッ^一ヨラ ヨ。

間はよ。(田のうねとうねとの間の話し) (中女→藤原)

である。この地方に、単純よびかけ性の「ヨ」が、よくおこなわれている。

津軽に、「ヨ」相当の「ヨン」もあるのか。

※ ※ ※

本県下の、「ヨ」に関する複合形の文末詞には、一つに、「ヤヨ」がある。『青森県五戸語彙』には、「ヤヨ」についての、

感動または強勢の助辞。目下に用いる。まるでいいヤヨ(とてもよいよ)。

蜜柑がうまエヤヨ(蜜柑がうまいよ)。

との説明が見える。

「サヨ」もある。

「カヨ」があり、また、「ダヨ」がある。

○ソ^一ンダ ダヨ。

そうなんだよ。

は、弘前弁での一例である。

十 北海道地方の「ヨ」ほか

広汎な北海道域のことである。私は、「ヨ」に関しても、この地域のどれほど、明らかにし得てはいない。以下には、諸文献を参酌しつつ、いくらかの説明を試みてみよう。

一般的に言って、自己の意を言う「ヨ」、説明の「ヨ」、命令の「ヨ」、問いの「ヨ」、単純よびかけ性の「ヨ」などのおこなわれているのが認められるようである。

自己の意を言う「ヨ」が、

○シツガツッヌィ ネ サンカイモ トレバ ^{i:<e:} エーホーダ ヨ。

7月ね、三回も昆布を採ることができたら、いい方だよ。

(上例は、小野米一氏編『礼文島言語調査報告』による。)

のようにおこなわれている。『言語生活』第三十五号の「全国珍語奇語集」に、石垣福雄氏が北海道のものを寄せられているのには、

「笑うなってゆったってお前の顔見たら、笑ワサッテしょうがないよ」がある。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

f………… オレンチ ジジーヘバ ツイテクルンダヨ

わたしのうちの じいさんならば ついてくるよ。

というのが見える。『北海道方言集』には、「ええべよ 良いでしょう」が見える。

○ヤグバノ ウエニ アル タケーヤマ アッ ペヨ。

役場の上の方に、高い山があるだろうよ。

は、小野米一氏編『北海道漁村方言の研究—南茅部のことばと生活—』に見えるものである。——これは、渡島半島東端部のことばである。

説明の「ヨ」が、

○マグロ トレルヨ。

マグロがとれるよ。(これも、上掲書に見えるものである。)

のようにおこなわれている。鈴木淳一氏教示の十勝地方での例は、

○センセイ イラッシャッタ ヨ。(センセイ キタ ヨ。)

などである。

命令・勸奨の「ヨ」が、

○シッカリ ベンキョー シナサイ ヨ。

○シッカリ ベンキョー ヤレ ヨー。

○シッカリ ベンキョー スルンダ ヨ。

などにおこなわれている。(これは、鈴木氏教示の稚内での実例である。)

問いの「ヨ」が、

○オマエ、シリョク ナンボ ヨー。

おまえは視力はいくらだい？（これは、『礼文島言語調査報告』に見えるものである。）

などとおこなわれている。

○ダレモ イナカッタッショ ヨー。

だれもいなかったでしょう。 女性

○ダレモ イナカッタベ ヨ。

だれもいなかっただろう。

などは、鈴木淳一氏教示の、函館市のものである。推量の問いである。

単純よびかけ性の「ヨ」の例としては、『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条の、

f………… マダ ツギノ シーヨ ……………

まだ 次の 日にね

などを見ることができる。

※ ※ ※

北海道での、「ヨ」に関する複合形の文末詞を見るならば、「ヨ」の前置される「ヨナ」などもよくおこなわれており、「ヨネァー」などもある。『礼文島言語調査報告』には、

○サキニ イッタнда ヨネァー。

さきに行ったんだよねえ。 (45女→55女)

というのが見える。

「ヨ」の後接するものに、「サヨ」がある。

○イマ 下ーロ ネー サヨ。

いま道路がないさ。 (80女→25男)

は、おなじく『礼文島言語調査報告』に見えるものである。

「ノヨ」がよくおこなわれている。

○オメ 下コ イク ノヨー。

○オマー、 $\overline{\text{下}}\overline{\text{コ}}\overline{\text{サ}}$ イク ノヨー。

お前は、どこへ行くのか。(——“「サ」という方向を現わす助詞は老人に多い。”という。)

は、鈴木氏教示の小樽ことばの例であり、

○オマエ $\overline{\text{ド}}\overline{\text{コ}}\overline{\text{イ}}$ イク ノヨー。(男)

は、同氏教示の稚内ことばの例である。なお、氏は、

○ $\overline{\text{ド}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{タ}}$ ノヨー。

どうしたんだ。(男)

を、函館市ことばでの実例としていられる。——女性は、「 $\overline{\text{ド}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{タ}}$ $\overline{\text{ア}}$ 。」であるという。

「トヨ」もおこなわれている。「ドヨ」ともある。

○ $\overline{\text{リ}}\overline{\text{ヨ}}$ ー $\overline{\text{ア}}\overline{\text{ツ}}\overline{\text{タ}}$ $\overline{\text{ド}}\overline{\text{ヨ}}$ ー。

漁がたいそうあったんだってき。(47歳男→50歳男)

は、小野米一氏編『北海道奥尻島方言の研究』に見えるものである。『北海道風土記 童戯と方言』に、「だめだどよ だめですよ」が見える。

「テヨ」もおこなわれている。

○ $\overline{\text{コ}}$ ー $\overline{\text{ツ}}$ ー $\overline{\text{ジ}}$ ョ $\overline{\text{オ}}$ コ $\overline{\text{シ}}\overline{\text{タ}}$ ン $\overline{\text{ダ}}$ ッ $\overline{\text{テ}}\overline{\text{ヨ}}$ ー。

交通事故をおこしたんだってよ。(53歳女→夫)

は、『礼文島言語調査報告』に見えるものである。

十一 おわりに

以上が、全国状況の一概括である。

それにしても、文末詞「ヨ」の用法のかなり多面的であるのが、よく認められる。本来、純粹な、感声的な文末詞であるがゆえに、人々の言語生活にあって、その用法は、自在に、多角的なものとされているのであろう。

諸用法中、「単純よびかけ性」とも称してきたのは、一つの注視すべきものである。近來の「あの $\overline{\text{ヨ}}$ ー。」「どうどうして $\overline{\text{ヨ}}$ ー。」などの言いかたは、

ときに、人の顰蹙をかうようでもあるが、静視すれば、これは、「ヨ」文末詞利用の基本的なものである。「ヨ」は、もっとも単純にこのように用いられることを、ゆるしていよう。さればこそ、東京方面にはかかわりなく、国の諸地域に、「あの ヨー。」式の言いかたがおこなわれている。私どもは、山村の老翁などに、「こうして ヨー。そうして ヨー。」といったような、やわらかな表現を聞いて、しばしば、「ヨ」のよびかけの美しさを感じ得る。——「竹市」という名をよぶのに、「竹市 ヤ。」「竹市 ヨ。」などと言う。こういう「ヨ」にならないで、「あの ヨー。」などがあるとも言える。

地方の方言に見られる諸種の文末詞を、その表現例にしたがって、いわゆる共通語に言いなおそうとすると、適切なことばが見つからなくて苦しむことが多い。そういうさい、とかく、「何々ですよ。」などと、共通語の「よ」におきかえてやむことが、すくなくない。そういう時、私は、「よ」はずいぶん便利なことばだなとも思う。方言の「ヨ」に直結した共通語の「よ」には、重厚な用法があるとも言えるのか。

複合形「ナーヨ」「ネーヨ」などに関しては、方言によっては、人が、“子どもがちかごろさかんにこれを言う。”などと説明している。“「ナー」「ネー」に「ヨ」をつけたのだ。”というのである。「アリャー ナーヨ。」などで、「ナー」に「ヨ」がつけられたのだとすれば、子どもたちは、あらたにその共通語知識をもって、「ヨ」をこのように運用したというわけであろうか。共通語の「よ」は、利用はばの広いものようである。

それはそれとして、諸方言上に隆盛な「ヨ」が、容易にはその勢力を減じるはずもないことは、明らかであろう。

上来の「ヨ」の用法に関しては、かんたんに、「自己の意を言う『ヨ』」とか「命令の『ヨ』」とかの言いかたをしてきた。くわしくは、たとえば、問いの「ヨ」ならば、「問いの表現を完結させる効果の『ヨ』」とも言うべきであろう。

なお、「命令」の「ヨ」については、つねに、ていねいな命令（勸奨）が、あわせ考えられできた。また、「命令」には、禁止命令をも、当然のこととして、ふく

めたしだいである。

第四節 「エ」の属

一 はじめに

ヤ行音文末詞の中に、「エ」文末詞を撰することについては、「第四章 ヤ行音文末詞」の「第一節 総説」でふれるところがあった。文末詞「エ」は、じっさいに、「イエ」[je]と発音されることも多かろう。——地方にもよることである。単純に「エ」[e]と発音されているとしても、今は、便宜的に、これをヤ行音文末詞の中に包摂する。

中国山陽路では、だいたい、「エ」文末詞をおこなうことがないのにちかいかいけれども、聞きかえしの返事ことばには、「エー。」ならぬ「[↑]イエー。」がある。(老人のことばである。今日は、もはやこれが聞かれにくくもなっているか。)これをたよりにしても、私どもは、「エ」文末詞をヤ行音として見ることができるか。

いずれにもせよ、「エ」が、感声的な単純文末詞であることは明らかである。この点で一つつけそえておきたいことがある。ハワイでの土地英語では、「さよなら。」にも、「バイバイ [↑]エー。」などの言いかたがなされているという。「エー」は、自然音的に成立しているものであろうか。「エ」感声は、人間自然のものかと思われる。(これがまた、日本語での、「エ」の生活では、前後関係のもとで、しぜんに、「イエ」ともなっていよう。)

「エ」文末詞と、次節にとりあつかう「イ」文末詞とをくらべれば、各母音の広狭の相違にかかわってか、「エ」のほうが、相手の気をひくことがつよいと見られる。「そう カイ？」と「そう カエー？」とくらべて見てもよい。(このばあい、「カイ」は一体の文末詞とされるものではあるけれども。)
「エ」は、独自の文末詞として認出されやすいものである。

二 南島地方の「エ」ほか

高橋俊三氏によるのに、与那国島の比川方言では、

○ンディ トゥル ドゥットゥドゥ アン ガエー。

あなたのランプは上等だね。 (壮女→初老女)

などの言いかたがなされているという。——“意向を尋ねたり、同意・同感を求めたりする表現”であるという。この例の、「ガエー」の「エー」は、こにとりあげてよいものであろうか。

生塩睦子氏がかつて教示せられた、沖縄、伊江島の方言文例には、

○habafa je:。(いいにおいだネエー)

などがある。ここには、「イエー」が認められる。

私が、かつて、沖永良部島の人から聞き得た方言文例には、

○ワチャ ヤーチ ゥモーチ タボイ ウエー。

私のうちへいらしてくださいますか。

などがある。この「ウエー」は何であろうか。「うちへ来てくれるか。」との言いかたは、「ワチャ ヤチ チュー ウエー。」と言われている。「おまえはすしを食うか。」の、

○ウラ スジ カミ エー。

○ウラ スジ カミュ ウエー。

も聞かれた。

三 九州地方の「エ」ほか

鹿児島県下の種子島には、そんなにしなさいますな、との禁止の言いかた、

○サーン シモースナ エ。

がある。「あけなさんな。」には「アケモースナ エ。」の言いかたがある。

『大隅肝属郡方言集』には、

イカナエー 案外なといふ意で、老婦人など之を用ひてゐる。イカナマ

ツとも云ふ。

とある。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

f オイ ソージャラエ

ああ そうですね。

との言いかたが見え、また、

f …… タイチェモ ウレンカンローガエーン

とても うれしいでしょうが。

との言いかたも見える。「エーン」の形が注目される。

複合形の「カエ」「ガエ」のあることが、やはり『全国方言資料』第9巻の、「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条や、「南種子町島間小平山」の条に見られる。

「エ」は、このように九州域にも見られて、以下の諸県下に、順次、これがたどられる。

宮崎県下では、まず、問いの「エ」が指摘される。「ね」や「よ」と言いかえてもよい「エ」が認められる。県中部、児湯郡下での一例には、橋口巳俊氏教示の、

○マーコツ。ウゴツチャッタ エー。

ほんとうに。大変だったねえ。 (老女→中男)

がある。橋口氏は、この文例について、“落着いたしみじみとしたものいいである。”と言われる。

複合形に「カエ」があり、問いや命令、あるいは抗弁あるいはあきれの気もちの表現などに用いられている。橋口氏教示の、

○シトトリ オミ ムン カエー。

大変重いもんだなあ。 (老女→青女)

は、“詠嘆的な気持を述べたものである”。「トカエ」の形のものもある。「ツ

カエ」というのもある。「ツエ」もある。

「ノエ」もあるか。岩本実氏は「日向の高千穂方言」で、
文末にくる疑問辞として「ノエ」と「ノカ」とを敬意差をつけて区別して
いるのも面白い。例えば、アルノエは丁寧で、アルノカはぞんざいな言い
方なのである。

と述べていられる。「ノエ」は女性に聞かれがちか。

延岡では、かつて、「ワエ」を聞いたことがある。多少ていねいであるとの
ことだった。「ワエ」の「エ」は、いま問題としている「エ」であろうか。
（「ワイ」が「ワエ」になることもあり得よう。）

熊本県下には、さそいや命令の「エ」が見られ、また、単純に「よ」と言い
かえてよいような「エ」も見られる。

○オッ^カサン ハ^ヨー メ^シバ ク^ラー エ。

お母さん、早くごはんをたべようよ。

は、熊本市南郊でのさそいの「エ」の例である。

能田太郎氏の『肥後南ノ関方言類集 用言篇』（『方言と土俗』第四卷第八号
昭和8年12月）には、「エ」についての、

専ら老人（男女共）の幼者に対する命令で親愛を表はすに用ひる、（例）
（一）行きなはん^ナエ（お行きでないよ）。（二）来なはり^エ（お出よ）。（三）勉強し
なはり^エ（おしよ）。

との記事が見える。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、「ナンエ」「カエ」「タエ」
「バイエ」「バエ」などがある。「ナンエ」は、私は、天草下島で聞いた。

○ドケ イー^タ ナン^エ。

どこへ行ったのね。

などとあった。『全国方言資料』第6巻の「熊本県上益城郡浜町」の条には、

*m*ソルバッテン マー ハテタケン シアワセタエ

それでも まあ 終わったから しあわせだよ。

とある。この「タエ」は、「タイ」と「エ」とのむずびあったものであろうか。

『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、「バイイエー」「バイエ」「バエー」が見える。私が、佐伊津で聞きとめた「バエ」の一例は、

○ホゲン アスーデバツカリ オルト, センセイカラ オコラレル バエー。

そんなにあそんでばかりいると、先生に叱られるぞ。(五十歳代男)である。

長崎県下では、まず、問いや命令の「エ」が注意される。「来い」と命令する時も「来いエー」とあり、また、「来うエー」ともある。

『全国方言資料』第6巻の「長崎県北松浦郡中野村」の条の、

*f*ソツェツテ ヨンエ イクトキネチャーエ

そして よそへ 行くときにはね、

では、「エ」が「ね」と言いかえられている。『嵯岐島方言集』には、

アヨ江ー いかにも然であるかと感歎して発する言。「イカナ江ー」とも云ふ。(農村)

との記述が見える。(「江」は [je] 音であるという。)

県下の複合形には、「ナーエ」があり、「タイエ」「タエ」があり、「トエ」「ツエ」がある。『嵯岐島方言集』には、「……………、カクルモンナー_エ。(……………、書けるものか。)」も見える。『対馬南部方言集』には、

「さうしてナス_エエ」は「さうしてねえ」に当る。

との記事が見える。「ナス_エエ」は、“目下の人に対してねえという時。”のものであるという。

佐賀県には、問いの「エ」があり、命令表現をささえる「エ」があり、ただに「よ」と言いかえてよい「エ」がある。

○オカ^ーサンバ ツレチ キテ^ン エ。ハヨ。

お母さんをつれてきてごらんよ。早く。 (老女→青女)

は、岡野信子氏教示の唐津市神集島での命令表現(→勧奨表現)のばあいの「エ」である。

○ヒコ^ーキノ トビヨ^ー エー。

飛行機が飛んでいるよ。

は、佐賀市西北郊の「よ」と言いかえられる「エ」の一例である。佐賀県南部で聞いたことばに、

○タツカ イエー。

がある。「高いなあ。」の意のものであったか。

県下の複合形には、「ナーエ」「カエ」(「カーエ」も)「ターエ」(「タエ」も)「ダエ」「バーエ」(「バエ」も)などが見いだされる。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

*m*インニャ オマヤ ジョーズダツタバーエ タイテー
いやいや、 おまえは じょうずだったわい とても。

などが見える。

私が、県南部で聞きとめたものには、

○ソガン タイイエー。

“そうだろう?” (“きたないことば”)

などがある。

福岡県では、まず、さそいの「エ」のよくおこなわれているのが見られる。筑前例は、

○ジローガイ ヤロー エー。

次郎の宅でやろうよ。

などである。「エ」が「イエ」とも発言されている。「ミイ^{エー} イヨ^ー イエー。」は、「見に行こうよ。」である。浮橋康彦氏は、さそいの「ヤ」と「エ」

とを比較して、「エ」は「親しい間柄」のもの、「より温い感じ」のものとされる。

問いの「エ」もあり、ただに「よ」と言いかえてよい「エ」もある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞に、「ズエ」があるのだろうか。『福岡県内方言集』には、「ずゑー」の筑後方面におこなわれていることが指摘されている。——あるいは「ザイ」に関係のあるものか。

諭示ノ意ヲ表ス詞ニテゾヤノ転訛ナリ下輩ニ向ヒテ用フル語ナリ例ヘバ

この本はおりがつずゑーナドノ如シ 肥後ノ鹿本郡辺ニテモズゑートイフともある。

『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には、

*m*フンナコトイ モー エー

ほんとに……。

というのが見える。これは別の「エー」か。

「………… タイノエ。」などと言われている「ノエ」は、「エ」を認めしめるものなのだろうか。（「ノイ」からも「ノエ」はできるであろう。）

つぎは、大分県下である。九州地方のうちでは、とくに本県下に、「エ」のおこなわれかたのさかんなものがあるか。県下では、“宇佐郡の人はエーがつくのですぐわかる。”などとも言われている。県下で、一般に、「エ」は、品位わるくなくおこなわれていよう。

用法上、一つに、問いの「エ」がよくおこなわれている。「何 エ。」などは、熟した言いかたになっていよう。

つぎに、さそいの「エ」のよくおこなわれているのが見られる。「行こうエ」などの言いかたは、流布していよう。

○キョーコチャン、イコー イエー。

京子ちゃん、行こうよ。（学童のさそい）

は、国東半島での一例である。県奥の日田では、やはり子どもが、

○アソ^ーボー エー。

あそぼうよ。

などと言っている。「ノ^ーモー エー」は、おとなたちの「飲もうよ」である。お茶についても、「ノ^ーモー エー」（飲もうよ）「ハナツ^ー エ」（話そうよ）が言われる。

命令の「エ」もまたよく見られる。

○エンリョ^ー シナンナ エ。

“遠慮するなよ。”

は、県南での禁止命令の一例である。「するなよ」そっくりの言いかた、「スンナ エ」も、よくおこなわれている。

○ハイ ヤスマンシ^エ エー。

早くやすみなさいねえ。（夜の辞去）

は、県南部での、ていねいな命令表現（勸奨表現）の一例である。『全国方言資料』第6巻の「大分県大分郡西庄内村」の条には、

m^ママー クロ ナルキ イー クロ ナッタキナー マー ボーツボツ
 まあ 暗く なるから、 暗く なったから、 まあ 気をつけて
 カインナイエッ¹⁾

帰りなさいよ。

1) 「エッ」は、最後に「t」の破裂あり。

というのが見える。「エッ」とある。

「ホント^ー エー。」（ほんとかい。）（ああそうですか。）との受けひきことばが、よくおこなわれている。

単純に「よ」と言いかえてよい「エ」もおこなわれており、「ね」と言いかえてよい「エ」もおこなわれている。

○オイサン、オゴメン^エ イェー。

おじさん、ごめんなさいね。（こう言って、朝食をとる。） （老女
 →老男）

は、国東半島での一例である。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナエ」（「ナーエ」も）がある。

○ウチノ ヂーサンニ アワザッタ ナエー。

うちのじいさんに会わなかったね？

○アン ヒター アン アッコン ヒトジャッタ ンナエ。

“あの人はあの、あそこの（家の）人だったの？”

は、県南での例である。問いのばあい、「カナエ」というものもある。「ナーエ」が、ただによびかけにも用いられている。

「ゾエ」もかなりよくおこなわれている。

「カエ」がある。

○オイデル カエー。

いらっしゃいますか。（訪問辞）

は、その一例である。「カエ」は、主として問いに用いられており、かつは、了解や反駁などにも用いられている。大畑勘氏の「大分県南部の方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）には、

○ダイコタチ ミナ ソゲー アル カエー。

大根だって、みんなそんなに<たくさん>もっているもんですか。

（老女→嫁）

との記事が見える。大畑氏は、上例を、「品位がひくい」としていられる。「カエ」とともに「ソカエ」も県下におこなわれている。「カエ」は、県下にじつによくおこなわれている。国東半島での、

○アンタチャ オイデラン カエ。

“あんたたちはおいでなさいませんか。”（映画会へのいざない）

（中女→中女）

は、ていねいな表現になっている。『全国方言資料』第9巻の「大分県白杵市諏訪津留」の条には、

*m*オラ ホアン ハナシヤッタカエン

おや、 そんな 話だったかね。

など、「カエン」の例が、いくつも見える。宇佐郡は「カエー」をよく言うのか。“宇佐郡は「ソー カエー。」”と教えてくれた人があった。「カエ」に関して、「ソカエ」とともに「トカエ」も見いだされる。

「ガエ」もある。大畑氏の上記論文には、

○タマガッタ ガエー。

びっくりしたよう。 (青女→青男)

とある。大畑氏はこれを、「品位がひくい」とされる。

「ワエ」もある。

大分県下の上述の状況を受けて、中国地方の山口県下はどのようなであろうか。

四 中国地方の「エ」ほか

山口県下では、西の長門地方に、比較的よく、「エ」がおこなわれていようか。——大分県地方との関連が思われる。長門西岸地方や北岸地方で、

○ヘイゼー ゴゼン アガリマシヨー エー。

へいぜいごはんをおあがりになるでしょう？

のような「エ」が聞かれる。海岸部からはいった所で、

○ゴハン タビョー エー。

ごはんをたべようよ。

のような言いかたを聞いたこともある。

周防にも、「よ」と言いかえてよいような「エ」などが見られなくはない。『全国方言資料』第5巻の「山口県都濃郡都濃町」の条には、

*m*フロナエト ハエッテ ナン ショーエ

ふろへでも はいって なに しょうよ。

とある。

県下に、文末詞「イ」のおこなわれることが、かなりさかんであり、この「イ」と「エ」とが関連している。

文末詞「カイ」は、「カエー」([kæ:] など)ともなりがちであり、これが、「カエ」のすがたにもなっている。ところで、周防祝島の、

○ド^マコ^イ イ^ク ノ(ン)カ^エ[je]ー。

どこへ行くのかね？

などのばあいは、「エ」の複合を認めしめるものであろうか。長門方面には、複合形「ナエ」(「ナーエ」も)が聞かれる。

○マ^タ キー^{サン} ナー^エ。

また来なさいねえ。

は、その一例である。

広島県地方・岡山県地方には、一般に、「エ」のおこなわれることがすくない。このほうでは、「エ」が、一般には、人々の口になじんだものとはなっていないありさまである。ところで、広島県下の島嶼部には、いくらかの「エ」が認められるか。さて、安芸東部の島嶼には、「行キンエー」(行きなさい)などの言いかたが聞かれ、ここに、「エー」の聞こえがあざやかであるが、これが文末詞「エ」に無縁のものであることは、言うまでもない。

本県下の備後島嶼内には、「ノエ」(「ノーエ」も)複合形が見いだされる。

○ソ^ージャ^フエ。

そうですね。

などと言っている。人は、この「ノエ」を、“やさしみを持って目上の人に”言うものだとしている。

岡山県地方も、島嶼部には、「エ」がある。また、本土部でも、北の作州には、「エ」が比較的見いだされやすいのか。備中島嶼の真鍋島では、つぎのような「エ」が聞かれる。

○アッジャー ホンマ エー。

あら、ほんとね。

これは、相手の言を受けひいての「エ」である。

○タヌキガ エー。

たぬきがね? (小学生女間)

これは、問いの「エ」である。問いの「エ」が、文アクセント下降の末に位置するばあいもある。

真鍋島では、複合形「ナーエ」(「ナーエー」も)「ノエ」が聞かれる。作州に、「ゾエ」「カエ」などが見いだされるようである。

山陰はどのような状況であろうか。

島根県下、出雲内に、「エ」がいくらかあるのか。『隠岐島方言の研究』には、

タノミガ アル テテ エ——普通疑問 エを激烈に発音す
との記述が見える。

出雲地方で、たとえば、『全国方言資料』第5巻の「島根県大原郡大東町春殖畑嶋」の条の、

m……… ドコニ アーカエネー

どこに あるかね。

などとある「カエ」は、「カイ」的なものかもしれない。が、私が、島根半島北岸で聞いた、

○ソギャー カエー。

そうかい。

は、「エ」の複合を認めしめるかと思われる。神部宏泰氏は、「隠岐島五箇方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

○チンボダテオ カエ。

いくらだっていうかい。(中女→中男)

の例を示していただける。

山陰、鳥取県下は、中国地方中では、比較的よく「エ」のおこなわれる所かもしれない。『鳥取県方言辞典 後編』には、「かんにんえ 挨拶 ゆるして下さい」というのが見える。あたかも、京都弁での言いかたのようである。同書の「ほんにえ 本当か」には、問いの「エ」が見られる。『全国方言資料』第5巻の「鳥取県倉吉市国分寺」の条には、

fドガーニ アッタエ

どう だったですか、

とある。問いの「エ」が、かなりおこなわれているのか。

命令の「エ」もある。鳥取市での一例は、

○ヤスー シトキナイ エ。

安くしておきなさいよ。(物売り屋に対して言う。)

である。命令とはいいながら、ていねいな、勧奨の言いかたでの「エ」が、県下に、かなりおこなわれているか。

どちらかといえば、県東部の因幡地方に、「エ」は、よりよくおこなわれているのか。この点、山陰も、本県地方が、よく近畿地方の「エ」の流行に関連していることを思わせられる。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞では、「カエ」のおこなわれることが、ぬきん出ていちじるしいようである。(「カイ」的な「カエ」もあるけれども。) 因幡での一例は、

○ウーン、ソー カエ。

うん、そうかい？

である。——「カエ」の「エ」がとくに上昇調子をこらむっているので、「エ」文末詞の複合が明らかである。因幡中部の調査で、私は、「エ」単独形のおこなわれることは、あまり認めることができなくて、「カエ」複合形は見ることができた。

○モー オキト[↑]ンナハッ カエ。エ[↑]ライ トーカラ オコシテ スンマシエ
ン ナー。

お早うございます。朝早くからお邪魔してすみませんねえ。(早朝隣
家を訪ねたときのあいさつ) (中女→中女)

は、室山敏昭氏教示の伯耆東部での一例である。『全国方言資料』第5巻の
「鳥取県倉吉市国分寺」の条には、

m………… マメニ アッタカエー
達者だったかい。

とある。

室山氏は、また、つぎの例を教示せられた。

○ドイツガ コガン コト[↑]ー シタ ダエ。 (中女→小男) 怒罵

ここには、「ダエ」の複合形が認められる。

本県下の「エ」も、どちらかといえば女性がわに、よりつかわれがちのもの
であろうか。

五 四国地方の「エ」ほか

四国には、「エ」がよくおこなわれている。女性が、よく「エ」をつかって
いようか。

愛媛県下では、「よ」と言いかえてよい「エ」が、いくらもおこなわれてお
り、内海島嶼内にも、これが見られる。県下南部には、「インマ エー。」(さ
ようなら。)などのあいさつことばもおこなわれている。(男性がわは、「イン
マ ヨー。」と言いがちである。)やはり南部地方で、「アラ エ。」(あるよ。)
などとも言われている。

問いの「エ」がよくおこなわれている。『伊予松山方言集』にも、「イツエ
[イツカ] いつですか。」などとある。

さそいの「エ」もある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナエ」がある。県東部には、

○アノ ナーエ。イッたら ナーエ。

あのねえ。行ったらねえ。

などの言いかたがある。県下で、問いに「ナエ」が用いられてもいる。

「ノーエ」(「ノエ」も)もある。だいたい、県東部域にこれが多いか。

○オンシガ ノーエ。

おまえがねえ。

は、県東部内での一例である。内海島嶼の中にも、「アーエ」のいちじるしい所がある。(「ノーエ」は、「ノーヤ」に対立するものになっている。)——伯方島の一集落には、「アーエノーエ ユーマイ エノーエ。イカタモンガ ワラウケン ノーエ。」(「ノーエ ノーエ」と言うまいよねえ。伊方者が笑うからねえ。)との言いかたがある。(伊方は集落名である。)

「ナーエ」や「ノーエ」の形になると、「エ」のややよわい安定性は、おおいに補強されることになる。なお、これらの言いかたは、男女におこなわれている。

「ゾエ」が、県下の南北にあり、『伊予松山方言集』には、

ゾエ $\left[\begin{array}{l} \text{デスヨ} \\ \text{デスカ} \end{array} \right]$ (女) 注意を喚起する言葉、疑問。

と見える。

○オトーサンワ ドコイ イタン ズエ。

お父さんはどこへ行ったの？

は、私が、県南部で聞き得たものである。「ゾエ」が「ドエ」ともなっている。問いの「ドエ」もあれば(「ンドエ」もあり)、自己主張の「ドエ」もある。あいさつことばに、「インデ クル ドエ。」(帰ってくるよ。)というものもある。

つぎに、「カエ」がよくおこなわれている。「ンカエ」もある。多くは、問いにおこなわれており、いづらか、受けひきやさそいにもおこなわれている。「カエ」の言いかたは、概して、品位が、低くはならないようである。

○イナ^ン カエ^ー。

帰らない？ (小女問)

は、南予での、さそいの「カエ」の一例である。

「ワエ」の言いかたもある。

高知県下にも、「エ」がよくおこなわれている。問いの「エ」が見かけられやすいようである。『全国方言資料』第5巻の「高知県幡多郡大方町」の条には、

fコノ アヂャー ナンボ スリャエー

この アジは いくら ですか。

とある。県西の幡多郡地方では、「ヨ」と「エ」とが対存しているか。高知市西南郊で聞いた、問いの「エ」の一例は、

○ナニ モーケニ キト^ッタ エ^ー。

何を儲けに来てたのか？

である。『土佐方言集』には、

なんえ 何故？ト云フニ同ジ。

「そりゃなんえ」(ソレハ何故カ)

とある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、『土佐言葉』によるのに、「ナエ〔旧十川村戸川・江川崎権谷〕」がある。さきの「高知県幡多郡大方町」の条には、

f………… ソレガ イチノテヨエ

それが 最善の方法ですよ。

とあって、「ヨエ」が見える。「ヨエ」は、県東部にもあるらしい。

「ゾエ」もある。

「カエ」が、県下によくおこなわれている。したしみのことばになっていようか。「カエ」には、問いの用法もあり、受けひきの用法もある。「ンカエ」

もおこなわれている。「カエ」が、「カヰ」「カヤ」に対立してもいる。

「ガエ」もある。

○ダレモ オララツツロー ガエ。

だれもいなかったらう？

は、県下西南辺での一例である。

○ダレモ オラザツツロ ガエ。

だれもいなかったらう？

は、室戸町での一例である。——ここで、「ガエ」は「ガネ」に近いものである。

「ワエ」もある。

徳島県下に、「よ」や「ね」と言いかえてもよい「エ」が、かなり見られる。『阿波言葉の辞典』には、

ヨンベラ ネラレナンダイエー〔相手に同意を求め更にその返事を促す形式の一つのあいさつ語〕

の記述が見られる。返事の「ホー エー。」(そうなの。)という女性ことばにも、問題の「エ」が見られる。

問いの「エ」が、よくおこなわれている。「ナンボ エ。」は「いくらなの？」である。(金沢浩生氏による。)女性や子どもたちに用いられることが多いのか。さそいの「エ」もある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、「ゾエ」(「ンゾエ」も)「カエ」「ンエ」などがある。

○ドヒタ ンゾエ。

どうしたの？

は、祖谷地方での「ンゾエ」例である。

「カエ」には、問いの用法、受けひきの用法などがある。

金沢治氏は、『柊のうた』で、県南部のことば、

アルゼウエ（あるのだぞよ）

というなどを指摘してられる。

香川県下では、問いの「エ」のおこなわれることが目だっている。『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条には、

*m*イツガ ミノヒナラエ セッキニャー

いつが 巳の日かな 節季は。

とある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、「ナーエ」（「ナエ」も）「ノーエ」があり、「ゾエ」（「ンゾエ」も）があり、「カエ」があり、「ガエ」があり、「ンエ」がある。「ンエ」は、問いに用いられがちである。

f………… モー ナンチャ デケンガエ

もう 何にも できませんよ。

は、『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条に見える「ガエ」例である。

「エ」のおこなわれることでは、中国と四国との対立が見られる。

「エ」は、国の西半では、近畿・四国になかはずよくおこなわれていようか。

「エ」にむすぶ言いかたは、どちらかという、女性的な表現法になろう。——表現がやわらかくなる。近畿四国弁には、やや女性的なところがある。近畿・四国に、「エ」のよくおこなわれているのは、さもあるはずのことかと思われる。

六 近畿地方の「エ」ほか

兵庫県下にも、「エ」がよくおこなわれており、まず、「よ」に相当する「エ」がある。『全国方言資料』第4巻の「兵庫県城崎郡城崎町飯谷」の条にも、

m シチブホド $\left(\begin{matrix} \text{ウン} \\ f \end{matrix} \right)$ コケッシャッターエ
7割かた 倒れてしまったよ。

などとあり、同巻「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」の条にも、

f アー ソーカ ソラソラ ソラ ヨカッタワナー キン
ああ そうですか、それはそれは。それは よかったですねえ。きの
ノヨリ アツカッタエ キョー エラカッタナ
うより 暑かったですよ、きょうは たいへんでしたね。

などとある。私が、播磨中部で聞いた一例は、

○モー ヒヨリダオ ドイイエー。

おおかたもうひよりだろうよ。

である。和田実氏は、国立国語研究所編の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「兵庫県高砂市伊保町」で、

エ 融合して：チガイマッセ；オマッセ；一番テッペンダッセ。

と記述してられる。「マッセ」などは、「エ」融合と見られるのか。——「ゼ」融合のことはあり得ないのか。

問いの「エ」が、よくおこなわれている。——女性に多いものか。

さそいの「エ」もおこなわれている。

命令表現の「エ」もおこなわれている。今石元久氏教示の、

○イッテ ミナイ エ。

行ってごらんよ。

は、播磨中部地方での、ていねいな命令表現の一例である。なお、氏の教示には、「ダスナ エ。」(出すなよ。)「オキナ エ。」(起きるなよ。)もある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナーエ」がある。私は、これを、淡路北部で聞いた。——この「ナーエ」には、「ナーレ」からのものがあるようにも思われた。

「ゾエ」「ドイエ」があり、「イエ」がある。『全国方言資料』第4巻の「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」の条には、

*m*ア イーヤ ゼニャー ツコーテシモテキタ コッキリ モー ツカイ
 いや、 お金は 使ってしまったて来た。 すっかり もう 使いで
 デノナイ コッチャハキヤ オマエ シヤー ネーイエー
 のない ことだから、 おまえ 仕方が ないよ。

とある。

「カエ」がよくおこなわれている。「ンカエ」もある。「ガエ」「ガイエ」もある。「ンエ」もある。

大阪府下で、まず、「よ」と言いかえてよい「エ」が見られる。山本俊治氏が、「会話における述部表現一助動詞・文末助詞の表現性について」(『武庫川学院紀要』第一集)で示された例には、

○カナンガラハル エ。

(そんなことをしたら) 迷惑がられるよ。(老婆→孫)

がある。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」の条には、

*f*ハー アリガトー ゴザリマスエ

はあ ありがとう ございます。

とある。

問いの「エ」もよくおこなわれている。「何 エ？」などと言われている。

さそいの「エ」もある。

命令の「エ」もある。——おおかたは、ていねいな言いかたになっている。

竹内徹氏の『和泉方言の研究』に見える例は、「マアユツクリ^(シイエ)_(セイヤイ)」などである。

府下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナエ」がある。南河内郡下の一例は、

○モー シェンド シタ ナエ。

もうたくさんしたねえ。(たんのうしたことを言う。)

である。

「ドエ」もある。「カエ」もある。ただし、この「カエ」は「カイ」に近いものともされるか。ばあいによっては、「カイ」が「カエ」になることもあるのか。ともあれ、方言書などにも、「カエ」形がとりたてられてもいる。「シカエ」もある。

なお、「エ」に「ナ」の下接した「エナ」形も、府下に見られ、これが、兵庫県下にも京都府下にもある。

和歌山県下にまた、「よ」と言いかえてよい「エ」が、一般的によくおこなわれている。諸方言書もこれを指摘している。——『和歌山方言集』には、「あかなエー（だめだわよ）」などが見える。同書には、

ナナエー 間 いゝえ、そんなことがあるものか。

というの見える。杉村楚人冠氏の「和歌山の方言中の否定詞」（『方言』第四卷第五号）には、

ナナエー }
 ナナヨー } いいえ、そんなことがあるものか
 ナナヨシ }

(考) ナナヨーが一番ぞんざいで、ナナヨシが一番丁寧である

との記事がある。

『和歌山県方言』には、「サアエ さあどうでせうね」というのがあり、『和歌山方言集』には、「サーエ 間 さやうさね。」というのがある。

問いの「エ」も、南北に広くおこなわれている。私が、南東部内で聞いた一例は、

○オマイ トコロ トーワ ドコイ イタ エー。

おまえさんとこの父ちゃんはどこへ行った？

である。問いの「エ」の出やすいところが、近畿弁らしいところでもあるか。

さそいの「エ」もある。

命令の「エ」もある。県北例、「ナカント ハヨ イキ エ。」（泣かないで

早くお行きよ。)は、ていねいな命令になっている。村内英一氏の「語法調査票試案」(『和歌山方言』4)には、「あがりえ」などが見える。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナエ」(「ナーエ」も)がある。『和歌山県方言』には、「アンナエ」があげられており、“呼びかけの詞”との説明が見える。「ナエ」「ナーエ」は、どちらかというところ、南部に、よりよくおこなわれているのか。

「ノエ」もある。田辺市奥での一例は、

○ジ^アン^テ ツチ ネット^テ ノエ。

自分で土をねってねえ。

である。新宮市では、

○ド^ツタ^ナ ノナノ^エ。アンター。

どうしたのお? あんた。

などの言いかたもおこなわれている。——「ンナノエ」の、長形の文末詞が見られる。「ンナノエ」は目下に言うものであり、「ンナノシ」は目上に言うものである。「ンナノエ」は、「ンナノシ」につぐものであろう。

「カイ」に近い「カエ」が、全般によくおこなわれている。新宮市のことばには、

○ウチ^ノ オジ^ーサン^ニ アワナ^ンダ カン^エ。

うちのおじいさんに会わなかったかね。

など、「カンエ」がある。(「ノカンエ」もある。)
「カ」の「カン」は、四国によく見られるものであり、これが紀州にも、このように見られて、注目をひく。

「ガエ」もある。「ンエ」もある。「何 した ンエ。」などと、よく言われている。

「トエ」もある。『和歌山県方言』には、「トエ (行訛) と言ふ事です」との説明が見える。

和歌山市域で聞かれたもの、「ウ^{チャ} ソン^ナ コト シ^ラナ エー。」(私はそんなこと知らないわ。)などでは、「ワイエ」の言いかたが見られる。「シ

「ラナ エー」は「知らぬ ワイエー」である。(県北に「ワエ」もある。)なお、本県下の広くに、「行コ ラエ。」などの「ラエ」が、よくおこなわれている。さそいの表現になるものである。「ラエ」は、たとえば和歌山市域などで、「ライエ」ともなっている。

○オカサン ハヨ ゴハン タベヨ ラエ。

おっかさん早くごはんをたべようよね。

は、南紀串本での「ラエ」例である。

三重県下では、「エ」の、以下の用法がとりたてられる。

単純に「よ」と言いかえてよいような「エ」がおこなわれている。県西南、紀州の西部では、小学校女児が、先生に向かって、

○コノ ヘンデ ヨドロテ ユー エ。

このへんで、たきつけのことをヨドロって言うよ。

などと言っている。

問いの「エ」がよくおこなわれている。やはり、紀州内では、「ソンチョーサン エ。」(村長さんですか?)などと言われており、伊勢地方には、「ドーシタ ンダーエ。」(どうしたの?)などの言いかたがある。「何 デー。」(何?)といった問いの言いかたは、「デ」文末詞の長呼が見られるものであるうか。しかしながら、ここに、[e]母音が長くひびくことは、いきおい、「エ」文末詞の存立と活動とを思わせはしないか。鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』第13号 昭和36年12月)には、「なんをえ。(何をか。)」などの記事が見える。

「そうですか。」と、相手の言を肯定する「受けひき」の言いかたにも、「ソー エー。」というように、「エ」が出ている。

命令・勧奨の言いかたにも、「エ」が用いられている。

○マー ヤスマサイ エー。

まあやすみなさいよ。

は、志摩東岸での一例である。「泣かんとはよ行きな エ。」は伊勢南部での一例である。『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

m…………… カナラズ チカラ オトスナエ

必ず 力を 落とすなよ。

などである。伊賀地方にも、勸奨などの「エ」が見られる。——『三重県方言資料集 伊賀篇』には、「命令。ハヤクエキエー(行きなさい)」などと見える。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナーエ」がある。伊賀では、「アツイ ナーエー。」(暑いねえ。)
「ワタイ ナーエー。」(私がねえ。)などと言われている。「ナーエ」は、主として伊賀地方におこなわれているのか。

「ゾエ」がある。『全国方言資料』第4巻の「三重県志摩郡浜島町南張」の条には、

f ホーカイ ベントーワ ドースルゾエ

そうですか。弁当は どうしますか。

とある。「サエー」の「セー」もあるのか。

「カエ」もあり、「トエ」もあり、「ガエ」もある。

「ンヂーエ」のことは、p. 124を見られたい。

「ワエ」があり、「ラエ」がある。『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

f イコラエ¹⁾

帰りましょうよ。 1) [rae]

などが見える。

「ノシエ」がある。福田学氏の「熊野方言における文末辞について」(『三重県方言』第8号)には、

イマカラ イクンカノシエ(阿田和町, 熊野市新鹿, 磯崎二木島, 木本市)などの例が見え、

「ノ」はやさしさをこめて表わす時に使い、「ノシ」「ノシエ」「ニシエ」

はあらたまつた時、目上の人に対する時に使う。前者を親体とすれば、後者は敬体ともいえるだろうともある。

奈良県下では、「エ」の以下の用法が、おもにとりたてられる。

単純に「よ」「ね」と言いかえてよい「エ」がある。『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条には、

<i>m</i> モタセテ	ホイテ	ソレー ²⁾	ソレニ	ヒ ³⁾	シテ	アソバシテ
もたれさせて、	そして	そんなふうに	して	あそばせて		
オッキニ	ンテンチャーネンエ			2) 言いさし。		
大きく	したのだと言うのだよ。			3) 「シテ」の言いさし。		

とある。大和中部で私が聞き得た一例は、

○コレガ オモタイ ノエー。

これが重たいのよお。 (老女→嫁中女)

である。(この例では、「ノエ」の複合形が見られる。) 諸方言書にも、「よ」の「エ」が見える。『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条には、

*f*フナ キレヤヘンダヤロケドエー

そんな、切れなかったでしょうけれどねえ。

というのがある。

問いの「エ」がおこなわれている。「どうしたんだい。」の意では、「ドーシタ ンエー。」と言われている。(この例には、「ンエ」複合形が認められる。)『大和方言集』には、「イツエ 何時ですか。(榛原町)」が見える。

受けひきの「エ」もおこなわれている。岸田定雄氏の「熊野のことば(上)一瀬峡・北山峡付近を中心として」(『和歌山方言』3)には、

そうですに当るジャー、そうですかに当るジャーカ或はジャーエも此の辺りではふんだんに聞かれるが二語重ねて使用する事も多い。例えば、ジャーカ ジャーカと言う風にてある。ジャーカは男にジャーエは女に多い

と思う。

とある。西宮一民氏の「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)にも、「下北山村地方」の「ジャーエ 敬」が見える。(「ジャーカ 卑」ともある。)都竹通年雄氏の『奈良県北部方言覚書』にも、「生駒郡北倭村」のこと、

左様カト云フノモ、左様エト云フ。行ッタカト云フ時ニ、行ッチャッタエト云フ。シカシテ語尾ヲアゲル [か] = [え] 右ワトクニ女ニ多ク用ヒラレル。

というのが見える。

さそいの「エ」もある。『菟田之方言』には、「はよイコエ」というのが見える。(「イコエ」は「行かうよ」とされている。)

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、上にふれたもののほか、「ナーエ」「ノーエ」「ゾエ」「サエ」「カエ」「ガエ」「トーエ」「ワエ」などがある。

「ナーエ」は、県下によくおこなわれているのか。諸文献にも、「アノ ナーエ。」などが見える。奈良市近辺で、私が聞き得た一例は、

○コッチー キテ ナーエ。

こっちへ来てね。(大女→大男)

○ホンデ ナーエ。

それでねえ。(大女→大男)

などである。西宮一民氏の「奈良県磯城郡織田村(新 大三輪町)」(『日本方言の記述的研究』所収)には、

ワイナーエ (ヤ) カワイ オヨギニナーエ (ヤ) イテキテンヤエ。

〔私はね、川へ泳ぎにね、行って来たのよ。〕

というのが見える。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

m…………… ホネノ オレル ムンジャナエ²⁾

骨が 折れる ものだねえ。

2) [næ·ẽ]

とある。「ナエ」は「ナーエ」に関係のあるものかどうか。県下の「ナー

エ」は、どちらかという、女性によくおこなわれるものでもあるか。

「サエ」の例は、『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条の、

fソヤサエー ダーブニ ヨロコンドンネゲ

そうなんです。 たいそう 喜んでいるんですよ。

などである。「ワサエ」などともある。

「ガエ」の例は、県中部の、

○ワシラミタイナ モノ ナンニモ シラ シマヘン ガエー。

わたしらみたいなのは、なんにも知りゃしませんわ。 (老女

→藤原)

などである。

「ワエ」の例は、『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条の、

fハー ソンデ エーワエー

はあ、 それで いいですよ。

などである。「ワ」のもとに加えられている「エ」には、やわらかな気もちで念をおそうとする心理がくまれる。

京都府下については、京都弁ないし京都地方のことばが、「エ」文末詞の本場をなしていると思われる。すなわち、この地方に、「エ」は、だいたい女性ことばとして、しっくりとしたおちつきかたを見せている。

早く、境田四郎氏は「関西方言」(『国文学 解釈と鑑賞』第三十八号 昭和14年7月)で、

京都の女性には「仰山人ガ通ルエ」(沢山人が通りますよ)の「エ」といふ詠嘆の辞がある。

と述べていられる。

単純に「よ」と言いかえてよい「エ」が、よくおこなわれている。「そんなことを言ったら あきまへん エー。」は、「あきませんよ」である。

○オユーショクノ ヨーイ シトース エー。

お夕食の用意をしてオマスよ。

は、京都の宿で聞かれることばである。榎垣実氏の『京言葉』には、

エは標準語の「よ」「は」^(わ)に当る。いまいくエ（今行くよ）これおつきーエ（これは大きいは）

とあり、氏はまた「京おんなの京ことば」（『放送文化』第25巻第1号）で、

婦人たちはこのドスに、「わ」に相当する婦人用の終助詞エをつけて、ソードスエと使い、それが早口になるとソードッセとなる。

と述べていられる。——大阪ことばでの「何々しまっセ。」などの「まっセ」は、「ますエ」のこともあるのか。「〜ダッセ」も「ダスエ」でもあるのか。宣伝ものなどに見える京ことばの列挙の中には、しばしば、「〜ドスエ」ことばが見え、多く、「〜ドッセ」があげられている。「おおきにどっせ。」などとある。

京都の「ドスエ」に関して、かつて、知友の入江秀雄氏は、つぎのように教示せられた。“「アンタソレガアカヘノドスエー」（駄目だったのですよあなた）「ヤメトキマシタンドスエー」（中止したのですよ）「行キマシタンドスエー」「死ナハリマシタンドスエー」「ですよ」よりも感情が後に余韻を残してねばりつく京阪風の情緒と執拗さが含まれてゐる様です。相手の感情に食ひ込んで行つて「ですよ」の如く自分の言ふべき事だけ言つて放棄するのでは無く飽くまで聞く者を自分の心持にさせて終ふまで眼を（心の眼を）相手から離さないと云つた様な感じ。敬卑感^レは可成り有る。中年以上の女が多く用ひる。気分がゆるやかに丁寧な時はドスエーであるが迫つて来たり荒つぱくなるとドッセーになる。”

問いの「エ」が、府下の南北によくおこなわれている。

○アンタ、ドコデスエー。

あなた、どこから見えました？（老男→藤原）

は、丹後半島での一例である。井上正一氏の『丹後網野の方言』には、「あんたどう思うエ。」などが見える。「だれだれさんにアワヒンダエ。」（だれだれさんに会いにはしなかったね？）は、府下南部での女ことばである。

命令の「エ」もある。旧京都市域から言つての、北郊の中川郷で聞いたこと

ばには、

○マツ^マト^トライ^{ライ} イ^イエ^エイ。

“まっとってちょうだいよ。”

○イ^イレ^レサ^サセ^セイ^イ イ^イエ^エイ。

“入れさせてやんなさいよ（やれよ）。”

との言いかたがある。これらの「イエイ」は「エ」に関係のあるものなのかどうか。土地の人は、上の言いかたを、女に多いものとしており、男はあまりつかわぬと言っている。[jei] と、発音はかなりきついようでもあるが、女に多いものとされているのが注目される。

府下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、「ナーエ」「ゾエ」「カエ」「ンエ」「ダエ」などがある。

「ナーエ」は、私は、丹後で聞いている。「ゾエ」もそうである。

○イ^イヤ^ヤ, ト^トオ^オツ^ツトル^{トル}マイ^{マイ} ズ^ズエ。

いや、通ってはいまいよ。（推想）

などと言われている。

「カエ」も、北部によくおこなわれているものか。

「ダエ」の例は、『丹後網野の方言』の「京都え行ってきたダエ。」などである。

滋賀県下では、「エ」の、以下のような用法がとりたてられる。

単純に「よ」「ね」と言いかえてよい「エ」がおこなわれている。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

m ホンジャ マー シ⁴⁾ シンパイ アラセン カエリマスエー
 それでは まあ、 心配 ありません。 帰りますよ。

4) 言いさし。

とある。大津市方面をはじめとして、県下のかかなり広くに、「〜ドス エー」が見られるか。——京都ことばの影響ということかもしれない。『滋賀県方言

集』にも、「ソードスエ さうですよ 女子」とある。

問いの「エ」も、よくおこなわれている。

○ドコイ イク エー。

どこへ行くの？

は、湖西での一例である。一般に、「それは何？」は、「ソレ ナン エ。」と言われている。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

*m*ダレノヤエ

だれのだい。

とある。

おなじく「多賀町萱原」の条には、「エン」の形が見える。

*f*ホイテ オナリセナ

ネヤ セナンダヤエン

そして 炊事のしたくをしなければ 寝は しませんでしたよ。

とある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、「ナーエ」「カエ」「ワエ」などがある。

○ウツトシー ナーエー。

うっとうしいねえ。

は、湖東安土ことばの「ナーエ」例である。——県下のかかなり広くに、「ナーエ」ことばが見られるのか。

近畿地方では、「エ」がよくおこなわれている、と見ることができようか。しかも、「エ」の流行は、「ヤ」のおこなわれかたとは、平行しないようでもあるのが注目される。そこにまた、「エ」は、おもに女性ことばとしておこなわれがちであるさまが見いだされる。

「エ」が女性ことばとは限られないにしても、近畿ことばは、「エ」ゆえに、女性的なものにもなっていると解することができるかもしれない。

近畿の「エ」の系脈は、北陸地方に、どうたどられるであろうか。

七 中部地方の「エ」ほか

北陸一帯に、「エ」が見いだされる。それが、おもには、「よ」と言いかえることのできる「エ」、あるいは、問いの「エ」などである。

福井県下では、問いの「エ」がよく聞かれる。

○ド^エコイ イカ^エンスンジャ エ。

どこへお行きなんだね？

は、若狭中部の一例である。

○ナ^エンニャ エー。

何なの？ (少女問)

は、越前東部での一例である。(愛宕八郎康隆氏教示)

複合形「カエ」がよくおこなわれている。

○ホー カ^エエー。

そうかね。

は、福井市方面での一例である。通常、「カエ」は、疑問の表現に用いられるけれども、納得したような時にもこれが言われる。

「ナエ」「ゾエ」などの複合形もあるか。

石川県下に、「エ」はさかんである。

能登の輪島ことばでは、「エ」をつかうことが多い。輪島の人が、“輪島ことばで笑われるのは、「エー」をつけることだ。”と言っていたのを聞いたことがある。

○オーキニ エー。

“ものをいただいて、ありがたい意のこもった時”のことば。

○ゾー カ^エエー。

そうかい？

などは、輪島での「よ」「ね」相当の「エ」である。

おなじく輪島で、「ナソニャ エー。」と言えば、「何なの？」であり、ていねいな問いは、「ナンデゴゼンス エー。」(何でござんすか?)である。

輪島ことばでは、「どうどうして クダー エー。」(どうどうしてちょうだいよ。)など、命令表現のばあいにも「エ」が出ている。「…………… クダーシ エー。」となれば、よりよい言いかたである。「タノム エー。」(たのむよ。)は、願望のばあいである。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

fオリャーエ ター ホ²⁾シ²⁾テノー

わたしはね 田が 水がなくなってね。 2)「干せて」。

というのが見える。その他、加賀にも、「よ」相当の「エ」がよく見られる。

問いの「エ」の、能登半島頸部での一例をあげるなら、

○カトー²⁾シェン²⁾シエ²⁾ワ ドコイ イッテヤ²⁾ッ²⁾タ²⁾ シエー。

加藤先生はどこへいらしたんですか？

がある。

能登半島西北端での、命令表現のばあいの「エ」をあげるなら、

○イカ²⁾ッ²⁾シ²⁾ エー。

お行きなさいね。(「さよなら。」の気分)

がある。岩井隆盛氏は、「海士(舳倉)方言の概観」(『国語方言』第二号 昭和27年12月)の中に、「アセンナイエ(あせるなよ)」の例をあげていられる。

本県下での、「エ」に関する複合形の文末詞には、上記岩井氏論文の「アソナイエ(あのね)」があり、「カエ」がまた、一般的によくおこなわれている。「ガエ」もある。

「ワイエ」「ワエ」もある。

富山県下にも、「よ」の「エ」が、

○カ^ーン^ニン エー。

ごめんね。

のようにおこなわれている。『全国方言資料』第3巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条には、

fコユコトモ アッタワニエーエ

そういうことも ありましたねえ。

というのが見える。富山市教育委員会の『富山県方言集成稿(二)』には、「おーえ」というのがあり、「-そうだよ」と説明されている。——「男が同輩又は目下に対して。」言うものらしい。

問いの「エ」が、

○オ^マイ ド^コイ イク エー。

おまえさんどこへ行くの？

のようにおこなわれている。上のは、越中南辺での一例であるが、県下に広く、問いの「エ」が認められるらしい。

問いの「カエ」複合形も、よくおこなわれている。

「ガエ」もある。「ワエ」もある。

新潟県下の越後・佐渡にも、「よ」と言いかえてよい「エ」が（——上来、みな、非命令のばあいであるが）おこなわれている。

○マタ キタエー。

又来ましたよ。 (中女→老女)

は、押見虎三二氏教示の、越後南辺、秋山郷での例である。

問いの「エ」がよくおこなわれている。

○オ^メーノ ツ^ァツ^ァツ^ァー ド^ゲー イ^ッタ エー。

おまえの父さんはどこへ行ったか。

は、越後中部での一例である。北条忠雄氏は、「東北方言に於ける対者尊敬『ス』の本質」(『国語学』第六輯)で、

私の郷里（藤原注新潟県北蒲原郡佐々木村）の方言では、（中略）それで「お前は行くか」（対下）は〔ンナエグヤノ〕となる。然るにこれが対等になると、ヤは用ゐられず、イ^エ[je]が用ゐられて、〔オマ^エ エグイ^エ〕〔omæ eguje〕となる。この場合のエはイ^エ[je]であって〔e〕ではない。対上になると、イ^エに更にシが付加されて〔オマ^エエサン、エグイ^エン〕となる。

と述べていられる。小林存氏も、「越後方言の結語法概観」（『国語研究』第10巻第7号）で、中蒲原郡一部に「お前も行くエシ」の言いかたがおこなわれていることを指摘していられる。

「行く意志なのか」といふ風の定まつた範囲内の疑問辞である。

との説明が見える。

佐渡弁にも、たとえば、押見氏の「佐渡方言の文末助詞について一両津市大字片野尾における一」（『方言研究年報』第一巻）の、

○バーヤン、イクツン ナッタ エ。

おばあさん、何歳になりましたか。

などが見られる。

命令・勧奨の「エ」が、また、佐渡にも越後にもおこなわれている。

○アガレ エー。

上がれよな。

は、佐渡西北岸での一例である。——“身内や、如才なくしている人が来た時のことば。”のよしである。（比較的軽小な音声特徴をもって、よく、特定の待遇効果をあらわすところが注目される。）「どうどうして グレ エー。」などとも言っている。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

f………… ハヨ コーエ ジャ

早く お上がり、 じいさん。

などとある。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、佐渡の「ナエ」、越後の「ザエ」があり、「カエ」がまた、県下によくおこなわれている。問いや納得や勧めなどをあらわしている。

「ワエ」も見られる。

○アトカラ イク ワエー。

あとから行くわよ。

は、佐渡での「ワエ」例であり、

f オルワエ

いますよ。

は、『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条に見えるものである。

岐阜県下にも、まず、「よ」と言いかえてよいばあい<非命令のばあい>が見られる。飛驒に、これが、より見られやすいのか。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県吉城郡古川町黒内」の条には、

mナ ドーカ タノムエ

それでは どうか 頼むよ。

とある。飛驒の「よ」である。

つぎに、問いの「エ」が、これは、美濃に、よりよく見られるか。

○オマヤ ドッカラ ゴザッタ エー。

あんたはどこからいらしたね？

は、美濃北部での一例である。

命令の「エ」もある。『郡上方言』には、「オリヤナ ゼラ イツトルンジヤデ オコツトクレンナエ 俺はね、出鱈目言っているんだから、腹を立てないで下さいよ」との例が見える。

本県下に、「エ」に近い「エン」がある。『岐阜県方言集成』には、羽島郡の「なんやえん【句】何ナンですか。」が見え、このところの説明には、『『エン』

は感嘆詞。」とある。同書の、武儀郡の条にも「なにえん〔句〕何ですか。」や「なねん〔句〕何ですか。」が見え、加茂郡の条にも「そうかえん(さう)〔句〕さうですか。」が見える。「カエン」は、同書の飛驒益田郡の条にも見える。都竹通年雄氏は、「方言文法」(『国文学解釈と鑑賞』第十九卷第六号)で、

エン=エンシ ますよ。 美濃

としていられる。「エ」または「エー」の言いかたが、単純に「エン」となることもあったのではないか。

『郡上方言』には、「ソーヤ エナ そうじやげな」などが見え、『北飛驒の方言』には、「〇〇エナ又エノ……よ。」の記事が見える。(この書に「ソヤエナ」は「さうですよ。」とあり、「ソソナイエナ」は「さうでないですよ。」とあり、「オキンサイエナ」は「起きなさいよ。」とある。)
「エナ」は、飛驒にかなりいちじるしいものなのか。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県古城郡古川町黒内」の条にも、

fオリモ ソイエナ

わたしも そうですよ。

などとある。

美濃には、「ナーエ」(「ナエ」とも)の複合形が見られる。

○ハツデンシ_ョジャ ナーエ。

(あれは)発電所だねえ。

などとある。「ネーエ」もあるか。

「サエ」もあり、「ゾエ」もある。

「カエ」がよくおこなわれている。問いのばあいもあれば、さそいのばあいもあり、また、応答のばあいも命令のばあいもある。『岐阜県方言集成』の大垣市の「おかんかえ〔句〕止マさないか。」は、禁止命令のばあいである。

○サンジューグライからで ナカロ カエ。

三十歳ぐらいからではないだろうかね？(ここへバスが通いはじめたのは) (老女→藤原)

は、美濃での、疑問表示の「カエ」である。「カエ」とともに「カエン」があり、『岐阜県方言集成』には、その、さそいや応答の例が見える。

『方言資料抄 助詞篇』には、『赤い鳥』第一巻第三号からの、「カエン」例の引用が見える。——問いの「カエン」である。

「コトエ」という複合形もあり、「ワエ」もある。ただし、「ワエ」のばあいには、「ワイ」の音転のこともあるかもしれない。

愛知県下でも、まず、「よ」と言いかえうる「エ」が見られる。

○マ^ー オヤスミ^ー エ。

まあおやすみなさいよ。(女の人のでいねいなあいさつ)

は、知多半島頸部での一例である。(佐藤虎男氏教示)

○マ^タ グラ^エ。

また来るよ。

は、渥美半島での一例である。『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条には、

*m*ウレンカッタエ

うれしかったよ。

とある。——三河例である。

三河西部の、「ホ^ー カン^{へー}。」(そうかね。)などとある「へー」は、「エー」に関係のあるものなのかどうなのか。

問いの「エ」がある。「ソ^ーダ^エ。」(そうですか。)は、渥美半島での一例である。

○ド^コイ^エ イ^ッタ^エ エー。

どこへ行った?

(「エー」は「ヤー」よりも、すこしくていねいであるという。)

は、三河北部での一例である。

つぎに、命令の「エ」もある。

○テツ[↑]ダイー エ。

てつだいなさいよ。(中女→小女)

は、知多半島頸部での、ていねいな命令である。(佐藤虎男氏教示 女ことば
だという。)『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条には、

*m*ソエジャ ヒャクメモ³⁾ (*f* ウーン) オクレヤエ
 それでは 100³⁾ くださいよ。 3) [çakumeō]

とある。「オクレヤエ」は、「ヤエ」をとらえしめるものか、「エ」をとらえし
めるものか。

愛知県下にも、「エン」がある。私は、渥美半島でこれを聞いた。半島南岸
の一地点では、「ソーダ エン。」が、“そうですか。疑問。”であった。「ソー
ダ エン。ホントズラ カ。」は、「そうですか。ほんとでしょうか。」であっ
た。渥美町立伊良湖岬中学校の「方言表」にも、

えん ……ですか

が見える。「エン」とあって、問いになるのは、了解しやすいことのようにも
ある。「エ」文末詞の、強調されて「エー」となったものが、問いに用いられ
たか。その、問いの強調の「エー」が、「エン」という形になったか。ところ
で、渥美半島西部出身の若い男性から教示されたのによると、「ソーダ エン。」
は、「そうだ(です)ねえ。」である。“同感の時の「ねえ」に、「エン」をつか
う。おもに女性。”とあった。この人は、渥美半島東部の田原町の“土族階級”
のことばを紹介して、「ソーダ ヨン。」をつかうと言われた。たまたまのこと
であるが、私は、「ヨ」に対するこの「ヨン」と、問題の「エン」とを見あわ
せたく思う。

尾張地方に、「エ」に関する複合形の「エモ」のさかんなことは、広く知ら
れていよう。森田草平氏の小説にも、「えも」(ねえ)がよく出てくる。

「ノーエ」の形は、私は、渥美半島で聞いている。

○アソ[↑]コフ ハタワ フーエ。

あそこの畑はねええ。(→どうも草が多くてこまるよ。)

などと言われている。

「カエ」複合形が、県下によく見られ、「カエン」もある。

『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条に見える、

f オラントーモ ボンクサオノー カルダエ

わたしたちも 盆草をね 刈るんですよ。

などでは、「ダエ」複合形をとりたてることができようか。

静岡県下でも、「よ」（「ね」とも）の「エ」がある。（県下に、「エ」の「イェ」もあるらしい。）古く、『静岡県方言辞典』には、「やだえー ヨー」というのが見える。私が、伊豆半島南部調査の中で聞き得た例は、

○キタ エートモッテ、…………。

（いのししが）「来たよ。」と思って、…………。

などである。『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条に見える例は、

f………… オホロノ カゲン $\left(\begin{matrix} \text{ア} \\ m \end{matrix} \right)$ ミテキマスエ
おふろの かげんを 見て来ますよ。

である。

問いの「エ」もおこなわれている。伊豆半島での例は、「ヒ[↑]ロシマ エ。」（老男→藤原）である。（ここでも、「エ」が、しぜんに、[je]と発音されることもある。）

命令の「エ」もある。『静岡県島田方言誌』には、

ミヨーエ みなさい 見なさい

とあり、また、「セドノコー ミヨーエー」（裏の家の子を見なさい）ともある。私が御前崎近くで聞いた一例は、「おくれよ。」の意の「ク[↑]リョー エー。」である。清瀬良一氏は、浜名郡新居町の「行くな エ。」を教示せられた。

単純よびかけ性の「エ」もある。山口幸洋氏は、舞坂地方のことば、「ソイデ イェー。」（それでよ。）などを教示せられた。

「エ」の「エイ」があるか。『静岡県島田方言誌』には、「ミショーエイ
みせてよ 見せてよ」との記事が見える。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ノーエ」がとりたて
られようか。私が御前崎近くで聞いた例は、

○ヤットブリデ キタ アーエー。

“久しぶりで”来たねえ。

などである。「ノーエ」が、女ことばであったりもするか。

『静岡県島田方言誌』には、「サエ」が見える。「ソーサエー そうだ
そうです」などがある。遠江にも「サエ」があるのか。

「カエ」がよくおこなわれている。——問いの用法が多かろう。御前崎近く
での、

○ソージャ ナイ カエー。

そうではないかね？

は、とくに「エ」のつよめられたものである。

「ダエ」もある。『静岡県本川根方言の文』には、

稀ではあるが、ヤラツエ (138), イソガシーダエ (289) のように、エ
もある。

とある。『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条には、

m………… ウラン コドモノ ジブンニャー マッター ヨガ ヒ
わたしの こどもの ころには まったく 世の中が 開
ラケンニモ ヒラケナンダ¹⁾ダエナー

けないにも 開けていなかったよねえ、

1) [dæe]

とある。「ダエナー」が見られる。

長野県下でも、まず、「よ」と(「ね」とも)言いかえてよい「エ」が指摘さ
れる。『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」の
条には、

fアー オフロエ ハエッテ オチャデモ ノマザーエ

ええ、おふるに はいって お茶でも 飲みましょうよ。

とある。信州中部の一女性の言によれば、「ソ^ーダ。ソ^ーダ。」(そうだ。そうだ。)は男性の言であり、「ソ^ー エ。ソ^ー エ。」(そうだ。そうだ。)は女性の言であるという。上の「高遠町山室」の条にも、「fアー ソーエ」(ええ、そうですよ。)とある。『上伊那方言集』には、

え(助) よ(強め) (そうえ) 上伊那郡全域

とある。『信州方言読本』には、

おらもいくえ(おれも行くよ)

などがある。——下伊那地方でのことばであるという。

問いの「エ」もある。『信州方言読本』には、

あっこえいくのだれえ(あそこへ行くのは誰ですか)(埴科・松代)

「松代を中心として北埴一帯に」

とあり、山崎栄雄氏は、「信州松代のことば」(『言語生活』第五十二号)で、

また、疑問を表す「エ」が、

・アスコエイクノードコノヒトエ。

・センセイコレドウイウノエ。

のように使われ、一般的な言い方である、「ドコノヒトダエ。」のように言わないのはd音のもつ粗野な響きを嫌う故かとも思われる。

と述べていられる。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ナエ」がある。『信州上田附近方言集』には、「ナエ」に関する、

塩田方面にて最も多く使用す。「ナイ」とも発音す。

あのナエ 川中島方面にては多く「ナア」といふ。

の記事がある。——「ナイ」に近い「ナエ」もあるのか。ところで、また、本書には、

アノナエ コノナエ 塩田のナエ ナアーエ言葉はおいてくれ

との記事も見える。佐伯隆治氏も、早く、「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号 昭和17年8月)で、「カワイソウナ話ダナエ(可愛さうな話だなあ)」などの例を示してられる。氏は、「ノイ」「ナイ」「ナエ」を列挙してられ、「感嘆。軽く同意を求める様な気持にも用ひる。」と解説してられる。「ナイ」と区別して、「ナエ」をとりたててられるのが注目される。『全国方言資料』第2巻では、「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条に、

f デンジデモ ナンデモナエ

田地でも 何でもねえ。

などが見えるとともに、「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」の条にも、

m…………… ゼニャー ネーシナエ

お金が ないしねえ。

などが見えている。「高遠町山室」の条には、「ナーエ」も「ナーエー」も見える。なお、この「高遠町山室」の条には、「ヨナエ」という複合形も見え、「カナエ」という複合形も見える。『上伊那方言集』にも、「ナエ」の記事がある。福沢武一氏の『信州方言風物誌 第三』にも、「——エンニャ、ユワネーナエ(いいえ、いいませんね。)」などの記事が見える。

「ノエ」もあるか。

『全国方言資料』第2巻「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」の条には、

f アー ニドツツァー イッタヨエ

ああ、二度ずつは 行きましたよね。

とあって、「ヨエ」が見える。なお、この条に、

f ソイジャ カリテ ミテクダヨーエ

それでは 部屋に通していただいて 見て行きますよ。

ともある。

本県下に、「ゾエ」複合形も見られる。「カエ」もよくおこなわれている。

さきの、「高遠町山室」の条に見られる、

*m*エーカゲデ デカケルダエー

いいかげんで 帰りますよ。

では、「ダエ」複合形が認められるか。

m…………… ヒルデーモ シルダーエ ドーモ

昼寝でも しますよ, どうも。

など、「ダーエ」ともある。

山梨県下でも、単純に「よ」と言いかえてよいような「エ」が、よくおこなわれている。「ソー エ。ソー エ。」(そうよ。そうよ。)などがある。

『甲州方言』には、

そーかいが、ほーけー、ほーえーとなるのは甲州方言の一般的傾向である。と見える。「エー」は、「ね」と見てもよからう。望月克己氏の「山梨県峡南地方の敬卑の表現」(『言語生活』第五十四号)には、

次に下山村独特の言葉で人に話し掛けられた時、「そうですか」と相槌を打つのに二つの表現がなされている。目上に向かって「ほう[○]エ」、同等や目下には「ほう[○]ヤ」二者がはっきりした待遇価を示すのは面白い。

とある。

県南に、問いの「エ」もある。

複合形には「カエ」があり、『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」の条には、

*m*エー ソーガエー

ああ、 そうかい。

というのが見える。

「ソエ」という複合形もある。県西南部での一例は、

○オ[○]リャー ヤメー イ[○]ク ソエ。

わしは山へ行くんだよ。

である。

八 関東地方の「エ」ほか

当地方は、「エ」のおこなわれかたが、比較的簡素であろう。

神奈川県下では、『神奈川県方言辞典』の記事、

エ（助）感動の意。「でっけー犬だーエ」⑦大*船^一足上山*北^一中西秦野
・国*府・東秦野・秦野・岡崎・北秦野・南秦野。⑧大磯*・横須賀市佐島
「そーだエ」⇒エー（助）

が、まずとりあげられる。

『言語生活』第三十五号の「全国珍語奇語集」というのに寄せられた、日野資純氏の「神奈川県」についての記事には、「^一イエー 親しい者へのよびかけ。」というのが見え、「^一イエー、サブチャンイエー。（大磯、三浦半島）」という例が見える。

『国語シリーズ』43の『標準語と方言 第3集』には、

そーじええー（そうではないか） 神奈川

との記事が見える。

県下に、「ソー カエ。」（そうかい。）など、「カエ」の言いかたがよくおこなわれている。

「ワエ」複合形もある。

東京都の伊豆諸島内には、「エ」文末詞がかなりおこなわれているのか。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f………… クレァシンキリャ ショーガネジエー
繰り合わせなければ しょうがないでしょう。

というのが見える。なお、この「坪田」の条には、

m………… ユズルワ ド イッカエー
譲は どこへ 行ったか。

ともある。

旧東京市域に、「カエ」の言いかたがよくおこなわれてきたであろう。『東京方言集』には、「オマエマデがそんなことをおいひかえ？」などの実例が見える。

「ナーエー」複合形は、三宅島などに見える。

‘東京語’の「エ」に関しては、松下大三郎氏の『標準日本口語法』（中文館書店 昭和5年2月）に、次下の記述を見ることができる。

「誰だ^い。」「乃公だ^い。」「そうか^い。」「分つたか^い。」「分つた^い。」

これらの「い」は皆「よ」の意の軽いものである。

「い」は「え」ともなる。古い口語では「い」でなく常に「え」を用ゐるたが、東京語では疑問の語の下へだけ使ふ。

誰だ^え。 分つたか^え。 善いか^え。 まだか^え。

母親が子供にいふやうな場合に用ゐるので、「い」よりは親愛の趣がある。

(以上 p. 331)

古風な女中などが「旦那様え」「奥様え」など呼ぶ「え」は「よ」の通音である。「や」も「よ」の通音であるが、「え」は「や」と違ひ敬語であつて親愛の語ではない。

(以上 p. 332)

上には、氏独自の解釈が見られる。私は、「そうか^い。」なども、「かい」をひとまとまりのものと見ている。「い」は「え」となることもあろうが、「エ」は、「イ」にかかわりなく存立するものでもある。氏が、「え」について「い」よりは親愛のおもむきがあるとしていられるのは、興味が深い。氏の指摘された、よびかけの「エ」は、今日、おこなわれることがすくなくなつていよう。

千葉県下で、私が聞き得たものには、

○オ^ー タマゲタ エ^ー。

やあ、びっくりしたよ。

などの、「よ」の「エ」があり、問いの「エ」があり、命令・勧奨の「エ」がある。

複合形には、「ナエ」「ヤエ」「カエ」「ワエ」などがある。『千葉方言 山武郡篇』に見られる、「ミろやえ 見よ」「オキろやえ 起きよ」「タタケやえ たゞけ」などは、「ヤエ」をとらえしめるものか。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、つぎの「ワエ」例がある。

*m*アッタワエ

(そういうことが) あったよ。

埼玉県下に関しては、私の整備し得ているものが、すこぶるすくない。——東部の調査で、「エ」をとらえておりもするが。

『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条には、

*f*ドノグライデ カウエー

どのくらいで 買いますか。

など、問いの「エ」が見え、また、

*f*オマエ カケテ ミロエ

あなた、 掛けて ごらんなさい。

など、命令の「エ」が見える。

なお、上の「両神村」の条には、「ゾエ」複合形も見え、

m…………… アシオトガ スルンダエナー

足音が するんだよね。

というのも見える。

群馬県下でも、問いの「エ」が、比較的によくおこなわれているか。神保広至氏の「群馬郡の語法」(『季刊 国語』昭和22年冬季号)には、「きや。え。け。疑問の意を表す。」とあり、「どうしたんだえ。」の言いかたが見える。大橋勝男氏は、県西北辺の実例、

○コンター, ドゴ イグ エー。

あなた, どこへ行くのですか。

を教示せられた。『全国方言資料』第2巻の「群馬県勢多郡大胡町」の条にも,

fドッチエ オイデニナリマスエ

(ときに) どこへ おいでになりますか。

というのが見える。

複合形には、「ネーエ」があるのか。有川美亀男氏の「上州ことば」(『言語生活』第二十号)には,

冬の寒い日など, 前橋市内のいたるところで「今日はハア, オーカ寒くて, ドーショモネーヤイネーエ」というようなことばを何回でも聞くことができるが, ……………。

とある。

「カエ」複合形もおこなわれている。

栃木県下に関しては, 今, 私は, 言うべきものを持たない。

茨城県下では, 『茨城方言集覧』の, 「なんやえー(成) 何デアリマスカノ意久<久慈郡>」を見ることができる。長塚節の『土』にも, 「どうしたんだえ」「今夜持つてつたのかえ」などが見える。

総じて, 関東東北部地方に, 言うべきことがすくないようである。ただし, 群馬県下にも見られる, 「さようなら。」の意の「アバ エ。」などは, この地方にもありうるのか。

福島県下をはじめとする東北地方には, 問題の事象のおこなわれることがすくなくない。

九 東北地方の「エ」ほか

福島県下に、単純に「よ」と言いかえてよい「エ」や問いの「エ」や命令・勧奨の「エ」がおこなわれている。さそいの「エ」もある。どちらかといえ、県東部に、「エ」は、よりよくおこなわれているのか。『福島県方言辞典』には、「ドダエ〔句〕 どうだね 北中」とあり、『会津方言集（増訂版）』にも、「ダレダエ（句） 誰です。」とある。「アイペイエ 行コー」は、会津西北隅で、私が、土地の方言しらべの書きものから見いだしたものである。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞としては、まず、東部域の「ナエ」が指摘される。『福島県棚倉町方言集』には、「ほれえ きれえだなえ」とある。長友菅野宏氏は、かねて、「エエ ショオガツ ダ ナエ。云々。」などと、「ナエ」のよく用いられることを教示してくださる。佐藤喜代治氏は、「福島県方言の敬語法」（『文化』第二十二巻第四号 昭和33年7月）で、

ただし、猪苗代町では中通り風の「ナエ」をも10人中二人が使っていた。と記述してられる。『福島県方言辞典』には、「ナエ〔助〕ね。○今日わ寒いなえ 中南北浜」との記事が見える。

「ヤエ」複合形もあるのか。『福島県方言辞典』には「ソーヤエ〔句〕 さうですよ ○そーやえあの子わ何時でも泣くんだ 会」とある。

ほかに、「ゾエ」が広く見わたされ、また、「カエ」も広く見られる。

「ワエ」もある。

「エ」の出るばあい、多少とも、もの言いがやわらかになるう。

宮城県下にも、単純に「よ」と言いかえられる「エ」、問いの「エ」などがおこなわれている。よびかけの「エ」もある。

○ナツテ ジョーヅ〔ü〕ナンダ エー。

なんてじょうずなんだろうね（よ）。

は、石巻弁での一例である。

本県下の、「エ」に関する複合形の文末詞には、県南（伊具郡刈田郡など）の「ナエ」（「ナエン」も）があり、「アン ナエン。」（あのね。）などと言われ

ている。菊沢季生氏は、「宮城県方言文法の一斑」(『国語研究』第二巻第四号昭和9年4月)で、

間投助詞の「な」「ね」等には接尾辞レを附して言ふ事が往々ある。

アンナレ あのネ

ソシタラバネレ さうしたらネ

これを、伊具郡角田町附近ではナエといひ、そのエが鼻音化してゐるから、ナエンとでも表はすべき発音をしてゐるのは、このレの一転したものかとも思はれる。

と述べていられる。「レ」起源考はいかがなものであろうか。

ほかに、「ゾエ」複合形があり、「カエ」複合形がある。

山形県下では、「よ」と言いかえうる「エ」が、つぎのようにおこなわれている。

有った事^{ごん}だが、無え事だったが、トント昔の話コだエ。

(「小僧と小餅」という話しの終文である。)

これは、佐藤義則氏の『小国郷のトント昔コ』(昭和41年2月 自家版)に見えるものである。『山形県方言集』にも、「らつちや」(られた(受身))の例として、

おれちや任せらつちやえ。(僕に任せられたよ。)

というのがあげられている。置賜方面のことばであるという。

齋藤義七郎氏の『村山方言会話集』に見える、

母「スズコ ナンボマデ カジエルエ？」

鈴子 いくつまで かぞへられる？

などは、「エ」が「可能の意をあらはす」。「エ」文末詞はくまれない。(齋藤氏は、「動詞の終止形に『エ』を附すと可能の意をあらはす」と説かれる。)

県下に問いの「エ」もある。上の『小国郷のトント昔コ』に見られる一例は、「オガタ『何、求めて来申したえ』って聞くから、」である。

つぎに、『山形県方言集』には、「おれこど、しねさげ、かんしえ。(僕今度しないから御免なさいね。)」というのがある。ここには、願望の「エ」が見られるかのようでもあるが、「かんしえ」は「kanshe」であるという。

県下の「ナエ」「ヤエ」は、「ナイ」「ヤイ」に近いものか。『方言絵はぎ山形ことば』に、「ハズエツダモノエマ スコス マゲロヤエ(今日初市 少し安くしなさい)」とある「ヤエ」も、「ヤイ」的なものではないか。

『小国郡のトント昔コ』に見える、

「もォすもォす、婆様。今、来たぞえ」って云うど、
との言いかたは、「ゾエ」複合形をとらえしめるものか。

『山形県方言集』には、「今度行くざえ。(今度行きますよ。)」などの言いかたが見えるが、この「ざえ」は「ザイ」に近いものか。同書には、「おかちやん洗濯物はしつたづあえ。(お母さん洗濯物は乾きましたよ。 最上 村上)」などともある。ここの「え」は、「エ」文末詞とされるものなのか。よくはわからない。斎藤義七郎氏の「宮城・山形」(『方言学講座』第2巻)には、山形県東根市の「コロンダテスシャネ・ザエ(ころんでも知らないぞ)」の言いかたが見える。氏は、「ザエ」を、共通語の「ぞ」に対応するものと見ていられる。

『山形県方言集』に見える、「机出来たが、こんでいゝかへ。(机出来ましたか、これでいゝですか。)

村山」などでは、「カエ」複合形がとらえられようか。——「ガエ」もある。

秋田県下には、単純に「よ」と言いかえうる「エ」がよくおこなわれている。

『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

m………… ソシテ モチ ダシタリナンダ シタモンデアッタエ
 そうして もちを 出したりなど したものだ²⁾ったよ。

2)「くれたり」の意。

mハエ エタエー

はい、 いるよ。

などである。

県下の昔話の記録などにも、この種の「エ」がよく見える。『秋田方言』には、鹿角郡のことは「君のペンを借りたえ。」が見えている。

かつて私は、船川港で、「カンボ^ー エー。」（おおきにね。）とのあいさつことばを教示された。（ほとんど言われなくなっているものようであった。）これにも、はっきりとした「エ」文末詞が見える。

『秋田方言』の「おれだて読めるってえ^{△△}（己だつて読めるってさ）」も、「エ」文末詞を認めしめるものか。「え」の下の、小さな「あ」は、文末訴え「ア」音とされるものであろう。同書には、「軽く言ひはなす意味の場合には、『せあ』『えす』『えあ』となる。」との説明が見える。

秋田市内のことは、

○サーサー，アガ^ーミ〔i〕シャイ エー。

さあさあ，お上がりなさいよ。

は、命令（勸奨）表現のばあいである。

岩手県下にも、まず、「よ」の「エ」が見られる。「どこへいくの？」と問われて、「山へよ。」と答える時は、「ヤマサ エー。」と言われている。「エー」が、「イエー」のこともあるのか。『岩手方言の語彙』には、「旧伊達領」の、「アスタ・エ さようなら」などが見える。「アバ エ。」のことは、言うまでもない。

『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、

fアデア ナガッタンダモノエー

あてが なかったんですものねえ。

というのがある。「モノエー」の複合形が、「ものねえ」と言いかえられている。

つぎに、問いの「エ」が広くに見られる。

○ナ^ー〔i〕ダ エー。

何だえ？

は、花巻市での一例である。

『岩手県釜石町方言誌』に見られる、「花ッ^エコ^エア 一寸^エコー」の「^エア」は、単純よびかけの「エ」を見せていよう。（「ア」は文末訴え「ア」音と見られる。）

『平泉方言の研究』の「^えあな^えあぶね^えあごとす^えな^ええあ（そんな危いことをするなよ）」は、命令表現のばあいの「^えあ」である。

盛岡市南方の紫波郡などで聞かれることば、

○オ^エド^エサン ド^エゴ^エサ イ^エッタ ^エン。

お父さんどこへ行ったね？

などでは、「エン」が注意される。人は、上の文表現を上品であるとしている。「エ」も、「エン」となると、しぜんに、やさしさ（→ていねいさ）を増してするのであろう。人間が言語音を利用するさまは、まことに妙と言うべきである。「エン」は『盛岡方言』第一輯（方言絵はがき）のうちにも見ることができる。

「エ」に関する複合形の文末詞には、「サエ」「カエ（ガエ）」などが見られる。

青森県地方の、おもに「南部」には、「エ」がさかんである。此島正年氏は、「青森」（『方言の旅』）で、

言葉の終りに軽くエをつけるのは、ていねいな気持をあらわします。このエは津軽では用いません。

と言われる。工藤祐氏の「買物言葉」（『民間伝承』第十九卷第九号）にも、

南部地方の助詞「エ」は丁寧助詞で、疑問文にも肯定文にも用いる。

とある。諸文献に、「南部」地方の「エ」の指摘が見られる。能田多代子氏の『青森県五戸語彙』『五戸の方言』に見える記述は、とくに注目される。『五戸の方言』には、

此「エ」が語尾に添ふ場合は敬語となつて目上に用ゐる親愛を含む。

(→遊びに来たエ（遊びに来ましたよ）

(二)行くべアエ (行くでせうよ)

因みに、目下に対する時は次の如く、ネ又ヨを用ゐて同じく親愛を含む。

(一)遊びに来たネ (遊びに来たよ)

(二)行くべアヨ (行くだらうよ)

とある。

「南部」地方にあつても、一つには、「よ」と言いかえうる「エ」のおこなわれることがいちじるしかろうか。ついで、問いの表現のばあいの「エ」がいちじるしかろう。私が「南部」の南方で聞き得た例は、

○アネダッタ ズァエー。

姉だったそうですよ。

○ツ[ü]チ[i]ロージャ ナク[ü] エー。

いや、土牢じゃなくてよ。(説明)

○ダー エー。

だれ?

○ドゴサ イグ エー。

どこへ“おいでになりますか”。

(「イグ エー」は“うんと目上”への言いかた。)

などである。『野辺方言集』には、「それ何んたエ、これ蜜柑こたエ。」というのが見える。

津軽地方にも、「エ」があるのか。滝野沢栄一氏の「津軽方言の語法」(『方言』第五卷第二号)には、「ノミナガラ、ユックリ、ハナスコスベスエ。(飲みながら、ゆつくり、話ませう。)」というのが見える。『青森県方言集』には、「これアわれのはこにはですエ。(コレハ私ノ箱庭デス)」などというのが見えるが、津軽のものであるのか、「南部」のものであるのか、判然としない。私自身の津軽調査経験では、「エ」が、あまり聞かれていない。

『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条には、

fコンピノ エネオエ

この 稲をね。

というの見える。「エ」が「ね」と言いかえられている。

「南部」地方に、命令表現のばあいの「エ」もあるか。「ネマラサー。」は、「すわりなさい。」で、「ネマラサー エー。」は、よりよい言いかたであるという。また、

○オセーデ ケサー エー。

教えてくださいね。

との言いかたもある。土地の人は、“目上に「エー」を言う。おもに女が言う。男も言うことがある。”と説明してくれた。

単純よびかけの「エ」もあるらしい。能田多代子氏の「三戸郡五戸町昔話」(『昔話研究』第二巻第十二号 昭和12年12月)には、「瓜姫子え、瓜姫子え、戸と開けて臭^はろ」というの見える。

複合形の文末詞「カエ(ガエ)」が、「南部」地方に見られる。

○イマシ[i]ダ ガエー。

いらっしゃいますか。

などとある。『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条には、

mオナゴベツダガエ

女の子のですか。

などが見える。

おなじく「三戸郡五戸町」の条に、

fヤー モッタワケモ ネータッテ (笑) (笑) モッタ
 いや (金を)持ったわけでも ないが (m) (金を)

デモ ネーノエ

持ったのでも ないさ。

というの見える。——「ノエ」がある。

方言書に、「サエ」とあるのは、「サイ」に近いものではなからうか。(p.

151 「ヤエ」—「ヤイ」 「ざえ」—「ザイ」)

『青森県方言集』には、「今年ア田がいく出来た^はで、晩ねは其のお祝の花火コァあがるづエ。(今年ハ田ガヨク出来タノデ晩ニハソノオ祝ノ花火ガ上ルサウデス)」との言いかたが見える。「づエ」という複合形の文末詞が認められよう。「づ」は「と言う」にあたるものであろう。) 私が、「南部」地方で聞いた例には、

○アルッ ^{ズァエー}。

“あるそうです。”

などというのがある。これについても、土地人の、“男女とも、目上の人に言う時、「エ」をつける。”という説明があった。

「南部」地方の「エ」の用法には、別して注目すべきものがある。

十 北海道地方の「エ」ほか

『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

fアー ソレー オドー イグカラ ホレ ワスレデデ イカ
ああ あんた 行くんなら ほら 忘れものがないように 行か
ナェバネーエ
なければだめだよ。

とある。——「だめだよ」との言いかえが見られる。おなじく第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

fヤー マ ダエズニ シテ アノー ソダデデケラッシャーエ
いや まあ 大事に して、 あのう 育ててください。

とあり、命令(勸奨)表現のばあいの「エ」が見られる。おなじく第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条にも、

fアーアー ジッパリ トッテキタエー
ああ たくさん とってきなさい、

というのが見えて、「きなさい」とされているものが、「キタエー」とある。

おなじく第1巻の「美唄市西美唄山形」の条には、

fアー ソーガエー

ああ そうかい。

というのがあり、「かエ」複合形が見える。

十一 おわりに

以上、全国にわたって観察してきたが、「エ」の分布は、「イ」のよりも多そうである。ナ行音文末詞のばあいにも、「ニ」はごくすくなくて、「ネ」は多かった。しゅせん、訴え音は、母音効果によることが多く、[i]音のばあいは、しぜん、その勢威が、つよくはなり得ていないようである。

分布上、「エ」が、関西系のものなどとは言えないことが、あらためて注意される。近畿地方に「エ」がよく生きてはいるものの、西の九州地方にもこれがあり、国の東半地域にもまた、「エ」が、かなり見いだされる。やはり、「エ」も、全国的に自由におこり得たものであろう。いわば、ごく感声的に、これが発出されたものと思われる。

もっとも、東北地方の「エ」は、ときに、「イ」と区別しにくくもある。

「エ」と「イ」とでは、品位・効果がかなりよく似ているのではないか。「エ」のばあい、総じては、これが中等品位の表現をかもしているようである。青森県「南部」地方の「エ」は特別である。

京都ことばの「ソードス ^{エー}。」(そうですわよ。)などの言いかたと、東京ことばの「^エダレダ エ。」(だれ?)などの言いかたとをくらべてみる時、「エ」が、おなじくやわらかみを出しているものではあっても、その存立の次元はちがうことがよくわかる。どのような文末詞のばあいにも、その棲息、存立と活動とを精細に見ていけば、ものがみな、地域的に生きていることが知られる。

それにしても、「エ」には、やさしみがあがり、したがって、これが、しばしば女性系のことばともなっている。ひとたび、広母音の「ヨ」ともなると、こ

れの世界は広くて、用法もまた、はなはだ広汎である。

存立が特定のであり、用法のはばがせまければ、当然のこと、その文末詞に関する複合形も、存立することがすくない。

第五節 「イ」の属

一 はじめに

「イ」文末詞をとりあげる。ただし、これは、つねに安定的にとりあげうるものではない。

「ナ」に対する「ナイ」、 「ノ」に対する「ノイ」、 「ネ」に対する「ネイ」などは、私は、「ナイ」などの形を一形（完結形）と見て、「イ」を分別することはしなかった。「サ」に対する「サイ」、 「ザ」に対する「ザイ」、 「ゾ」に対する「ゾイ」や、「ヤ」に対する「ヤイ」、 「ヨ」に対する「ヨイ」なども、それぞれ「〜イ」形を完結体としてとりあつかい、「イ」を分別することはしない。たとえば、信州方言の、「この電車は、南に行きゃあしないかねえ。」の問いに対する答え、

○ミナミ イク サエイ。

南へ行くさ。

などにしても、「サエイ」は、「サ」によく合致するので、私どもは、「サエイ」を一体のものとしてとりあげざるを得ない。「ヤイ」にしても、『全国方言資料』第2巻の「群馬県勢多郡大胡町」の条に見える、

fアー ソノ ホーガ マー イーヤエネー

ええ、その ほうが まあ いいですよ。

では、「ヤイ」相当の「ヤエ」が、一体のものと思われる。（「ゾイ」に関しては、「ゾヨ」からの「ゾイ」もあるとすると、そのばあいには、「イ」が分別されることにもなるが、「ゾイ」形が「ゾン」形ともよく並行しているのなどでは、

「ゾ」の変形としての「ゾイ」が認められやすい。) このように見てくると、私どもは、上記諸事実のばあい、「イ」の安定的なもの、すなわち「イ」文末詞をとりたてることができない。

「いい カイ?」「そりゃあ 何だい?」などの〔i〕形にしても、とりはなしうる安定形だとは思われない。ただし、人は、「カイ」の「イ」や「何だい」の「い」を、終助詞などともしてきたであろうか。しかしながら、信州方言について、

○ヂヂ、オチャ ドーダイ。

じいさん、お茶はどうだい。(すすめる。)

○ネズミノ ノミダン。

ねずみののみだ。

などを見るのに、「ダイ」は、まさに「ダン」に対応している。「ダン」は、「だ」相当のものとして受けとることができよう。とすると、「ダイ」もまた、これを一体的のものとして受けとるのが至当とされる。

要するに、現場に存立する活動形態に注目するかぎりには、「ナイ」や「カイ」などでは、この形態の、現場での一体者としての存立が明白である。私は、共時論的処置の徹底を重んじて、「ナイ」などを、「ナン」などに比定もしつつ、一体者・一完結形としてとりあげてきた。

ところで、「何々です チーイ。」とか、「何々です ノイー。」などとあると、これらの表現の現場では、「イ」の訴えの効果が明らかである。そういう点では、「ナイ」や「ノイ」の現場形の中に、「イ」文末詞的なものが認められるともし得よう。

もし、文末詞の「ヨ」が「イ」に転じたばあいには、「そうです イ。」などの「イ」が、語としては、完全な文末詞と見られる。(——こういうばあいは、音調のいかんにかかわりなく、「イ」が文末詞である。)

「わかったか?」の問いが、「わかった イー。」と言われたとする。こうい

う独自の「イ」もまた、語としての「イ」文末詞をとらえしめる。

「あるか?」とたずねられて、「アル　ワイ。」と答えることがある。この「アル　ワイ。」が、方言によっては、「アラー。」とも「アライ。」とも言われている。「アライ。」を言う土地には、「そうですよ。」の意の「ソーデスライ。」などもある。このように「イ」が見えるばあい、たとえば「ソーデスライ。」では、「ソーデスラ」までが「そうです」に該当するので、「イ」が分離傾向にあるとも受けとられる。こう見たばあいは、「イ」が、文末詞になっているとされる。(「語」次元での認識である。) もっとも、この「イ」は、上の「わかった　イー。」などのばあいの「イ」とはちがう。上のは、「イ」によって訴えようとするのが積極的であるが、「アライ。」「ソーデスライ。」などのばあいは、「イ」がそえものの的である。

もし、「イ」の安定的存在の様相が明らかなばあいは、文表現において、その「イ」の現実を、特定文末部と見てよく、したがってそこでは、「イ」文末詞を認定することができる。

臨時的に、「何々だ　イー。」などの言いかたが成立したとする。その「イ」には、なにがしかの訴え効果があり、したがってまた、なにがしかの待遇効果がある。もし、人が、このような効果の経験を記憶すると、やがてその人は、つぎの言語表現の中でも、自覚的無自覚的に、「何々だ　イー。」などの発言をしよう。そのような経験者が複数化すると、「イー」表現法が習慣化する。かくては、文末詞「イ」が沈澱することにもなろう。臨時的な「イ」文末詞から習慣上の「イ」文末詞へ、ということが考えられる。

「イ」は、「ン」とともに、文末訴え音的なものと見られるでもあろう。

しかし、「ン」には、どのような意味においても、その成長の方向が、ごく限られているように思われる。「イ」は、その点がちがおう。このため、「イ」には、文末詞としての安定のおもむきが見られることになっているのか。この点、「イ」には、「エ」に近いものがある。

かくして、「イ」は、「エ」とともに、ヤ行音文末詞の系列におかれるのである。

文末詞とされる「イ」が、[ji]と発音されることはまれであろう。しかし、今日のヤ行の「イ」は、ふつうに[i]と発音されている。それゆえ、今、「イ」をヤ行音文末詞の列に加えることには、さしつかえがなからう。「イ」や「エ」が、「ヤ」や「ヨ」に類する、感声的な単純文末詞であることを思えば、「イ」をもこめてのヤ行音文末詞という概括は、合理的でもあろうかと考えられる。

[i]の母音は、文末にたつて文末詞の役わりを演じるのには、劣勢すぎる、との考えかたがある。なるほど、そうでもあろう。ナ行音文末詞のばあいにも、「ニ」文末詞がはなはだしく劣勢である。

ところで、また考えてみるのに、動詞命令形の用法に、「起キー。」「見ー。」などというのがある。——これらの形が、直接に命令表現にたっている。命令表現の、つよいきみのものが、ここにありはしないか。とすると、ここには、[i]音効果の、特別につよいものがあるとも見られる。転じては、「イ」が文末詞にたつたとしても、そこには、それなりのつよい音効果が見られることにもなるのか。

二 南島地方の「イ」ほか

私がはじめて南島方言の「イ」に接したのは、旧時、与論島のことばを鹿児島市内で聞いた時のことである。ここでは、「ねている？」との問いことばが、

○=ブトッイ、イー。

とされている。「さむくない？」の問いが、

○ピークン ネー [ji:]。

とされている。当時、私は、この[ji:]について、“たしかに漸強摩擦音”

と注記している。“古典的なヤ行音文末詞があったのだ。”とも。与論島に、問いのよびかけの効果の「イ [ji:]」文末詞が見いだされたらしいのである。この調査の時、奄美諸島の諸方言を聴取したのであったが、[ji:] 音の文末詞は、ほかでは聞かれなかった。のみか、「イ」文末詞があまり聞かれなかった。与論島の、ほかの奄美諸島に異なる地位が、この時も考えられたことである。

与論島方言に関しては、今日、町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞——資料報告——」（『方言研究年報』統一 昭和51年12月）を見ることができる。氏は、「ヤ行音文末詞類」の [ji:] をあげていられ、

○çifomja: na: sanneb ji:. (青男→少女)

<広美(人名)は、もう3年生ね?>

などの例を示していられる。やはり [ji:] が、問いの効果に役だっているのが注目される。

町氏の発表には、なお、[ju:] の指摘がある。

○nu: ju:. (少男→青男)

<何 ユー。>

なんね。

などとある。「ユ」形はまた、注意すべきものである。([jo:] もまた町氏にとりあげられている。)

奄美諸島では、ほかに、奄美大島古仁屋の方言から、

○ナンヤ ダーチ イキユン イン。

あんたはどこへ行くのかね。

○ヌーガ イーン。

どうしたんだ?

などを聞きとり得ている。これらには、「イン」形が見られる。——「イ」がしげんに「イン」になっているのであろうか。

ひるがえって、沖縄本島を見るのに、高橋恵子氏の教示によれば、コザ市方面のことばには、

○ウヌ ヌイグルミヤ インイ クマイ

?unu nuigurumija ?ini kumai

この ぬいぐるみは 犬か 熊か。

のような言いかたがあるという。「クマイ」などの言いかたは——ひとまとめの表記にはなっているが、「イ」を、問いかけの文末詞と見ることができるか。

生塩睦子氏の「沖縄伊江島方言の文末表現」(『方言研究叢書』第5巻)には、「イ」についての、「相手に肯否の判定を要求する問いかけの表現に用いられる。」との記述が見え、

169 アヌ ウブ^ショー シン^シューシチ ヌ クワ イ。

<あの おじいさんは 四十七 の 子 か?>

との例があげられている。このあとに、「体言には文例169のように『イ』がそのまま用いられるが、用言に『イ』が後接すると前接の音と融合する。」との説明が見える。前接の音と融合したものは問題にならないけれども、上の「クワ イ」とあるものは、生塩氏もわかち書きにしていられるとおおり、「イ」が、独立のものとも見られる。しかもこれが、問いの表現をささえていることは、高橋氏のばあいと同様であり、また、与論島のばあいと同様である。

生塩氏の論文には、なお、

○ワ^ー ハカ^ー イイ^ー。

<私が 書こう ね。>

のような文例も見られ、「このように『イイー』が付加されると、自分がしようとする行動について相手の同意をえようとするいいかたになる。」とある。これよりさらに、早く氏の教示せられた実例にも、

○?it'fa ji:。(行きましょね。自分の意志を相手に納得させる。)

などというのがある。ここには、ヤ行音とするのにふさわしい[ji]が見られる。しかも、この種のものばあいは、端的な問尋法でない。

いずれにしても、沖縄本島方面にも、問題の「イ」のあることが認められる。『沖縄語辞典』には、「?ii ①(感)」が見え、「はい。そう。ああ。目下に対し

て、承諾・同意を表わし、肯定する語。」などの説明が見える。感動詞とされる「?ii」のあることからすると、文末訴えかけ用の「イ」があってもよさそうに思われるが、どうであろうか。南島方言に、多く問いの「イ」（あるいは「イン」）の見られることには、一つの道理が感得される。人は、自然発言のなかで、問いの訴えには、しぜんに〔i〕音などを発したのではないか。（「イ」音の純粹感声音であることが思われる。——したがってこれは、ヤ行音文末詞に撰してもよいわけであろう。）

高橋俊三氏は、与那国島の比川方言について、かつて、「イ」を教示せられたことがある。しかし、その例文は、

○[k'at:jī hānu nai] <少・女→幼・女>

お菓子を食べないか。

などであった。

三 九州地方の「イ」ほか

九州地方のほぼ全域に、問題視すべき「イ」が認められる。ただし、これの処置は容易でない。

まず、鹿児島県地方には、「オッカ^ン ハヨ^ハ ゴハン^ヌ タモロ^イ。」（母ちゃん早くごはんをたべよう。〈さそい〉）の「タモロイ」、あるいは、「イット^ヂャイ。」（行くんだ。〈先方に教える。〉）の「〜ヂャイ」など、文表現の末尾に、付加的な「イ」が見られる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条にも、

m………… ソーラ ウレシモンジャッタ^イ

それは うれしいものだったよ。

などとある。——「〜タイ」の「イ」が注意される。さそいの表現のばあいにかぎらず、さまざまのばあいに、付加的な「イ」があらわれる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

*m*オーヨ ヤッパイナー (*f* オーヨン) デケンジャッタカライ
 そうよ やっぱりね。 (*f* ええ。) でできなかったからね、
 というのも見える。瀬戸口俊治氏教示の、薩摩半島東南部の例には、
 ○イマ ヨガ アゲダ 下ゴイ。

(わたしの家は、今夜があけたんですよ。)

○マイットッ マッタイ。

しばらく待て。 <青以上 やや下>

というのがある。文末詞に関心の深い瀬戸口氏も、これらでは、「イ」を分立させていない。

ところで、村林孫四郎氏は、『鹿児島語法』(郷土研究社 昭和4年9月)で、「ヒガ、クルッデ、モウカエンソヤ」などに関して、

この場合の「ヤ」は、「イコイ」(行かうよ)の如く、「イ」となることあり。

と説いていられる。氏によれば、「イ」は「ヤ」である。であれば、「イ」も、独立の文末詞と見られることになるろう。

県下の「行こイ」などを見るのに、こういうばあいの「イ」が、たとえば、「暑い ナー。」などのばあいの「ナー」に相当するほどの、積極的なよびかけことばであるようには、思いかねるふしがある。

ところで、薩摩半島南端、枕崎での言いかた、

○オッカサーン ハヨ ゴハンヌ タモイモソー イ。

お母さん、早くごはんをたべましょうよ。

などとなると、「タモイモソイ」の「イ」が、ただに付加的ではなくて、はっきりと分立したものであるので、このばあいは、特定文末部「イ」が認められ、したがって、「イ」文末詞が想定されることになる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」の条の、

*m*マタ アオーイ

また 会おうよ。

f マタ アイモソーイ

また お会いしましょうよ。

などにしても、ともに、「イ」文末詞を認めしめやすいもののようである。「…… 行コー イ。」のような、長呼を受けての「イ」存立は、もはや、文末詞を認めしめるものとしてよいか。ただ、一方に、短呼のあとに頻発する「イ」があるので、「イ」文末詞の確定が容易でない。

この点の困窮を一洗して、「イ」は、上来のすべてのばあいには、もはや文末詞として認める、とするのも一案であろう。

長呼の言いかたを受けたばあいだけに「イ」文末詞を認めることにすれば、他のばあいのものは、「文末訴えイ音」とされる。

宮崎県下では、岩本実氏の「日向の高千穂方言」に、

五ヶ瀬町三ヶ所では、「ダ」の外に「イ」も使い、「行コイ」「起キロイ」「食オイ」のように用いられている。

との記事が見られる。「行コイ」式の言いかたは、本県下にも、どのようにか、見られるものであろう。

熊本県下では、「行コイ」式の言いかたがさかんである。阿蘇山方面の例をとるならば、「ノ^バロイ。」(登ろうよ。)^イ「^アイ。」(帰ろうよ。)などがある。

ところで、天草での、

○ウ^ミサン オ^ヨギギ^ャ イ^コー イ。

海に泳ぎに行こうよ。

○キ^シャニ ノ^ロー イ。

汽車に乗ろうよ。

などとなると、「イ」が、けっして付加的ではない。「メ^シ ^コー イ。」(めしを食おうよ。)にしても同様である。これらについて、私どもは、「イ」文末詞を認めることができよう。「行コー イ」式の言いかたは、天草ならずとも、

肥後の南北の「行コイ」式の言いかたのおこなわれる所に、ならび存立している。「どうどうしようよ。」は、「どうどうシュー イ。」ともある。

今はともかく、長呼の言いかたの下にきている「イ」に、文末詞「イ」を認めることにしよう。「遊^{アス}ぼい。」や、「シューイ。」(しようよ。)のばあいの「イ」は、文末訴え音と見たい。

とはいいながら、昭和二十三年に私が天草方面の調査にしたがった時は、「シューイ。」の「イ」について、私自身、「『ヨ』とおなじで、『ヨ』よりも相手の気をひく感じがつよい。」と観察している。——この時、「オヨ^ゴーイ。」(泳ごうよ。)なども聴録している。また、「オキ^ロイ。」(起きろ。)なども聴録している。これらの「イ」にひかれつつ、「シューイ」の「イ」を観察したのだったかもしれない。

鹿児島県下のばあいと熊本県下のばあいとで、「行コイ」式のもの対「行コーイ」式のもの、二態の存立状況には、かわりがない。この連関状況のうえにあって、双方とも、「行コイ」式のものばあいと「行コーイ」式のものばあいとは、「イ」の待遇効果の相違が認められるのが注目される。「行コイ」式のばあいは、これにさほど深みのある待遇効果はくみとることができず、「行コーイ」式のものには、「イ」に、さしてわるくはない待遇品位がくみとられるようである。「文末訴え音」の待遇効果は、消極ともいえようか。長呼の言いかたのあとに来る「イ」の効果は、なにほどかの積極性をくみとらせるものである。(話者の意識を衝いてみれば、——あるいは、話者の意図を糺してみれば、「行コイ」などのばあいは、本人に、言うべきことがあまりないであろう。「行コーイ」などのばあいについては、本人に、なにほどかの述懐があるはずである。)

さて、本県下に、たとえば天草下島西岸の、

○スندا^ダ イヤー。

すんだか？

○ドガン^ン シタ^タ イヤー。

どうしたんだ？

などの言いかたがある。また、斎藤俊三氏『熊本県南部方言考』の「モドラッ
タイヤ（戻られたのか）」などがある。また、昔話の「ちよる〜すんのはな
んぢやいなあ」（坂本久之進氏「葦北郡昔話」『昔話研究』第七号 三元社
昭和10年11月）などというのがある。長呼ではない「すんだい」などの言いか
たであっても、「イ」のもとに文末詞「ヤ」がくるとなると、文末訴え音の
「イ」も、「ヤ」とともに、まとめてとりたてられることになる。「イ」に関す
る「イヤ」「イナ」などの複合形が認められることになる。

長崎県下では、まず島原半島に、「イツテミューイ（行つて見ようよ）」「シ
ューイ（しましようよ）」などの言いかたが見られる。（『島原半島方言集』）「行
コイ」式の言いかたも聞かれて、かつ、長呼の言いかたのあとにたつ「イ」が
見られる。

『肥前千々石町方言誌』には、「イテミューイ 行ってみよう、」が見られ、
「イコイ 行きませう、」が見られる。

私が五島列島で聞いたものには、

○ワタイノ ユー コツガ イッチョ ホンナ コト イ。

私の言うことがいちばんほんとうよ。 （老男→藤原）

などがある。「コト」の言いかたのあとにきている「イ」は、文末詞と見なく
てはなるまい。

西彼杵半島で聞いたものには、「メシュ クォー イ。」「つなとびを シュ
ー（しよう） イ。」などがある。これらのばあいにも、「イ」を特立させなく
てはならないか。

『続老岐島方言集』には、「遊ボーイ（遊ばうぢやないか）」が見え、「イ」
についての、

助詞。「ヤ」に同じ。語尾に附し対者の同意を求むるに使用す。

との説明が見える。

佐賀県下では、米倉利昭氏教示の、神埼郡下での例、

○イ^ーコ^ー イ。ヨ^ーカ^ーヤ^ーン ネ^ー。

行こう。いいでしょう？ (高校生女→同女)

などがある。唐津市の城外ことばでは、

○オ^ーッカ^ーチャ^ーン ハ^ーヨ^ーー メ^ーシ^ーバ タ^ービ^ーユ^ーイ。

などの言いかたがなされており、長呼の言いかたは見られない。「たべよう」にまずは該当する「タビユ」の言いかたのなされたあとの「イ」ゆえ、「よ」相当の文末詞と、これを見ることもできるかと思われるけれども、九州方言の中で、一方に「タビユ^ー イ」式の言いかたがあるのからすれば、「タビユ^ーイ」式のは、本格的な「イ」文末詞を認めるのには、若干の問題があるものとされる。

岡野信子氏教示の唐津市神集島のものは「ド^ーコ^ーダ^ーッ^ータイ。カ^ージ^ーワ。」である。

県下に、「～タイ」「～ジャイ」などが見られるが、やはりこれらの「イ」は、文末訴え音的なものと解してよかろうか。ところで、『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条に見える、

*m*オナゴシガ キツカッタイノー マツリヤ チュットー

女の人たちは 御苦労だったねえ、 おまつりだ というと。

では、「イノー」複合形文末詞が認められることになるのか。

福岡県下では、加来敬一氏の「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号)によるのに、

イコイ——筑後区浮羽、八女、三池、山門、柳川

とある。筑後内には、「イ^ーコ^ー イ。」(行こうよ。)のような言いかたもあるのか。

岡野信子氏は、小倉市内の、

○ジュ^ーミ^ーョ^ーノ アルスジャ^ーロー^ーイ ナ。

寿命があるんでしょよ。

という実例をとらえてもいられる。「〜ジャローイ」が見られる。氏はまた、関門沖の島についても、「ユーイ ナ。」(言うよね。)のような言いかたが認められるとしていられる。

大分県下は、「イコイ」式のものも、おこなわれることが比較的すくないのかとも思われるが、どうであろうか。国東半島では、

○ヤスママジョーイ。

やすみましょよ。(老男→藤原)

などの言いかたを聞いている。県南にも同種事例がある。

九州域に、「よ」と言いかえる「イ」が、およそ一般的である。ただそのあらわれかたが、多くは、「行コイ」などと、付加的従属的なので、これらに執るかぎりには、文末詞「イ」をただちに認めることが、容易ではない。

九州地方では、「ナ」の「ナイ」、「ノ」の「ノイ」、あるいは、「ゾイ」「ザイ」「サイ」などがよくおこなわれているので、そういう習慣下では、いきおい、「〜タ」の言いかたも、「〜タイ」になりやすくもあったか。「〜ジャ」の言いかたも、「〜ジャイ」になりやすくもあったか。

「イ」が付加的従属的なばあい、これが「文末訴えイ音」とされるが、等しく文末訴え音であるにしても、これと「ン」とは、訴え効果がちがおう。そのちがいがあるだけ、「イ」は、文末詞的なものになっているとも考えられなくはない。

九州での「ナーイ」や「ノーイ」などのばあい、ことによっては、「ナ」や「ノ」に、別にできている「イ」が複合したということもあったか。——もとより、一想像である。

けっきょく、私は、九州方言域に関しては、つぎの整理をする。

「イコーイ」などの、長呼習慣のもとにたっている「イ」は、その、文

末部としての特定性を認めて、これに、「イ」文末詞を認定する。

「イナ」「イノ」「イヤ」などは、複合形文末詞として認めざるを得ない。付加的な「イ」や不安定な「イ」も、明確な文末詞「ナ」や「ヤ」などと結合したものは、その一体者が、独自の複合形文末詞と見られることになる。

四 中国地方の「イ」ほか

第一に、山口県下では、「～ですイ」「～ますイ」式の言いかたのおこなわれることが、はなはださかんである。おそらくは、全国的に見ても、山口県下などは、この「イ」音を見せることの、ぬきんでさかんな地方ではなからうか。

中国五県のうち、他県下になると、山口県下とはくらべものにならないほどに、「～ですイ」式の言いかたが劣勢である。県下によって差異の大きいことは、下述のとおりである。

なぜ、このように差等があるのだろうか。にわかには、その動因を指摘することができない。が、いずれにしても、このように地域別に発音習慣の相違が見られることは、各地域が、それぞれの発音基底を有するからにちがいなからう。さてまた、地域的な発音基底の相違が、なぜそのように存在するかが問題になる。——比較的せまい地域に発音習慣の相違が見られもするのを、私どもは、方言の実態として、重視したい。

山口県下では、「～ですイ」「～ますイ」、「オサムー ゴザンスイ。」(おさむうござんす。)など、「イ」音尾の派生することが、機械的とも言いうるほどに、恒常的である。機械的付加の「イ」は、「文末訴えイ音」とすべきものであって、「イ」を文末詞にとりたてることはできかねる。——「オサムー ゴザンスイ。」は、「オサムー ゴザンス ー。」ほどのものでは、けっしてない。が、一方に、「～です イ。」などの「イ」文末詞化もある。もし、このような「イ」が、きわだって「イ」のように発言されたばあいには、これを特定

文末部と見ることが容易であり、したがってここに「イ」文末詞の内在を認めることが容易である。

なお、「イ」音尾の派生のばあいを補足するならば、上にするしたものほかに、「～タイ」「～ジャ(ヤ)イ」などがある。ところで、『山口県方言調査』には、「ウカガイマセンイ (あがりません)」などの記述も見える。「～マセン」を受けての「イ」は、文末詞を認めしめるか。「山口県豊浦郡豊北町大字阿川の方言表現法」(『梅光方言研究』第1号)には、

○コリヤー イケン イー。

これはいけなねえ (だめだよ)。

が見える。ここでも、発表者にしたがって、「イ」文末詞の存立を認めてよいか。私がかつて、長門北部の青海島で聞いたものには、

○コネー アメガ フッテ ミズガ デチャー、イキムシャ オラン イ。

“こんなに雨が降って水が出たら、魚はおらんよ。”〈アクセント欠〉がある。中川健次郎氏の『小串町覚え書』には、「そーい そーよ」が見える。

長呼の言いかたを受けて最後にたつ「イ」、『山口県柳井町方言集』の、「……、フネデイコーイ。」といったようなものばあいは、最後の「イ」を、特定文末部と見ることができるとしたい。したがって、この種のものには、「イ」文末詞の内在を認めたい。県下の全般にまた、この種の「イ」が、よく存立している。

○ソレナラ エカロー イ。

それならよかるうよ。

○キョーワ ヨー ゴザイマシヨー イ。

きょうはようございましょうよ。(物売りに対して)

は、長門西北部での例である。

○イコー イ。ノー。

行こうよ。ねえ。

は、周防東部での一例である。(荒巻大拙氏教示)「話ソー イ。」「ヤミョーイ。」など、長呼の言いかたのもとに、しぜんによく「イ」が用いられている。——とはいいいながら、しぜんによく、「イ」が胎生しているのでもあるか。

本県下では、長呼の言いかたのもとであるといなどを問わず、要するに、「イ」のおこなわれることがさかんであり、したがってまた、「どうどうし^タイノー。」(どうどうしたよ!)「アリ^マス イ^ネー。」などと、「〜 イノー」「〜 イナー」「〜 イネー」などを見せることがさかんである。九州方言でのぼあい同様、今は、「イノ」などを、「イ」に関する複合形の文末詞と見ていきたい。

○カケテ ヤ^ロ イナ。

掛けてやろうよ。

は、長門北部での「イナ」例である。長門西北部の、「ゴ^ハン タ^ベル イ^テー。」は、けっきょくは、「ごはんとべたいなあ。」の意になるものであろうか。

複合形のものに、国安功氏教示の周防平郡島例、

○ワシ^アー カ^スイ ヨ。

おれのを貸すよ。〈中男→老女〉

もある。——氏は、「カ^スイ ヨ」と表記してられる。「イ」が、習慣的機械的につかわれていることを考慮してられるのであろう。

さきの、『梅光方言研究』第1号の論文の中には、

○ソリ^ャー ソ^レ イヤ。

そりゃそうだよ。〈浦 老男→老女〉

というのが見える。(同論文では、「イノ」「イナ」「イネ」の分別表記も見られる。)

もし、「イノー」などのぼあい、「イ」が高音に発音されるようなことがあれば、その時は、いよいよもって、「イ^ノー」などの、文末の特定の話部であることが明らかである。

山口県下について、広島県安芸が、かなりよく「〜ですイ」「〜ますイ」式のものを見せる。——長門周防に接続するこの地域が、やはり同質の発音基底<音韻地盤>の地であるということか。（安芸島嶼部には、さしてのことがないようである。）

広島市域以西の地域が、比較的よく、「〜ですイ」「〜ガンスイ」「〜マシタイ」などと言っている。

○エー、私も ホリマシタイ。

ええ、私も掘りましたよ。（炭鉱へ行ってはたらいた女性の話し）

○コノタビノ ツエガ イチバン フトー ガンシタイ。

このたびの土砂くずれがいちばん大きかったですよ。 （老男——藤原）

○トキドキニ カワル モノジャイ。

ときどきにかわるものだよ。

は、安芸西辺での例である。『全国方言資料』第5巻の「広島県佐伯郡水内村」の条にも、

f………… サビシュー ナリマシタイ
さびしく なりましたよ。

とある。

上例いづれも、「イ」のところは、「よ」と言いあらわしうる。この点をとれば、「イ」は、文末詞と考えられるものようであるけれども、人々の発言の実際では、「イ」が、音尾と言いうるように、付加的機械的に発音されるので、通常文末詞のはたらきのばあいのような、明確な訴え力は、これに認めることができない。

『三原市大観』には、「いーいー（かえりましょう）」などの記事が見える。備後方面にも、問題の事象があるのか。それにしても、備後には、言うほどのことのないのが一般かと思われる。東の岡山県下に、問題事象の、一般的にはほとんど見られないありさまと、備後地方の状況とが、よくつながってい

るのであろう。

上の三原市の言いかたは、「イノ」複合形を認めしめる。安芸地方にも、「イナ」「イノ」などが認められる。「アリマス イノ。」(ありますよ。), これは、安芸西辺での一例である。

島根県下では、石見西部に「イ」音尾が認められるか。このことはまた、山口県下とのつながりを思わせしめるものである。

『島根県鹿足郡方言の調査研究』には、

イ(助)文句の終につける助詞。ワイの約であらう。アルイ(有るわい)などいふ。

とある。

本県下では、他に言うべきものを、今、私は持たない。

岡山県下の知友は、私に、「～ですイ」「～ますイ」式の言いかたのないことを強調する。そのようなのであろう。

ところで、私が、備中真鍋島で聞いたことばには、

○エー コト ヨイナー。

いいことですよねえ。(むすこさん夫婦にたいせつにされて)

というのがある。

また、美作西部の調査で聞き得たものにも、

○クサヤネノ イエガ アリマス イナー。

草屋根の家がありますよねえ。(初老男→藤原)

などというのがある。美作のこの状況は、鳥取県下の状況につながるものであろうか。

鳥取県下では、『鳥取県方言辞典 後編』の記事、「い [助詞]、問い、か何処行くい」、「追想々起する意を表わす語遣 面白かったい」などが見られる。

また、『^{因幡}方言輯録』には、「イとナを併せ用ふと希求の意を表示する。ヤを用ふ場合もある。」とあり、

見てイナ。(ヤ)来てイナ。(ヤ)為^シてイナ。(ヤ)走るイナ。(ヤ)行こイナ。
(ヤ)

との記述が見られる。『山陰方言概論』にも、「いやー遊ばいや(遊ばましようよ)」などとある。

「イ」音尾のおこなわれていることは、明らかであろう。私が、因幡中部で聞き得た例には、

○ナンニン^グライドマ キョーラレタ イナー。

(林道をつくる人が) いく人ぐらйдモは来ていられたかなあ。

などがある。

「イナ」などの複合形は認められるが、「イ」単独の文末詞様のものは、認められなさそうである。

五 四国地方の「イ」ほか

四国地方を見るのに、山口県下のような状況はなく、ほかに、「何々が あら イ。」「どうどう すら イ。」「そうですら イ。」などの言いかたが、よくおこなわれている。(「あら イ。」などが、「ワイ」複合のはてにできたものであることは、言うまでもない。)

○パーサンワ マダ イキトラ イ。

ばあさんはまだ生きてるよ。

は、香川県島嶼での一例である。——「イ」を、はなしてみる。

愛媛県下には「あら イ。」などがさかんである。

県南には、「ソーダスラ イ。」(そうですよ。)など、「デス」「ダス」の下で「ライ」と聞こえる言いかたがさかんである。こういう点では、「イ」あるいは「ライ」文末詞が受けとられそうでもある。——人は(土地人も)、「ライ」

という特定の因子をとらえたりしてはいないか。

『伊予松山方言集』には、「話してくれーィ。(話しておくれ)」などの記事が見える。このようなばあいの「イ」は、文末詞「イ」を認めしめるか。伊予弁には、「ハヨ セー ヤ。」(早くしろよ。)などの言いかたがある。が、この「セイ」は、「セー」に等しいものではなからうか。すなわち、これから「イ」をとりたてることは、できないように思われる。

「セー」が「セイ」とあるのに等しく、「〜デシヨー」も「〜デシヨイ」とあったりする。

○コチノ ヒトノ ホーガ ロードーガ アルノデシヨイ ナン。

こちらの人のほうが体力があるのでしょうね。 (老女→吉住治男氏)

は、吉住氏教示の、県中央部での「〜デシヨイ」例である。

高知県下には、「イ」について言うべきことがほとんどない。山陰出雲地方に問題がすくなかったのと、対応的であろうか。もとより、「ヅイ(ドイ)」や「カイ」や「ガイ」はある。それにまた、幡多郡のうちでは、「ハナシー シタリコイ スル。」(話しをしたりなんかする。)など、「シタリコ」とあってもよいところが、「シタリコイ」となったりもしている。このようなこともあるけれども、「〜デスイ」「〜マスイ」などの言いかたは、およそ、おこなわれていない。方言上の風土差というものであろう。

徳島県下となると、金沢治氏の『柵のうた』によるのに、県西の三好郡で、「ハヨ行コイナ。」「カモデイナ(かまいますかさしつかえありません)」などの言いかたがおこなわれているという。「カモデイナ」のばあいは、「イナ」の分離性がより明らかであろうか。金沢浩生氏は、「今日の阿波ことば」(『阿波方言』第三巻第一号)で、

「イナ」系統(例文「シヨーイナ。しましよよ。」など)は三好郡に

のみあって、南方では全く行われぬ。

と述べていられる。本県下に、「イナ」複合形文末詞は認めることができよう。金沢治氏は、『阿波言葉の辞典』で、「シヨウイナ[しようよ]」などを、「やや卑（三好，女）」としていられる。

香川県下では、「イ」単独のものが見がたくて、——文末訴え音とされる「イ」も見がたくて、「イナ」複合形がよく見られる。香川県中部での例は、「ソ^ーイナ^ー。」（そうよねえ。）（「そうですよ。」とつよく応答）などである。『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条には、

fニワ クレーイナ

2わ ください。

などとある。「イナ」の分立性が明らかであろう。

おなじく「大浜肥地木」の条には、

mマット アソベイヨ

もう少し 遊んでいけよ。

というも見える。

六 近畿地方の「イ」ほか

近畿地方内には、問題の事象が、比較的多く認められる。

兵庫県下では、但馬の「ワ^ャャー モンガ ナニ ユーンジャイ。」（若いものが何を言うんだい。）など、文末訴え音とされる「イ」が、播磨にも淡路にも、よくおこなわれている。播磨での「行^ョーイ。」などでは、「行^ョー」の長音の言いかたの下に「イ」が見られるので、「イ」文末詞が想定しやすいようである。但馬の、

○オーイ。ドテカラ タビョー イ。

おおい。土手でたべようよ。（弁当を）

にあっても、「イ」文末詞がとりたてやすからうか。いつかは、神戸駅で、「^ベ

「ソト イ。」という売り声を聞いた。しぜんに派生した「イ」であろうが、厳密に言えば、ものは、文末詞的なものになろうとしている。

「行コイ。」などの短呼の言いかたのもとにくる「イ」、あるいは「イツイ。」(いつね?)といったような問いの表現は、人々にもよくとらえられており、なお、「イナ」などの複合形の指摘もある。

○ナンデス イナ。

何です?

は、私が但馬南部で聞いたものである。問いのことばに、「イネ」も言われている。

大阪府下では、前田勇氏の『大阪弁の研究』に、「見い。」「起きい。」「寝い(ネー)。」「食べい(タペー)。」「来い。」「せい(セー)。」の記述が見えるが、私は今、「見い。」などを、命令形と見ておく。

それにしても、「〜マス イナ」など、「イナ」複合形は、よく存立している。『和泉郷荘村方言』には、「帰らう」の「イノイノ」が見える。

和歌山県下では、串本の問題事象が、まず注目される。ここでは、

○ダーレモ ナカッタジャロ イー。

だれもいなかったでしょう?

○ダーレモ ナカッタンド イー。

だれもいなかったんだろう?

などと言われている。こうあれば、「イー」は、念をおす文末の訴えことばと見ざるを得ないのではないか。すなわち、ここに、文末詞の存在が認められよう。——とはいいながら、これが、臨時的な、場面的な発言にほかならないのだったとしたら、にわかには語詞としての文末詞を認定することはできなくなる。

『和歌山県方言』には、西牟婁郡のこととして、「スルイ するのです」の指摘がある。和歌市域での言いかたにも、「それは何か。」と問うのに、「ソ

レワ ナンナライ。」などの言いかたがなされている。文末訴え音の「イ」がおこなわれている。榎垣実氏も、「紀州ことば(6)」（『和歌山方言』6）で、「イ」について、「話し手も聞き手もこれを独立の助詞であるとは意識しない傾向がある。」と述べていられる。私は、日高郡三尾村で、「ドコイ イキャイ。」（どこへ行く？）との言いかたを聞いた。これでは、「イ」が、音声的に明瞭に強調されている。すくなくとも、臨時的には、これに文末詞「イ」が考えられよう。

問いの意の「イナ」複合形文末詞は、県下によくおこなわれているらしい。

三重県にはいって、その紀州の西部の南牟婁郡の木之本では、

○モー イク ワイー。

もう行くわね。（女性）

○タノム ドイー。

たのむよ。

などの言いかたがなされている。当地に「ワイ」はおこなわれず、「タノミマス ワー。」（たのみますわ。）など、「ワ」の言いかたがおこなわれている。それゆえ、上例の「ワイー」は、「イー」を分別せしめるものと思われる。「ドイー」は、「ゾイー」からのものではないか。とすると、これにあっても、「イー」の長呼形を分別することができそうである。木之本には、なお、

○マタ ドーゾ キテ イー。

またどうぞ来てちょうだいね。

○ウチー キテ イー。

うちへ来てちょうだいね。

などの言いかたもおこなわれているので、けっきょくは、ここで、「イ」文末詞を認定することができようかと思う。教示者の女性は、「イ」をつけると、“ずっと感じがよくなる。”とも、“「イー」はやさしい。”とも説明した。「オマシ ドコイ イクンナラ イー。」（あんたどこへ行くの？）（“やさしい。”“お

となが子どもになど。”) などともあった。“「イー」がつくと女。”とのことでもあった。(木之本では、女学生どうしが、「ああそうですか。」を「アージャイ。」と言うとのことでもあった。)

おなじく紀州の北牟婁郡にあっても、尾鷲で、「コリヤ アシノジャイ。」(これはわたしのだよ。)などの言いかたがおこなわれていて、まずは、文末訴え音が認められる。ところで、高田昇氏の「三重県北牟婁郡尾鷲方言」(『方言誌』第十五輯)には、「ドコエイイ どこへ行くんですつて?」「ドコエイクンイイ どこへ行くんですつて、」などとあって、「イイ」の重複表記が見られる。こうある「イイ」は、あるいは、文末詞を認めしめるものか。『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

fハー フロ タイトクヨッテ ハヨ シモテコイイー

はい、ふろを たいておくから 早く 終えてきなさい、

というのが見える。高田氏が、上記尾鷲方言の報告で、「ホントジヤイー 本当ですよ。さうですよ。」とするしていただけるのには、「イ」文末詞の存在が認められやすかろうか。山口幸洋氏の「尾鷲方言の談話資料分析」(『三重県方言』第24号)にも、

………、ナンジューネン]モタツンヤ「イー

というのが見える。私が、尾鷲近辺のことばとして聞き得たものには、

○オ^ラトコノ カカワ ノイー。

おれのうちのかかあはねえ。

などがある。——「ノイ」がとらえられよう。ほかに、尾鷲ことばとして聞いたものには、「ホー カイ。」(そうかい?)「オーキニ イー。」(ありがとだよ。)「アツイジャロ イー。」(暑いだろう?)などがある。後二者などのばあいは、独立の「イ」が認められやすかろう。——文末詞の存立が考えられる。ここでは、「イー」が「ナー」とともに、ていねいとされている。

志摩の地方にも、「イ^マシ クタ トコヤイ。」(いましがた食ったとこだよ。)や、「ナンジャイ。」(何だ?)など、文末訴え音の「イ」がおこなわれている。

鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』第13号)にも、

やい、ゆうない。(コラ、勝手に言うとなれ。(或は、そんなことを言うな
の意。))

などがある。

『三重県方言資料集 志摩篇』の中には、「くれーい 下さい(布)」との記事が見える。こうあれば、「イ」文末詞が認められるか。——臨時的にこうなるといふことかもしれない。

伊勢にも、「ソレワ ナンジャイ。」(それは何か。)などと、文末訴え音の「イ」がおこなわれている。

奈良県下には、今、とりたてうるものがほとんどない。

『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

fジョーイ

そうです。

というのが見える。あいづちことばとしてこう言っている、この「イ」は、訴えことば的なものであるか。

京都府下では、『丹後網野の方言』に、

「よ」を「イ」また「イヤ」という。イは普通、イヤは目下に対して用いられる。

行こうイ。 やっぱり見てこうイ。

との記事が見える。「行こうイ。」などがあるのでは、「イ」の訴えことばらしさが明らかであろう。文末詞が認められるか。西舞鶴方面で私が聞いたことばには、

○イッツヨニ ノロー イ。

いっしょに乗ろうよ。(女学生たち)

がある。丹後南奥でも、かつて、

○オ^アレワ ナ^ンチュ コト サラスジャー イ。

おまえはなんということをしやがるんだい。

というのを聞いたことがある。

「どう しちゃったんじゃイ？」などの、「イ」音尾を付して言いおわる言いかた（したがって、「イ」は、文末訴え音になる。）も、府下にありうるのか。「イナ」の複合形は、府下の南北に見いだされる。「ドー シタンジャ イナ。」は、丹波西北方で聞いたものである。丹後半島では、

○ナンデス イナー。

何ですか？（何がいますか？） （青男→買い物に来た母子）

などのような言いかたが、よく聞かれる。京都ことばの「イナ」は有名である。楳垣実氏は、「紀州ことば(6)」（『和歌山方言』6）で、「要するに、京都ではこのイは、(1)原則として疑問代名詞を主題とした文の末尾にナ・ナーを従えて現れる。」と述べられ、「アノコワイカオイナー（あのこわい顔だこと!）」などの例も示していられる。氏は、「京都でも、疑問の意を含む代名詞を受けない場合もある。例えば次のような質問に対する応答としてそれが現れる。ナニオイナ（何をだね。）——サイフオイナ（財布だよ。）以下略」とも記述していられる。「イナ」のこの頻用は、「イ」成立の強固さを示すものであろう。

滋賀県下には、文末詞「イ」は、一般に、見られないようである。「ソレワ何ジャイ。」「ドー シタイ。」（どうしたんだ？）といったような言いかたは、主として、湖東域によく見られるようである。「イナ」などの複合形もある。

○ドー シテ イヤハル イナー。

どうしていなさるかなあ。

は、彦根ことばの一例である。

近畿地方の南辺域は、「イ」文末詞が認められて、注目される。——全国でも、この地域が、問題視されはしないか。私は、奈良県吉野郡下の調査でも、

土地の人から、「尾鷲ことば」として、

○ソージャロ イー。

そうだろうよ。

というのを教示された。その人は、“ことばの尻に「イー」をつかう。”と説明してくれた。関連地域の人もこう観察するほどに、南辺の「イ」は、特立的なものであるのか。佐藤虎男氏も、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、「告知の用法」の「イ」が、「志摩・紀伊によくおこなわれている。」としていられる。

○ハイ。オーキニ イ。

はい。ありがとうね。(初老女→青男)

は、氏が尾鷲の念おし例とせられるものである。

七 中部地方の「イ」ほか

福井県下の若狭に、「ドコエ 行クイ。」などの言いかたがよくおこなわれているようである。

○ドコイ イカンスイ。

どこへ行きなさる?

は、そのていねいな言いかたである。越前でもまた、海岸線での、

○アトカラ ヒロマッタサケー ヒロ ゴザンスイ。

あとから広まったから、広うござんすよ。

など、東西に「イ」訴え音がよく聞かれる。

愛宕八郎康隆氏は、昭和三十年に私どもの小研究会で、「北陸道方言のイ音尾について」というのを発表された。(福井・石川・富山の三県にわたるものである。)この報告では、福井県に関しても、「イノ」「イネ」ほかの諸複合形がとりあげられた。福井市近郊の「イノ」例として、私が聞き得たものは、

○オマイ ドコイ イカッサル イノ。

(“「どこい行くんや?」というような、かるい、親愛のことば”)

である。

○コ コ ホレ コンナ コト シテ ド シル イヤ。

この子は、ほれ、こんなことをして、ド シル ン ジャ。

は、海岸部での「イヤ」例である。若狭地方でもまた、「イナ」「イノ」「イヤ」などが、よくおこなわれている。

石川県下でもまた、「イ」音尾がよく聞かれる。

○ナン ニャ デル イ。

何が出るものか。

は、能登半島西岸の一例である。——この例のばあいなど、「イ」音尾などと言いうるものではあっても、「イ」のはたらきが大きいようでもある。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

*m*ナニヤッタイ

なんですか。

というのが見える。どちらかというと、能登半島方面に、「イ」音尾は、よりよく聞かれるのであるか。

能登北部の輪島で聞いたことばに、「ください。」の意の「ク ダー イ。」がある。このように発言される「イ」は、文末の特定の訴え要素になっていよう。能登半島西岸で聞いたものには、

○……………というのは ナン ジェ ー イ。

……………というのは何ジャイネ。(問いのことば)

というのがあ。これらによれば、「イ」文末詞が認められそうである。

県下にまた、複合形の「イノ」「イネ」「イヤ」その他が聞かれる。

○ワ リ ャ ド コ イ イ ク イヤ。

おまえはどこへ行くのか。

は、金沢市での「イヤ」例である。

○ア リ ガ ト ー ゴ ザ リ マ ン タ イ ノ ー。

ありがとうございましたねえ。

は、加賀東南部での「イノ」例である。

○コ¹フ スナ²オ イネ³ー。

この砂をねえ。

は、能登での「イネ」例である。

富山県下でも、「イ」文末訴え音がよく聞かれる。「イヤイ 嫌です。」は、『富山県方言集成稿(二)』に見られるものである。古く、『富山県方言』にも、「○たい [あ³ったい] (ありますよ)」などの記述がなされている。『全国方言資料』第8巻の「富山県東砺波郡平村上梨」の条には、

f………… コワイ³⁾ コト オータ モンジャイ
ひどい 目に あった ものです。

3) 「体が疲れるような」の意。

というのが見える。私が、富山市西北郊で得た例は、

○タッテガッテ モノ ユーテ ナンノ コッチャイ。

立ってものを言っ、なんのことじゃい! (たしなめる。)

などである。

県下の、

○ソソナガデシヨ¹ー イ。

そんなのでしょうよ。

のような言いかたでは、「イ」という特定の訴えことばが見わけられよう。

(——ところで、このカードを検閲された土地の有識者は、「『イ』は言わない。」と注せられた。) 愛宕八郎康隆氏は、県西南隅で、

○ソイガダ イ¹ー。

そうなんだよ。

との言いかたを聞いていられる。

県下の「イ」に関する複合形では、「イネ」が、なかんずくよくおこなわれ

ていようか。私は、県南で、「お所は ドコデス イネー。」と聞かれたことがある。

新潟県下には、「イ」文末訴え音のおこなわれることが、比較的すくないのか。

とはいいいながら、『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結東」の条には、

m………… イッカグレーニ ナルイ
何日ぐらいに なるんだい。

というのが見え、問いの表現が注意される。和田初栄氏の「新潟県北魚沼郡小出方言の文末詞——「カ」「イ」「ケ」「ヤ」について——」（『方言の研究』創刊号 昭和43年3月）にも、

○サンペノ バァ ナ ジョソ ナッタ イ。

（三平のばあちゃんはどんな具合になったでしょうか。）<老・女——
中・女>

というのが見える。

水沢謙一氏の『昔あったてんがな』には、「婆さ、また何言わっるい。これはこんにゃくと言ふもんどし。」とのことばがあって、ここにも、表現上注意される「い」が見られる。

県下に、「〜ダイ」も見られ、また、「〜ダ イナ」も見られる。

岐阜県下でも、『岐阜県方言集成』の「なにい〔句〕何ですか。」、『飛騨のことば』の「だりやせずい（句）たれがするものか。嫌だよ。（そんなことは——。）（東）」など、文末特定音としうる「イ」が、よく見られる。

なお、『岐阜県方言集成』には、「どういん〔句〕どうですか。」（恵那郡）というのも見える。これには、

「い」は「え」と同じ語、それに「ん」の添はったもの。

との説明がある。

本県下に、「イナ」の複合形も見られる。

○です イナー。

は、美濃北部での一例である。

愛知県下でも、「イ」音尾がよく見られる。「何だん。」(何だ?) などとなるのおなじように、「～だい」ができています。

○キューツ 切ッタ モンダイ。

は、渥美半島での「～だい」例である。

複合形に、「イナ」がある。知多半島で聞いたものには、

○カリニダ イナー。

かりにですなあ。

がある。

明らかに「イ」文末詞として認めるべきものがない。

静岡県下にもまた、「～だい」など、「イ」音尾がよく見られる。

○ナントユー コンダイ。

なんということだい。

は、御前崎近くでの一例であり、

○コリャ オレンノダイ。

これはおれのだ。

は、大井川すじでの一例である。

山口幸洋氏は、『静岡県本川根方言の文』で、

ヨイズライ (708) は「良いだろうよ」といったニュアンスをもつ。

とするしてられる。「ズラ」にはとどまらないで「ズライ」とあれば、それだけの音効果は、たしかに発揮されるのであろう。それにしても、「ズライ」の「イ」について、ただちに「イ」文末詞を認めることができるかどうか。

複合形には、「イナ」「イネ」がある。

長野県下には、全般に、「イ」音尾がさかんのものである。方言研究の諸文献もまた、これをよくとりあげている。佐伯隆治氏は、「信州北部方言語法(上)」で、「イ」につき、

「カ」と同じ、疑問に用ひる。

とせられ、「何処ニアルイ(何処にあるか)」以下の例をあげていられる。福沢武一氏は、『信州方言風物誌 第二』で、

このイは何々した経験に内心得意としている心持がこめられる。

との説明をしていられる。「イ」を一個の独立要素と見るむきがすくなくないが、私は、「～だい」「～たい」などのばあいを、すべて、「だ」や「た」の言いきりの、一種つよめられた形と見、「イ」の機能は認めつつも、「イ」を文末訴え音とする。私が信州北部で得た「タイ」例を、一つあげよう。

○クタビレタイ。

くたびれたよ。

「イ」に関する複合形に、「イネ」「イナ」がある。『信州上田附近方言集』には、

タエナ(句)であつたね。「行クダツタエナ」

が見える。

土地っ子の、自語をかえりみでの発言の一事例を、ここにかけおきたい。諏訪地方の一女性は、「～たい」は言わぬと、まず言った。やがてこの人が、「イッタ イネー。」<アクセント失>(行きましたよ。)の例文をあげた。

『信州方言読本 語法篇』には、「それでい^いや^な(それでな)」(木曾の黒川)との記事がある。「イヤナ」がとらえられそうである。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条にも、

fソイヤナー

そうですね。

というのが見える。

山梨県下にも、「～だい」などがあるか。

『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条には、

*m*マダ ソガーニャー クラカー ナラヌイ

まだ そんなには 暗くは ならないよ。

とある。——「ナラヌイ」が注意される。

中部地方に、はっきりとした、単独の「イ」文末詞は、あまり見いだされないようである。

八 関東地方の「イ」ほか

東国地方の情勢も、おおよそ、中部地方東半域のそれに似たものである。やはり、はっきりとした文末詞「イ」は、まず認められない。

神奈川県下に、「～だい」がいちじるしい。それに、問いのばあいもあれば、説明のばあいもある。

東京都下では、伊豆諸島の八丈島のことが、まず問題になる。飯豊毅一氏は、「八丈島方言の語法」で、

このイは動詞に直接つくほか、文末助詞ワ、カ、ガ、ジャ、などや助動詞ラ(オ)、タラ(トオ)、など多くの語につく。軽い親しみを表している場合が多い。

と述べていられる。「ラ」のもとに「イ」の見える例としては、

○ジョ オブダライ。丈夫ですよ。(イには親しみ・やさしみがある)

などもあげていられる。『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』には、「^{(なん}あん
^{ですか)}だっ^{(なん}てい。」などの事例が見える。私は、今のところ、これらの「イ」も、文

末訴え音と見ておきたい。

『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町宇津木」の条には、

fア ドッカエ オジャリヤローイ
どこかへ いらっしゃいますか。

とあり、「ヤローイ」というのが見える。こうなると、この「イ」は、特定文末部になっているとされようか。しかし、こういう表現の習慣がつかなくなれば、私どもは、「イ」文末詞をとりたててはできない。新島のことばとして聞き得ているものに、

○オメーワ ドキー イカッシャウ イ。

あんたはどこへいらっしゃる？

がある。これの「イ」もまた、この文表現の現実では、特定文末部であろう。しかし、「イ」文末詞が認められる状況にあるのかどうかは不明である。

大島や三宅島などにも、「～だい」や「～たい」がある。

東京都に関しては、旧の『東京方言集』に、「チンデス[△]イ？」「何をクダス[△]タイ？」「今あの人どこにイルイ？」「早く支度をシロイ。」などが見られる。「しっかり しろイ。」などとも言われてきたであろう。が、これらはすべて、「イ」文末詞を認めさせるものではない。「シロイ。」は、「しろ ヨ。」を思わせるようではあっても、それは、意味の内面のことであって、外形は、「シロ。」の発音の強調形が「シロイ。」になったというものであろう。

千葉県下でも、「～たい」「～ますイ」ほかが見られ、「～たい」にしても、

○オメー 下 イッターイ。

おまえさんどこへ行ったの？

のような問いの表現のばあいもあれば、

○スワッターイ。

すわれよ。 (初老女→孫ら)

のような命令表現のばあいもあるというわけで、「イ」文末訴え音利用の生活が自在である。

○イマデモ、ツカッタ アンドンガ アリマスイ。

は、房総半島南部での「～ますイ」例である。「アリマスイ」などと言われているのをだけ見ていると、これは、関西地方域でのことばづかいにさも似たものとも思われる。複合形には「イヤ」などがある。

つぎに、埼玉県下でも、「～だい」「～たい」（問いのばあいも説明のばあいも）などが、よくおこなわれている。命令表現のばあいもあって、「マユックリ シロイ。」などと言われている。大久保忠国氏の「埼玉方言の語法」には、「くれ」「下さい」の系統の「クンドイ」が見える。——「クレロ」の「クンロ」が「クンド」になって、やがて「クンドイ」になったか。

群馬県下にも、「～だい」（説明や問い）「～たい」などがよくおこなわれている。上野勇氏の『万場の方言』には、「さうでがんすイ」「何時頃出来るイ」などの言いかたが見える。県下に「～するイ」もある。

私が前橋市を出ての東北郊で聞き得たものには、

○コレ。コレダ ヨ。コレダイ。コレ。

これ！ これだよ。これだい。これ！ （四歳男→中女）

がある。このばあい、「コレダイ。」が「これだよ。」に恰当することは明瞭である。したがって、「コレダイ。」の「イ」が、「ヨ」的なものとも考えられる。——つまり、「イ」が、文末詞かと考えられてもくる。しかしながら、表現の内奥に「ヨ」的なものが認められることと、外形に、「イ」の文末詞らしさが明確であるのとは、つねには、一元的なことではない。「コレダイ。」は、やはり、通例にしたがって、一話部と見ておきたい。同地で、

○チー[↑]ンダーイ。

なあんだい？ （幼男→中男）

との言いかたが聞かれた。この現実形では、「イ」が、特定文末部とも見られようか。しかし、「ダーイ」は、「ダイ」の一変形と見るのにとどめておきたい。

当県下にも、「イナ」「イネ」の複合形が認められる。

○ヨ^ーカッタ イ^ーネー。

よかったね。

などとある。

栃木県下にもまた、「〜だい」などがよくおこなわれている。「ナーイ」などともあるが、私は、これを、「ナイ」の変形と見ておく。

茨城県下の情勢も、栃木県下のにはほぼ同様であろうか。「〜だい」や「〜たい」が認められる。

複合形には、「イネ」などがある。

なお、関東地方に関しては、大橋勝男氏の、『関東地方域方言事象分布図』の二図に、「イ」事象の分布を見ることができる。Map 27「どうするイ。」では、おもに、埼玉・群馬・栃木の方面に、「イ」の分布が見られる。Map 28「どこ行くイ。」にあっても、やはり、ほぼ同様の地域に「イ」が見られる。「どうするイ。」や「どこ行くイ。」に関する問いであったため、調査結果の分布は、以上のようにしているのか。関東に、「〜だい」は一般的のようである。

九 東北地方の「イ」ほか

東北地方に、「イ」文末訴え音は、さしてつよくはないのか。

福島県下には、やや言うべきことがある。——関東地方からの、しぜんのつづきがらが考えられる。

菅野宏氏は、「福島のていねい語」(『言語生活』第二十九号)で、

「おらない戦争なんてこりこりだいでい」のように間投助詞や終助詞について、丁寧さをあらわす。「ん」の勢力はひどくおとろえているようである。(中略)東京語の「なにしてるんだい」「ぼくいやだいでい」のい₁と形は同じであるが、福島のいは丁寧い語であり、なだらかに発音されるという点で、使われる頻度の点で、全体的に女性的な調子を与えている。

と説いていられる。「イ」をとりたてていられるが、「こりこりだいでい」のばあいだと、「だいでい」は、「で」の発展形かと考えられる。飯豊毅一氏も、「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」(『方言研究年報』第一巻)で、「ドコサ イ₁グ イ。(どこに行きますか。)」 「ナニ クル イ。(なにがくるものですか。)」の例をあげられ、

このような「イ」は、現在はあまり用いられない。老人などの、同輩に対する多少丁寧なものいいにあらわれる程度である。

と、やはり、「イ」をとりたてていられる。また、氏は、同論文の中で、

「——イ」は、ひろく尊敬表現に、ばあいによってはていねい表現にしたてあげるのである。

と述べていられ、

さて、この「——イ」「——ン」の文末助詞は、天栄村にかぎらず、福島県では中通りの南半一帯に用いられているが、……。

とも述べていられる。一谷清昭氏は、『言語生活』第三十五号の「全国珍語奇語集」への寄稿「福島県」で、

そうカイ、何ダイ、暑いナイ、いいゾイ、そうだワイ——と「イ」を添えるのが浜通りと中通り。

と述べていられる。『福島県方言辞典』には、

ナンダイ [句] なんですか○「何の用なんだい」(何の用なのですか) 中
会南北

の記述が見える。

飯豊氏は、別に、

○ドッチャ イッテキタイ。

どこに行って来ましたか。〈壮年男→壮年男〉

の例を教示せられ、

「タイ」などは目上の人にはあまり用いられない。しかし「タ」よりは敬意が認められよう。

と説かれた。

諸説はあるが、要するところ、「イ」文末詞を、独自のものとして認めることは、なお困難とされよう。

宮城・山形・秋田・岩手の諸県には、「イ」（文末訴え音）について、述べるべきことがあまりない。私の現在の調査状況がそうなのであるが、これらの地域には、比較的、「イ」文末訴え音のおこなわれることがすくないのではないか。宮城弁での、

○ナジョナ コッシャイ。

“どういうこと？”

は、「イ」音尾を認めしめるものか。『山形県方言集』の、「すろい suroi 連続語 しなさいよ 村山
置賜」には、「イ」音尾が認められよう。秋田県下には、「～ですイ」「～たい」などが見られるようである。東能代で聞いた買い物ことば、「マンツ[ü] カワイ。」（買いましょう）は、「カワイ」が「カウワイ」ではないか。岩手県下では、「～だい」などが見られる。『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、

f シャグサンジューエンダーイ

130円ですよ。

とある。私が県中央東部内で聞いたものには、

○ナンボダ ワケダーイ。

いくつなんだい。（むすこさんの年を聞く。）（老男→老女）

などがある。

青森県下でも、いくつかの「～だい」「～たい」などが聞かれる。ところで、「南部」地方の野辺地町で私が聞いたものには、

○コリヤ オラノダ イー。

これはおれのだよ。

○センセー オデタ イー。

先生がいらしたよ。

○ソッタラニ[ī] ヨゲ キ[kçi] タラ ヌ[ü]グ[ü]ガベ イー。

そんなにたくさん着たらぬくかろうね？

などというのがある。一初老女から得たものであるが、このように定期的に「イー」が特立されると、私どもは、この背後に、もはや、「イ」文末詞を認めたくなる。ただこれが、一人の発言例である点が気がかりである。社会の慣習というほどに、「イー」の、特定の発言がなされているようであれば、「イ」文末詞を認めることが容易である。

十 北海道地方について

この地方については、私の調査作業が、あまりにも狭小である。どれほどのことも、言うことができない。

鈴木淳一氏の教示や私自身の経験によるのに、文末詞「カイ」（「か」）は、道内によくおこなわれているようである。しかし、「カイ」は、「カ」の変化形と見たいから、今は、これについて「イ」文末訴え音を言うことはしない。

道内に、「～だい」「～たい」は、よく認められるようである。

○コレ オレゲノダイ。

これは私のです。

は、鈴木氏教示の十勝本別町での一例である。（「コレ オレゲノダ。」は、対等の言いかたであるという。）

○お父さんは、どこへ行ったい？

は、鈴木氏教示の北見斜里郡斜里での一例である。

十一 おわりに

以上、全国にわたって、「イ」を観察してきた。さほどにはこれの見られない地域もあるが、総じて、「イ」文末訴え音が全国的にも言いうるほどに見いだされるのは、興味ぶかいことである。それにしても、明確な「イ」文末詞と認められるものは、寥寥たるものである。この点は、「エ」文末詞存立の優勢には比較すべくもない。（「エ」は、多く、はっきりとした文末詞として存立している。）

「エ」と「イ」（その、文末訴え音であるものをも広く見て）とでは、待遇上の表現効果に大きな開きはなさそうである。両音相は、同一方向上の二者と認められるようである。これらが、しばしば、女性ことばにかたむくものであったりするものもおもしろい。

特殊なこの「イ」には、用法上の分化もすくなく、複合形もまたすくない。

「カイ」や「ナイ」での「イ」は、文末詞「カ」や「ナ」の下に自生したものであろう。「カイ」や「ナイ」は、それぞれを、一定の完結形と見たい。これに対して、「～ですイ」や「～だイ」などのばあいは、事情がちがう。「イ」というもの前にあるのは、文末詞ならざるものである。その「です」や「だ」での言いきりが、表現上明らかであり、その言いきり要素に「イ」が付生している。この種の「イ」は、文末訴え音と見る。

※ ※ ※ ※ ※

ヤ行音文末詞としてきた「ヤ」「ヨ」「エ」「イ」では、「エ」と「イ」とが特

異的である。「ヤ」と「ヨ」とは、大感声的文末詞とも言いたいおもむきを呈
して、これらは、おこなわれることが、ヤ行音文末詞において、まさに本
流的である。人々は、しぜんのうちに、「ヤ」「ヨ」に、詠嘆一般の生活を託す
ことが大であった。さてこの傾向は、今後とも、にわかには変移するもので
なからう。

第五章 サ行音ザ行音文末詞

第一節 総説

サ行音ザ行音に属するものとしうる諸文末詞を、この章でとりあつかう。

この章で総観しうるものは多岐にわたり、いわば、内状が単純ではない。サ行音・ザ行音というまとめかたをするが、これは、今日現在の、ものの音形態に目をつけた、一つのたちばでの概括である。

なかには、「サ」「ゾ」など、たぶんに感声的なものと見うるものもあるが、ほかにまた、かならずしもわかには感声的としがたいものもある。「ザイ」など（——はじめの「サ」にしても）、これをすぐには単純感声的なものとしがたいかもしれない。このような状況ではあるが、ここにとりそろえようとするものが、いずれもサ行音またはザ行音に属するものであることは、言うまでもない。したがってこれらの全体は、ひとまず一括して、一群のサ行音ザ行音文末詞と見ることもできる。

かねて私は、ナ行音やヤ行音の文末詞、「ナ」「ノ」や「ヤ」「ヨ」などを、感声的文末詞とよんできた。しかもこれらを、もともと感声的なものであろうと解して、原始的な感声文末詞とも見てきた。サ行音ザ行音文末詞としうるものは、上にも述べたような理由によって、これを単純に、「原始的な感声文末詞」とすることはできない。しかし、その多くのものについては、今日の諸方言上の習慣では、もはや、感声的文末詞の様相を認めることができる。ここに、原始的とはいいかねるけれども、サ行音ザ行音文末詞の総体について、準感声的文末詞と言う程度のことは、できそうに思われる。

「サ」「ザ」、「ゼ」「セ」、「ゾ」など以下のものを、要するに共時論的見地で処理して、「サ行音ザ行音文末詞」というまとめかたをする。

日本語諸方言上の文末詞の全相を通観する時、サ行音ザ行音関係の文末詞群は、まさに、ナ行音文末詞、ヤ行音文末詞の、前後の二つの大群落につぐものと見さだめることができる。

第二節 「サ」の属

一 はじめに

サ行音ザ行音文末詞としうるものが、広汎に認められるのを、どのように整理しどのように順序づけるかは、一つのやっかいな問題である。私は、第五章にとりあげたいものの全体を、私なりの考えで整頓し、以下のように、節を追ってものを取りあげる。最初にとりあげるのが「サ」である。

関東地方はもちろんのこと、全国の東西に広くおこなわれている「サ」を見るにつけても、私どもは、これを、サ行音ザ行音文末詞としうるものの一代表分子とも見ることができる。その活動の実際を見るのに、「サ」は、ほとんど、感声的文末詞同然の流行を呈していると認められる。

柳田国男先生は、この「サ」に関して、「しか言う」の「さ」との解を示された。

なるほど今日の「サ」に、特殊な指示性を感知し得ないではない。そういえば「ゾ」にも、なにかの指示性が感じられる。

もし「サ」がそういうものであるとしたら、これは、非感声的な文末詞とされる。

しかし、「サ」が指示性をにおわせているとしても、そのような性格の「サ」が（「ゾ」もまた「ゾ」なりに）、現段階で、「サ」の音声効果を発揮して、おおよそ感声的なものさまを呈していることも、私としては、認めたいところである。東京都や千葉県下などでの、“どうして サー。こうして サー。”などと、「サ」を連発している表現生活の実態を見るにつけても、私どもは、「サ」

を、単純感声的なものに近い文末詞と見なすことができる。

ともあれここに、対話の文表現の末尾にはたらく特定の一重要分子「サ」の、全国諸方言にわたる広い存立がある。

二 南島地方の「サ」音形文末詞

南島方言内に、「サ」音の文末詞、あるいは「サ」音を持った文末詞が認められる。私は、これがどういう性質のものであるかを知らない。けれども、「サ」音形のものがあることは事実のようなので、今はただ、その音相に即してこれを取りあげる。

『全国方言辞典』の補遺篇に、

チャーびら ㊦ (来侍の意) 訪問の挨拶の詞。御免下さい。「チャー
ビラサイ (男)」「チャービラタイ (女)」南島首里。

との記述が見える。

沖縄語を調査しつつある胤森弘氏は、

女性は、男性にも女性にもタイを言い、男性は、男性にサイを言う。男性は、女性にはサイを使わない。おふくろにだけは使う。サイは尊敬。

と語ってくれた。

大橋勝男氏が、昭和五十年に新幹線車中で、那覇市の高校一年生およびその姉さん(二十五歳くらい)から得られた「サ」音形文末詞の実例は、以下のようなものである。

○ハイ サイ。

“人と会ったときのあいさつことば。本土語の「ヤー。」「オス。」などと同じ。”

○マー^ダ メンソー^{ラン} サ^ー。

“まあだいらっしやらないかなあ。(ていねいな言いかた。)”

○チ^ー チュー^ー サ^ー。

“今 来る。”

金城朝永氏ほかの「南島方言に於ける敬語法」(『沖縄文化論叢 5 言語編』平凡社 昭和47年11月)には、

首里・那覇では、敬語文の末尾に男は「サイ」女は「タイ」を付ける一種の癖があつて、之が又敬語法の一つの特徴をなしてゐる。

とある。

国立国語研究所編の『沖縄語辞典』(大蔵省印刷局 昭和38年4月)には、sai①(感・助) 目上に話しかける時・呼びかける時などに男が発する敬語。さらに高い目上には sari という。女は tai という。もし。～。もし(他家で案内を乞う時など)。¹uncuu～。もし、おじさん。

とある。

高橋俊三氏夫人の教示せられた沖縄本島文末詞諸例の中には、

○チュヌ イユヤ ジョートーヤサ。

“今日の魚は上等であるヨ。”

○ウヌ ホンヤ ユデーグトゥ ヤンカイ カシーサ。

“この本は読んだのであんたに貸すヨ。”

などがある。(ちなみに、沖縄県の他の人にも、文末の「サ」を「ヨ」と説明してられるかたがある。)

旧年、私が、沖縄本島国頭郡の人から聞き得た「サイ」例は、

○ニフェデービル サイ。

ありがとうございます。

○アガインソーレ サイ。

お上がりなさい。

などである。教示者は、「サイ」と「タイ」とを対置させており、「サイ」や「タイ」がつくと丁寧・上品だとしていられる。

仲宗根政善氏は、「宮古および沖縄本島方言の敬語法——「いらっしやる」を中心として——」(九学会連合沖縄委員会『沖縄——自然・文化・社会——』弘文堂 昭和51年2月)で、

なお、沖縄方言の丁寧をあらわす間投助詞サイ（男性が用いる）、タイ（女性が用いる）の如き助詞もない。

と述べていられる。——宮古西里方言のことである。

ところで与那国島には、「サ」が認められるようである。高橋俊三氏教示の実例は、

- ウギィ ワン ディ^ーサー。 <中・女→私>
 （起きられたのですね。）——（早朝にだけ用いられる挨拶表現）
- ボタン チャツン サ。 <少・女→私>
 （ボタン《の糸が》切れたんでしょう。）

などである。

沖縄本島の北に位する与論島には、

- ^{du}:^{fidu} ^{ju}:^{ta} sa:. (少男→町氏)
 <自分でぞ 為た サー。>
 自分でやったんじゃないね。
- ^ulagadu ^{mut}fikju:ta sa:.
 <お前がぞ 持て来た サー。>
 お前が持って来たんじゃないね。

などの言いかたが見いだされはする。（町博光氏教示）

ところで、奄美大島には、「サ」音形のものが見いだしがたいようである。

しかしながら、徳之島では、

- ^{do}-^{ka} ^{tan}byu ^{sa}ー。
 （どうかおたのみします。）

などが見いだされる。この「サー」は、どういう「サ」であろうか。

喜界島にもまた、

- オッカ^{san} ハヤク ^{mun} カミッ サ。
 お母さん、早くごはんをたべようよ。

という「サ」がある。

以上、実質はともかく、音形が「サ」音形であるものを、南島方言下にたずねてみた。

三 九州地方の「サ」ほか

鹿児島県下では、さまでよいことばづかいにはならない「サ」の言いかたが見られる。薩摩半島南辺、枕崎港の、

○アガ^ーロ^ー サ^ー。

お上がりよ。

○コン テガ^ンヌ ヲンデ クレ サ^ー。

この手紙を読んでくれよ。

○カー^ーサン ハヨ メス クラ サ^ー。

母さん、早くめしを食おうよ。

などが、まずはその「サ」の好例である。

○オマイ^ーセ^ー ヤッデ サ^ー。

“おまえさまにやるでネ。”

は、薩摩半島西南辺の一例である。北条忠雄氏は、「甌島語法の考察」(『方言』第八卷第二号 昭和13年5月)で、つぎの記述を示していただける。

キヨネン、イカレンヤッタバツテ、コトジャ、イカジンヤ^ーサ。(中甌)

去年は、往かれなかつたけれども、今年はずひいかうよ。(直訳、イカズニ居ラレヨウカヨ)

「サ」に関する複合形文末詞に、「ト(ド)サ」があり、「モンサ」などもあ
る。

宮崎県下にも「サ」音形の文末詞が認められる。県中央部あたりの例は、

○イ^ー サ。

よいというのに。(こづかいをやろうというのを辞退する。) (青男→中女) 下<全>

○ヤレ サー。

返してくれというのに。(漫画を取り上げられて、泣きそうになって
懇願する。) (小男→青男) 中<主に小>

などである。(橋口巳俊氏教示) 橋口氏は、

「サ」「サー」は自分の言動の徹底しないのにいらだって、再び自分の
いわんとするところを強調するものである。乱暴な口調で、親しい者に対
してなされる。

とされる。おなじく県中部でまた、

○ハヨ オキッ サ。

早く起きろ。

○クリャリ サ。

おくれよ。

などの言いかたが聞かれる。

熊本県下では、倉岡幸吉氏の『肥後方言集』(自家版 昭和13年3月)に、

サ イクサ 行くのよ

との記事が見られる。わらべ歌の、「アンタガタドコサ。肥後サ。肥後ドコサ。
熊本サ。熊本ドコサ。仙波サ。仙波山ニワ狸ガオッテサ。ソレオ獵師が鉄砲デ
ウッテサ。煮テサ。食テサ。菜ノ葉デチョイ。」は、この場所に引用しておい
てよかろうか。私が、天草で聞き得た「サ」の例は、

○オリランバ サ。

おりなくちゃね。(汽車ごっこ) (小姉→小妹)

○……を シヲッタッ サ。

何々をしてたよ。

などである。すでに宮崎県下でも見られたことであるが、促音のもとに「サ」
のたつのが注目される。

熊本県下に「サ」に類する「サイ」がある。早く、静岡県警察部刑事課『全

『国方言集』には、

アンデサイ　　そうだからだよ　　(天草郡)

というのが見える。上畝勝氏の『九州方言辞典』上巻〔中南部篇〕にも、

さい　　終助詞、熊本。そげんさい、おるがっさい、いくでさい、そうだよ、おれのだよ、出くのだよ

との記事が見える。

天草で、また、複合形の「トサナ」「トサイ」などが聞かれる。

○ソガンジャイ　トサナ。

“そうですね。”“そうである。”

などの「トサナ」では、「サ」が「トナ」に挿入されたようなかっこうでもあろうか。

長崎県下では、「サ」のおこなわれることがさかんである。林田明氏は、「長崎市方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

「サ」は比較的上品で、おもに女性が使用する。

と言われる。林田氏のあげられる例は、

○イーヤ　サ。コガン　サ。　　いいえ。こんなですよ。(中女→中女)

○トニカク　アラワレンッ　サ。　　とにかく洗えませぬよ。(青男→青女)

などである。「アラワレンッ　サ」の促音は、“文末助詞「ト」の変じたもの”とせられる。私が長崎市内で聞き得た例は、

○オラン　サー。

いないよ。

○モー　ネトッ　サー。

もうねてるよ。

などである。県下の諸地で、「サ」「サー」が聞かれる。青年男子も、

○ヤラン　サー。ホント　ダー。

しやしないさ。ほんとによ。

（「ダー」は、文末詞「ダイ」の「ダー」である。）

などと言っている。（西彼杵半島での例）西彼杵半島では、返事に「オールサー。」（いるよ。）などとも言っており（老男も）、反抗的な言いかたにも「サー」をつかっており、あつらえの言いかたにも「サー」をつかっている。かつての五島列島調査では、そこに「サー」をよく聞くことができた。福江島の内では、

○イェー[↑] サ。

まったくそのとおりだ。（共鳴してあいづちをうつ。）

などとも言っている。「サ」は、ごくしぜんに発せられていて、あいそことはば的である。

○思わぬことばをつかったよ。ヒトクッ[↑] サ。（ひとくちサ。）

○コノヘンリユーノ[↑] ヒノマルデ ヨカッ[↑] サ。

このへん流儀の日のまる弁当でいいよ。（中男——宿屋の主婦）

（「ヨカッ[↑] サ」は「ヨカ トサ」であろう。）

○ソー[↑] シタッジャバツテ[↑] サー。

そうしたけれどもよ。（できなかったことを言う。）

（土地の識者は、私のカードを検閲せられ、「普通は、ソーシタバツテサとジャをぬかして話してゐます。」と注してられる。）

などと、「サ」が自由につかわれている。五島での「サ」経験で言えることは、「サー」はあっても、一般には「サ[↑]」はないらしいということである。（福江市などでは、若い女の人などが、「サ[↑]」と言うこともあるのか。）「ジギョージカソニ[↑] サ。」（授業時間にサ。）などのように、「サ」の前が高くて、「サ」は低音下にあることが、じつに多い。——この点が特色であろう。おなじ「サ」でも、その用法には、関東地方でのとは、おもむきのちがうさまが見られる。

「何々です[↑] ワ。」などの「ワ」のばあいも、関東地方では「ワ[↑]」と発言されるのがつねであるが、関西地方では、多く「ワ\」と発言されがちである。諸方言上での、習慣のちがいというものがおもしろい。

県下諸地に「サ」のよくおこなわれる中で、山本靖民氏『島原半島方言集』の、

ウカッサー まあ恥ずかしいこと

といったような言いかたも方々でおこなわれている。この「サ」は、接尾辞の「サ」であろう。上例のばあいも、「サー」文末詞を受けとることはできない。

つぎに、本県下では、「サー」の類縁形「サン」が見られる。『島原半島方言の研究』には、

いま おきろーて しをつとこつ さん

などとある。「サン」は、「サー」のつよい発音からしぜんにうまれたものではないか。なお、上書には、「サイ」も見いだされる。

こどもじや あるみやーず そんくりやん こた でくつさい

などとある。長崎県西部にも「サイ」がある。五島列島では、「シェー」というのを聞いている。

○カンノンサンガ シェー。

観音さまがね。(観音さまが、タカマツに化けて、鯛を追ってくれたのでしょ、という話しである。)

など。「シェー」は、「サイ」にあたるものか。

「サ」に関する複合形文末詞に、「ネサ」があるか。私は、五島で、役場の女性吏員さんが、

○寄宿舍に オッテ ネサ。中五島のことばが、いちばん標準語に近いと思った。

と言うのを聞いた。県下に、「トサ」がよくおこなわれているか。西彼杵半島で、

○………言うて、ワライマシタ トサ。

………言うて、笑いましたとさ。

(このカードを検閲してくれた人は、「トサ」の「サ」に傍線をつけた。)

などと言っている。こういう「トサ」は、関東地方などでの「トサ」によく似てはいないだろうか。「トサ」が、「トサー」「ッサ」とも発音されている。

複合形の「モンサ」もある。

おなじく肥前の佐賀県下にも、「サ」がおこなわれている。

○ドガ^ン ショ^ン サ^ー。

“どうしてですか？” (二十歳女性)

は、佐賀市での一例である。佐賀県南部での一週間調査のさいにも、女性間の会話に、「サ」の頻発するのが聞かれた。その地で、男性も「サ」を言っていて、

○イン^{ニャ}、ホース^{モチ} サ。

いいや、ホース持ちさ。

などというのが聞かれた。

本県下にも、「サイ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

*m*アリ^ャ ジョ^ーズダ^{ッタ}サイ

あれは じょうずだったよ

などとある。(「サーイ」も見いだされる。)

○キ^{ニョ}ー サイ。ジツ^ワ サイ。

きのうさ。じつはさ。 (大男)

は、佐賀県南部で得た例である。——このほうでも「サイ」が、じつによく用いられている。

○オリ^ャー コ^ンニャ^ー ドケ^ーモ イ^{カン} サイ。

わしは今夜はどこへも“行かないぞ”。

は、唐津市城外弁での一例である。この言いかたに関連して、土地人は、「イ^{カン} バイ」を持ちだし、両方は似ているが、“「サイ」のほうはつよく否定する。”と語った。

肥前地方の「サイ」に、「どうどうした サイ。」「何々であった サイ。」と
 いうような「~~~~た サイ」の言いかたが、一つ、きわだっていようか。地方
 は地方なりに、やはり、なんらかの特色用法を発揮させがちでもある。唐津
 市城外ことばでは、

○ヤスマジ^ー ハヨ イケ^ー サイ。

やすまないで早く行けよ。

などというのもある。これは、命令の言いかたを「サイ」が受けている。土地
 の人は、この言いかたを、“ちょっとしたしみが出る。”と言っている。(とな
 ると、これの気分は、今日の東京語の“どうどうして サ^ー。”などの「サ」
 の気分とはちがおうか。)

米倉利昭氏は、

「サイ」はおとなしく結ぶ語で東京弁の「…して^さ」や、共通語の「よ」

「ね」に当る柔らかい語。「ク」の脱落により語調もぐんとおとなしい。
 と教示してくださった。東京弁・共通語との対比の説明がまず貴重とされる。
 つぎに、氏が、「サイ」の成立を、「ア^フ クサイ (クサン)。」「(あのねえ。)
 などの言いかたに見られる「クサイ」の「ク」略と見ていられるのが問題とさ
 れる。なるほど、九州の、上来とりあげてきた「サイ」については、「クサイ」
 起源も考えられるのか。「あきらめたよ。」の意の「あきらめた サイ。」など
 を見ていると、ここにも「クサイ」があったろうとはしにくいようにも思え
 る。「クサイ」のもとが「こそは」であることを考えてみるにつけてもである。
 「あるといたら。」の意味で「ア^ッ サイ。」と言ってもいる。これは、「アル
 クサイ。」でもであるのか。しかし、現実の「ア^ッ サイ。」の「サイ」は、
 関東流の「サ」に似たもののようにも思われる。「まあ、いいよ。」の意味の
 「ヨカ サイ。」の「サイ」は、関東流の「サ」によく似たものにとれるありさ
 まのものではないか。)

「サ」に関する複合形の文末詞に、「トサイ」相当かと思われる「トセー」
 がある。岡野信子氏が、唐津市神集島方言の文末詞について教示せられたもの

に、

○ウドン キョーワ キトラン トセー。 (中女→小男)

“うどん、今日は来てないのよ。”

というのがある。岡野氏は、“土地ふうは、「サイ」「セー」に特色づけられていると言ってもよいくらい。”と語られた。

福岡県筑後にも、「サイ」が見いだされる。

○ソガン コトグリャー シットッ サイ。

そんなことぐらい知っているわよ。(夫に何か言われて) (三十歳代女性)

は、久留米の「サイ」である。

筑前にも「サイ」がある。

○ソゲナ モンデ カオバ フイテ キタナサー。

そんなもので顔をふいて、“汚いこと！”

というのは、「サ」文末詞をとらえしめるものではなからう。「汚なサ！」ということではないか。

岡野信子氏の「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)には、

▽モウミタッ サイ。(もう見たんだよ)

▽アイツキヨルッ サイ。(彼奴来てるんだな)

▽キノーイッタッ セ。(昨日行つたんだよ)

などの例が見える。(「サイ」が「セ」ともなっているか。)

「サイ」は、肥前の「サイ」とおなじものと見てよいのか。

大分県下については、今、問題の事象を見いだすことができない。

南九州から、西北九州・北九州にかけての地域に、「サ」音系の文末詞が、以上のように見わたされる。九州東北部方面にはこれがない。中国・四国とつ

ながりあう地域が、「サ」音系文末詞空白の地域である。

もとは、九州に、広く「サ」「サイ」などが見いだされはしなかっただろうか。いずれにしても、近代東京語の「サ」などの入来とは無関係に、土地の方言の「サ」音系文末詞が、当地方にあり得たことかと思われる。「サ」などという文末詞は、諸方言の風土の中にしぜんにも成立し得たものであろう。——「サ」などは、やはり、準感声的な文末詞とも考えられるものだからである。

四 中国四国地方の「サ」ほか

中国地方には、「サ」の問題がすくない。

山口県下では、おもには長門に、問題の「サ」があるか。長門北辺の青海島の調査では、

○スワッチョレ サ。

すわっておれよ。

(ただし、私のカードを検閲して下さった識者は、カードに、「サの言い方なし」と注しておられる。)

などを聞いている。同地で、私はまた、

○マタ キチャッタ サーン。

また来なさったね。

などの言いかたも聞いている。この「サーン」は何か。土地の人は、これを、“あまりよろしくない歓迎せぬことば”だと説明した。等しく「サ」の音を示しても、この「サーン」などは、異物のようである。「サーン」が、「サン」ともある。

○シチャー ナイガ サン。

“あの人はいらない。”(“相手がはぶててしない時に言う。”)

この例文の「サン」になると、これが、東京語の「サ」に似てもいるか。

○トートー チャイター サン。

とうとう泣いたよ。

○ヤ^ーラ^シー サン。

“わるい人！”

などとも言っている。

『山口県方言調査』には、

デキョーサ (出来るさ)

の記事が見える。

広島県下・岡山県下には、「サ」の、問題としうるものがないようである。

山陰になると、出雲には、

○タ^バコ^モ ノ^マニ^ャ イ^ケマ^シェン サ^ー。

たばこも飲まなくちゃいけませんサー。

○エ^ー サ^ー。

いいです。

のような言いかたがある。

『全国方言資料』第8巻の「島根県知夫郡西ノ島町黒木字宇賀」——隠岐——の条にも、

f………… ハラー タッテサー

腹が たってねえ。

というのが見える。

中国域で、とりわけ注目されるのは、鳥取県地方である。『因伯方言考』には、「浜言葉」〈弓浜部〉の、

マー、ミガーヲ大事ニシテ、ナガ生キスーノガ、一番ダサ。

(まあ身柄を大事にして、長生きをするのが一番です。)

というのが見え、また、

アダンマー、ソガナ事、エツタカエ。アノコノ嘘ツキネハ、アキエテ物が、エワエンサ。

(あらまあ、そんな事言つたかね。あの娘の嘘つきには、あきれて物が言はれないよ。)

というの見える。終止形の言いとめを受けむすぶ「サ」の文例が、本書に多く見られる。伯耆・因幡にわたって「サ」が見られる。「……デス サ(サ一)。」などとも言っている。因幡中部域での「サ」の一例は、

○ゲンリョーノ ホーワ トーテ ミラレリヤ サ一。(土地人→藤原)

原料のほうは問うてみられれば？

である。『鳥取県方言辞典 後編』にも、

さ〔感〕 「そーさ」「行くさ」

などとある。

四国では、徳島県下に「サ」の問題がある。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』には、県南の海部郡の「サ」がとりあげられており、

命令の文の末について柔い味を出す

イケサ(行けよ)

一寸オロシサ(荷物を一寸下ろしなさいよ)

とある。吉野川中流域にも、つぎのような「サ」がある。

○スジ ヒートカナ イカン チャサー。

線を引いておかないといけないってば。(小女間)

これは金沢浩生氏の教示されたものである。のちに明らかにするように、近畿には、問題の「サ」がよく見わたされる。淡路や紀州に対応して、徳島県下に「サ」がおこなわれているのは、興味ぶかいことである。——その用法にも、彼我あい通じるものがある。

つぎに、香川県下にも、問題の「サ」があるかもしれない。県西、三豊郡に、

○タベテ ゴー サ一。

たべてごらん。

などの言いかたがあるか。命令一般の言いかたへ「サ」をつけ、「見 サ。」などと言うことも、県下にあるか。

愛媛県下・高知県下には、「サ」文末詞関係のものが、見いだされないよう

である。伊予の南部で、「ココデサイ。」(ここですよ。)などの言いかたがあるが、こういう「サイ」は、——上の例で言うと、「デス」の「ス」と文末詞「ワイ」との熟合になったものである。

五 近畿地方の「サ」ほか

近畿には、詳説すべきものがある。

「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」(『全国方言資料』第4巻)には、

*m*ウーン ダイコマキデ アンーマリサー $\left(\begin{matrix} f \\ \text{アー} \end{matrix} \right)$ オソナルサケ
 うん、 だいこんまきで、 あまりね。 おそくなるか
 ナー
 らね、

*m*ウーン モーサー セッキニ オマハン ……………。
 もうあの、 節季に おまえさん ……………。

などというのが見える。播磨・摂津のうちに、なんらかの「サ」があるか。

私は、淡路北部で、

○ハヨ セー サー。

早くしろよ。(しっこを)

○ポー モッテ イナン カサー。

棒を持って帰らないか。(命令表現) (中女→子中学生男)

などを聞いている。「…………… ヨイ (来い) サー。」など、「サー」は、人を、さあとせかすばあいなどの「サー」であったりもするか。よくはわからない。——命令の言いかたをとりむすぶ、今日の共通語ふうの「サー」と同質の「サー」もあったりするのか。ただ、淡路北部では、短呼の「サ」は聞き得ていないのが、心にかかる。

大阪府下に関しては、今、私に、「サ」の言うべきものがない。「どうどう

シトキマッサー。」(どうどうしておきますわ。)などとある「サ」は、もとより問題外のものである。——「マッサー」で言えば、「サ」は「マス」の「ス」と、文末詞の「ワ」とが融けあったものである。

かつて、大阪府女子師範学校生徒氏から教示されたものであるが、大阪市淀川付近のことは、

○こゝへ来やへんかいさ。(こゝへ来い。)

というのがある。この「サ」は、いま問題視すべきものであろうか。大阪府下も、なお探査を要する。

和歌山県下については、「和歌山県日高郡竜神村大熊」(『全国方言資料』第4巻)の、

*m*ソッデサー

それでねえ、

がある。また、「和歌山県東牟婁郡古座町」(『全国方言資料』第4巻)の、

*m*アー マゴガ デキテノー オトロノコヤンサー

ああ、孫ができてね。男の子だしね……。

がある。さきの「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条には、

*m*コノサーイ

このねえ、

というの見える。——「サーイ」とある。

奈良県下では、南城、吉野郡の東部で、私が調査したさい、

○何々にするのがホンマサー。

何々にするのがほんとだよ。

○ソノフタツダケサー。

その二つだけさあ。

○ミツツシカナイサー。

三つしかないさ。

○コンナ カミ モラウンヤ サ。

こんな紙をもらうんだよ。

○ショメン ダヒテ ミ サー。

書面を出して見ろよ。

○ホン ヨンデ サー。

本を読んでちょうだい。

などの例が得られた。卑近な言いかたをすれば、ふつうの「サ」から、変わった「サ」まで、いろいろなものがここに得られている。「サ」は一元の「サ」であろうか。(あるいは、一元とはかぎらないのか。) いずれにしても、土地の老若男女に「サ」が聞かれた。命令のばあい、「見ナハレ サー。」とともに、「見ナハレ サイ。」とも言われている。土地っ子は、“「サイ」と言う人もまれにある。”と語った。

広く吉野郡下に、命令表現の「サ」、その他の「サ」が聞かれるか。

県北にも、「奈良県山辺郡都祁村」(『全国方言資料』第4巻)での、

*m*ウマイ コト シタサー

うまい ことを したねえ。

など、「サ」が見られる。

奈良県下の、「サ」に関する複合形の文末詞に、「ノサ」「ンサ」があり、「ワサ」がある。

奈良県下の状況は、三重県下の状況によくつづいている。たとえば「ワサ」の使用にしても、彼我同色である。

三重県下は、近畿中でも、当該問題に関して、とくに注目すべき所である。南部の紀州域から伊勢・志摩・伊賀にわたって、「サ」が、いろいろに見いだされる。県西南隅には、ひきうけて肯定する意の「ソ^一 サ。」などの言いかたがおこなわれている。尾鷲市のことばには、

○コリャ アシノー サー。

これは私のさ。(やや反動的)

などというのがある。志摩には、

○シンバイスル モンデ サー。

おまえが心配するからさ。

がある。伊賀には、

○ニャンコ フンズケタヨーナ コエ ダシテ [↑]サー。

猫を踏んづけたような声を出してさ。

などの言いかたがある。伊賀で、「サ」は頻用されている。伊勢市での例は、

○ミッツ チガウダケヤケド [↑]サ。

年は三つちがうだけだけれどさ。

などである。伊勢、鈴鹿市方面の例は、

○ユーテ キタリ スルモンデ サー。

へたに言ってくるものだから。

などである。(佐藤虎男氏の教示による。)氏は、

○アノ ナー。ソレガ サナー。

あのね。それがね。

などの言いかたも教示された。

中野朝生氏の「北牟婁地方の助詞について」(『三重県方言』第8号)には、
「いけないわよ」の意の、

アカンガサイ (中)

が見える。「サイ」は、「サ」に相当するものであるのかどうか。

三重県下での、自由な「サ」のつかいかたを整理してみる。志摩での、

○コートーグライナ モンヤ サー。

(学校へは行くといっても) 高等小学校ぐらいなもんだよ。

など、指定断定の助動詞「ヤ」のむすびを受ける「サー」が、一つ、目だつ。

○ワシラノ コトバ アキマヘンノヤ サー。

私らのことばはつまりませんのですよ。 (老女→藤原)

は、伊賀の一例である。つぎに、命令表現をとりむすぶ「サ」が注意される。「来い サー。」「ハイ セー サー。」(早くしろよ。)といったあんばいである。

○アンジョー セー サー。

ぐあいよくしろよ。

は、伊賀の一例である。つぎに、

○マー キータッテ サー。

まあ聞いてやってよ。

など、依頼表現をむすぶ「サー」がとりあげられる。——この種のものも、「～てください(おくれ)」の意に近いものとすれば、けっきょく、命令表現をとりむすぶ「サー」によくつながるものと見られることになる。

三重県下に見られる、「サ」に関する複合形の文末詞には、「ンサ」があり、「ワサ」がある。「ワサ」のおこなわれることは、かなりいちじるしい。

○エー ワサ。

いいわよ。

○オンナモ センナン ワサ。

女も“せなければならん”。

といったような調子である。

三重・奈良の「ワサ」を聞いては、私は、紀州の「ワダ」を思いだしもする。——紀州内では、「イッコモ ナイ ワダー。」(p.404)などと言われている。

なお、「カサ」という複合形文末詞が聞かれもする。『三重県方言資料集 志摩篇』には、

あるかさ あるものか(鳥)

などに見える。

丹後に、

○………… オータラ サー。

…………会ったらさ。

などの言いかたがある。

榎垣実氏の『京言葉』には、

エと同様の意味でサを使ふ事もあるが、今は余り使はなくなつた。エに較べると語気が甚だ強い。

なんやいサ (何だね!)

あらへんやんかいサ (ないぢやないの!)

とある。

今日、京都府下の一般には、どの程度に「サ」ことばがおこなわれているのであろうか。「何々しまっ サ。」(何々します ワ。)となっているのは、今、論外である。

滋賀県下には、「サ」がかなりよくおこなわれているのか。旧の滋賀県大津高等女学校が製作した『正しい日常語』(昭和18年9月 岩本一男氏主宰)というのには、

マットンサ
マッテーサ 待つて下さい

というのなどが載っている。

イヤイサ
イヤヤワ いやです
イヤヤシ

というのも載っている。

県下の諸方言文献にも、この種の「サ」の指摘がある。佐藤虎男氏は、「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」(『国文学攷』第十七号)で、「滋賀県東辺の状態」を説き、日野町の方言につき、

○ヒャクショーフ ヨー ヌーテナハル ワサ。 (中女→母)

○ホー カイサ。そうなのかい。 (初老女→中女)

などの例をあげていられる。

筧五百里氏は、日本放送協会編『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭和31年9月）の中の「岐阜・滋賀」の記事で、民謡に、

大津そーやがさ、小松の うら言葉 彦根ないない、
 (そうですヨ) (我) (応答の辞)

というのがあることを示していられる。

「サ」は、単純形で、あるいは複合形で、かなり自由に用いられているようである。

六 中部地方の「サ」ほか

中部地方でも、まずは全般にわたって、そうとうに、「サ」を見いだすことができる。他地方にくらべて言えば、中部地方は、概して「サ」のよくおこなわれる所と見られようか。

福井県下には、「サ」のかなりいちじるしいものがある。越前平地部では、

○アンマ アゲヨ サ。

お菓子をあげよう。

などと言い、山地部では、

○ホンデン サー。

それだからね。

などと言っている。

『福井県方言集』には、「イコサー（行かうよ）」の「サー」についての、つぎの記事が見える。

「サー」は「よ」と「さあ」の両意を含む感じがする

石川県加賀の白山麓では、

○イーヤ ソレガ サ。

いや、それがさ。

などの言いかたがおこなわれている。『松任地方の方言』にも、

いこさ 行きますえう

などとある。

能登半島西岸での「サ」例は、

○コレ ミナ タベマッシエ サー。

これをみんなおあがりなさいな。

○アガッタラ アゲル トサー。

上がったらあげるってよ。

などである。愛宕八郎康隆氏の教示せられた能登半島東北部内の例は、

○バーバ ゴザイ サ。

ばあさん、来なさいよ。

である。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

f………… タンボ キッタモンサ

田を 耕したものです。

というのがある。

富山県下では、その東西に、「サ」ことばが見いだされる。富山市近郊での
実例は、

○コドモ ヒトリ カカエテ サー。

子どもを一人かかえてさ。

○人の気に入らんことは ユワン ツモリジャレド サー。

…………言わないつもりだけれどさ。

などである。

全般に、自己の思いを言う表現での「サ」が多かろうか。

新潟県下は、中部地方内でも、別して「サ」のさかんな所のようにである。越後でも佐渡でも、「サ」ことばがよく聞かれる。

○リョーシンデモ イキテ イナリヤ ハナシアイテダケデモ サ。

両親でも生きていなさりゃ、話し相手だけでもね。

は、越後西南部での一例である。

○オレモ イク サ。マッテレ。

わしも行くさ。まってる。 (くだもの屋主婦)

は、新潟市内での一例である。

佐渡での「サ」のおこなわれかたには、まことに自在なものがある。まず、

○アレ ミー サ。

あれを見ろ。

○ソナ コトー センナ サー。

そんなことをするなよ。

などと、命令表現に「サ」のあらわれることが多い。

○ヨッテ イカンシ サー。

寄って行きなさいよ。

○コンシ サー。

来なさいよ。

などとも言っている。佐渡の東南部のほうにも西北部のほうにも、同様に、この種の言いかたがおこなわれている。川島主税氏の「新潟県佐渡郡加茂村方言」(『方言誌』第十八輯)には、

フデハ、ドコサー。 筆は、どこです。

などの言いかたがあがっている。

佐渡で、

○ハヨー イカン カ。

というような表現に、「サ」を用いることも、よくおこなわれている。『全国方

粟餅搗いたども くんねとサイ
 おらも 搗いたてて やらねとサイ
 サイサイささぎの花だとサイ

とある。

押見虎三二氏が、かつて「(新潟県)秋山郷方言の語法資料」というプリントを恵与せられた。その中には、

○ダレカガ フルッタト オモーデモソ。

誰かが 拾つたに違いないと 思うけれどもさ。

というのがある。「～デモソ」が、「～けれどもさ」と言いかえられている。「サ」の音転の「ソ」がありうるのか。

さて、新潟県下の、「サ」に関する複合形の文末詞、いくらかが注意される。「カサ」(「カサン」も)があり、「カイサ」があり、「ンサ」があり、「トサ」があり、「ガ(ガ)サ」がある。「ガサン」もある。

○ナンツータッテ コレガ イチバンラン サ。

何といったってこれが一番ですよ。

は、「ンサ」の一例である。

○アエ ソーラ ガサ。

はいそうですよ。

は、「ガサ」の一例である。(両例とも、上記の押見氏論文による。)複合形になお、「コテサ」というのもあり、「ワサ」というのもある。

小林存氏の『越後方言考』(高志社 昭和12年11月)には、

モーサ [採集] 広瀬村誌 [語義] 強く肯定する助辞「よ」と訳してよい場合がある [説明] その地方の童謡にサンギサンギ(驚々)首伸ばせ、腹が減つて伸ばされない、田螺拾つて喰へや、脚が汚れるモーサ」云々とあるので知つた時芝居の荒事に付きものゝ阪東言葉の系統モサがこゝにあると珍らしく思つたが、その後岩船郡三面村から丹田二郎君の報告を得て分布の斑に聊か驚いた、尤も同地のモサは「カモシ」といふ風に結果を予

想した疑問を含んである〔用例〕明日お前は山へ行くモサ〔分布〕そんな訳。

との記事が見える。

越後内で、ことばの男女差の、かならずしも明確ではないことが多い。そのような環境の中で、「サ」ことばは、男女に、広くおこなわれていよう。

新潟県下で、「サ」の用法の広さが認められる。いったい、起源的には、「サ」は、どういう用法のものだったのだろうか。自分のことを言う「サ」、相手に言いかける「サ」、いずれがさきのものであったろう。

相手に言いかける「サ」の用法が、原始的ではなかったろうか。その「サ」は、「ソラ！」といったようなものとあい近いものかもしれない。

岐阜県下を見るのに、飛騨にも美濃にも、よく「サ」がおこなわれている。飛騨高山市の一例は、

○ドーカ タノム サー。

どうかたのむよ。

である。飛騨・美濃ともに、「ソーヤ サ。」などの言いかたをよく見せている。土田吉左衛門氏の『飛騨のことば』には、

そーやさな(句) そうよ。そうですよ。(下馬瀬)

などの言いかたも見える。

美濃北部での実例は、

○マッタク サ。ナンデモ ソーヤ デー。

まったくさ。何でもそうだから。

などである。上例の、私のカードを検閲して下さった土地の識者は、「マッタク サ。」について、「小学生を除く全般におこなわれ、盛んであって、中品。」と注記していられる。この地で、「サ」を、男女とも言っており、かつ、“年寄りがおも”だともいう。

『岐阜県方言集成』に、郡上郡のことば、

うんさ〔感〕 さやう。
 というのがあがっている。

愛知県下にも「サ」がおこなわれているが、その度あいには、岐阜県下のにくらべて、どのようなのであろうか。渥美半島での一例は、

○ニンゲンワ トリ[〰]ヨ トリ[〰]ヨデ サー。 (老女→青女)

人間は(他人の気もちを)とりようとりようでさ。

である。同地の、

○クヤシン サ。

食やしないさ。

は、やや反抗的な表現をみちびく「サ」である。関東流の「サ」に変わらないものが、三河地方にもおこなわれている。

かつて私が、三河奥の田口村に出むいたさいには、

○ソ サノ。

そうさねえ。

○ソ ソノ。

などの言いかたが聞かれた。「サ」は、「ソ」ともなっているのであろうか。——さきの新潟県秋山郷のことも、ここに思いあわされる。(p.225)

愛知県下に、「サ」に関する複合形文末詞の「トサ」「ワサ」なども聞かれる。

静岡県下は、広くに、「サ」が認められるようである。御前崎近くでの例は、

○シツカリ シ[〰]テル モンダデ^ノ サ。

しっかりしてるものだからさ。

○ワタジャー ソ オモッテ^ノ サ。

わたしはそう思ってさ。

などである。県下、男女に、「サ」がよく用いられている。

『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条には、

mソーソー (フーン) ソーダンサー
 そうそう。 (f) そうだよねえ。

との言いかたが見える。「～ダンサー」が注意される。「ン」は、しぜんに挿生したものであろうか。

山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』にも、

クレンタダンサ (42くれたんだがさ)

というのが見える。

なお、山口氏の前著には、

アールサイ (453), ウマカナイガサイ (823)

とある。——「サ」の「サイ」ができているのか。

鈴木脩一氏の「静岡県志太郡
榛原郡川根地方方言」(『方言誌』第十輯 昭和9年5月)には、

コドモヂャ ナイダデ ソノクライノコター デキルサン。

子供ぢやあるまいし、その位の事は、できるさ。

というのが見える。ここには、「サ」の「サン」があらわれている。

本県下にも、「トサ」などの複合形が認められる。

長野県下にも、「サ」がよくおこなわれているらしい。諸方言書が、これをとりあげている。『信州上田附近方言集』には、

イイッサ いよ (女語)

イクッサ 行くよ (女語)

とある。なお、「イイッサ」など、「サ」の前に促音のあるのが、当県下での言いかたなのか。佐伯隆治氏も、「長野市及び上水内郡方言集」(『方言』第四巻第十一号 昭和10年12月)で、

イイッサ いいよ「そんな事はもうイイッサ」

との記事を見せていられる。『信州上田附近方言集』には、

ソーダッサ (佐様にてあるよの意)

などともある。

斎藤武雄氏は、『下高井の言葉』で、

アンサ なあ……。話の始めに人の注意を向けさせる言葉。しかしそんな意味でなく、ただその時の調子を整えるために使うこともある。

と説いていられる。「アンサ」の熟用には、「サ」が、いかにもよく土地ことばとして根づいていることを、ただちに悟らせるものがある。

青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』（信濃教育会出版部 昭和23年10月）には、

上小地方では、

いったっけさ (行ったっけ)

とったっけさ (取ったっけ)

あったっけさ (在ったっけ)

のように、回想の意を表わす「たっけ」に軽く続けて用い、ある親しみの情を表わします。

との記事が見える。県下に、「サ」のつかいかたの異色が、さまざまに認められるようである。

私が県北西辺で聞きとめた「サ」の実例をあげてみる。

○まつのは、ソノ キモチガ サ。どうもよくない。

まつのは、その気もちがさ。どうもよくない。

○ソー サエイ。

そうさ。

○オメサマ、………… ヤイテ サエイ。

あなた、…………焼いてね。(説明) (老女→藤原)

「サ」とともに、「サエイ」が聞かれた。——「サ」の言いかたが「サエイ」にもなっているのらしい。土地の人は、「サエイ」と「サ」とおなじ。”と言っ

ていた。“山間地帯の人が、よく「サエイ」を言う。”と説明する人もあった。
長野県下に、「サ」に関する複合形文末詞の「ヨサ」「ワサ」などがある。

山梨県下にも「サ」がよくおこなわれているらしい。県西南部での事例は、

○ソ^ーサ。ムリ サ。

そうだよ。むりだよ。

○ソ^{ンナ} コタ チッ^{トモ} イワ^ン サ。

そんなことはちっとも言わないよ。 (中女→藤原)

○ソ^ー サ^ー。

そうさ。 (中女→中男)

などである。——「サ」が、男女に、よくおこなわれている。

『全国方言資料』第2巻「山梨県北都留郡上野原町西原」の条の「サ」例は、

*m*ソ^ーサ^{ナー}

そうだねえ。

などである。(上例には、「サナ」の複合形文末詞が認められる。)

七 関東地方の「サ」ほか

関東地域には、「サ」文末詞の安定勢力が認められる。まずは、「サ」の本場が関東であるとも言うことができよう。

神奈川県下に、「サ」がふつうにおこなわれている。日野資純氏は、「方言文法論の実践—相模方言を例として—」(『駒沢大学研究紀要』通巻第17号)の中で、「サ^ー」について、「イ^ヤダ^サ」などの例をあげていられる。

県西部内での「サ」例は、

○オヤ^モ アル^ン サ。

おやもあるしさ。

などである。この地方で私が出あった男青年に、“男は、「サ」をひとつも言わ

ぬ。オト^ワ マチ^ガッテモ ツカ^ワネー。”と言う人があった。また、別の中年男性に、“「サ」を イ^ワネー サ^ー。アンマ^{リー}。しゃれた人が「サ^ー」を言うだけだ。それと、子どもが……。”と言う人があった。

いわゆる東京弁に、「サ」を見る。

○イ^コート^トモ^ウン^ダケ^ド, ツ^イ サ^ー。

行こうと思うんだけど、つい、さ。

などと男性が言い、

○ア^ソビ^ニ イ^ラッ^{シャ}イ ナ^ンテ サ^ー。

あそびにいらっしゃいなんてさ。

などと、女性も言う。どちらかというところ、男性がわに「サ」がよく用いられがちであろうか。とくに、近來の若い男性たちは、ひとことばごとに「サ」の言いかけをし、その連発のいちじるしさが耳だつ。

東京弁での文末詞「サ」の用いかたは、広範自在である。「どうどうしてサ^ー。」などと、「して」の下に「サ^ー」を用いることがいちじるしいかとおもうと、名詞形の言いとめの下に「サ^ー」を用いることもいちじるしく、「チッ^トモ サ。」などと、副詞の下に「サ」を用いることもふつうである。「が」・「の」・「に」・「を」、その他のてにをはの下に「サ」をおくこともまた自在である。動詞や形容詞の言いきりの下にも「サ」をおけば、「行かない サ。」など、助動詞のしめくりの下にも「サ」をおく。

「ノサ」「トサ」という複合形も見せれば、「カサ」という複合形も見せる。こんな会話がおこなわれる。

○レ^キシ。
 ↓ 歴史?
 ○ウ^ン。
 ↓ うん。
 ○ソ^ー カ^サ。

そうか。

これは、若い男性二人の会話であった。「カ」のもとへも「サ」をつけるほどなのは、「サ」頻用の明証ともなる。

「テサ」「テバサ」という複合形もある。

「サ」の訴えかけには、特色がある。総じては、男性的な調子が出がちか。「ソー サ。」の応答表現など、ずいぶん男性的である。これにはやや、横柄なきみも見られようか。(こういうさい、「サ」が「そうだ。」の「だ」にも該当するように見られるのは、おもしろい事実である。一方、「そうだ サ。」の言いかたは、今日、東京弁に慣用的ではない。このことは、九州弁で、「ソー タイ。」<そうだ。そうです。>の言いかたがなされて、「ソー ジャ タイ。」などと言われてはいないのによく似ている。「ソー タイ。」のばあいも、「タイ」が助動詞的でもある。)東京弁の「サ」表現の気もちには、単純な訴えかけというよりも、おさえをきかした訴えかけというものが感じられる。そのおさえのきかせかたが、しばしばつよい自己主張の表現ともなり、さらにはまた反抗気分の表現ともなる。「サ」には、「自己を相手にさしこむようなひびきがある。」とすることもできようか。東京の言語風俗に、「サ」の風俗があるとすることもできようか。

柳田国男先生は、東京の「サ」を、「しか言う」の「しか」の「サ」と見ていられる。「サ」について、“その起源は、鎌倉時代にさかのぼる。”と説く人もある。私は、はじめにもふれたように、「サ」に関して、感声起源のばあいを、一般論的に考えようとしてもいる。

東京都に属する伊豆諸島にも「サ」があるのを、ここに見ておきたい。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条に、

f…………… キガエガ アリャ シズサ

着替えが ありは しないしね。

mオラー ケーボードンノ ヤクニン シテーチサー

わたしは 警防団の 役員を していたからね、

などとある。同巻「東京都三宅村坪田」の条にも、

m コメワ タダ チーンドッコナ ア ナガイテサー
米は ただ 少しばかりね 流してねえ。

などとある。「三宅村坪田」の条に、

m ホンデオサ
それでね

とあるが、この「オサ」は何であろうか。大島一郎氏は、「三宅島及び御蔵島方言の語法」(『国学院雑誌』第五十八卷第六号 昭和32年10月)で、

坪田方言では、[ワガモンダジサ] (藤原注「おれの物だよ」) である。
などと記述していただける。

八丈島方言について、私が、広島県下で、八丈島から入婚している女性から聞き得たものには、

○ソリャ ホントー サ。

などの表現例がある。八丈島方言に関する先輩の調査記録にも「サ」が見え、『八丈島教育会報』第二号所載の「口語法取調 音韻調査」にも、

ウグワ ンエラケ人デジャーショクナケコトガアロドァーンテ我々ワ無理ワ
ニャーサ

(アナン大家デサエ知ラナイコトガアルノダカラ我々ワ無理ワナイサ)
などの記事が見える。

千葉県下は、「サ」のさかんな所である。命令の言いかたのあとにも、「サ」の訴えかけがなされている。私はかつて、房総半島、上総の安房ぞいの地域に一週間の調査をして、老若男女が「サ」をよくつかうのを見た。小学生の男子なども、「サ」を、きわめて頻繁に用いるので、その母おやも、“「サー」「サー」と言って。”と、私にあいさつするありさまであった。そこでの「サ」の例は、

○ショーガネー サー。

しょうがないさ。(あきらめのことば)

○ソー イッテ ヤンベ サー。

“じゃあ、私はその用件を伝えてやろう。”

などである。

○ココエ カケヤッシャエ サ。

ここへおかけなさいな。

は、安房内での一例である。——これは、おもには農家の老人たちの言うことばづかいである。

○ヤスンデバカリ イルデッ サ。

やすんでばかりいるからさ。

これは、九十九里が浜の中ほどで聴取した一例である。「サ」の前に促音のできてるのが注意される。このようなことは、関東域内にはありがちか。

千葉県下に「サ」に関する複合形の「トサ」がある。『千葉方言 山武郡篇』には、

モドッたっさ 戻つたとさ

オワッたっさ 終つたとさ

との記事が見える。「モドッたっさ。」「オワッたっさ。」の「たっさ」は、「たトサ」からのものか。同書にはまた、

死ンダッちさー 死んだとさ

というのが見いだされる。

埼玉県下にも、「サ」のおこなわれることがいちじるしい。ところで、県東部の幸手町に行った時は、“「サ」は、男はあんまり言わぬ。”と、人々が、異口同音に言った。私の観察でも、文末詞「サ」と「チャッタ」ことばとが、若い女性たちに、あいともによくあらわれるのをうかがうことができた。しかし男性も、

○カミガ ナクナッチャッテ サー。

紙がなくなつてさ。

などとも言っていた。中学生男子も、

○カックラスト サ。

「なぐる」とさあ。

などと言っていた。しかし、なお、“「サ」はむかしから言う。女が多くつかう。”などと言う人があった。

『埼玉県秩父郡両神村』（『全国方言資料』第2巻）の「サ」例は、

m………… ズーット アカシガ ツイテサ

ずうっと 灯火が ついてさ、

などである。

群馬県もまた、「サ」のさかんな所である。男女ともにこれを言う。

○ユー サ。

言うさ。

老男から老女に、このようにも言う。

○シラネー サ。

知らないさ。

これは、老男の私に対する発言である。

小男などでの慣用表現、

○ダニッ サ, ダッ サ。

“すごいだろう？（いばって）”

○ダッ サ。

“すごいだろう！（と、えらぶる。）”

というのは何か。私はこれを、前橋市をはなれての東北郊で聞きとった。

中沢政雄氏は、「群馬方言概説」（『季刊 国語』昭和22年冬季号 3）で、

吾妻郡嬭恋村多野郡万場町方面では、「コレダッサ」「ソーダッサ」

とするしてられる。桐生市方面も、「サ」のよくおこなわれる所のようにである。

「サ」に関する複合形の文末詞に、「ンサ」「カサ」などがある。

○ユ^ーガ^タ イ^ッタ^ン サ^ー。

夕がた行ったのさ。

は、「ンサ」例である。

栃木県下の「サ」を見る。

○アル^サ。

あるさ。(かるく抗弁)

○カ^タホ^ー オ^ッチャ^ッタ^ケド^サ。

片方を折っちゃったけどさ。(老女→藤原)

などと言われている。「サ」は、県下に普遍的であろう。

「サ」の「サイ」もあるか。大橋勝男氏の、「那須郡黒磯町大深堀方言」の調査によれば、

○ヘ^ーキ^{サイ}。(初老女→大橋氏)

などの例が見られる。栃木市大皆川にも、「サイ」があるという。県下に、「サイ」の「セ」もあるのか。

茨城県下も、南北に「サ」が認められる。

○シ^キト^リ サ^ー。

引きとりにさ。(うちのお父さんも引きとりに行ったという話し)

は、南部での一例であり、

○チ^チノ^キョ^ーリ^ノ ヒ^トガ^サ。

父の郷里の人がさ。

は、北部での一例である。県下に、「サ」の「セ」もあるか。

八 東北地方の「サ」ほか

東北地方も、全般に、「サ」のよく見られる所である。

福島県下の東西に「サ」が認められる。

○コトッパ ワル[ü]ク[ü]テ サー。

ことばがわるくてさあ。

は、会津北部での実例である。

○ヨカンベケドモ サ。

よかろうけれどもさ。

は、県東北隅での一例である。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条には、

f ザスキ イヤダドモ イワレメーシサ
座敷は⁵⁾ いやだとも 言われまいからさ⁶⁾、

5) 「自分が座敷に行くのは」の意。

6) このあとに「適当に理由をもうけて」の意の語句があればよく通じる。

とある。

『福島県方言辞典』には、

サは事の当に然るべき時に用ゐられ、……。併しサはあまり用ゐられない。

などとある。しかし、同書に、

アソベサ [句] あそぼうよ 北中会

との記事も見られる。

県下の「サ」に関する複合形の文末詞に、「ノサ」「ト(ド)サ」などがある。

『会津若松市方言集稿』には、

アッカセ ないよ

とある。複合形「カセ」文末詞は、「カ」と、「サイ」の「セ」との結合になるものか。『全国方言資料』の第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条にも、

f…………… メーニダカシエ

前であったかね、

などとあって、「カシエ」が見られる。『会津方言集(増訂版)』にも、若松地

方の、

ナンボ、カンゲーダッテ、ニサニ、コノワゲガ、ワガッカセエ。(いくら考へたって、貴様にこのわけが分るものか。)

との言いかたが見える。以上、「カセ」「カシェ」などのばあいにはあるけれども、「セ」「シェ」に、「サイ」が認められるか。「サ」文末詞の変形に「サイ」があるということなのであろうか。

宮城県下に「サ」がよくおこなわれている。南部の一例は、

○シャーネッ [↑]サ。 シャーネッ [↑]サ。

知らない。知らない。

であり、北部の松島湾岸の一例は、

○ンダ サー。

そうだ。

である。石巻弁では、かつて私は、

○オレモ サッ。

おれもさ。(私もですよ。)

というような「サッ」を聞き得たように思う。松島湾岸では、「ジ[i]テンニ [i]ワ アッ サー。」(辞典にはあるさ。)のような「アッ サ」の言いかたも聞いている。

県下で、「サ」は、老若男女におこなわれていよう。

『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条に見える、

m………… ソステ ザリ ツメテ ヒジョセガワラカラ スケラカサッ

そして じゃりを つめて 広瀬河原から 馬につけさせ

タモノッシェー

られたものですよ。

の言いかたでの、「シェー」は、「サ」の変形の「サイ」の、なまりの形であらうか。——(所によっては、「サ」>「セ」もあるのか。)

本県下の、「サ」に関する複合形の文末詞に、「ノサ」「トサ」がある。

○ドコイ イク[ü] ノッサ。

どこへ行くのさ。

は、仙台市内での「ノサ」の一例である。——「ノッサ」とあるのが注目される。「いやだ。」というのでも、「ヤンダッ[↑]サ。」と言ったりしている。）

山形県下でも、「サ」が、およそ県下の全般におこなわれている。『山形県方言集』には、「次郎さん学校さあべさ。(次郎さん学校に行きませうよ。)」などの例が見える。

米沢在の一例は、

○ソーデモ ナェッ サ。

そうでもないさ。

である。山形市を出て西南方での一例は、

○キョーワ ドサモ デカケネーベッ サ。

きょうはどこへも出かけないでしょう？

である。

庄内地方にも「サ」がおこなわれている。三矢重松氏の『庄内語及語釈』には、

さうがさ (サウカネ)

そでね_エがさ (サウデナイカナ)

そだつて_エさ (サウダトモヨ)

とても来_エうばさ (トテモ来バコソヨ, 来ルモンカ)

などの例が見える。——複合形の言いかたも見えている。『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条には、

mエサ ガキドモダ ガタガタ エルモンダモノ マジ ケーッタホ

家には こどもたちが 大勢 いるものだから まあ 帰ったほうが

エサー

いいだろう。

などとある。

「サ」に関する複合形としては、「トサ」などがあげられる。（「トサ」が「ドサ」にもなっている。）

秋田県下にも、「サ」がよくおこなわれている。当県下に関しては、言うべきことが多い。

『秋田方言』も、

今来[△]んにさ[△]あ（今来るになあ）

などの例をあげており、河辺郡の例としては、

おれ[△]あど[△]さ〔河〕おれとこ[△]さ

などというのもあげている。私が、北部の大館で聞き得た実例は、

○ンダ[△]サー。

そうだよ。

○ンデ[△]ネ[△]サー。

そうではないよ。

などである。

○ハヤク〔ü〕アンベ[△]サー。

“早く行かないか。”

は、男鹿半島での一例である。

『秋田方言』の記事に、「んだんべた」（さうだらうさ。）というのも見える。平鹿郡のことばであるという。「サ」が、「タ」になっているのであろうか。

「サ」の変形の「サイ」も、県下に見いだされる。たとえば、さきの男鹿半島で、

○ソ[△]ンタ[△]ニ〔i〕キ〔kçi〕モノ[△]キ〔kçi〕タ[△]ラヌギ〔gçi〕ベ[△]ーサ[△]ェ[△]ー。

そんなに着ものを着たら暑いでしょう？

○ソ^ナタニ^[i] キ^[kçi] モノ キ^[kçi] タラ キューク^[ü] ツ^[ü] ナベ
サエアー。

そんなに着ものを着たらきゅうくつでしょう？

などと言っている。私はまた、田沢湖近くの生保内でも、

○ム^[ü] カシ^[i] アッタ トサエアー。

むかしあったとき。

などの言いかたを聞いた。(この「サエアー」は、「トサ」の言いかたの中にはあるが。)

今村義孝氏の『秋田むがしこ』には、文末詞「セ」の実例が多い。「ところ
がセ。その牛コど豚と取替だなた。」などである。この「セ」は、おそらく、
「サイ」からきたものであろう。同書に、

東滝沢の大水口から五十土^{い かつ}さ 行^えく途中、^(小さい)ベヤ^(あつたがなあ)って森コ あっではヘエ、
その森コ もっとも^{おつ}っと、大き森^{おつ}だったとセエ。

などともある。

湯沢幸吉郎氏は、「サッサト書^セゲセ(ジャ)。」などの「セ」「シャ」につい
て、「共に勧める意があるから、これがつくと単なる命令ではなくなる。」
としていられる。(「語法上から見た秋田方言」『国語史概説』)

「ヘエ」も、「セー」の一態であろう。県下に、「シェ」の言いかたも多いよう
である。さて、『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に
見える、

mナーニ ソレ ナー…… ソーユー ハナシダバ ネーノ ダンダンニ
なあに それ そういう 話は ないね。 したいに
フトリシテ イナクナッテ ナッタモンダベ²⁾シェー
ひとりでに いなくなって なったものでしょう。

2) 「イナクナッテ」と言いさして、もう1度言いなおした。

では、「シェー」の、「サイ」起源のものであることが、思われやすからうか。

『秋田方言』には、「せぁ」がとりたてられており、しかも、

せぁ は強く言ひ放す心持で「さ」に似てる。

との説明が見える。実例としては、

それわどーでもえ[△]せ[△]ぁ (それはどうでもいゝさ)

などが見える。「せぁ」は、県下に広くおこなわれているもののようである。私が、さきの生保内で聞いた例は、

○ンダ[△] セァー。

そうだよ。

○ソシ[i]テ[△] セァー。

そしてさ。

などである。当地では、つぎの言いぐさを教えられもした。

アキタノ[△] セァー。セセモチ[△] セァー。セセツテ[△] セァ。セセクッタ[△] ト
セァ。(最後のセンテンスのアクセントは失。) (秋田のさ。ささ?餅をさ。搗いて
さ。食ったとき。)

こうして、人々によく用いられている「セァ」は、上来の「セ」の一変態であろうか。「セ」となったものが、文末の特定の訴えことばとして頻用されるうちに、人々は、この「セ」の言いかたに、しぜんに力をこめるようになり——すなわち、訴えの効果を大ならしめようとする発言活動をするようになり、「セ」を「セァ」にしたのではないか。[a]音をつけ加えることにより、「セ」の[e]母音は、大きく開かれることになるので、そこに、訴えの効果の大きもたらされるのであろう。人々は、しぜんのうちに、「セァ」というような独特の訴え形式を完成したものと見える。

『秋田方言』に見える、

あのし[△]え あかね。

などの「しえ」は、単純な「シエ」にほかならないものであろうか。(この「シ」に、「もし」の「し」を思いみることなどは、おそらく不要なのであろう。)

本県下の、「サ」に関する複合形の文末詞には、「トサ(ドサ)」「ネサ」がある。「ネサ」は、特筆すべき文末詞である。中山健氏は、「ネサ」について、

“秋田でいちばんよいことば。”と言われる。ところで、「サンビ[i] $\overline{\text{ネサ}}$ 。」(さむいですね。)は「サンビ[i] $\overline{\text{ネハ}}$ 。」に“ひじょうに近い。”という。ただし、人は、“「 $\overline{\text{ネハ}}$ 」は多く用いられ、「 $\overline{\text{ネサ}}$ 」の用いられることはすくない。”とも言う。いずれにしても、「 $\overline{\text{ネサ}}$ 」「 $\overline{\text{ネハ}}$ 」は、おもに秋田市内で用いられることばのようである。中山健氏は、「 $\overline{\text{ネサ}}$ 」は女ことばであり、これに相当する男ことばは「 $\overline{\text{ネシ}}$ [i]」であると言われる。

岩手県下にも、「サ」の使用のいちじるしいものがある。早く、『東北方言集』も、「ゆかう[行]」に関して、岩手県中部地方の「あべさ」をあげている。私がとらえている中部東寄りでの「サ」例は、

○ソ $\overline{\text{サ}}$ サ。ソ $\overline{\text{サ}}$ サ。

そうさ。そうさ。

○カネ $\overline{\text{ド}}$ マチ[i]ガッテ $\overline{\text{サー}}$ 。

金とまちがってさ。

などである。この地でたしかめたところ、人は、「オレ $\overline{\text{モ}}$ イグ[ü] $\overline{\text{サー}}$ 。」(おれも行くさ。)について、“前からあったことば”との説明をしてくれた。

県下南部の例は、『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条の、

*m*ナンダツ ゴター ネガ ナニー ヤスイ モノ アッタラ カッ
何という ことは ないが、 なにか 安い 物が あったら、 買っ
テ クルッサー
て くるよ。

などである。水沢では、私は、老女から、

○コ $\overline{\text{タツ}}$ [ü] $\overline{\text{ナンカダッタラ}}$ $\overline{\text{サー}}$ 。

こたつなんかだつたらね。

などの言いかたを聞いたことがある。

県北の実例は、

○ジド^ーシャ イグ[ü] サ。

自動車が行くさ。

などである。『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、

*m*オドゴヨリ オナゴア ツラガッタサ

男より 女は つらかったね。

などとある。

小松代融一氏の『岩手方言の語彙』には、「旧南部領」の、

イツタサ 行きなさい

キタサ 来なさい

などが見える。——特異な命令表現法「来た」などの下に、「サ」が用いられているのか。

さて、当県下にも「サイ」がある。さきの「種市町中野」の条には、

*f*ソー ソ ソーサイ

そう そう。

とある。

小松代氏の前引書には、やはり「旧南部領」の所で、

アノセア (あのね)

アノシェア あのね

などともある。ここに見られる「セア」(シェア)も、まえに秋田県下で見た「セア」とおなじものではないか。つまり、「セ」の訴えが、「セア」(シェア)形に発展せしめられたものと思われる。文末詞での、この種の、訴え効果の拡充は、まことに注意すべきものである。

つぎに、「サ」に関する本県下での複合形の文末詞には、注目すべき「ナサ」がある。花巻弁では、

○アノ ナサー。

あのね。

○サム[ü] ナサー。

さむいな。

などと言われている。これらは、同輩間で、あるいは目下に、言われがちのものである。『岩手方言の語彙』の「旧南部領」の部には、

アノナサッ (あのね)

が出ている。ほかに、「ノサ」の複合形がある。問いにも説明にも用いられている。つぎに、「ト(ド)サ」も見られる。

東北地方の最後に青森県を見れば、本県下には、広く、「サ」がよくおこなわれている。県東部域のいわゆる「南部」地方から見ていこう。その南辺での事例は、

○ア, ソー サ。 (中男→藤原)

あ、そうさ。

○イダ サ。

行く。

などである。下北半島での一例は、

○マダ エガベ サ。

まだいいじゃないか。(帰る客人に言う。)

である。

津軽域にも、「サ」がよくおこなわれており、前記例同様、「〜ベ サ」もよくおこなわれている。

○マテ マテ。ソ[↑]ンデ ネーベ[↑] サ。

まてまて。そうでないだろうよ。(制止する。) (中男間)

は、その一例である。「ソ[↑]ンダベ サ[↑]。」(そうだろうよ。)などが、本地方の車中でもよく聞かれる。つぎに、津軽平野の木造町での調査例をかかげる。

○ド[↑]ヨー[↑]フ ウ[ü]シ[i]ア ヒ[i]=[i] サ。

土用の丑の日にさ。

○ワー ココニ[i] ケーサン シ[i]タ ワケ サ。

私はここに計算したわけさ。

後者例については、カード検閲の識者は、“最後の「サ」が気になる。あまり出ない「サ」である。”と注してられる。(この人には、のちに述べるように、「サ」に対する「シ[i]」を思う心がある。)

本県下での「サ」の用法は自由であり、問いにもこれを用いれば、命令にもこれを用いる。

青森県下に、注目すべき「サイ」がある。「南部」例は、

○食うのを マータッタ サイ。

たべるのを蒔いたさ。

○ダエーモ イネガッタベ サエイ。

だれもいなかったらう? (“それごらん。”の気もち)

などである。

○イダベ サエイ。

“いたらう?” (かるい問い)

は、津軽南部での一例である。

○ダレモ イナク[ü]テ アッタベ サエイ。

だれもいなかったらう?

は、津軽半島部での一例である。「サイ」が、「サエイ」ともあり、また「サエー」ともある。

○リョーコーノ ゴットンデ サエー。

旅行のことでさ。(「何の用で来た?」に対する返事)

のように、「サエー」形のあらわれることも多い。

「サエー」形が、「セー」「セ」に簡約されてもいる。「南部」・津軽の両方に、「セー」「セ」が、よく見られる。「セ」形が、県下にさかんであるとも言えようか。——この点、国内諸方言にぬきんでいよう。『津軽方言えはがき』第一輯には、「アレアセ、(あの子はね、)」などとあり、また、第二輯には、

主人「ツトサ、ヘデセ」

苞へ 入れてさ

などとある。『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条には、

mン キョーシエ $\left(\begin{matrix} \text{ハ} \\ f \end{matrix} \right)$ タイシタ ツエデシエ コラ コノトー
うん、 きょうはね $\left(\begin{matrix} \text{ハ} \\ f \end{matrix} \right)$ たいそう 釣れてね。 これ このとお
リダネ ソラ
りだよ そら。

とある。「セ」が「シエ」とある。）おなじく第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条には、

fフン テンキヤ ワリドモセ²⁾ ホッコア デテマシタケア
ふん、 天気は 悪いけれども 穂は 出ましたよ。

2) 「セ」は間投の助詞。

とある。私が、弘前市で得た一例は、

○コレ オラノデ セ。

これは私のですよ。

である。青森県下・秋田県下に、「セ」形が注目され、加えて北海道内でも、これが一つ注目される。

さて、「セァ」の形もある。「ァ」は、かねて私が、重視してきた文末訴え音である。「セ」文末詞のばあいにも、人は、しぜんに、これに訴え「ァ」音を添加して「セァ」とも言っている。これがまたそうとうにはなはだしい。(秋田県下・岩手県下にも見られた。)

○ワレワレガ ヨーショーノ コロニ〔i〕 セァー。

われわれが幼少のころにさ。

は、津軽での一例である。——共通語ふうの言いかたの最後にも、まぎれのな
い「セァ」が出ている。県下の諸方言文献が、「セァ」を指摘している。瀧野
沢栄一氏は、「津軽方言の語法」(『方言』第五巻第二号)で、

セァ。標準語の「さ」にあたる。

アスエグセァ。明日行くさ。

と述べていられる。

本県下に関しては、なお一つ、関連記述を試みておきたい。県人は、たとえば、

○ア^ハ シ[i]。

あのね。

について、“これは上品。”と言い、この言いかたを、「ア^ハ ^ハ。」(あのね。), 「ア^ハ ^セァ。」(あのね。)などにくらべる。上品とされる「シ[i]」の言いかたに対置されている「セァ」は、「サ」の「サイ」の「セ」であろう。「ア^ハ ^セァ。」は、なるほど、さほど上品な言いかたにはならないはずである。要するに、ここで、つぎのことが明らかである。等しくサ行音ではあるけれども、「シ」文末詞と「セ」文末詞とは、似て、はなはだしく異なるものである。と。しかし、「シ」に文末訴え「ァ」音のついた「シァ」などは、しばしば「セァ」にまぎれやすいものでもある。土地人も、ときに、「シ」と「セ」「サ」とを、近しい関係のものとしたりしているか。

“弘前は「サー」で、木造町は「シ[i]ー」だ。”と言う人もあった。“木造町としては、「シ[i]ー」がふつうだ。”とも言う。

青森県下の、「サ」に関する複合形の文末詞を見る。まず、「南部」に、「ナサ」がある。

○ア^ナノ ナサ。

あのねえ。

などと言っている。つぎに注目されるのが「ネサ」である。北山長雄氏の『津軽語彙』には、

「nesa」は中津軽郡弘前市の女性語であり語尾につくことは丁度東京弁の「ne」に相当する。

sonda nesa (さうですね)

とある。『青森県方言集』にも、

そだねさア。(女用語(弘前)ソウデゴザイマスネ。念を押す)

と見える。「ナサ」「ネサ」ともに、「サ」にアクセントの高音ががちである。つぎに、複合形の「カ(ガ)サ」などが見られる。『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条に見られる、

*m*ンニャ ナンボ オモシロフテアタガサセ

うん ずいぶん おもしろかったよ。

の「ガサセ」は、どういう出来のものであろうか。「が」の「ガ」と、「サ」と、「サイ」の「セ」との複合であらうかどうか。複合形「ノセァー」もある。

九 北海道地方の「サ」ほか

北海道地方に、「サ」はさかんのようである。「〜ベ サ」の言いかたもよくおこなわれている。

「セ」形も見られ、「セァ」も見いだされる。

道南地方では、ただちに、「何々で ^{サー}。」などの言いかたを聞くことができる。「サ」に対する「セ」もある。(「セァ」となってもいる。)『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

*f*マケタコタ ネーベセ

負けたことは なかったろうよ。

とある。おなじく「福島町白符」の条には、

*f*イマデモ ソダベサ

今でも そうだろうね。

などというのもある。

おなじく第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

*f*マンダ エガンベサー

まだ いいでしょう、

などとある。

諸地域に、「サ」ことばが見いだされ、「〜ベ サ(サエ)」も見いだされて、北の稚内でも、

○コレ アンタ シタンダベ サ。

これはおまえがしたのだろう。

などと言っている。

十勝の一例は、

○ダレモ オランカッタベ サ。

だれもいなかったらろう？

であり、釧路の一例は、

○ソソナニ タクサン キタラ アツイベ サ。

そんなにたくさん着たら暑かろう。

である。さて、複合形には、「ノセ」などがある。

十 おわりに

全国にわたって、「サ」文末詞を見るのに、その分布ではまず、中部地方以東の広域が注視される。この地方は、おおよそ関東地方の「サ」のながれの地域であると見ることができようか。国の西方の分布は、おおよそ、その関東性の「サ」に対する関西ないし西国ふうの「サ」を示すものであると言えようか。

関西以西には、その分布のむらがすくなくない。近畿は、滋賀・三重方面によく「サ」が見られ、中国四国にはこれがすくなくて、九州には「サ」音系のいちじるしいものがある。このような、分布のむらは、どうしておこっているのであろうか。

「サ」の用法を見るのに、関東地方では、「どうして サー。」「こうして サー。」などと、きわめて自在に、「サ」が連発されがちである。自己を叙述する中で、わけもなくとも言いたいぐらいに、「サ」を頻用している。それにまた、「ツー サー。」(そうさ。)などと、「サ」を、指定断定助動詞ふうにつかうこ

ともさかんである。以上のような用法習慣は、概して関西系地域にはよわいありさまである。——「サ」の関東性と関西性とが区別される。

「サ」に関する複合形をとってみても、「テサ」あるいは「ノサ」といったものは、関東性のものと解される。「ワサ」は近畿のものである。

関東性・関西性の別は考えられるとしても、「サ」の機能が、一元的に、なんらかの指示作用を発揮するものであることは、多く言うまでもなからう。根元のその作用のうえで、「サ」は、命令表現や問尋表現にはたらくものもなっている。——こうなって、地方的な様相は顕著となる。

起源はどうであるにもせよ、今日、現代語の共時面では、「サ」に、ほとんど純粹の「音作用」としての特殊な指示性が認められる。「サ」音の強烈な指示には、総体に、高品位はともないにくい。

第三節 「ザ」の属

一 はじめに

「サ」に似た「ザ」がある。「サ」に「サイ」や「サン」があったのと同様に、「ザ」のばあいにも、「ザイ」や「ザン」が見られもする。このようではあるが、「ザ」などの正体は、定かでない。

いずれにしても、こういうことが言える。「サ」の属と「ザ」の属とは、およそ類似のものであり、かつ両者を合一することはできない、と。——そうとうの程度にまで近づけることはできても、そこで一線を引かなくてはならないようである。

「ザ」の本源は何であろうか。こととばあいによっては、「サ」が転じて「ザ」となったものがあるかもしれない。しかし、「ザー」の形のものなどには、そういう「ザ」とは区別すべきものがあるようにも見うけられる。「ザイ」に

近い「ザー」, 「ザイ」からの「ザー」があるだろう。

その「ザイ」であるが、九州のばあいだと、「ぞよ」起源のものがあり得ているのではないか。「ソギャン コター ナカ ザイ。」(そんなことはないザイ。)といったような言いかたを見るのに、「ザイ」に、「ぞよ」起源が考えやすくもある。あたかも「トヨ」が「トイ」をへて「タイ」になったのと同様に、「ゾヨ」が「ゾイ」をへて「ザイ」になったりはしなかったか。

今は、起源論に執することをしない。いわば共時論的処理を旨として、ここには、現実音の「ザ」、したがって「ザイ」「ザン」などを、このままにとりあげ、これらが現実に文末詞として機能しているさまを見ていくことにする。この見地で、私は今、「ザ」(——「ザイ」「ザン」)を、ザ行音文末詞とよんでおく。

文末詞「ザ」が、文末詞「ゾ」と、近縁の関係にあるらしいことが、また、音形からして察せられる。〔z〕に対する〔a〕と〔o〕とは、わずかの相違にちがいない。こういう点でも、「ザ」に関して、ザ行音文末詞の名をたてることは、穏当とされよう。

以下、「ザ」の一属の分布を、諸方に見ていく。

二 九州地方の「ザ」ほか

まず九州地方が、「ザ」の属の分布に関して注目される。九州地方では、問題の事象が、ひときわさかんであると言えよう。

鹿児島県下では、問題の事象が見いだされにくくて、宮崎県下に、つぎのような事象が見いだされる。

○ソングナ コツグレ シッチョレ ザ。

そんなことぐらい“知らなくてどうするか(もちろん知ってるよ)”。

これは、中部、児湯郡下の事例である。同地域の、「オリモ イカザー。」(“お

れも行かなくちゃ。”)というのなどになると、この種の「ザ」は問題外であることが明らかであるが、上例の「ザ」は、「ザ」文末詞としてよいものである。今は、その、「ザ」と聞こえる事態を重視しておきたい。

熊本県下には、「ザイ」が多く見いだされる。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

fコゲン ヨカ ³⁾ コ シューベーフ ナカザイ
 こんな いい 商売は ないぞ

3) 言いさし。

とある。「ナカ ザイ」との言いかたがなされているのを見るのに、「ザイ」は、「ぞ」と言いかえられているとおり、「ゾ」的な文末詞かと思われる。

肥後本土の南北に「ザイ」が見いだされる。北の南関町についての、能田太郎氏の「肥後南ノ関方言類集 用言篇」(『方言と土俗』第四卷第八号)には、

ザイ 「ぞ」に当る卑語、(例) (一)ぬし(汝)に^ヤ構わんザイ。(二)構わ
 んち^ヤよかザイ。

とある。熊本市南郊の方言について教示してくれた一知友の示例には、

クラワスゾー。

クラワスッザイ。

などがある。同氏は、「ソット マタ チガウト ザイ。」とするしたものについて、“それとまたちがうのだぞ。”と注記してもらわれる。

原田芳起氏も、『熊本方言の研究』で、「オリヤ知ランゾ」「打タルルザイ」に関して、

この「ゾ」系助詞も、熊本方言の中では劣勢ではない。これは女性が使えば、しとやかでないと感じられているようであるが、女性でもなか〜勇敢に使う人があるのは事実である。それでも右の意識があればこの「ゾ」表現は男性的としてよいわけである。

と述べていられる。

東条操先生の『分類方言辞典』の「小詞」の条には、

ザイ ゼ。九州。

との説明が見える。

斉藤俊三氏は、『熊本県南部方言考』の中で、「ザン、ザイ(怒罵)」について、怒気を含んだ場合の指示である。八代で「ザイ」、水俣で「ザン」になる。

1. オラ行キャセントザン (僕は行かないぞ)
2. 泣カスッザン (泣かせるぞ)

と記述していられる。

私は、天草で、つぎのような「ザン」を聞いている。

○ジューエン クルツチュー ザン。

“十円くれるそうです。”

長崎県下には、「ザ」の属のおこなわれることがさかんである。まず、島原半島が「ザイ」の地域である。『肥前千々石町方言誌』には、

ザイ ですよ、(例、ソガンザイ、「さうですよ」)

とある。

林田明氏の「長崎市方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)に見える「ザイ」例は、「オイガ ウッタトチャ ナカ ザイ。 おれが打ったのじゃないぞ。(小男→中女) <男子のみ>」である。氏は言われる。

この「ザイ」は、「ゾヨ」の転じたものであろうか。はなはだ下品で、感情が激したばあいに用いられる事が多い。ほとんど男子に用いられるが、まれには中年以上の婦人も用いる。

なお、『ザイ』には、「ザン」「ジャン」のごとき異形もきかれる。多分にくだけたばあいが多し。」とも言われる。

西彼半島に、「ザイ」がよくおこなわれている。「トザイ」という複合形もよく見られる。ところで、同半島東北岸には、

○チガウ ザー。

ちがうよ。(抗議)

などの「ザー」の言いかたも聞かれる。ただし、この地方でも、「ザイ」が一般的のようでもある。(「ザーイ」もあり「ザーィ」もある。)

○ネギ^フ フト^ナ ナッタ^ザ ザイ。

葱が太くなったなあ。

○ネンガバ^ヤ ヤランバ^ザ ザーィ。

年賀状をやらなくちゃ。

○ナカ^バ バーィ。ナカ^ザ ザーィ。

ないよ。ないぞ。

などは、このほうの「ザイ」「ザーイ」などの実例である。同地域で、「ザン」とも言っている。人は、「「ザン」は、怒っている時につかう。」とも言う。

○ソギャン^{アル} アル ザン。

“かねてつつしんでおらんけん、そうあるぞ。”

○モー^{フト} フト^シ シフル^テ シモー^タ タト^ジ ジャイロ、イッチ^ヨ ヨモ^ナ ナカ^ト トザン。

“もう人が拾うてしもうたとかしらん、ひとつもない。”

「ザン」は、「ザイ」に近いものであろう。

念のために、一つの考察を加えておく。「バイ^{あなた}」は「バンタ」となっている。「ザイ^{あなた}」が「ザンタ」となり、「ザンタ」からやがて「ザン」ができることなどが、ありはしなかったか。「バンタ」から「パン」ができたように。

平戸方面にも「ザイ」がよくおこなわれている。平戸方言の一例は、

○キョ^ワ ワ オヤ^ジ ジカラ^キ キメラルル^ザ ザイ。

きょうはおやじから叱られるぞ。

である。当地方で、「ザイ」が「タイ」や「バイ」とつれあっておこなわれている。「ザイ」の異形は、他の文末詞に関係の深いものでもあろう。『全国方言資料』第6巻の、「長崎県北松浦郡中野村」の条には、

m^ンー ジサンモ ホンニ ヨロジュ ヌッタザイ

うん、おじいさんもほんとに よろしくと 言っ(てい)たよ。
 などの「ザイ」例が見える。上例の説明が、「言っ(てい)たよ」となっているのに注目したい。

五島列島では、私は、「ザン」「ザーン」をよく聞いている。

○ア^ッコイ シンマチー オ^ッタ ザン。

あそこへ新町へいたザン。

○ホンナ コ^ッジャッタジャロ ザン。

ほんとうであったらろう？

○ヨカ ザーン。

いいよ。(承知)

○キトッ ザーン。

来てるよ。

○イコ ザーン。

(いっしょに行く時に言う。)

このように、「ザン」「ザーン」の使用は自由である。用法に諸相が見られるまでに、「ザン」ことばは、いわゆるザ行音文末詞として定着しているのか。

山口麻太郎氏の『壱岐島方言集』には、「ザーイ ザイ」についての、
 「バイ」に似たれど常に否定の場合に使ふ。……しないぞ。……できない。
 等の意。

「知らん——」

「聞かん——」

との記事が見える。同氏の『続壱岐島方言集』には、「ザイ、ザーイ」に関して、

「バイ」に似て投げやりな意を表す。卑語である。

体言、活用言の連体形、並に他の助詞にもつくかと思ふ。

とある。

佐賀県下にも、広くに「ザイ」が見られるらしい。早く、『佐賀県方言辞典』には、

ざい〔助〕 ズヨ。「見タざい」「カイタざい」

と見える。小野志真氏は、「佐賀県方言区画概観」の中で、「ザイ」系のものとして、「ザイ、ジャー、ゼー、ジェー、ゾー」をあげていられ、地域的特色がうかがわれるとしていられる。

私が、県南の旧須古村で得た例は、

○シ^ータ コタ ナカ ザイ。

したことはない。

○ノ^ー ナッタ ザイ。

なくなったなあ。（“ひとりごとみたいなことば”）

などである。第一例の「ザイ」について、カード検閲の識者の加えられた注記は、“ザイを軟かく言へばやさしくなる。困って言ったことになる。ザイを強く言った時が、心のとがった時のことば。”というものである。「ザイ」は、“男のワルカことば”と言う人もある。

岡野信子氏が、唐津市神集島方言の文末詞について教示せられたところによると、「ザイ」は、「うやまうべき相手には用いぬが、『ゾ』よりいくらか品位が高い。『ズヨ』か？」とされるものようである。

加来敬一氏の「福岡県方言の語法」（『北九州国文』第五号）では、「ゼ」「ド」「ザイ」が、

共通語形「ぞ」にあたる強意（念をおす）の語で、
とされており、分布に関しては、

「ザイ」——筑前区宗像、筑後区山門

とされている。『福岡県内方言集』には、

ざい（八女郡南部）

とある。分布は、やや広いものがあるか。都築頼助氏は、「九州方言の性格」(『NHK国語講座』昭和32年4・5月)で、

筑肥方言の余情・情意の終助詞バイ・タイ・ザイは、豊日系と一連とな
って薩隅のラー・トーと南北対峙し、

と述べていられる。

私が白石美代子氏から得た、嘉穂郡下の例は、

○ヨメ[↑]ジョデン ソゲ アル ザイ。

“嫁さんでもそのようにあるよ。” (老女→中女)

○リーッパナ シオマメガ デキル ザーイ。

“立派な塩豆ができるよ。” (老女→青男)

などである。“「ザイ」「ザーイ」は、老人によく使われ、品位は中等以下であ
らう。”とのことである。同氏教示の、

○ハイ[↑]ジャン イエン ヒトヤッタッ ツァイ。

“歯医者さんの家の人だったんだよ。” (老女→中女)

などでの「ツァイ」は、「トザイ」のつづまったものか。

岡野信子氏の「助詞『カラ』の生態——若松市島郷地区における——」(『北
九州国文』第七号)には、

○バーサンナ バカ ザイ。

おばあさんは馬鹿だよ。

などの「ザイ」例が見える。同氏によれば、鞍手郡下にもまた、

○オマエガタノ バーサンシカ イキキッチャ ネー ザイ。

“お前のうちのばあさんしか行ききってじゃないよ(行くことがおで
きでないよ)。”

などの言いかたがおこなわれているという。

大分県下では、

○ビッ[↑]シャグル ザーイ。

ぺしゃんこになるぞ。

○ア^ツチ^デ マ^ツチ^ョル ザ^イ。

あっちでまってるぞ。

などと、豊後の日田弁に、「ザイ」がよく聞かれる。『鳥陽』創刊号（日田中学校校友会 昭和22年9月）に見える里木健二氏「日田方言の研究」にも、

知らんざい 知らんぞ

などとある。

全国を見わたすのに、九州では、とくに「ザイ」がさかんである。「ザイ」を中心とする「ザ」の属のものが、九州にいちじるしいのはなぜであろうか。「ゾヨ」>「ゾイ」>「ザイ」の「ザイ」が九州にとかくおこなわれがちなのだとしたら、これは、「トヨ」>「トイ」>「タイ」かの「タイ」が九州によくおこなわれているのに符節を合する。今、私は、「ザイ」がとくに九州にさかんなのを見るにつけても、「ザイ」は「ゾヨ」からのものではないかと、考えたくなるしだいである。「タイ」の分布領域と「ザイ」の分布領域が酷似していることも重要視される。

九州に、単純とも言うべき「ザ」はすくない。

三 中国地方の「ザ」

山口県下の、

○ハ^ヤイ^コト コ^リョー ヤ^ツチ^ョカザ（ダ）。

早くこれをやっておかなくちゃ。

などの「ザ」が、本題のザ行音文末詞に似て非なるものであることは、多く言うまでもなからう。上に見える「ザ」は、「ズワ」系のものであろう。「早くせざばなるまい。」などの「ずば」がもとであろう。

島根県下に、問題の「ザ」があるか。神部宏泰氏によれば、出雲では、たと

えば宍道湖のあたりで、

○オラ ショーサン トコマデ イク ザ。

ぼく、しょうさんの所まで行くよ。(小男間)

○オカツァン ナカ ハーテ オラエマス ザ。

おかつさんは中へはいつていらっしやいますよ。(中女間)

などの言いかたが聞かれるという。同氏の、出雲東部で得られた一例は、

○ダイブ カカッタ ザー。サカー アガッタデ ノー。

だいぶんかかったんだよ。坂を上がったからねえ。(小男間)

である。「ザ」は、山陰でも、出雲地方に特有のものか。ともかく、この「ザ」は、神部氏が「よ」と言いかえられている「ザ」である。

私が出雲西辺で聞いた一例に、

○アリュー ザイ[i]ナ。ナカナカ。

あれまあ(やれまあ)。なかなかのことだ。(老翁がふろを沸かしおえてのことばである。つかれた時の表現であった。)

というのがある。「ザイナ」の「ザイ」は、上の「ザ」に関係があるものかどうか。いずれにしても、「ザイナ」が文末詞ふうの地位にあることは明らかであろう。他で、このような言いかたは、まだ、聞き得ていない。

隠岐にも「ザ」があるのか。『全国方言資料』第8巻の「島根県知夫郡西ノ島町黒木字宇賀」の条には、

fハイ ベントア イッチョッザ¹⁾ー

はい、弁当は はいっていますよ。

1) 「ザ」はよいことば(女性が使う)。それに対して「ダ」は悪いことばという。

とある。上の注記に、「ザ」に対する「ダ」が見られる。この「ダ」は、「ザ」の音訛に成ったものか。あるいは別の「ダ」か。——感声的な「ダ」もありうることである。(後章参照)

さきに、出雲の「ザ」について、「出雲地方」と言った。出雲東部に関連の

深い伯耆西部には、同様に「ザ」文末詞があるかもしれない。

九州では、ともかく、ザ行音文末詞として、現在、共時論的に処理しうるものが多く見られた。これに対して、中国地方では、山陰にのみ、類似のものが見いだされる。この中国状況は、見るからに興味ぶかいものである。私は、中国も、とくに山陰がこのようであることを、九州状況との系派的なつながりとする。おそらく九州と中国とは、なにかにつけ、このようにして底面での脈絡を保っているのであろう。

四国はどうであろうか。

四 四国地方の「ザ」ほか

土居重俊氏の『土佐言葉』には、宿毛市の、

コノ本 ナンボ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ザイ} \\ \text{ザン} \end{array} \right.$

ウチャー イチャッタガザイ (わたしは行ってあげたのよ) などの、「ザイ」「ザン」例が見える。ここに「ザ」はないのか。

『全国方言資料』第5巻の「高知県幡多郡大方町」の条には、

fキョーワ ナニ シザイ

きょうは なにを しょうとしているのですか。

というのが見える。ここには「シザイ」とある。「ザイ」が「する」の「シ」につづいている。この「ザイ」は、どういう「ザイ」であろうか。

土居重俊氏は、おなじく『土佐言葉』で、土佐東部の長岡郡大豊村落合のことば、

「ヨーヨー、オーキニ。ハヨーイナザ。」いいえいいえ ありがとうございます
ます はやく帰りましょう (老婆)

というのをあげていられる。これにも「ザ」が見えるが、「ザ」は、「イナ」につづいている。動詞未然形につづく「ザ」は、上来、問題にしてきた「ザ」

とはちがったものである。

徳島県下にも、「ザ」が見られるが、これまた、

○ホレバー ア^ラザ^ー。

“それぐらいなくてさ。”(あるとも。) (小男問)

(県南での一例。金沢浩生氏の教示による。)

など、動詞未然形につづく「ザ」であって、この「ザ」は、いわば不活用助動詞である。

徳島県下に、単純な文末詞の「ザ」はないようである。

以上が、四国についていま記述しうるすべてである。四国でもまた、土佐西南部といった、いわば辺境に、「ザ」関係のものを見いだされるのが注目される。中国四国では、双方の辺々が、問題の事実を示しあっている。

土佐の事情を、九州の事情につないで考えてみることもできようか。

五 近畿地方の「ザ」ほか

服部敬之氏の教示によれば、淡路島の洲本市方面のことばに、「ザン」の言いかたがあるという。

○コレヤ ザン。

これだ。

などと、氏の母君は、よく言っていたそうである。氏は、「ザン」には断定の意があると言われる。(氏はまた、氏の母君年輩の人々が「ザン」を言っていた、とも言われた。)

なお、服部氏によるのに、由良ことばにも、

○ソ^リヤ ザン。

“そうです。”

○ソ^リヤ エ^ー ザン。

それはいい。

などの言いかたがあるよしである。もっとも、「ザン」は、今はあまり聞かれなくなった。”という。

田中万兵衛氏の『淡路方言研究』には、

まああ、そお^私かん、あてちつとも知らなんだざん。

などの「ザン」例が出ている。氏は、

(前略)殆んど明治、大正を境として滅んだと云つてもよい。主としてか(疑問)若くはぞの下に附ける。但しぞに附く場合はそれと結合してざんとなる。明治時代までは随分頻繁に使はれたものである。

と言われる。ここには、「ぞ」の下に「ん」がつけられ、それが“ざんとなる”との解がある。——そういう解釈も成りたつか。

増田欣氏は、かつて私に提示せられた『淡路方言覚書』で、

現在五十才程度の人が、幼時、

淡路カンカン そやまたなへざん (そりや又、何故だの意)

というような唄を歌っていたという。

と説いていられる。

近畿地方では、他に、三重県下に「ザ」が見いだされる。鈴木敏雄氏の「志摩越賀の会話」(『三重県方言』第5号)には、

男「なんも、われとのかね〔金銭〕で、われとが飲〔酒〕んだんやんけ。ねんない、あつかい顔してたて、えーやんけ。その代り月末になつて赤紙が来て、青うなつたぞ。あつこうなつたり、青うなつたりや。」

なにも自分の銭で自分が酒を飲んだのじやないか。しよ中赤い顔をしていたて、誰に遠慮することもいらんじやないか。その代りに月末に代金取立が来て青くなつたぞ。赤くなつたり青くなつたりさ。

との言いかたが見られる。氏は、

「なつたぞ」の「ぞ」はその転。

と説明してられる。

『全国方言資料』第4巻の「三重県一志郡美杉村川上」の条には、

fドーシトルザ $\left(\begin{array}{c} \text{ハー} \\ m \\ \text{はあ。} \end{array} \right)$ グアイ ワリカッタカ
 どうしてですか。 ぐあいが 悪かったのですか。

というのが見える。

六 中部地方の「ザ」ほか

近畿地方に「ザ」の分布がまれであって、中部地方の北陸に、「ザ」の分布のかなりいちじるしいものがある。北陸は注目すべき地帯である。

まず福井県下に「ザ」がよくおこなわれている。福井市武生市方面の「ザ」例は、

○テンポナ ネダンヤ ザ。

“とても高い値段ですよ。” (中男間)

○ホンナ コト シタラ アカンノヤ ザ。

“そんなことしたらいけませんよ。” (おや→子)

(“「ザ」は女も言う。”という。)

などである。これらの教示者、佐藤俊郎氏は、第一例について、「自己の予想に反した事に今更の様に驚き、それを誇張的に表現する時の言い方である。」と説かれる。なお氏は、「武生よりも福井の方が、『ザ』をよく使う。」とも言われる。

越前に、こういう「ザ」のおこなわれることはさかんのようである。愛宕八郎康隆氏は、越前東部の勝山方言について、「ザー」は女性中心のことばであると言われる。そうして氏は、「ゾ」が男性中心のことばであるのと、これとが、よく対応していると見られる。愛宕氏は、「ザー」が“中等品位”のものであって、“中年以下の女性に頻用されている。”とも言われる。

○アカン ザー。

いけないよ。

は、勝山方言での一例である。

福井市方面では、「ウラガ シル ザー。」(わしがやるよ。)の言いかたが、「ウラガ シッ サー。」ともなっているか。(愛宕氏による。)

『福井県方言集』には、

……ザ (アカンザ) ……よ (いけないよ)

「ザ」は「ぞ」の訛か

との記述が見える。なおこの所で、「ザ」の、若狭内にもあることが指摘されている。

上来、「ザ」を、「ぞ」起源と見るむきが、いくらあった。「ぞ」起源の「ザ」もあるかもしれないが、ちがった起源の「ザ」が、用法上、「ぞ」同様の表現価を示すことも、ふつうにありうることだと思う。

石川県下の加賀・能登にまた、問題の「ザ」が見られる。「ザイ」もある。加賀東南部の白山近くでは、

○イッテ キタ ザー。

“たしかに行ってきたのだよ。”

などと言う。——このばあい、「キツ ザー」の言いかたも聞こえたように思う。いずれにしても、上の表現は、たけしちゃんという人が、行かなかったと言う老夫婦に対して、嫁さんが反駁したものであった。「キツ ザー」は、「きたじゃないの」などにあたるものかもしれない。

おなじく白山近くで、つぎのように「ザイ」を言っている。

○シャーナ モノ デテ オラン ザイ。

そんなものは出ていないよ。

○ソア タミジャ チューザイ。

その組だってことだよ。

岩井隆盛氏の「石川県金沢市彦三一番丁」の記事(国立国語研究所報告16

『日本方言の記述的研究』に寄せられたもの)には、

知らンザ (ないよ)

などが見える。私が金沢市で聞き得た例は、

○ソーユ^ー 話しは キカ^ン ザ^ー。

　　そういう話しは聞かないよ。

○コ^リャ ワ^ンノガ^ヤ ザ^ー。

　　これはわたしのだよ。

などである。「ザ^ー」の表現にはつよみがある。

能登の能登島向田では、「ゾ」が多く用いられており、「ザ」もある、という。ただし、土地人は、“「ザ」なんかやらぬ。”などとも言っているという。(愛宕八郎康隆氏教示) 愛宕氏の「能登島向田方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)に見える実例は、

○ゴ^ハンナ マ^ダヤ ザ^ー。

　　御飯はまだだよ。 (中女母→息子)

などである。ここでも、「ザ^ー」「ザ」は、主として女性に用いられ、品位は中等以下であるという。

愛宕氏は、能登半島東北端方面でも、

○イ^コ ザ^イ。

　　“(酒を) 飲み始めようよ。”

などの言いかたをとらえていられる。

富山県下については、今、私は、言うべきものを持たない。

新潟県下に、「ザイ」がある。田中勇吉氏の『越佐方言集』には、

　　語尾ノゾヲざい、だい、ぜ、ナドイフ。コレ北蒲ノコトナリ。

と見える。ここにも、「ザイ」に関する「ぞ」起源説が見える。「ダイ」は、「ザイ」のなまったものか。「ゼ」は、「ザイ」からのものである。

小林存氏の「越後方言の結語法概観」(『国語研究』第十卷第七号 昭和17年8月)には、「下層に向つてはザイが使用される。」とあり、

お前、エグ(行く) ガンダザイ

お前、喰うガンダザイ

の実例が見える。なお、

エゴ(此の場合は立去ることを意味す) ザイエゴザイ
は、「必ずしも誘引の意でなく寧ろ一種の宣言である。」という。

『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

f………… イッペ マズ ノンデ ネロザイ

1杯 ちょっと 飲んで 休みましようよ。

というのが見える。

剣持隼一郎氏の「粟島浦村の言語(-)」(『高志路』第二〇一号)には、

ゼ・ザエ

強めの終助詞かと思われる。

ヨムゼ(読むよ 老人→孫)

シタデザエ(したそりだよ)

ガツコーノヘンヘナンダザエ(学校の先生だよ 本保孝一氏 老人→孫)

「ザエ」が短くなつたものが「ゼ」であろう。

との記事が見える。もし、「ザエ」がとりたてられるのなら、これは、「ザイ」に近いものともし得ようか。

北陸を除いては、中部地方に、当面の問題とすべき「ザ」が見いだされない。たとえば長野県下に、「イカ^ーザ^ー。」の言いかたが聞かれるが、これは、「行こうよ。」の意または「行く」の意志をあらわすものであり、「ザ^ー」は、文末詞ではない。「ザ^ー」のものは「ずは」(ずば)か。ともあれ「ザ^ー」が、助動詞としてたっている。

こういう「^ーザ^ー。」は、広く山梨県下・静岡県下にもおこなわれている。

山梨県下の例は、

○オチャ ノマザー。

お茶を飲みましょうよ。

○ホンジャー オリャ イカザー。

“じゃあ、わしは帰るといこと。”

などである。

ところで、「ザー」も、おなじく山梨県下で、

○イヤザー。

いやだ。（“自分がいやだといこと。”）

というようにつかわれているのになると、これは文末詞然としたものに見えてくる。

静岡県下でのばあいにも、たとえば、徳田晴彦氏の「岳陽語法一用言之部一」（『方言』第五卷第二号）の中に見える、

早クイツテコラザア

早クイツテクラザア

のようなものになると、この「ザー」がまた、文末詞ふうのものに見られてもこよう。

七 東国地方の「ザ」ほか

関東地方には、言うべき何ものも見いだすことができない。

東北地方では、山形県下に言うべきものがある。羽前村山方言では、

エマ クン ザェ （今 来る ぞ）

などの言いかたがなされているという。『山形県方言集』にも、

ざい zae 感動詞 よ、ぞ 村山
麓賜

さあれが出んざい。

（さあれがでるよ。）

との記述が見える。佐藤義則氏の『羽前最上小国郷のトント昔コ』（自家版 昭和41年2月）には、

「沼^{のま}の主殿^{のすどの}主殿。オラな前千刈り後千刈りの田コさ、水コ恵んで具^は申さい。
ほしたら、オラなメラスコ^あ捧げ申すさい」って云^ゆったどや。

などのことばづかいが見えている。

「(前略)あの金コと同すな石コア、オレな炭小屋^{すばえ}の炭灰^{やまえ}な中さ、山盛^{やま}なつてるざエ」って云うさえ、二人して行って見^みと、……………。

ともある。

本県下の「ザイ」「ザエ」は、どういう出来のものであろうか。ともかく、今は、音形に着目して、これらをここにかかげる。

つぎに岩手県下に、問題視しうるものがある。『釜石町方言誌』には、

「ザ」 命令勧誘の意を強めるもの、

例 ソーシロザ(さうしろよ) ヤメロザ(やめろよ)

とあり、『岩手方言の語彙』の「旧南部領」の部には、

ヨベザ(呼べよ)

とある。どういう「ザ」であろうか。ともかく、今は、これらの「ザ」を、語としては文末詞と見うるものと解しておく。——命令の言いかたの下に、「ザ」がある。(秋田県南には、「ンダ ザー。 そうだよ。」などの「ザー」がある。)

岩手県北部では、

○イカネァヅァー。

と言っている。これは、じつは、「行かないそうだから。」の意のものであり、「イカネァヅィー ヨー。」(行かないということだよ。)に類したものである。「ヅァー」には、「と言う」の意がふくまれている。

東北地方の、以上の事態は、どういう事情によっておこったものであろうか。現象の、地域的に偶然に存在し得たものの、このような残存ということなのか。方言事象の存立には、解しがたいものが多い。——(それにしても、「ザ」関係

ものの、北陸に見られて、東北は山形県下に見られるのなどは、存立の系脈を思わせるようになって、興味が深い。東北地方と北陸地方との縁由は、だいたい、浅くはないものであろう。)

八 おわりに

以上、「ザ」関係のものを、音相本位に、さぐり集めてみた。

「ザ」関係のものには、第一に、分布の特色がつよい。第二に、これには、相手に訴えかけることの、あるつよさがくまれる。

第三に言うべきは、その起源の不詳である。

ふかしぎな「ザ」文末詞の一類ではあるが、ともかく、現実態が「ザ」音関係のものなので、現段階では、以上のとりあつかいをすることができた。

この種の文末詞が、将来、栄えていくものだろうか。その可能性は、ごくすくないもののように思われる。

第四節 「ゾ」の属

一 はじめに

ここに、ザ行音に属する「ゾ」がある。「サ」「ザ」などの、[a] 母音のものについて、やはり、訴え音の大きい「ゾ」がとりあげられる。

「サ」に対応する「ソ」は、今のところ、ないと見てよさそうである。(「ザ」は、「サ」と共存するが、「ゾ」には、そのような共存の相手がない。)「サ」なみの、使用範囲の広い「ソ」が認められないのはなぜであろう。

疑問視すべき別の「ソ」がある。これは第五節にとりあげる。

「ゾ」の訴えは、たしかに効果的なものである。これのできたのは、もっともしごくのことと考えるようである。

「ゾ」には、「おしつけ」のきみがつよい。特殊な強調性がある。私どもの会話の現場には、こういう文末詞を必要とする場面が、はなはだ多い。「ゾ」は、全国諸方言上につよいきおいを見せている文末詞である。

言いかける気分をつよくあらわす「ヨ」もまた、よくおこなわれていよう。これも〔O〕母音の文末詞である。「ゾ」と「ヨ」との関係が、広く認められよう。——「ゾ」と「ヨ」とをくらべる時、「ゾ」の存立地位が明らかである。「ゾ」は、その音効果のままに、おしをつよさをあらわしつつ、上品ではない表現領野を行っている。

「ゾ」の強調はしぜんに「ゾー」になりやすく、「ゾー」からはまた、しぜん「ゾイ」「ゾン」も分岐しやすかったようである。

「ゾ」はまた、単純に音訛をおこして「ド」にもなっている。「ド」は「ロ」にもなっている。「ドー」からは、「ドイ」「ドン」もまた分岐している。

以上は、「ゾ」文末詞の異形分化とも言う。それはなお、上記のものほかにもわたっている。異形のおのおのごとに、表現効果の相違が見られるのはもちろんである。「ゾ」が「ド」になっても、すでに表現効果の差が明らかである。——一般には、「ド」の表現品位は「ゾ」のそれに劣っていよう。

「ゾ」に関する複合形の文末詞も多様である。「ゾ」におわる複合形も多ければ、また「ゾ」にはじまる複合形も多い。本文中では、複合形は「ゾ」におわるのを見ていくので、ここには「ゾ」ではじまる複合形の諸形をしるしてみたい。「ゾナ」「ゾネ」「ゾノ」「ゾヤ」「ゾエ」「ゾヨ」などがあり、「ゾナン」「ゾヤネ」「ゾイナ」「ゾイヤ」「ゾエモ」などもあり、「ゾカ」「ゾマイ」「ゾハ」などもある。「ド」に関しては、「ドナ」「ドノ」「ドヤ」「ドエ」「ドヨ」などがあり、「ドヤナ」「ドイナ」「ドイヤ」「ドイシ」「ドエノ」「ドエヤ」などがある。

「ゾ」もまた、単純感声的な文末詞の一つと見てよからう。うたがっても、けっきょくは、感声ふうのものであることを認めることになってくるかと思う。その作用性にやや複雑なものもあることから、「ゾ」文末詞の、単純感声であることをうたがうむきがあるかもしれないけれども、そのような作用性は、「ゾ」文末詞にあつての言語機能の一進境と言いうるものであろう。

「ゾ」の変形の「ド」などにしても、依然として単純感声的なものである。

後 注

- I. 「ゾイ」「ゾン」に関しては（「ドイ」「ドン」に関して）、「イ」なり「ン」なりを、文末訴え音とも見ることができるか？——（これは、「ナン」とか「ザイ」とかのばあいも同様である。）文末訴え音の複合と見ることは、適切でないと思う。「ゾー」該当の「ゾイ」「ゾン」と見ておくのが適切であろう。
- II. 「ゾイ」の言いかたは、早く、狂言詞章その他にも見える。（「ヤイ」などとともに。）
- III. 「ゾイ」については、「ゾヨ」起源も考えられる。「トヨ」は「トイ」にもなっている。「ゾヨ」も「ゾイ」になり得たのではないか。「ゾエ」からの「ゾイ」も考えられなくはないと思う。「ゾイ」については、そのおこなわれる現地ごとでの考究がいる。
- IV. 「デヨ」起源のこともあろうかと考えられる「ジョ」がある。これが「ゾ」相当のものとしておこなわれていることがある。起源上、別個のものであっても、現実音体そのものが「ゾ」的であるならば、これを「ゾ」の論の条下にとりきたることもしなくてはなるまい。
- V. 「……です ゾ。」の「です ゾ」が、「デッ ソ」になることもある。ここに「ソ」が見られることになるが、これが「サ」に対応する単純なものでないことは言うまでもない。
- VI. 「です ゾ」の「デッ ソ」から「ソ」をとり、「です ぜ」の「デッ

セ」から「セ」をとり、「ます ワ」の「マッ サ」から「サ」をとれば、ここにサ行音の「サ」「セ」「ソ」の系列が見られることになる。「ザ」「ゾ」の存立はすでに見た。「何々だ ゼ」の「ゼ」文末詞の存立も明白な事実である。これらに関しては、「ザ」「ゼ」「ゾ」の系列が見られることになる。結果音形だけを処理して見れば、上述のように、サ行音系とザ行音系のきれいな対立が認められる。

さて、単純感声的な「サ」文末詞と、単純感声的な「ゾ」文末詞とは、どちらがさきに成立したものであろう。

二 南島地方について

いわゆる南島方言の中に、問題とすべきものがある。それは「ド」である。昭和二十七年での、私の整理記述では、鹿児島県下の南島方言領域の「ド」を、「ぞ」に相当するものと見ている。

岩倉市郎氏の『喜界島方言集』（中央公論社 昭和16年8月）には、

ド 疑問の助詞。

があがっており、また、

ドー 助詞。よ——だよ。

があがっている。前者例には、

ウケー アミドゥ フトゥッド 沖は、雨が降つてゐるな——降つてゐるらしいな。

ストー アミ チャッド 外は、雨、らしいな。

があげられており、後者例には、

イチュン ドー 行く、よ。

アレー ブネィ ドー あれは、舟、だよ。

があげられている。「よ」——「だよ」と言いかえられている「ドー」は、「ぞ」にかなり近い感じのものか。——「ド」の二例では、対訳に、「な」文末詞が用いられている。岩倉氏は、同書でなお、

ナガサソー ワームン ドー 長いのは、私の物、だ。ナガサソーは、
 ナガサスに、はに相当する助詞ヤが融合して出来たもの。
 などの例文をかかげていられる。「ワームン」の言いかたの下にきている「ド
 ー」には、——氏も、わかち書きにしていられるほどなので、独立の文末詞の
 はたらきが認められるようである。

私が、喜界島の人たちから聞き得た事例には、以下にあげるものがある。喜
 界島中間では、

○シンセーガッ チャン ドー。

先生が来たぞ (よ)。(ぞんざい)

○ドーカ タンミン ドー。

どうかたのむよ。(目下に)

○ワノー シランタン ドー。

私はしはしないよ。

などと言う。島内の他集落でも、同様の「ドー」がおこなわれている。ところ
 で、

○アッシ ガバ チリバ アツサエンドー ガー。

そんなにたくさん着たら暑いでしょう？

○アッシ ガバ チリバ アツサロー ガー。

そんなにたくさん着たら暑いだろう？

のような「ド(ロ)ー」になると、これは別ものか。

「だろう」の「ド」は、薩隅地方によく見られるものである。もし、南島
 方言域の喜界島などに「だろう」の「ドー」もあるのだとしたら、当地方
 と薩隅地方との、方言上の近距離が思われることになる。(——ここでも
 また、私どもは、南島方言状態と九州方言状態とを画然と切りはなして考
 える習慣のあることを、問題にしないではいられない。)

つぎに、大島本島の人たちから聞いたものをかかげる。

○クリ〔i〕ヤ ワン ムン ド。

○クリ〔i〕ヤ ワン ムン ド。

これは私のものだよ。

○クリ〔i〕ヤ ワン ムンダリョット。

これは私のものですよ。

などがある。「ト」は「ド」の清音化したものか。さて、ここの「ド」も「ぞ」を思わせやすいものである。山下文武氏の「奄美大島方言 (一) (『鹿児島民俗』No. 1) には、

アガシ[○]しやんちだめどー (あんなにしてもだめよ)

アガシ[○]すりばいきやんどー (あんなにしてはだめよ)

などの文例が見えている。上村孝二氏の「奄美大島」(『方言と文化』)には、男のことば、

オー、ウカグ[○]ェシ ウテ[○]イテ[○]イキシャドー。

ええ、お蔭で 安心したよ。

というのが見える。

沖之永良部島の人たちから聞き得たものには、

○マチュ[○]ン ドー。

まっていますよ。

などがある。

○チ、ネツワ[○] イヂラン[○]ドー。

もう熱は出ないだろう。

○………… アチャサ[○] アヤブ[○]ンドー。

…………暑いでしょう？

に見える「ドー」は、どういう「ドー」であろうか。私は、「出ないだろう」や「暑いだろう」などの言いかたをかかげて、方言対訳を求めたのだった。その時に出たのがこの「ドー」である。(あるいは、「ぞ」的な「ド」が、こうい

う推量表現のばあいにもつかわれることがありうるか。) この「ド」は、おそらく「だろう」の「ド」であろう。

○ガ^ンディ^ロ ド。

そうだろうよ。

の「ド」は、「よ(ぞ)」的なものであろう。

徳之島の例は、得ることができていない。

与論島の人たちからは、多くの「ドー」例を得ている。つぎのようなものがある。

○イ^キュ^ン ドー。

行くよ。

○シ^ンセ^ーヌ マ^ーチャ^ン ドー。

先生がいらしたよ。

(「マーチャン」は、「ウ^ハーチャ^ン」より尊敬した言いかたのことであった。)

これらには、「ぞ」に通う「ドー」が認められよう。教示者はこの時、“「ドー」は、尊敬したり、また意味をつよめたりする助詞。”“「ドー」は、どんな時にもよく用いる。”と語った。

○ニ^ャーヌ[ü] ユ^ルア^ー イ^ダーティ^ン イ^キャビ^{ラン} ドー。

は、「今夜はどこにも行きませんよ。」である。

○イ^チーン ヤ^ッケ^ーバ^ッカイ ナ^ヤビ^ュイ ドー。

は、「いつもやっかいにばかりなって、すみません。」である。(この対訳は、町博光氏による。)

沖繩本島の「ドー」例は、

○ナ^マ イ^チュ^ン ドー。

いま行くよ。

○ナマ チューン ドー。

いま来るよ。

などである。本島北部の国頭地方のことばとして教えられたものに、

○シンシーガ チャービン ドー。

先生がいらしたよ。

というのものもある。

国立国語研究所編の『沖縄語辞典』には、「doo ◎ (助) ぞ。だぞ。」が見え、
nusudu ～. どろぼうだぞ。

'jaqciini nuraarijuN ～. にいさんに叱られるぞ。

の例があげられている。

伊波普猷氏は、「琉球語の掛結に就いて」(『伊波普猷全集』第1巻 平凡社
昭和49年4月)で、

今日の口語でも、kunu hyâ ya nusudu dô! (此奴はぬすとだぞ)といふ
よりも kunu hyâ dô nusudô! (此奴だぞぬすとは)といふ方が力が強い
ようだ。兎に角掛結のおこりの語句の倒置にあることは、かういふ所から
推測することが出来ると思ふ。ど (du) に就いてはまだ述べたいことがあ
るが、それらは他日に譲ることとして、こゝにはど (du) は用ゐる様によつ
ては、日本語のぞよりも力が強く、場合によつては、こそと同じ位の力を
有することがあるといふだけを附加しておく。

と述べていられる。

高橋恵子氏も、かつて、沖縄本島コザ本位の、諸種の文末詞用例を教示せられ、その中で、

○ツアリン ナーファカイ ツイチュラ ハジ ドー。

あの人も那覇へ行くはずだぞ。

○ツウリル マーシ ドー。

これがいいぞ。

などの「ドー」例を示された。

与那国島の比川方言について調査せられた高橋俊三氏によれば、同方言では、

○アッタ アミガ フ ハディ ドゥ。

明日、雨がふるはずだよ。 (中男→高橋氏)

○ブル ンドゥン ドゥ。

全部言うよ。 (少女間)

○ガクニ アンピタン ドゥ。

学校で遊んだんだぞ。 (少男間)

○マユガ アガミ^ティ ナジャン ドゥ。

猫が子供を生んだぞ。 (少男間)

などの言いかたがおこなわれているという。ここには、「ド」相当の「ドゥ」が見られる。「ガドゥ」などの複合形もおこなわれているようである。

南島方言域に広く認められる「ド」の言いかたをかえりみつつ、いわゆる九州方言域の「ゾ」の属を、南部から北部に見ていきたい。

三 九州地方の「ゾ」ほか

鹿児島県

鹿児島県下には、「ぞ」該当の「ド」がさかんにおこなわれていて、これが、特色ある様相を呈している。——全国でも、この点、この地域がとくに注目される。

本県下の「ド」に関しては、まず上村孝二氏の、「南九州方言文法概説——助動詞・助詞——」(『国語国文 薩摩路』第十二号)に説かれるところを、ここに引用させていただきたい。氏は、

このドは古典語の「らむ」に由来するもので、ロウ>ドー>ドとなったものの。県南辺境ではドがロに発音される。このドと同形の文末助詞ドがあって、両者は紛れやすい。アクセントによって区別するよりほかない。イッ^下(行くだらう)、イ^ッド(行くぞ)。さてカ語尾形容詞に接してヨカド(良かろう)というばあいは、共通語の良カロウの訛りか、あるいは、良カという方言の基本形に「らむ」系のドがついたものか、判断に迷う。北薩地方では良カ^ロドと促音を受けることが多いが、これは明らかに「良カル^ロウ」の訛りである。

と言われる。ついでまた、

文末助詞の一部についてはすでに述べたところがある。まず断定の意にドをさかんに使う、学校ニオクルド。だが鹿児島地方の女性はこのドをさけてヨを使う傾向がある、ことに共通語的場面では。遅ル^ッヨ・ヨカ人ジャ^ッヨ(だよ)。離島ではドー・ローが有力。長島方面では、雨が降トゾ・ソラ雨ゾのようにゾを使うのが特徴。だが、ドの方は体言を直接うけることはない。

と説いていられる。

「ロウ」の「ド」とは区別される、「ゾ」該当の「ド」は、「ゾ」の転訛形であろうか。しかしながら、薩隅地方の大部分では、属島にもわたって、「ゾ」相当の「ド」が常用されており、「ゾ」のならばおこなわれることがない。こういうことによってか、「ド」は、「ゾ」該当の独自の風格の文末詞になっている。これは、かならずしも、低品位の表現に役だてられるものとはかぎられていないようである。

「ゾ」形のごとは、上村氏のすでに説かれるところである。長島方面、あるいはそれに近接した本土方面は、北方他県の「ゾ」域につらなって、「ゾ」を示すということであろうか。

甌島以南のいわゆる離島の諸地域では、「ド」がさかんであって、かつ、種子島、屋久島などでは、「ロ」形が示されがちである。(十島村の硫黄島につい

て、また、トカラ列島の宝島について、かつて私が教示せられた資料には、「ド」の「ロ」形が見られない。「ロ」は「ド」から単純に転化したものであろう。種子島の「ロ」例は、

○きょうは 魚は ヤスー ゴザンス ロー。

きょうは魚は安うございますよ。

○ツレモザン ロー。

釣れませんよ。（「釣れるか？」との問いに対する返事）

などである。“ふつう、女が「ロー」を言う。男でもつかう。”などと言われていた。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の「ロ」例は、

m………… カワカン ク クンデ ハコラロ
川から くんで 運んだよ。

などである。離島部にかぎらず本土部にも、じつは、「ロ」が見いだされる。

*f*アイロ ヤマジェ $\left(\begin{array}{l} \text{へー} \\ \text{m} \end{array} \right. \begin{array}{l} \text{(笑)} \\ \text{ほう。} \end{array} \left. \right)$ ウミノ ソバジェー
ありますよ。 山で、 海の そばで。

は、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水」の条に見られるものである。白沢龍郎氏は、大隅東岸の内之浦町内の言いかた、

○ヨカッタ ロー。

よかったよ。

を教示せられた。男女ともこの言いかたをするという。

「ド」（または「ロ」）の用法に関しては、述べるべきことが多い。「断定」や「肯定」に用いられると概説することもできようが、今は、たち入って、次のような分析的な見かたをしてみたい。

第一に注目したいのは、「説明・告知」の用法にたつ「ド」である。薩摩半島西南端の一例、

○ッケン スット ゴアン ドー。

こんなにするんですよ。

大隅東岸の、

○ハナツガ ミゴチカッタ ド。

花火がきれいだったよ。

など、まったく「説明・告知」と言ってよいものであろう。(断定的な調子で言われても、それが「説明・告知」になっている。) この範疇におさめうる用例を、私は、なかならず多く持っている。

上二例でもうかがえるように、「ド」は無敬態の言いかたの下にくるとともに、敬態の下へもきている。「…………… ゴア[↑]ン ド」の言いかたはよくなされている。「ごさいませんよ。」は、「ゴザハン ド。」である。山下光秋氏は、「鹿児島県鹿児島郡谷山町方言集 下」(『方言誌』第八輯)で、

ナカド ないよ

ナカンド ないですよ

と記述していただける。県下で、「アッ ド。」(あるぞ),「ア[↑]ン ド。」(ありますぞ)が、ふつうにおこなわれていよう。『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県肝属郡高山町麓」の条には、

fソア モツヂッキヤイ アシケ アッド

それでは 持ってお行きなさい。 あそこに ありますよ。

との記述が見える。「アッド」が、前の「ヤイ」尊敬法助動詞を受けてか、「ありますよ」とされている。さて、「(〜)チャ[↑]ッ ド」もよくおこなわれる。

○コンダ カンナカガ トーバンジャ[↑]ッ ド。

こんどは上中(の家)が当番だよ。(青男→青女)

は、薩摩北部の一例である。(井上親雄氏教示)『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条には、

fシナイノ シガ ウッチウツテド オモデ ショノデジャ[↑]ッドー

尻無の 人が 打つと 思って ねたんですね。

などが見られる。「(です)ね」の言いかえはどうであろうか。) トカラの宝島では、

○そんとはおいがとざっど。

の言いかたがなされているという。「ヂャッ」や「ザッ」のもとにきうるのは、「ゾ」ではなくて「ド」でなくてはならなかつただろう。ところで、この種の「ド」に関しては、「トヨ」との類縁も考えられるのか。上畝勝氏の『九州方言辞典』上巻〔中南部篇〕には、

これだよ 文末助詞

こいぢャっど、こいぢャっどよ、薩摩地方。こいぢャっがよ、大隅地方。

(以下略)

というような記事が見られる。

第二には、自己主張とか意志表明とか言いうるものをあげてみたい。——「告知・説明」に近いけれども。大隅東岸での一例、

○ $\overline{\text{パッテン}}$ $\overline{\text{アヒコン}}$ $\overline{\text{ヤメナ}}$ $\overline{\text{イカソ}}$ $\overline{\text{ド}}$ 。

でもあそこの山には行かんよ。

は、“はっきりにした拒否”であり、まさに意志表明である。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

m………… オヤ モー モロッド

わたしは もう 帰るよ。

というのがあつた。吉町義雄氏が、「吐噶喇諸島方言」(『旅と伝説』第十三巻第四号 昭和15年4月)でかかげられている、宝島の、

ウッチョラントナラ、カルヨリホカ、シカタハネエド。

の「シカタハネエド」での「ド」の表現は、意向をあらわしたものであろう。

第三には、推量表現にかかわる「ド」がある。薩摩半島南部での、

○ $\overline{\text{コンニャ}}$ $\overline{\text{コリャ}}$ $\overline{\text{ユッガ}}$ $\overline{\text{フッ}}$ $\overline{\text{ドー}}$ 。

今夜これは雪が降るぞ。

の言いかたは、その一例とされよう。

○ $\overline{\text{ソゲン}}$ $\overline{\text{ウゴッ}}$ $\overline{\text{キッソ}}$ $\overline{\text{ヌッカ}}$ $\overline{\text{ド}}$ 。

そんなにたくさん着るとぬくいぞ。

は、北薩での一例である。大隅の、

○キユワ アメヂャ ド。

きょうは雨だぞ。

などは、明らかな推量表現の例とされよう。瀬戸口俊二氏教示の、薩摩半島東南端での一例は、

○ワリ コッモ シカネン ド。

悪事もやりかねないぞ、きっと。 (老男間)

である。

第四に、勧誘の「ド」があげられる。

○ハヨ モロッ ド。

早く帰ろうよ。(相手を促しせき立てる調子。「モロッ ド」となれば自分一人丈でも帰ってしまおうという気持が表れる。)

は、白沢龍郎氏教示の、大隅内之浦での一例である。

瀬戸口俊治氏は、薩摩半島東南端での、

○メス ク ド。

飯を食おうぜ。 (青男間)

を、「軽く勧誘する場合」とされ、なお、「ことばつきは軽いのであるが、自分の気持としてはすでに決っているのである。」と説明してられる。

第五に、おしつけるきみのつよい「ド」がとりたてられる。(——北の長島方面でなら「ゾ」である。)たとえば、「おまえたちは、六時まえに起きなければいけないよ。」に相当する言いかた、「………… オキランバ イケン ド。」などのばあいの「ド」がそれである。

第六には、広く命令表現と解しうるものでの「ド」がとりたてられる。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条には、

mソーラネー アシモテ キオ ツケテ イゲロー

それではねえ、足もとに 気をつけて 行けよ。

というのがある。「イゲロー」が「行けよ」と説明されている。「ロー」は「ド

一」か。薩摩半島南部の枕崎での例は、

○ヒッ[↑]カカランヂ イゲ[↑] ドー。

ひっかからないで行けよ。(下の部の表現。これは、「アス[↑]バンヂ[↑] ハ
ヨ イゲ[↑] ネー。」<あそばないで早く行けよ。>に近いもののように
ある。)

○ヒッ[↑]カカランヂ イゴ[↑] ドー。

ひっかからないで行くんだよ。(叱りつけてこう言う。)

などである。なお、ここでは、「そんなにするな。」を、

○ソン スンメ[↑] ドー。

とも言っている。瀬戸口俊治氏が、薩摩半島東南部の、その郷里方言からとり
だして示された例は、

○アツケ[↑] ソデ[↑] デュイメ[↑] ド。

暑いのに(から)外へ出るなよ。(老男→幼女)

○ワリコヂュ[↑] スイメ[↑] ド。

悪いことをするんじゃないよ。(中女→幼女)

などである。瀬戸口氏は、「〜メ ド」の言いかたを「禁止表現法」と言わ
れる。これに、「やわらかいもの言い。やさしく禁止する。」との注釈もつけら
れた。なお、氏が、「間接的な命令表現法」とされるものに、

○ノ[↑]ッタッ[↑] ドー。

さあ乗るんだよ。(老女→幼男)

がある。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条に
は、

m…………… ヒノヨージンノ シチョーゴロー

火の用心を しておきなさい。

というのが見える。「シチョーゴロー」は、「しておこう ゴ」というようなも
のであろうか。

「ド」(または「ロ」)の、以上のような分析的な見かたのあとに加えて、一

つの特殊な「ド」をとりあげておく。薩摩半島西南端の笠沙半島で聞いたことばであるが、私の方言踏査目的を知って、中年の女性が、

○ド ド ド ド ……………。

と言った。これを聴録したカードに、私は、「かるいおどろぎと恐縮のことば」としてしている。こういう時、「ド」音を連続させたのは、私にとって、すこぶるめずらしいことである。なににしても、「ド」が、ものごとの確定に関する感情をあらわすものであることはたしかであろう。

つぎに、「ゾ」にいくらか似た音相のものに「ジョ」がある。これが、「ゾ」系のものであるのかどうか、私にはよくわからない。今はただ、いわゆる共時的論的処理を重んじて、関連音相のものを合わせかかってみるしだいである。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

m………… イワン ヒター モー ソイト ハンタイジョ

いまの人は もう それと 反対ですよ、

と見える。「ハンタイジョ」の「ジョ」がとりたてられる。同巻の、「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条にも、

m………… ソーダンニ キタッジョー

相談に 来たんだよ。

などが見える。私が、薩南の枕崎で聞いた例は、

○コンタ ラガッヂョ。

これはおれのだぞ。

(下の部の表現である。)

である。井上親雄氏教示の、薩北の一例は、

○ワヤ ドケ オッタッ ジョ。

お前はどこに居ったのか。(小学校の入学式に孫を連れて行き、やっ
と探しあてた時) (老男→孫幼男)

である。白沢龍郎氏教示の、大隅東岸での一例、

○オイガ ユタバッ チョ。

おれが言ったんだがな。(不安を感じている) (やや下品)
も、「チョ」をとらしめるものであるという。

宮崎県

宮崎県下にも、「ゾ」「ド」がよくおこなわれている。ふつうにこれをつかえば、まずは低品位の表現がおこる。男性がわにつかわれやすいか。

「ド」形は、県下の中部以南によくおこなわれており、南方の状況は、じつによく鹿児島県下状況に接続している。

「ド」「ゾ」の用法のうち、ぬきんでてさかんなのは、告知・説明と言える用法である。「何々だ よ。」の、つよい「よ」に相当するものとも言えようか。県下中部西奥での一例は、

○センセガ キヤッタ ドー。

先生が来られたぞ。

である。中部東寄りでの一例は、

○ハルッ ドー。

晴れるぞ。

である。(「晴れるだろう。」は、「ハルッチャロー。」である。) 中部西奥でのことであるが、私のカード記録、

○ヤマイモガ デタ ゴー。

“ぼつぼつ、「ぐづぐづ」を言いはじめると、こう言う。”

に対して、カード検閲の識者は、「ゴー」のところに「ドー」と注記していら
れる。

命令表現の「ド」がある。都城市の例では、

○イラン コツドン スイメ ド。

余計なことどもするなよ。

などというのがある。

陳思の表現の「ド」がある。自己の意志を述べる「ド」がある。

○インニャ、ソッチニャ イカン [↑]ド。

いいや、そっちには行かないぞ。

などと言っている。

「ね」と言いかける程度の「ゾ」もある。

推量を表白する「ゾ」「ド」がある。

○モー ヤガッテ モドッテ クッ [↑]ド。

もうやがてもどって来るぞ。

などとあり、『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

*m*モー ドーシテン ヒチハチネン ナローゾ

もう どうしても 7, 8年に なるだろうよ、

とある。推量を告知する表現になっている。

つぎに、「ゾイ」の形が見いだされる。「ゾ」から生成した「ゾイ」か。(あるいは「ゾヨ」が「ゾイ」になることもあり得たろうか。判然としない。)『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

m……… ナカナカ ヤオー イカン³⁾ゾイ

なかなか 容易ではないよ。

3) 「やさしくはいかないぞよ」の意。

というのが見える。岩本実氏の『日向の高千穂方言』にも、

ゾ・ゾイはぞんざいな強めとなる。

とある。

※ ※ ※

本県下の、「ド」(ぞ)に関する複合形の文末詞には、「トド」「ツド」がある。

○オラ シェン [↑]トド。

わしはしないよお。

は、県中部での「トド」例である。「ド」のつよめがよく効いていよう。

熊本県

天草をはじめとして、県下に、「ド」「ゾ」がさかんである。「ゾ」は、低品位の表現をかもす。おもに男性がわにこれが見られよう。

最初に、告知の「ゾ」「ド」がとりたてられる。

○ウツタ[↑]タッ クルッ ゾ。

たたいてやるぞ。

は、県中部西寄りの一例である。県南には、「ド」形がよくおこなわれている。中部にもこれがあるか。『全国方言資料』第6巻の「熊本県熊本市中唐人町」の条に見える、

mオイオイ モー イマカラ デカクルロー²⁾

おいおい、 もう いまから でかけるよ。 2) 「ロー」は「ゾー」の転か。

での「ロー」は、「ド」からのものであるのか。

○アレガ キョ[↑]ル ゾー。

あいつが来てるぞ。

は、阿蘇山南麓での一例である。「ゾ」と、指示代名詞「アレ」とが対応している。「ゾ」は、いちばんわるいことばだ、などとあった。天草下島で聞いたことばには、

○ウツ[↑] ゾー。

打つぞ。

というのがある。土地の五十歳代の男性は、これを、「クラースル ザイ。」(“たたくぞ。”)の言いかたとおなじものだとした。「ザイ」は、このように、「ゾー」と比照されるものなのか。能田太郎氏の「玉名郡昔話(一)熊本県玉名郡南関町一」(『昔話研究』創刊号)にも、

そッで猿どんな、はるきゃーち(腹立てて)、すんなら汝が穴んロィ(に)、糞たり込むざい(ぞ)、てち云わすと、…………。

とある。

命令表現の「ゾ」がある。天草で聞き得た事例は、

○コン テガンバ ヨーデ クレ ゾー。

この手紙を読んでくれよ。

○ガマダェテ ペンキョ セロ ゾ。

しっかり勉強しろよ。

○ハヨ イケ ゾー。

早く行けよ。

などである。おなじく天草で、禁止の「～ナ」の下にも「ゾ」をつけている。

陳思の「ゾ」がある。

○キャーネム ナッタ ゾ。

ひどく眠くなったぞ。

は、阿蘇山南麓での一例である。陳思とはいいいながら、それを告知している。

問いの「ゾ」がある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条に見られる、

fワリゲン トナンノ モンドマ ドードー シトルゾーカイ

お宅の 隣の 人たちは どんなふうに していますか。

での「ゾーカイ」は、文末詞の「ゾー」を示すものであろう。(推量の「ロー」が「ゾー」に変化したといことも考えられるか。)

県下に「ゾ」相当の「ゾイ」もある。上畝勝氏は、『九州方言辞典』上巻〔中南部篇〕で、

ぞ+い=ぞい。球磨川沿岸から八代

とするしてられる。斉藤俊三氏も、『熊本県南部方言考』で、「ゾ、ゾイ、ゼ」を指摘してられ、

ゾイ(ゾにイがつく) 「ゾ」よりも和やか 大野村

ともしてられる。早く、『全国方言集』も、下益城郡のこととして、「ゾイ」をとりあげており、また、阿蘇郡のこととして、

ダリドン 何誰ですか

ともしてある。「ゾ」の「ゾン」が「ドン」になっているのか。

「ゾ」にならべて見ることのできる「ジョ」が、本県内にもある。

○モー ヨカッ ジョー。

もうよいぞ。

は、天草での一例である。

本県下の南北に、「ゾ」の「ド」ではない、「だろう」の「ド」が、よくおこなわれてもいる。(ここにはまた、九州南部地方の当該状況との関連がよく見られる。)

○本町あたりは、精霊船をナガス トカ ナカドー。

……………流す所はないだろう。

(これに対する答えは、「アッ トー。」<あるよ。>というのであった。)

は、天草での一例である。原田芳起氏も、『熊本県方言の研究』で、

イサギェウツタッテドケドニイカルドカイ (球磨郡) (大へんおめかしをして、何処にども行きなざるのだろうか)

などの記述をしていられる。熊本市域で聞き得たものには、

○ダーモ オンナハランカッタトー。

だれもいらっしやらなかったらう？

○アトドー。

あるだろう？

がある。「ロー」と「ドー」では、「ドー」のほうが圧倒的に多い。”との説明も聞いている。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞には、「トゾ」「トゾイ」がある。

○キョーワ イエニ オッ トゾー。

きょうは家におるよ。

は、天草下島西岸での「トゾ」例である。おなじく天草下島の本渡市で聞き得たものは、

○イク トゾー。

行くんだぞ。

であり、これがまた、「イク トジー。」とも言われている。「トゾー」が「トジー」と言われているのは、めずらしいことである。

長崎県

全般に、告知の「ゾ」が、よくおこなわれている。

○コラー、シェンシエノ キヨル ゾー。

これ、先生が来てるぞ。

は、北部の生月島での一例である。「…………… ～マス ゾ。」は、「マッ ソ」にもなっている。

「ゾ」が、「ド」にもなっている。島原半島方面には、「ド」がいちじるしいようである。『肥前千々石町方言誌』には、

オイドマ、ロクジメ ヌーナ、オケニャー、ツマランド。（お前は六時前に起きなけりやいけないうよ。）

とある。

「ド」の変化した「ロ」もある。長崎市域方面に、

マタ ウタウ ^(ド-)ロー。

“また歌うよ。”（老女）

などの言いかたがあるという。

自己の思いを相手に告げる、上来、陳思などとも言ってきたものは、「思い」ないし「意志」の告知とも言える。こういう類のものも、全般によくおこなわれている。

そん内遊びに行くゾー

は、『島原半島方言集』に見えるものである。

（これは北串山村のものであるという。）

○コン ガキヤ カッポン ハズルッゴテ コッターヒ ゾ。

“この野郎。あごのはずれるようになぐりたおすぞ。”

(「コッターヒ」は、「コキタース」におなじものである。)

は、五島での「ゾ」例であり、

○コリヤ オンドガ ド。

これはわしのだぞ。

は、平戸島での「ド」例である。

推量告知の「ゾ」がある。五島例は、

○ソガンニ ヨケン キタラ アツカロ ゾー。

そんなにたくさん着たら暑かろうがい？

である。

命令表現のばあいの「ゾ」がある。対馬では、「起きるな。」「開けるな。」が、「オキメーゾ。」「アケメーゾ。」と言われているよしである。また、「そんなにするな。」が、「ソーシタラデキンド。」とも言われているという。

(山本俊治氏による。) 佐世保市方面には、

○コイバ シテン ドー。

“これをしてごらんよ。” (小学生男→大学生女)

などの言いかたがあるという。「シテン」は、「しておみ」にあたるものだろうか。であったら、「ド」は、明白な文末詞であろう。長崎市域方面にも、「ナクメーロ。」(泣くんじゃないぞ。)の言いかたがあるという。——「ロ」は、「ゾ」の「ド」からの「ロ」であろう。

○ソノ クッシバ イッチョ クイド。

その菓子を一つくれろ。(一般的には、同年輩のものや目下のものに、こういう言いかたがなされる。)

などと、西彼杵半島で言っているが、この「クイド」は、「くれろ」そのものか。「くれろ」を、動詞の一活用形、命令形ととるならば、文末詞「ド」の問題はおこらない。もし、「クイ」だけを命令形と見るならば、「ド」が文末詞と

してとりたてられることになる。

県下に、

○ゴハン タペンバ ズ。

“ごはんをたべなきゃよ。” (老男→老女)

というような言いかたもあるという。(愛宕八郎康隆氏の教示による。)「たべねば」との言いかたにおわるものを受けて、「ズ」がはたらいているのは、特異なものとされよう。本例もまた、一種の命令表現になっているとも見ることがができる。

さて、本県下に、「ズ」に類する「ジョ」がある。(「ジョ」の起源が何であるにもせよ、できている「ジョ」は、「ズ」に似て、もはや純感声的でもある。したがってこれを、「ズ」に合わせてとりあげることにする。)

○リップカ ジョー。

“きれいよ。”

○イッタ ジョ。

行ったぞ。

○オッダ シラン ジョ。

わしは知らんよ。

は、五島での例である。「ジョ」が、「トジョ」の複合形にもなっている。(その「ト」が、促音になってもある。)

※ ※ ※

「ズ」に関する、本県下での複合形を見る。「トズ」のおこなわれていることが、ぬぎんでた特色になっている。

○鹿児島のことばも、チョット ワカラン トズ。

鹿児島のことばも、ちょっと“わかりません”。

は、五島での一例である。

○オイドンモ アカハライ カカリマシタ トズ。

わしも赤痢にかかりましたんですよ。

は、西彼杵半島北部での一例である。古賀十二郎氏編『長崎市史 風俗編』（長崎市役所 大正14年11月）の付録、古賀十二郎氏編「長崎方言集覧」には、「トゾ」「トゾー」に関する、

トとゾを結び合せた言葉。肯定或は否定の意味を一層強むる為^レに用ふるの
である。

の記事が見える。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」の条に見える、

mソリャー モー オランドゾ

そりゃ もう いないよ。

での「ドゾ」は、何なのであろうか。

佐賀県

告知の「ゾ」が、全般によくおこなわれている。——みずからきめてかかる告知は、意志の表明でもある。

唐津市のいわゆる城外弁では、「先生が来てるぞ。」を、

○センセーン キヨル ズ。

と言っている。人は、この「キヨル ズ」を、「キタ バイ」とも対置している。なるほど「ゾ」は、「バイ」によく対立するものか。

○そこへ行くと ネー ズー。

そこへ行くとめりこむぞ。

（「ネー」は「ネル」である。）

は、県南方での一例である。

岡野信子氏教示の、唐津市神集島での「ゾ」例は、

○ソヤン マエ イワシタ ズ。

そんなふうに以前、言われたぞ。 （老男間）

などである。

県下に、「ゾ」に隣る「ゾン」もあるのか。

福岡県

告知の「ゾ」(→「ド」)が、広くおこなわれている。——陳思というのものも、これにふくめて考える。

○アイアン、オッカソノ ヨボラス ズ。

お兄さん、お母さんがよんでるよ。

は、大牟田弁での一例である。北九州方面に、「ゾ」「ド」のさかんなありさまは、岡野信子氏の諸研究にくわしい。

○イク コタ イクケンド マダ イカン ドー。

行くことは行くけど、まだ行かないぞ。 (少男間)

は、その中に見られる一例である。加来敬一氏は、「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号)で、「ド」に関し、

「ド」——豊前区築上、筑前区戸畑、八幡、鞍手(西川)

と、分布をしるしていられる。

告知のつよいばあい、命令調にもなる。——『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条には、

*m*シゴタ チョイト シッ シチャ オカニャ イカンゾ

仕事は ちゃんと して おかないと いけないよ。

というのが見える。

「ド」に関する「ロ」があるのかどうか。『久留米市誌 方言部』によったかと思われる稿本『久留米地方方言』には、「のう」「ろう」についての、

歎の意にて問ふ言葉の末に加ふ のうは同輩以上に用ひ、ろうは下輩に用ふ

との説明があり、

おまやー (おまいはの約) どけいつたろう

ともある。「カ」の意で問うことばの末にとされている「ろう」は、「ゾ」の「ド」に近いものかとも思われる。

※ ※ ※

本県下での、「ゾ」に関する複合形の文末詞に「ンゾ（ド）」があり、「トド」がある。（「トゾ」もあるのか。）

大分県

告知の「ゾ」がよくおこなわれている。

○先生が ゴザリョル ゾ。

先生が来てらっしゃるぞ。

は、国東半島での一例である。

「ゾ」の「ド」となったもののおこなわれることが、県下にいちじるしい。

○ニワトリノ エゾー ヤラニャー ド。

“鶏の餌をやりなさいよ。”

は、県東南隅方面での一例である。（小野米一氏による。）

○キミラ カテン ド。

きみは参加できぬぞ。（“申しわたすことば”）

は、国東半島での一例である。

「ド」の「ロ」もある。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」の条には、

*m*バーヨー オッカラ イマ モロッタロー

ばあさんよ、 沖から いま 帰ったよ。

とある。

広い意味の告知にふくまれる陳思の「ゾ」（→「ド」）を見る。中津市で聞いた例は、

○オラー ハンゾー ワルイケン イカン ゾー。

わしはつごうがわるいから行かないぞ。

などである。

○ソーユー コト スル コタ デキン ド。

“そんなことをしてはいけないよ。”

は、国東半島での一例である。思いを述べることがつよまれば、命じるような気もちを表現することにもなる。大畑勘氏の「大分県南部の方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、

○ガッコーニ モテイクヨーナヌ ツクラニャ ツマラン ド。(中女
→子)直川

学校にもっていくような<立派な>のをつくらないとだめだよ。

などの例も見られる。

九州北半の諸県内には、「ゾ」に関する複合形の文末詞(「ゾ」におわる形態)の見るべきものが、さほどにはなさそうである。

後注

九州方言内の「ザイ」については、「ゾワイ」起源を考えようとする説がある。上野智子氏は、昭和五十二年十一月、愛媛大学で開催された国語学会中国四国支部第23回大会で、「長崎県西彼杵半島方言における断定表現法の特質」を発表され、その中で、

ホンナコテー ザイ まったくだよ。(中男→中男たち)

などの「ザイ」を、「ゾワイ」起源のものとされたようである。

こういう見解にしたがえば、通時論的には、「ザイ」(「ザン」なども)文末詞を、上乗の「ゾ」の叙説に加えてとりあつかってもよいことになる。

(なお、「ザイ」について、「ゾヨ」起源を考えることもできるか。「トヨ」からの「タイ」生成に合わせて考えれば、「ゾヨ」からの「ザイ」生成も考えられることは、さきに p. 252 で述べた。)

四 中国地方の「ゾ」ほか

山口県

告知の「ゾ」がさかんである。その「ゾ」の「ド」となっていることもいちじるしい。——「ド」のほうが、よりよくおこなわれているかのようにさえも思われる。

○イツーマガ タケツ↑チョル ズ。

“イツーマガが叫んでよんでいるぞ。” (青男→小男)

は、県中部での「ゾ」の一例である。「ド」の例を東西に見れば、県西辺に、

○ダ↑レモ オ↑ラン 下。

だれもないぞ。

などがあり、県東部に、

○オ↑ッチャー ナ↑カッタ ド。

いられはしなかったぞ。(人の不在について言う。)

などがある。

「ド」の「ロ」もあって、周防の平郡島では、

○メ↑ジ ロー。オカズワ イモ ロー。

めしだぞ。おかずは芋だぞ。

などの言いかたがなされている。(国安功氏による。)

陳思の「ゾ」(→「ド」)を見る。

○ワ↑ア↑ー コ↑ター シ↑ラレン ド。

わるいことはできない(してはいけない)ぞ。 (老男→老女)

は、平郡島のものである。(国安氏教示)

○ヤ↑ド。デ↑ル カー。

いやぞ。出るものか。

は、周防東部での一例である。この種の「ゾ」(→「ド」)の言いかたが、一般に下卑たもの、あるいは粗野になることは、多く言うまでもないことであろう。「ド」となまったものが、いっそう下品であろうか。(「ゾ」よりも「ド」のほうに、表現上、線の太さとでもいうようなものがありましょう。)

『山口県方言調査』には、「やるものか」にあたる「ヤロード」があげられている。ここの「ド」は、つよい意志をあらわす反語表現にかかわっている。

問いの「ゾ」「ド」もいくらかおこなわれている。

県下に「ゾイ」形もある。周防祝島では、

○マ^ー アン^タ, ソ^レガ ツマ^{ロー} ズイ。

まああんた、それがつまるものですか。(“ツマランということ” “わるいということ”)

などと言っている。「ゾイ」が「ドイ」にもなっている。

○モ^ドロー ドイ。

帰ってくるだろうよ。

は、また、祝島での一例である。周防本土にも「ドイ」がある。平郡島には、

○コ^トシノ カンワ ヨッ^ボド コタエル ズヨ。

ことしの寒さはよほどひどいね。

の言いかたがあるという。(国安功氏教示による。)『山口県方言調査』にも、「イケンドヨ」(いけないよ)などが見える。「ゾヨ」が「ゾイ」(→「ドイ」)になることもあったか。(あるいは、本県のばあい、「ゾイ」は「ゾヨ」からのものか、と言うべきか。)

本県下に「ジョ」形も見いだされる。長門北部の一例は、

○サ^キー イ^キヨル ジョ。

さきに行ってるよ(ぞ)。

(「ジョ」は、男の子どもの間に多くおこなわれているという。)

である。(この例のばあいなど、「デヨ」がつつまって「ジョ」になったことが思われやすい。) 神部宏泰氏教示の長門東部の一例は、

○トー ハイチャ^ル ジョー。アメガ。

10個入っているぞ。飴が。 (小男間)

などである。

※ ※ ※

県下の「ゾ」に関する複合形の文末詞に、「ノ(ン)ド」などがある。

○コイベ クー^ンド。

今夜、食うんだぞ。

は、祝島での一例である。

「ドナ」など、「ゾ」「ド」が頭部にある複合形は、しばらく不問に付すること、従前どおりである。

広島県

本県下で、「ゾ」の「ド」もよくおこなわれている。——まれに、「ド」の「ロ」となったものもある。

告知の「ゾ」「ド」が、さかんにおこなわれている。

○マッ^サラゾー。

ま新しいものだぞ。

これは備後島嶼部での一例である。

陳思の「ド」「ゾ」もまた、芸備に、よくおこなわれている。

○コガ^ン エット^{ゼニャ} イラン^ド。

こんなにとくさんぜにはいらぬよ。 (老女→中男)

は、備後での一例であり、

○ブ^{シャ}ゲル^ド(ゾ)。

なぐりあげるぞ。

は、安芸での一例である。陳思のさいも、「ゾ」は、よい言いかたにはならず、「ド」となるとなおさら卑俗ぎみの言いかたになる。それが、「ワ^{シャ}ー^{シラ}

「デ。」となると、この「デ」ゆえに、表現は、やや品を持ちなおしたものに
なる。

問いの「ド」もおこなわれている。

「ゾ」に相当する「ゾイ」がある。

○アヒタモ ヒヨリ ゾイ。

このぶんだとあすもひよりだぞ。(確実みの想像)

は、安芸北部での一例である。「ゾヨ」が「ゾイ」になりもしたかもしれないけれども、「ゾ」をつよく「ゾー」と言うひょうしに、発音が「ゾイ」になることもあったろう。「ゾイ」が「ドイ」となってもおり、これが安芸地方にさかんである。安芸のうちに、「エツト ドイドイ ユーマイ ドイ。」(たくさん「ドイドイ」って言うまいよ。)との言いぐさもある。

※ ※ ※

「ゾ」に関する複合形の文末詞としては、「ンゾ」などがある。

岡山県

岡山県下のいちじるしい方言事象をとりまとめた言いぐさに、「ズド ホン ボッコ オエン ゾナ。」というのがある。「オエン ゾナ。」(いけませんよ。)などと、「ゾナ」のおこなわれることがさかんである。その「ゾ」が、「ド」とともに、告知によくつかわれている。

○キー ツメタ ゾー。

来つづけたぞ。

は、備中島嶼での一例である。陳思の「ゾ」もまた、よくおこなわれている。

○ベント イラン ゾ。

弁当はいらないぞ。

などと言われている。

「ゾイ」もある。

○メツソー モンクワ ナイ ズイ。

たいして文句はないだろうよ。

○ソージャロー ズイ。

そうだろうよ。

は、県下の、南北の各一例である。「ドイ」もある。

島根県

本県下の石見地方には、告知の「ゾ」がよくおこなわれている。

○マ[↑]タ オチテ ア[↑]タマー ウ[↑]トー ズ。

また落ちて頭をうつめにあうぞ。 (老女→孫小男)

は、石見西部で聞いた告知の「ゾ」の一例である。「ウ[↑]トー ズ」とあって、「ウツ ズ」ではないのが注目される。未来表現を受ける「ゾ」は、出雲地方にもよく見られる。加藤義成氏の「中央出雲方言語法考」(『方言』第五卷四号)には、「ヨモヨモダラ[↑]ゾ (よくもよくもだらうぞ)」、「バンゲニャ[↑]ゴゾ (晩方には来るでせうぞ)」などの言いかたが見える。

県下に、陳思の「ゾ」もよくおこなわれている。——石見では、「ド」がよく聞かれる。

○ホ[↑]ダカ[↑]シェ オ[↑]ッター ドー。 (老男→小男)

くそ足をへしおってやるぞ。[いかり]

は、神部宏泰氏の「隠岐島五箇方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)に見えるものである。——氏は、「ド」について、「品位は、『ゾ』よりもいっそう低い。」と述べていられる。

加藤義成氏の前掲論文には、「ソ[↑]ラオモシ[↑]レズイ(それは面白いよ)」などに関する、

文語ぞに類し、東京などのぞと用法を同じくして居る様である。

との記事が見られる。「同輩以上にはネを加へてズィネといふ。」ともある。こ

の「ズィ」は、どういう性質のものであろうか。私も、かつて出雲西辺を調査して、

○グ[ü]ーグ[ü]ー ヨー ズィ[zi]ー。

ぐうぐう言ってるよ (ぞ)。 (小男→祖父老男)

○ヂ[i]ーヤン、ク[ü]ス[ü]ーガ モー ズィ[zi]。

じいちゃん、薬がもるよ。

などの言いかたを聞いた。「キ[kçī]タ ズィ。」というのへは、私は、「来たぞ。」と注しており、心やすい家へはいる時のことばとも注している。「ズィー」([zi])は、まさに「ヅ」的なものであろう。かといつて、「ヅ」が、「ズィ」に変じたとは、にわかには、しがたいことのように思われる。この点では、むしろ「ゼ」起源が考えやすい。(しかし、当地に「ゼ」文末詞があったのかどうかは、当時、確認しかねた。)ともあれ、「ズィー」は、この地で多用されていて、陳思の、

○ナグ[ü]チャー ズィ[zi]。

なぐってやるぞ。

なども聞かれた。後年、出雲南部で得られた実例の一つは、

○ホンダ ズィ。

ほんとうだぞ。

である。隠岐には、「ズ(ヅ)ヤ」の複合形も見られる。

県下に「ヅ」関係の「ゾイ」もある。出雲で、推想の意味に多くつかわれており、千代延尚寿氏の「石見ことばの種々相」(『方言』第六卷第十二号)には、

ゾイを附けて

早う寝ようゾイ

明日の朝ア早う起^{おき}ようゾイ

という「ゾイ」が見える。

出雲地方に、「ヅ」に関連する「ジヨ」がある。南部山地での例は、

○アダシ ヘー ヤメタ ジヨ。

わしはもうやめたぞ。

などである。人は、「コメー ジョ。」を、「小さいよ。」と言いかえてくれた。
藤木敦氏は、やはり出雲奥での用例、

○バシガ トーヤン ナッタワ サイキンダ ジョ。 (青男間)

バスが通るようになったのは、最近だぜ。

を教示された。

鳥取県

告知の「ゾ」がおこなわれている。

○ダレンダ ェアイ オリャー セン ゾ。

だれもいはしないよ (ぞ)。

陳思の「ゾ」もよくおこなわれている。「ド」ともある。

○ネニャー。 ハヨ メガ サメン ゾー。

ねなくちゃあ。早く目が覚めないよ。 (中女→子小男)

問いの「ゾ」もある。

「ゾイ」もある。『鳥取県方言辞典 後編』には、

ぞい 〔感〕 語気を強める表現「云ったー」

ぞい 〔感〕 反語「よー行こーぞい」

などがある。『因伯方言考』には、「西伯地方の言葉」の、

エライ、ローソクガ、ミチケガ、トチユウデ、ナンナラセンモゾイ。(大へん蠟燭が、短かいが、途中で、なくなりはせまいね。)

というのが見える。

本県下に、「ゾ」に関連する「ジョ」もあるか。

中国地方に、「ゾ」に関する複合形の文末詞の見るべきものは、あまりない。

五 四国地方の「ゾ」ほか

愛媛県

告知の「ゾ」が、つぎのようにおこなわれている。

○ネガ エー ズ。

値がいいぞ。

これは東予での一例である。内海島嶼での「ドヒタ イナゲナ ヒヨリ ズ
アー。」(なんという変なひよしかねえ。) というのも、「ゾノー」が、告知の表
現をささえている。

陳思の「ゾ」が、つぎのようにおこなわれている。

○ソナ ヨトー シタラ イケン ズヨー。

そんなことをしたらいけないよ。

これは、南予の宇和島市での一例である。南予地方では、「ゾヨ」の言いかた
がよくなされている。——「タイテイ ユキ ズヨ。」(たいてい雪になろう
よ。) などとも言われている。

○ナシカシャン ヨーッタ ズー。

なにかしら言ってたぞ。(自分がそれに賛成であることを示す。)

は、伊予西海の孤島、青島での陳思の「ゾ」である。

○キョーワー コラエトイチャルケド コソドカラ シタラ イカン ズ。

きょうはゆるしてやるけれど、こんどからしてはいけないぞ。

(中男→小男)

は、松山市での一例である。(柳田征司氏教示) この種の「ゾ」は、おしつけ
ぎみがつよく、表現が命令表現相当のものになる。

勧誘の「ゾ」もおこなわれている。

○マタ コンド ヤロ ズ。

またこんどやろうよ。

は、中予での一例である。

問いの「ゾ」が、よくおこなわれている。東予今治市方面での一例は、

○ナン ズー。ソリャー。

なんだ？ それは。

である。当地方では、こういう「ゾー」の言いかたは、“いちじるしい卑語”
とされている。中予での一例は、

○オマイ ドコ ズー。

おまえはどこのものか？

である。南予での一例はつぎのものである。

○イワシワ ドーダッ ソー。

鯛はどうですか。(鯛売り)

(「～ダス ズー」が、「～ダッ ソー」になっている。)

たとえば松山弁では、

○ドクショ シドーって、いったい ナニ ヤル コト ズ。

読書指導っていったい何をやることなんだ？

などと、おとなの知的な会話の中でも、「ゾ」がふつうにつかわれており、かなりぞんざいな気分がそこにあらわされる。ところで、この地方に多いあいさつことは、

○ドー ズナー。

どうかね。

というのでは、さほどのぞんざいみは感じられない。つよい気やすさが感じられる。(男青年たちも、出あいがしらに、こういうあいさつをしがちである。)

『全国方言資料』第5巻の「愛媛県温泉郡川内村井内」の条には、

m ドーユノー コーテ コーゾ。

どんなのを 買って 来ようか。

とある。「ゾ」の問いが、反語法にもなる。国立国語研究所報告16『日本方言

の記述的研究』の中の杉山正世氏「愛媛県 宇和島市」には、

ゾ・ゾー ①助詞ンを伴った動詞に続き、念を押し、意味を強める。「こ
こはお前がするんゾ」②不確かな意を含む語に続き、疑いの意をあらわす。

「だれゾー」。また、反語法にも。「これぐらい何ゾ」

とある。南予地方のことばに、「あるだろうか。」の意の「アル ゾカ。」との
言いかたがある。ここに「ゾカ」の言いかたが見えはするが、これは、「ゾカ」
<「ドカ」<「ロカ」とさかのぼりうるものかもしれない。「有るロー(助動詞)
カ。」の言いかたが、もとなのかもしれない。人は、「ゾカ」を、“不安に思っ
ての問い”だとしている。

感嘆の「ゾ」がある。

○オーオー、ドー ゾ。エー ナー。

おやおや、どうなのでしょう！ いいことねえ。(持っているおもち
ゃをほめる。) (老女→幼男)

は、伊予東部での一例である。

「ゾ」の変形と思われる「ゾン」がある。

○ゾー ゾン。

そうですよ。(そうだよ。)

などが、東予に(島嶼部にも)おこなわれている。“「ゾー」はわるいことばだ
が、「ゾン」となるとよいことば。”とされている。子どもたちからも、「ゾン」
がよく聞かれる。

東予本土の突端部、あるいは今治市方面には、「ゾン」の「ドン」もある。
(ここには「ゾイ」の「ドイ」もある。——中予にも「ドイ」がある。)

○ゾー ドン。

そうですよ。

などと言われている。

○ヨー ゾーヤカス ゾンナーシ。

よくせわをやかせますわねえ。

(「ゾンナーシ」の「ン」は、聞いた時、かるくはいっているように思えた。)

は、南予辺陞部での「ゾン」の一例である。

本県下にはまた、「ゾン」相当の「ゾイ」もよくおこなわれている。

○オーイ、ドーゾイ。

おおい、どうだね？

は、南予での一例である。

○ドュー グライ ズイ。

これはいったいどういうことですか？

○コリヤ コマッタ ズイ。

これはこまったぞ。

は、内海島嶼での実例である。——これらの例を見るにつけても、「ゾイ」は、かならずしも「ゾヨ」本源のものとしなくてもよさそうに思われる。内海島嶼の大三島の、私の生地では、

○アガニ ショーッテ、シマイニャー ナンギ スルンジャロー ズイ。

あんなにしてて、しまいには難儀をするんだろうよ。

などとも言われている。こういう「ゾイ」は、「ぞよ」ともとってよさそうであるが、すくなくとも私などの知るところでは、生地の方言に、「ゾヨ」のふつうにおこなわれることはない。(「とってもいいんだ!」ということ報告する「エー ゾヨ。」の言いかたなどの「ゾヨ」はあるけれども。きれいだっことを報告する言いかた、「キーレナカタ ゾヨ。」もある。)

中予から南予にうつってすぐの喜多郡のうちで聞いたものに、つぎの二例がある。

○ナンボニモ ヨイ、カサワ カエン ズヨ。

とともともきみ、傘は買えないよ。(高価で)

○コレガ 七割八割ジャッタラ ナンゾイ、マタ、…………。

これが七割八割だったら、あれだよ、また、…………。

この両例で、「ゾヨ」と「ゾイ」とが見あわされる。「ゾイ」も言い、「ゾヨ」も言うこの地では、「ゾイ」について、それが「ゾヨ」からきたことも考えられようか。それにしても、私は、一方で、「ゾ」の変形としての「ゾイ」も考えたく思うものである。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞を見る。

「ゾ」がはじめにくる複合形「ゾナ」「ゾネ」「ゾヤ」「ゾヨ」「ゾエ」などがあることも注意される。

「ゾ」があとにくるものでは、「ノゾ」（「ノンゾ」も）「ンゾ」（「ンド」も）「ンゾン」「ンゾイ」がある。複合形は、四国地方にあっても、多種ではなさそうである。

○オッカー ドコイ イタ ンゾー。

母ちゃんはどこへ行ったのか？ （大男→小男）

は、南予での「ンゾ」例である。『全国方言資料』第5巻の「愛媛県温泉郡川内村井内」の条では、

f………… ザンネンナ コトオ シタナーモシ オイクツデ ゴザイマシ
残念な ことを しましたねえ。 おいくつで ございまし
タンゾヤナー

たんですか。

とある。——「ンゾヤナー」が注目される。

○ナニ シヨル ンゾン。

何してるの？

は、東予今治市方面での「ンゾン」例である。——「ンゾン」で、よい言いかたになっている。

○ドコイ イク ンゾイ。

どこへ行くのですか。

は、東予での「ンゾイ」例である。（私の生地では、子どもがおとなにこう言

えば、それは、かなりきれいな表現になる。)「ンゾイ」の言いかたは、どこにあっても、わるい言いかたにはなっていないであろう。南予喜多郡での例には、

○ $\overline{\text{ド}}$ ー $\overline{\text{オンタ}}$ $\overline{\text{ンゾイ}}$ 。

どうなさったの？

のようなのがある。

南予南辺に、「ガゾ」複合形も見いだされる。

○ $\overline{\text{オマイ}}$ $\overline{\text{ドコイ}}$ $\overline{\text{イク}}$ $\overline{\text{ガゾ}}$ 。

あんたはどこへ行くのかね？

などと言われている。「ガゾ」の言いかたが、「ガゾナー」ともなっている。

(「ガヨ」の言いかたもある。)

高知県

告知の「ゾ」がおこなわれており、陳思の「ゾ」がおこなわれている。『土佐の方言』には、

私が花を取って上げよー $\underline{\text{ぞ}}$ 。

の言いかたがある。『全国方言資料』第5巻の「高知県香美郡美良布町」の条には、

f………… マー ジューエンバー キッチョココ ゴジューエ

もう 10円ばかり 見切っておきましょうか。 50円に

ンニ シチョコーゾ

しておきましょうよ。

と見える。私が、県中部の海岸で聞きとめた一例は、

○ $\overline{\text{オトツチャン}}$ 。 $\overline{\text{ナオシテ}}$ $\overline{\text{モラウ}}$ $\overline{\text{ゾ}}$ 。 $\overline{\text{イン}}$ 。

お父さん。自転車の鎖を直してもらおうよ。いい？ (中学生一男

→父)

である。

勧誘の「ゾ」もおこなわれている。さきの『土佐の方言』には、

飲みながらゆっくり話ませうよ。 飲む飲むそろ〜(或はゆる〜)
話しましゅぞ。

というのが見える。

本県下にあっても、「…………… イカン ゾ。」との、おしつけぎみのつよい言いかたがおこなわれており、これは、命令表現の言いかたに近くなる。

問いの「ゾ」のおこなわれることがいちじるしい。——これは、四国一般にあって、特色的なものでもあろうか。問いの言いかたが、「カ」ではなくて「ゾ」でなされることは注目すべきものである。(「ゾ」と問われて、問いのつよさ・きつきを感じる人は多かるう。)土居重俊氏の『土佐言葉』には、

ゾ——文末に位置して強く指示する場合のゾである。断定と同様の働らきをもする。(断定表現参照)〔全県〕

ナゼワラウゾ (何故笑うか)

アリャ ダレゾ (あれは誰か)

ソングー ナキヨルト ドヤスゾ (そんなに泣いているとなぐるよ)

〔大月町弘見〕

ゾと同類のものに、ゾヨ・ゼ・ゼーその他がある。

とある。問いの言いかたの、反語法の言いかたになることもある。

「ゾ」の変形の「ゾン」がある。『土佐言葉』には、

室戸町では、「この本はいくらだ」に相当するものは、コノホンワナンボ
ゾンである。もっともゾンは、多少敬意をふくんだ言い方のようである。

(元部落では、ゾンはあまり聞かぬ。)

とある。『土佐方言集』には、「ゾン」に関しての、「ぞよ又ハぞね或ハよノ意。」との記述が見られる。

「ゾイ」がまた、県下によく見られるようである。県中部海岸の例は、

○ヤドヤ, トマリチンワ ドレバー ゾイ。

宿屋は、泊まり賃はどれぐらいかね?

○ブチ^{マース} ズイ。マコト。

ぶんなぐるぞ。ほんとに。

などである。県東隅海岸での一例は、

○オイサン アレ ミテン。アラ ナン ズイ。

おじさん、あれを見てごらん。あれはなんかね？

である。この例については、上等の言いかたとの説明があった。「ズイ」は、やさしく言う時のものともあった。県下で「ズイ」が「ドイ」にもなっている。

※ ※ ※

本県下での、「ゾ」に関する複合形の文末詞を見る。

「ゾ」がはじめにくる「ゾナ」「ゾネ」「ゾヤ」「ゾヨ」「ゾエ」などが、まずとりたてられる。

「ゾ」のあとにくる複合形が、さほど見いだされない。西辺の、

○コリャー ワシン ガゾ。

これはわしのだぞ。

などでは、「ガゾ」をとりたてることができようか。——じつは、「わしの」の意で、「ワシガ」と言われるはずかもしれない。その「ガ」の前では、「ン」音がおこりやすかったであろう。もし、「ワシガ」に相当する「ワシガ」を受けとるとなったら、文末詞は、「ゾ」がとりたてられるばかりである。しかしながら、上例の文アクセント状況などからすると、おおよそ「ガゾ」が、まさに一体の文末詞をなしているように受けとられる。

やはり県西部の言いかたに、——さきに南予で見られたと同様の、

○ユキン フル ズカ。

雪が降るだろうか。

などの言いかたがある。おそらく「〜ロ」が、「〜ゾ」になったものであろう。

徳島県

告知の「ゾ」が、つぎのようにおこなわれている。

○センセィガ キョル ゴー。

先生が来てるぞ。

陳思の「ゾ」のおこなわれることがさかんであり、用法の諸相が見られる。金沢治氏は、『阿波言葉の辞典』で、「ゾ」のはたらきを、①自分の推量で相手をはかる、②忠告、③反語、④相手をとがめる、⑤命令強迫、⑥教戒、⑦疑問、⑧独白、⑨相手に念をおす、⑩詰問 叱責、⑪無責任なうわさ話、としていられる。この中にも、陳思の諸相が注目される。金沢浩生氏教示の、県西北での一例は、

○ヤメサイテクレタラ エーワデ オルンヂャロ ゴ。

やめさしてくれたほうがいいという考えで怠けているんでしょうよ。

(老女→中女)

である。私が県南奥地で聞いた一例は、

○アムナイ ゴー。イケル カイ。

あぶないよ。だいじょうぶ？(客人男が暗い道を帰のを見おくって、主婦がおお声で言う。)

である。——「ゾ」が、かならずしも品わるくはつかわれていない。

「ゾ」が「ド」ともあり、まれに「ロ」ともある。

問いの「ゾ」がよくおこなわれている。「それは何か。」と問うのにも、「ソレ ナン ゴ。」などと言っている。「ゾ」が、

○ドーデッ ソ。

どうですか？

など、「ソ」形をとってもある。「～ます ゴ」は、「～マッ ソ」にもなっている。「阿波美馬郡方言語彙」(『方言』第四卷第二号)には、

アンタハオグワイガオワルイトイフハナシジャガドウヂャツソ。

というのが見える。

「ゾイ」形のおこなわれることも多い。(「ゾン」形はない。)問いの「何

ゾ。」は、「何 ゾイ。」ともなっている。疑問の時に「ゾイ」形が見られがちである。県西北奥での一例は、

○オマイ ドコ イク ゾイ。

あんたはどこへ行くの？

であり、県南辺での一例は、

○オマヤ ドコイ イク ゾイ。

あんたはどこへ行くの？

である。「ゾイ」は、疑問のほか、

○カワサイデモ ソレワ ヒル ゾイ。

うらがえさなくてもそれは乾くよ（乾くだろうよ）。（干草のあつかいについて言う。）（中男→父老男）

などのようにもつかわれている。「ゾイ」が、前接語との関係で「ソイ」になってもいる。——「ソイ」の前は促音である。

「ゾイ」が「ゾエ」ともなっている。

本県下でとくに論ずべきものに「ジョ」がある。

○いくみちゃん、アムナイ ジョー。

いくみちゃん、あぶないわよ。

などと言われる「ジョ」である。今日は、徳島市を中心に、県下の南北にこの「ジョ」が見られる。四国も、他県には見られなくて、とくに本県下にのみこれが独自に流行しているのは、ふしぎとも言うべきである。しかし、語詞や文法や音韻の成立と流布とは、一方で、とかくこうしたものであろうか。それだからこそ方言が成りたつのもあると考えられる。（ところで、東に海をへだてて和歌山県下には、やはり「ジョ」が見いだされるからおもしろい。淡路をはじめとする兵庫県下にも、「ジョ」形が見いだされる。）私は、旧来、徳島県下にこの「ジョ」を聞いて、しばしば、「デヨ」ではないかと直覚してきた。「何々 デ。」とのよびかけ表現に、さらに「ヨ」がそえられ、その「デヨ」が「ジョ」につつまったかと考えてきた。徳島駅で聞いた、

○オトサレン [↑] ジョ。

落とされんよ。(落としてはいけませんよ。)

との、若い母おやがおさな子に言いかけたことばなどでは、ごくしぜんに「デヨ」が実感された。金沢治氏の、『フォト』(昭和43年3月)に寄せられた「阿波の味」には、

「アンなア、阿波おどりやいう名アなア、もとはなかったんジョー」という。この「ジョー」が阿波の徳島の味である。「ですよ」じゃない。「ぞヨ」でもない。「です」と「ぞヨ」との中間(ちゅうかん)、甘くて、人なつこくて、それで素純なのが「阿波女」である。

とある。徳島県立小松島高等女学校の『言葉の修養』という刷りものには、

ホンマデヨ ^{ほんま} 本真ですよ 本真よ 本当よ

とあり、かつ、「デヨ(デヨ) のですよ ですよ」とある。濠口正治氏は、「感動詞あれこれ」(『言語生活』第七十六号)で、

「面白いよ」という場合男子は「オモッショイゾ」といい女子は「オモッショイデヨ」という。 註 **オモッショイ、「面白い」意、

とするしてられる。金沢治氏は、かつて私に、「デヨ(ジョ)」は大正ごろにできたことばだと説明せられた。かならずしも古くはないものだろうか。同輩以下に用いられるものようである。——どちらかといえば、女性によく用いられるのか。

県下に、

○ムカシワ [↑] デヨ。

昔はよ。(説明をはじめるところ)

など、「デヨ」のおこなわれることは多い。「デヨ」とともに「ジョ」がおこなわれているといったありさまがよく見られる。「デヨ」もまた近畿内に認められるものである。) 本県下の「デヨ」は、多く、やさしみのある言いかたになっている。「ジョ」が、女性に用いられがちであるらしいのもゆえあることか。

私はかつて、徳島市近辺で、老女の、孫女に対して、「デヨ」と言い、また「ジョ」

と言うのを聞いたことがある。

ところで、金沢浩生氏は、県西北部での、

○ナンデモ イーシダイ ジョー。

何でも言いしただいよ。(青男聞)

などの「ジョ」について、「これは徳島市の女性専用の『でよ』系のジョとは違う。断定の『ジャ』+『ヨ』の『ジョー』である。」と説かれる。なるほど県西辺奥では、私も、「デンノジャ ヨー。」(出ないのだよ。)など、「ジャ ヨ」の言いかたを聞いている。「ジャ ヨ」から「ジョ」ができることは自然でもあろう。体言または準体言におわる言いかたを受けている「ジョ」については、「ジャ」指定断定助動詞を考えなくてはならないということなのだろうか。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ゾ」上接の「ゾナ」「ゾヨ」「ゾエ」が注目される。「ゾ」の下接するものには、「ンゾ」「ンゾイ」「デゾ」などがある。

「ンジョ」もここにあげておきたい。

香川県

告知の「ゾ」が、

○ナンデモ、ホーモツガ ゴザンス ゾ。

どんなものでも、宝物がございますよ。(老男→藤原)

○イマナ オッキョカッタ ゾ。ダイブ。

今のは大きかったぞ。だいぶ。(釣りあげられなかった魚について言う。)

などとある。前者は県東部での一例であり、後者は県中部での一例である。

「ゾ」が、かなりよく「ド」にもなっている。

陳思の「ゾ」が、つぎのようにおこなわれている。

○モー コーテ ヤラヘン ゾ。

もう買ってやらないよ。

やはり「ド」もよく見られる。『讃岐方言之研究』には、

モ^ーユク^ゾ（ド） 全、多（但し小豆は「ド」）。男子。

「ゾ」は念を押して指定する語。文語「ぞ」の残存。

とある。

勧誘の「ゾ」が、

○ジ^テン^{シャ}イ ^フッテ ^イコ ^ゾー。

自転車へ乗って行こうよ。

のようにおこなわれている。

問いの「ゾ」「ド」もおこなわれている。「ド」に対する「ドイ」もよく聞かれる。『讃岐方言之研究』には、問いの「どう？」に近い「ドード」「ドードイ」についての「小豆にのみ有。」との説明が見えるが、『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条には、

f…………, ナニ スンドイ
なにを するのですか。

などが見えている。

すでに見たように、「ドイ」形があり、また「ゾイ」形もある。私が讃岐中部で得た「ゾイ」例は、

○ヨー シッテ オリマ^ショー ゾイ。

よく知っていきましょうよ。

である。これについて土地の人は、“「ゾイ」と言うと、知っているという意味がよくなる。”と言った。

本県下には、「ジョ」形の問題があるのかどうか。山田正紀氏の「瀬戸内海島嶼方言資料」（『方言』第二巻第六号 昭和7年6月）には、〔そんなだ〕に関する「ソ^ンナ^ジョ」（伊吹島）の記事が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞では、「ゾ」上接の「ゾナ」が注目されて、つぎに「ノゾ」などが見られる。

四国地方での「ゾ」の用法では、一つに、「デス[↑]ゾ」「マス[↑]ゾ」「マセン[↑]ゾ」といった言いかたが注目される。中国地方での方言界の一般では、「マセン[↑]ゾ」などとは言っていないであろう。それだけに「ゾ」は、ややぞんざいなものになっていると見られる。これに対して、「マス[↑]ゾ」「マセン[↑]ゾ」などを言う四国では、「ゾ」の言いかたが、多少ともよいものになっていよう。

六 近畿地方の「ゾ」ほか

兵庫県

告知の「ゾ」がある。

○キンニ^ニバンニ^ニ カッテ^テ キョッタ^タ ゾ。

(孫の中学生男が)きのうの晩に借りてきてた(きた)ぞ。(孫の幼男の持っている本のことを話す。) (老男→妻老女)

○オーケナンガ^ガ デテ^テ クル^ル ゾ。

大きなのが出てくるぞ。

前者は淡路例、後者は但馬例である。後者の地の人は、「ゾ」を、“男が多くて、女はあまり言わん。”とも、“女は、すくなくとも目上には言わぬ。”ともする。

陳思の「ゾ」が、さかんにおこなわれている。

○今は、教員は、ケッコナ^ナ モン^ン ゾ。

今は教員はけっこうなものだよ。(老男→藤原)

は、淡路での一例である。「アカン^ンゾ。」などは、広く県下に慣用のものであろう。播磨などでは、「～ダス^スゾ」が「～ダッ^ッソ」になっており、「～ヤス^スゾ」が「～ヤッ^ッソ」になっている。「ゾ」は、県下全般で「ド」

と言われることが多い。さて、山田潤三氏の「赤穂方言の表現法」(『播州赤穂方言の研究 語法編』昭和31年11月)には、「ドは男性用語、デは女性用語である。」とあり、「ド」はもはや「デ」に対比されるようにもなっている。

問いの「ゾ」「ド」がある。——四国・近畿に、関連してこれが見られるというわけか。清瀬良一氏の「神戸方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)の記述には、「問い」の「ドコ ドー。」についての、

「ド」は男ことばである。乱暴ないかたになるばあいがおおい。
品は下である。

との説明が見える。氏はまた言われる。

「ドコ ドイ。」を、「ドコ ドー。」にくらべると、「ドイ」の方がうったえがつよく、より、ぞんざいである。また、「ドコ ヤ。」は、いくらかていねいで、やわらかみがある。「ゾイ」と、品はあまりかわらない。

「ゾ」に対する「ゾイ」形があり、「ド」に対する「ドイ」形がある。清瀬氏は上記論文で、「わかい世代においては、古形の『ゾイ』は、だんだんおこなわれなくなりつつあるようである。」としていられる。

○オーサカ ヒガエリ ショー オモタラ、エラカロー ゾイ。

大阪へ日帰りしようと思ったらまいへんだろうよ。

は、播磨北部での「ゾイ」例である。「ゾイ」「ドイ」は、多く問いに用いられしており、ときにさそいなどにも用いられている。

本県下にも問題の「ジョ」が見いだされる。「である」の「であ」が、「ジャ」になったのからすれば、「デヨ」が「ジョ」になっても当然とされることではある。かつての但馬南部での調査のさいは、「オーヤノ ジョージョー イワマイ ジョー。マタ イッター ジョー。ワルイ ジョー。」との言いぐさが聞かれた。「イワマイ ジョー。」(言うまいよ。)など、「ジョー」がよくおこなわれているということである。この地に、「シラン デョー。」(知らないよ。)などの「デョー」のあることからするのに、「ジョー」は「デョー」からのものかと思われる。この地で聞いた事例には、

○カチ[↑]ジャ ジョ。

ぼくが勝ちだよ。

○モー[↑] ボツボツ イコー[↑] ジョ。

もうぼつぼつ行こうよ。

などというのものもある。「ジャ」におわる体言的な言いかたを受けての「ジョ」がここに見られるが、ものはやはり「デヨ」的なものではないか。

ところで、淡路北部での調査のさい、私が聞きとめた「ジョ」は、

○イチ[↑]ジョー。

八十一だよ。(老男が自己の年齢を言う。)

などと、体言類を受ける「ジョ」が多くて、「ジョ」は、「ジャ ヨ」からのものではないかとも思われた。「ジョ」は淡路南部にもある。増田欣氏は、「ジョ」が、「ジャに比してはるかにやさしみを持っている。」としていられる。「ジョ」の淡路での広いおこなわれかたからするのには、やはりこれは、阿波にいちじるしい「ジョ」に似たものかとも思われてくる。いずれにしても、県下に現用の「ジョ」は、「ゾ」的なものになっていると見ることができよう。それにしても、これの分布が、播磨地方には見いだしにくいようなのが注目される。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞では、まず、「ゾ」上接の「ゾナ」という頻用形がとりたてられ、ついで、「ンゾ」「ンド」「ンゾイ」「ンドイ」などが指摘される。

ここになお、「ノジョ」「ンジョ」の複合形もあげておきたい。

大阪府

告知・陳思の用法が目だつ。

告知の「ゾ」は、

○オヒサン アタッテ キヤハッタ[↑] ズ。ヒナタク ジョー[↑] カ。

お日さんが照ってきなさったよ。日なたぼっこをしようかね。
 のようにおこなわれている。

陳思の「ゾ」の「ド」が多い。

○ツヤケド オモロイ ドー。

だけどおもしろいよ (ぞ)。

などがある。「ツヤ ド。」(そうだよ。)が「セ ド。」にもなっている。さらには、「セ ロ。」ともなっている。「アカン ドー。」などは、よくおこなわれていよう。『和泉郷荘村方言』には、「オレノンヤド (私のですよ)」などが見える。

「ドイ」形がある。山本俊治氏は、「大阪方言における待遇法(2)」(『近畿方言』8)で、

○ナニ グズグズ シテンノドイ。(兄→弟)

(何をぐずぐずしているんだい。)

○オマイノ ナマエ ナンチューン ドエ。(五十男→浮浪児)

(お前の名前は何というんだい。)

の記述を示していただける。「ドイ」は、府下に、いちじるしいものようである。「ド」なり「ドイ」なりの訛形のほうが、府下に一般化している状況である。

和泉地方に「ジョ」形がある。『和泉郷荘村方言』には、「ミージョ(見よ)」
 「ソージョ(そうです)」の記事が見える。竹内徹氏の『和泉方言の研究』には、

みたいじよ・・・のようだ。→カトウテイシミタイジヨ。

とある。『国語学辞典』の「近畿地方の方言」の条には、「南和泉は通婚関係から紀北に近くソージョ(そうじゃよ)」と出ている。

和歌山県

告知・陳思・問いの用法が目だつ。

告知の「ゾ」「ド」が、
 ○イーヤッタ ドー。

“言っていた”ぞ。

のようにおこなわれている。この例は新宮市で聞いたものであり、「デー」の言いかたに対して、“目下には「ドー」と、「ドー」が指摘された。「ド」音のばあい、「ゾ」音のばあいよりは、低卑ぎみになるのが常態であろう。

○ハヨ カイニ イカント ノーナル ゾ。

早く買いに行かないと売りきれよ。

は、和歌山市域での例である。陳思の「ゾ」は、『全国方言資料』第4巻の「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条には、

*m*バサン タダイマ モーッタ²⁾ゾー
 ばあさん、 いま 帰ったよ。

2) 「ゾ」の子音が [d] に近い。

などに見える。本県下でも、陳思の「ド」がさかんである。「ド」が「ロ」になってもいる。

問いの「ド」が、よくおこなわれているか。『和歌山県方言』には、「ダエド (段訛) 誰か」とあり、『和歌山県方言 (其二)』には、「ドヨド 何処か『南』」とある。串本での一例は、

○オマヤ ドコイ イク ンド。
 おまえはどこへ行くのか。

である。「ンド」複合形が見られる。県南、田辺奥で聞いた例には、

○オマイモ イカン ノヤドー。

(“相手の意志をたしかめるばあい”だという。)

がある。「ド」の発音は [dzo] であった。この種の微妙な「ド」音は、近畿で和歌山県だけに聞かれるものであろう。いな、他地方でも、この種のもは、あまり聞かれまい。(p. 342)

「ゾ」に相当する「ゾイ」があり、「ゾイ」に近い「ドイ」もある。さきの

和歌山市域での実例のばあいにも、

○ハヨ カイニ イカント ノーナル ゴイシ。

早く買いに行かないと売りきれますよ。

とも言われた。串本市での一例は、

○アンタ ドヨイ イク ンドイ。

あんたどこへ行くの？

である。「ンドイ」複合形が見られる。「ドイ」が問いによく用いられている。串本の「ダーレモ ナカッタ ンドイー。」は、だれもいなかったことを、念をおして問うものだという。（ことによっては、「ドイ」が、「だろう」に相当するものでもあるか。県南に、「だろう」を思わせるような「ドー」が、「ツナッテン ドー。」“そのようになったんでしょう（だろう）？”などを見いだされる。）

本県下にも「ジョ」が見える。諸方言文献は、県下に広く「ジョ」の存在することを伝えている。『和歌山県方言』に見えるものは、「さうジョ さうです」「スルンジョ するのです」などである。村内英一氏は、「文末助詞の考察」（『和歌山大学学芸学部紀要』＜人文科学Ⅲ＞ 昭和28年3月）で、「じょ」について、「だほど強くない断定。よに近い。コンナ サカナ、ワヨキライジョ。こんな魚は私嫌いよ。（調月村）」と記述してられる。「ジョ」は、「ゾ」に近いものか。すくなくとも現用では、「ジョ」が「ゾ」的であろう。「ジョ」に関する「ジャ ヨ」起源は、どの程度に考えられることなのか。今の私には、言いうることはない。日高郡奥で聞いた一文、「ソレノ オチノ ヤツモ アン フジョー。」は、“それの一級下でもあるのじゃろう。”の意のものであるとのことだった。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」「ド」に関する複合形の文末詞には、「ンド」「ンドイ」などがある。「ンジョ」もここに併記しておきたい。

なお、「デド」形が指摘される。村内英一氏の上記論文には、「でど」につい

での、

念を押す。ではだの変化したもの、それにどのついたものと考えられる。

キー ツケルン デド。 気をつけるのだよ。(岩倉村)

との記述が見られる。「デ」は助詞系文末詞の「デ」と見てもよいのではないか。徳島県下には「デゾ」がある。

三重県

告知・陳思・問いの用法が目だっている。

告知の「ゾ」が、伊賀の、

○ナンジャラ ユートッタ ゴー。

なんとやら言ってたよ。

のようにおこなわれている。

陳思の「ゾ」も、県下に広くおこなわれている。多く「ド」形が聞かれがちなか。「ド」を本体と思っている人々も多い。伊賀の、「何々ツテン ドー。」は、「何々しているよ。」である。志摩半島東岸での一例は、

○キモン ヨケ キセテ ムセラヒタル ドー。

着ものをたくさん着せて、むせさせてるよ(ぞ)。(幼児について言う。)である。桑名のほうでのあいさつことばには、「ゴメンヤゾ ゴメン下サイ」があるという。『三重県方言資料集 伊賀篇』には、「いんでこーど 出る時の挨拶(島)」「かえらしてもらおど 辞去の挨拶(島)」というのが見える。本県下西南辺で聞いたものには、

○フク モテ コイ ドー。キセタロ ドー。

服を持ってこいよ。着せてあげよう。

というのがある。この例について、人は、「「ドー」にとくに意味はない。」と語ってくれた。この「ド」は、どういう「ド」であろう。「ぞ」に関しては、杉中浩一郎氏の「セキレイの紀州方言」(『近畿方言』5)に、

オマン しりふれ田肥えババひれ、米一升やろぞ。(「南牟婁郡の阿田和町、井田村など」)

というのが見える。伊勢南部でも、「あげましょう」の意の「やろぞ(ど)」が聞かれる。

問いの「ゾ」が、広くよくおこなわれている。

○ソレ、ダレノ タバコ ゾー。

それはだれのたばこか？

は、その一例である。「ゾ」が、「ゾイ」ともあり、「ド」ともなっている。県下に「ド」のおこなわれることがいちじるしい。紀州域・志摩・伊賀には「ド」がさかんである。

上にもふれた「ゾイ」は、「ゾーイ」などとも言われている。『全国方言資料』第4巻の「三重県志摩郡浜島町南張」の条には、

fドコ イクンゾーイ

どこへ 行くんですか。

などとある。「ゾイ」も、紀州域・志摩などによくおこなわれており、かつこれが、「ドイ」にもなっている。「ドイ」(あるいは「ドーイ」)が、——伊勢にもわたって、県下によくおこなわれている。「ドイ」「ゾイ」の類が、よく、問いに用いられている。『三重県方言資料集 志摩篇』には、「えうどいよろしいか(和)」の記事が見える。

県下に、また、問題の「ジョ」がある。紀州域西南辺での一例は、

○ホンマ チョー。

ほんとうだよ(ほんとうですよ)。 (女兒問)

である。尾鷲ことばでの一例は、「ドシキッタル チョ。」(なぐってやるぞ。)である。発音は、「チョ」とも「ジョ」ともある。長島町での一例は、「雨がヤンダ ジョ。」(雨がやんだぞ。)である。「ジョ」が、紀州域・志摩・伊賀によくおこなわれており、伊勢内にもこれが見いだされる。かえりみて、四国徳島県下・兵庫県下・和歌山県下での「ジョ」分布が注目される。伊賀での「ジ

ョ」例は、

○ナ^ーニ^モ ア^ラヘ^ン ジョ[。]

なんにもありゃしないぞ。(小学生六男→小学生四女)

などである。上の例を聞きとめた時、私は、「ジョ」のことを聞いてみた。すると小学生六男は、「ジョ」について、「デー」と「ドー」とを教えてくれた。この三者を比較することによって、私どもは、「ジョ」の生態をよく理解することができよう。本県下の「ジョ」に関しては、私は、紀州域のもの以降、「デヨ」起源を推量している。伊賀では、「ソーヤ デヨ^ー。」(そうだよ。そうですよ。)[↑]「ユートッタ デヨ^ー。」(“言っておりましたよ。”)などの言いかたを聞いている。この「デヨ」と、さきの「ジョ」とが、伊賀で、近い関係にあるもののように思われた。小学生六男が、「ジョ」と「デー」とを比照してくれたのが印象ぶかい。『三重県方言資料集 伊賀篇』には、「ド、ドナ、デ、デヨ」についての、「強めたり、念を押ししたりする。ぞの音韻交替したものである。デ、デヨは女性語に多い。」との記事が見える。

県下に、「ジョ」の「ジョイ」もある。「イヤ デヨ^イ。」(いやだよ。)は、紀州域での一例である。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞には、一つ、「ナゾ」があるか。鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』第13号 昭和36年12月)には、

そやそうと、ばあさんことし(今年)でいくつ一なつたなぞ。(それはそうとして、おばーさん、あなたは、今年いくつになつたのですか。)

との記事が見える。「なぞ」の「な」は、単純な「ナ」感声文末詞であるのかどうか。「ゾ」に関する「ンゾ」形がある。

「ジョ」に関する「ンジョ」形がある。

奈良県

まず、告知の「ヅ」が、

○ソレ オマイ メシテシ ヅ。

それはおまえ、「飯無し」だぞ。(食事ぬきだぞ。)(宿料のこと)のようにおこなわれている。

陳思の「ヅ」が、広くおこなわれている。「アカン ヅ。」といったあんばいである。十津川で聞いた辞去のあいさつことばには、

○ドーレ イアー ヅ。

どれ、帰ろうか。

というのがある。「ヅ」が「ド」ともなっている。むしろ、これがよくおこなわれているか。

問いの「ヅ」が、よく、南北におこなわれている。やはり、「ド」形の見えることがいちじるしい。

「ヅ」に対する「ゾイ」形が見られる。これがまた、よく、「ドイ」になっている。『中和郷土資料』には、「ナンド」「ナンドヨ」「ナンドイヤ」などの記述が見える。

本県下にも「ジョ」形が見られる。これに関して西宮一民氏は、「奈良県天理市の方言」(『天理市史』昭和33年3月)で、

また「アンド」(あるぞ)「アンデ」(あるぜ)「アンジョ」(あるぜ)の三形があるが、「〜デ」は女性に多い如くやさしい表現であり、「〜ド」はぞんざいなきめつけ方であり、「〜ジョ」はもと「〜デヨ」から来たもので最も普通に用いられるものである。

と説いていられる。都竹通年雄氏の『奈良県北部方言覚書』には、

次の例からわかる所では、推量をふくむ感動を表わすようである。語源は「ぞよ」であろう。

ワニザメワ「ソイツハオモシヤイジョウ」チューテ、…… (添上郡月ヶ瀬村)

との記述が見える。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞では、まず「カゾ」が注意される。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

f ジーサントコニモ ミンナー マメナカゾー

じいさんのところも みんな 元気ですか。

などの言いかたが見られる。

「ノゾ」があり、「ノド」もあり、「ンゾ」がある。

京都府

告知の「ゾ」が、「アメガ フル ^{ゾー}。」(雨が降るぞ。)などと、北域ではよくおこなわれている。丹後地方では、

○ココデワ ユワン ^{ドー}。

ここでは言わないぞ(よ)。

など、「ド」が、ことによくおこなわれている。

陳思の「ゾ」が、やはり北域に、比較的よく見られる。

○オヂーサン、オマイガ ^{ツミダ} ゾ。

おじいさん、おまえの罪だぞ。(むすこが酒を飲むのは) (老女→
夫老男)

は、与謝半島での一例である。やはり、「ド」形がよく見られる。丹後に「ド」が多い。

問いの「ド」もある。

○ナン シト^ン ドチン。

何してんだよ? (“だめじゃないか。”)

は、京都市の北部、中川郷で聞いたものである。「チン」という特異なつよめの文末詞も見えている。) 中川で、「フデ ^{ドコ} ロ(ド)。」(筆はどこだい?)

とも言っている。

上の中川郷では、かつて、「ジョ」も聞くことができた。「あそびに行くよ。」は、「アスビニ イク ジョ。」であり、「しなければいけないよ。」は、「セナ アカン ジョー。」である。なお、「イカイ イン ジョー。」などというのも聞くことができた。これは、「行かれないよ。」の意になるものである。のちのこと、口丹波周山町でも、「ぞ」相当の「ジョ」が聞かれたように思う。(そのさい、“「ジョー」をよく言う。”とあったのは興味ぶかい。ものが「デヨ」的なので、「ジョー」がよく言われることにもなっているのか。)馬淵一夫氏は、「口丹波語の諸相」(『言語生活』第三十八号)で、

拗音化も多い。特に終助詞「ぞ」を「行くジョ」「降るジョ」というのは泥臭い。

と述べていられる。

滋賀県

告知の「ゾ」「ド」、陳思の「ゾ」「ド」が、ふつうにおこなわれている。「アカン ゴー。」(いけないよ。)は、県下に通有のことばであろう。佐藤虎男氏教示の湖東例は、

○ヨイ オマツリドス ゴ。 (老女→佐藤氏)

などである。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県高島郡朽木村」の条には、

mサー ヤマイ イクンニャカラ ペントーヤゾー

さあ、山へ 行くんだから 弁当だよ。

などと見える。「〜ヤ ゴ」の言いかたは、やはり、当地方に熟したものであるろう。

「ゾイ」もおこなわれている。

「ジョ」もある。『滋賀県言語の調査と対策』には、「……『デ』『ド』・『ジヨ(八幡)』を『ゼ』『ぞ』の意に用いる。」とある。

近畿地方に、「ゾ」の「ド」形、「ゾイ」の「ドイ」形がさかんなのは特筆にあたいする。

また、「ゾ（ド）」を問いに用いるのは、特筆すべきことである。

七 中部地方の「ゾ」ほか

福井県

若狭・越前にわたって、告知の「ゾ」「ド」がよくおこなわれている。

○ドーチャン、ヨーケ キモノガ タマッタ ドー。

父ちゃん、たくさん着ものがたまったよ。 (小女→父中男)

は、若狭での一例であり、

○オイ、ナンカ ケナクサイ ゾ。

“おい、何か布の燃える匂いがするぞ。” (中男→妻中女)

(女性ならば、「ゾ」よりも「デヨ」を用いるという。)

は、福井市方面での一例である。

陳思の「ゾ」もまた、若越に広くおこなわれている。越前東域内では、「おこられる ゾ。」が「オコラレツ ゾー。」ともなっている。(天野俊也氏による。)「ド」形の見られることが多い。若狭例には、

○ナンノ マチゴートロー ド。

なんでまちがっていようか。

などがある。

○ナグッ ゾ。 (小男間)

なぐるぞ。

は、越前東部の「ゾ」例である。(愛宕八郎康隆氏教示)

命令表現になる「ゾ」があり、敦賀市域では、

○ハマ イク コト ナラン ゾー。

海辺へ行くんではないよ。(老女→少女)

などが聞かれる。(愛宕八郎康隆氏教示)

問いの「ゾ」「ド」もある。

若狭には、「あの人も行くやろ ドイ。」などの言いかたがあるという。(永江秀雄氏による。)

石川県

告知の「ゾ」が、よくおこなわれている。

○マ[↑]ダ カネガ ハイッ[↑]トル ロー。

まだ金が“はいっているよ”。(初老男眼科医→老男)

は、金沢市内で聞いた例である。ここには、「ゾ」相当の「ロ」が見られる。「ド」からの「ロ」であろう。馬場宏氏は、「木郎方言考(其の三)」(『国語方言』第四号)で、「おとすぞ=おとッすオ」「すぐ起きるぞ=すぐおきッるオ」などの事例をあげていられる。岩井隆盛氏は、国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』に寄せられた「石川県金沢市彦三一番丁」で、

アッゾ(あるぜ)・アッゾネ(あります)・アッゾイネ(ありますよ)は能登風だという。

としるしていられる。能登半島西岸調査のさいは、

○ムカ[↑]ジャ ヨメ[↑]ヅトメ[↑]チュー モナ ツライ モンヤ[↑]ゾ。

むかしは、嫁づとめというものは、つらいものだよ。

などと、「ゾ」が聞かれる半面、「ド」もよく聞かれた。(ここではなお、「ゾ」と「デ」との文末詞対応も見ることができた。「おぎょうぎよかったら、紙芝居シテ アゲル[↑]ゾ。ホントヤ[↑]デ。」などとあった。)『全国方言資料』第3巻の「石川県河北郡内灘村大根布」の条には、

fメロデア[↑]ッテモ ナテモ オマエ オトコドマー ウチラアタリ

女であっても なくても あなた、 男たちは わたしの家のほう

オトコドマ ヤッパー オマイー チョロサエ アクルヒー イ
でも 男たちは やはり あなた、 長次郎さんへ 翌日 行
ッタズ

きましたよ、

というのが見える。これに、「アクルヒー イッタズ」とある「ズ」は、何であらうか。説明には、「行きましたよ」とある。「ズ」は「ヅ」かどうか。

陳思の「ヅ」がまたよくおこなわれている。

○マ^マ タ^{ベル} ロー。

ごはんをたべるぞ。 (おや→子)

は、金沢方面での一例である。また、「ゾ」>「ド」の「ロ」が見える。「タ^ムゾ^ノー。」(たのむよ。)というのは、能登半島頸部での一例であり、

○イ^{ッテ} ク^ッ ドー。

行ってくるよ。(バス発進の時、窓外の人に言う。) (老女)

は、能登半島西岸での一例である。(「ド」の「ロ」も聞かれる。)『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条には、

*m*ドーカ タノミッソ

どうか 頼みますよ。

とある。ひるがえって、加賀白山麓での一例をあげるなら、

○アンマリ ガクモン シット、ヤマ^イガ デル ^ゾ。

あんまり学問をすると病気になるぞ。

がある。ここではまた、「変^ワリマス ^ゾー。」が「カ^ワリマッ ^ゾー。」とも言われている。馬場宏氏は、『能登木郎方言考』で、「今頃来た ろう よ=今頃来た^ロゾ」 「行っただ ろう よ=行ったヤ^ロゾ」としていられる。ここには、推量表現上の「ゾ」が見られる。

馬場氏の上著には、「行^こうよ=行こ ^ゾ」「食^べようよ=食^びよ ^ゾ」「着^{よう}よ=き^ょー ^ゾ」というの見える。さそいの「ゾ」がここにある。

命令の「ゾ」もおこなわれている。

「ゾイ」が、加賀にも能登にもある。

○マー、ジャンジャロー ズイ。

まあ、そうじゃろうよ。

は、加賀白山麓での一例である。

県下に、問題の「ジョ」も見える。『石川県方言彙集』には、

じよ ゾ 「行くじよ」トイフガ如シ 鳳

とある。「鳳」は鳳至郡で、能登にある。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条にも、

*m*イッテ クンジョ

行って 来るよ。

と見える。

※ ※ ※

本県下の、「ゾ」に関する複合形の文末詞に、「ワエゾ」などがある。上記の「能登島町向田」の条に、

*f*ヨブッテァ $\left(\begin{array}{l} \text{オー} \\ m \end{array} \right)$ イク イッショニ イクワエゾ
誘いますよ。 ああ。 いっしょに 行きましょうよ。

とある。

同第8巻の「石川県輪島市海士町」の条の、

*f*アルゲゾー

ありますよ。

は、「ゲゾー」をとらしめるものか。

富山県

主として、告知・陳思の「ゾ」がおこなわれている。

*m*オリマスゾー

おりますよ。

は、告知の「ゾ」の一例である。(『全国方言資料』第3巻 「富山県下新川郡入善町小摺戸」)

○マツトル $\overline{\text{ゾー}}$ 。

まってるよ。

は、富山市西北郊での、陳思の「ゾ」の一例である。『全国方言資料』第8巻の「富山県東砺波郡平村上梨」の条に見られる、

*m*ハイ ゴジュエエン イコッソー

はい 50円 渡すよ。

の「イコッソー」は、「イコス ゾ」の認められるものか。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条には、

*f*マタ ドーカ タノンマッソー

また どうか 頼みますよ。

などが見られる。

陳思のうち、おのずから命令の意を表すものがある。「……………アカンゾ。」などは、制止の表現である。『富山県方言集成稿(一)』には、「あんじゃ、もうあんなことしられんど。(お前けっしてあんなことするな。)」などが見られる。「割 $\overline{\text{ラレン}}$ ゾ。」(禁止) などというものもある。(愛宕八郎康隆氏教示)

「ゾイ」がある。『全国方言資料』第8巻の「富山県東砺波郡平村上梨」の条には、

*m*ソエガヤッタゾイ

そうだったよ。

というのが見える。私が越中南辺で聞いたものには、

○ $\overline{\text{マタ}}$ $\overline{\text{コーリャクニ}}$ $\overline{\text{クル}}$ ゾイ。

また合力に来るよ。(たのむぞと言われたのに対する返事)

がある。この「ゾイ」を聞いた時には、「ゾヨ」かと思われた。

新潟県

やはり、おもには、告知・陳思の「ゾ」がおこなわれている。昔話の発端句、「むかしあったぞ。」には、告知の「ゾ」が見られる。「ゾ」が「ド」にもなっている。さらには、「ロ」にもなっている。私は、佐渡で、これを聞くことができた。

○エーン モンガ ヨーガ アルチャー ロー。

家のものが、用があるってことだよ。

は、その一例である。

陳思の「ゾ」も、よく、「ロ」になっている。「イダ ロー。イダ ロー。」(行くぞ。行くぞ。)は、直江津方面での一例である。

○センセニ ユーゾー。

先生に言うぞ。

は、佐渡ことばでの一例である。「ド」もよくおこなわれている。越後、十日市方面での、

○スッケン ゴト ユッタッテ ダメダ コツツォ。

そんなこと言ったってだめだよ。

の言いかたは、「コツツォ」に「ことぞ」が認められるのであろうか。

陳思のうち、しぜんに命令表現になるものがある。中越での、

○ソソナ コトー セルンジャ ナイロ。

そんなことするんじゃないぞ。

は、その一例である。

問いの「ゾ」もある。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」の条には、

*m*イチニチ コクト ドノグラー コクゾ

1日 こくと どのくらい こくんだい、

などが見える。

「ゾイ」があり、『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結束」

の条には、

m………… ソジャ イッテ クルゾイ
 それでは 行って 来るよ。

が見える。

押見虎三二氏が、越後南辺の秋山郷について調査せられたものには、——教示によるのに、

○オンガ タケ ソ。

お前が焚けさ。 (中女→子)

などの事例がある。この「ソ」は何であろう。私が、秋山郷のはるか西北方にあたる東頸城郡大島村で調査し得たものには、

○ダメ^ーンガ^ーソ^ーネ。

“だめなんですよ。”

などの言いかたがある。(上例の分別書きが、今、私にはできかねる。)押見氏の教示には、なお、

○ダチャ ネー^ーンダ^ーツ^ーオ。

どうしようもないんだとき。 (中女同志)

などの「ツオ」もある。「ツオ」は何だろう。ちなみに、「ツァ」(ということだ)というもある。

「ジョ」形が注意される。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡畑野村後山」の条には、

*m*マー イッティ クルジョ
 まあ 行って 来るよ。

とある。

岐阜県

県下一般に、告知・陳思の「ゾ」がおこなわれている。『福岡地方方言考』

には、陳思の「ゾ」に関する、“願望の終助詞”“強意の否定”などの説明が見える。

○ヤ^ーイ、ヨイツ。ドンダサイ [↑]ゾー。

やあい、こいつ。鈍臭いぞ。(“臭くて臭くてしょうのない時に言う。”

との説明が、これについて、あった。)

は、美濃北部での、陳思の「ゾ」の一例である。

「ゾイ」がある。関ガ原で聞いた例は、

○ツル^ーガー ダンダカブリ ゾイ。コリヤー。

敦賀のほうはおお降りだろうよ。このぶんでは、

などである。

「ゾン」もある。『岐阜県方言集成』には、可児郡の例、「花が咲いたぞん＝花が咲いたですよ。」が見える。

前書には、郡上郡の「なんぢゃい [句] 何だい。」というのも見える。

「ゾ」に関する複合形に、とりたてて言うべきものはない。(一方、「ソナ」「ソヨ」などはよくおこなわれている。)

愛知県

やはり、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれている。「ゾ」が「ド」ともなっている。

○エビガ [↑]オチトル ゾー。エビガ [↑]イッチョー。

海老が落ちてるぞ。海老が一匹。

は、三河西南部での、告知の「ゾ」の一例である。(清瀬良一氏教示)

○オ^ッカサント イ^ッチャ [↑]ダメダ ゾ。

お母さんに行ってはだめだぞ。(小男間)

は、渥美半島南岸で私が聞いた、陳思の「ゾ」の一例である。

○オ^ラ ア^カン ゾー。

おれはだめだよ。(行ってくれるかと言われての返事)

は、三河北部のものである。高瀬徳雄氏は、「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』第一巻)で、「ゾ、ゾー」につき、

概して粗野な言い方になる。男子だけが用い、東京語でのものと、ほぼ同じい。

と述べていられる。

問いの「ゾ」もおこなわれている。

「ゾイ」形がある。

○センセーガ オイデタ [↑]ゾイ。

先生が来られたぞ。

は、知多半島での一例である。

○ソ[↑]ンナ [↑]コトー セルジャー ネー [↑]ゾイ。

そんなことをするんじゃないよ。(言い聞かせる。)

は、三河北部での一例である。

「ゾン」もある。——岐阜県下のとのつづきが思われる。江端義夫氏は、知多半島内の、

○タ[↑]ム [↑]ゾン。オー[↑]キニ。

お頼みますよ。おおきに、ありがとうございました。(中女

→同)

などを教示せられた。三河の広くに、「ゾン」がよく見られるか。三河西南部例は、

○マ[↑]キジャク [↑]ダス [↑]ゾン。エー [↑]カン。

巻尺を出して借りるよ。いいかね。

である。(清瀬良一氏教示)

○カー[↑]チャン、イッテ[↑]クル [↑]ゾン。

母ちゃん、行ってくるよ。(小学生→母中女)

は、渥美半島で私が聞いたものである。高瀬徳雄氏は、前記論文で、「ゾン」

につき、

「ゾ」のもっている粗野さがすくわれて、したしいあいだがらにおける、もっとも、ふつうのもの言いになるのである。(中略)男女共用の「ゾン」であるが、女のばあいは、やや品がひくく感じられる。

と述べていられる。『分類方言辞典』の「小詞」の条には、「ズン ぞ。岡崎。」というのが見える。

本県下に「ジョ」も注意される。『名古屋ことば』には、「じよ(ぞ)」とあり、「誰某が来たじょ。居るじょ」とある。谷川三郎氏の「尾張方言転訛語の小研究」(『尾張乃方言 続篇』)にも、「語勢を強める助詞『よ』及『ぞ』『ぜ』が『ヂョ』に変化する場合」とあり、「いけないよ イカ^{ヂョ}」^{ヂョ}「すぐ行くよ スン行ク^{ヂョ}」^{ヂョ}「ほんとだぞ ホントダ^{ヂョ}」^{ヂョ}「道が悪いぜ 道ガ悪イ^{ヂョ}」などと見える。私はかつて、尾張西部で、「ぞ」に相当する「ジョー」を聞いた。三河の渥美町立伊良湖岬中学校の「方言表」には、「なんじょう 何ですか」というのが出ている。

※ ※ ※

本県下では、「ゾ」に関する複合形の文末詞の「ンゾ」「ダゾン」などを見ることが出来る。高瀬徳雄氏教示のものには、

○ジギョーゼーガ ドサマク デル [↑]ダゾン。

事業税がうんとこさ出るんだよ。(初老女→初老男)

との「ダゾン」例がある。

『名古屋方言の語法』には、「犬 ガ 来ル ゴューモ 犬が来ますよ(女性)」などの文例が見える。「ゴューモ」は、「ゾ」に尾張弁の「エモ」がついたものであろうか。

静岡県

県下に、主として、告知・陳思の「ゾ」がおこなわれている。「ゾ」が「ド」

ともある。

○ア^ア ヒトガ オマエオ ヨ^アバー^アッテ^アル ズ。

あの人がおまえをよんでるよ。

は、御前崎での告知の「ズ」の一例である。

○イ^イマー ワレダ^イ ズ。ワレダ^イ ズー。

今（摒のむこうへ落としたのは），おまえだぞ。おまえだぞ。（小男→弟）

は、伊豆半島南端での陳思の「ズ」の一例である。（このほかに、「ド」もよくおこなわれている。）後藤一日氏の『遠州の方言』には、「火にくべっちやうぞ」などが見える。『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条には、

fカワ^フェーソーニ ナッタ^フッケ^フゾー

かわいそうに になりましたよねえ、

などに見える。

「ズイ」形が見いだされる。

○コ^コンヤ^コー アメン^コ フル^コ ズイ。

今夜は雨が降るぞ。

は、大井川上流地域で、私が聞いたものである。

「ゾン」形も見いだされる。「本当だゾン」「嘘じゃないゾン」は、清瀬良一氏教示の、浜名郡新居町での「ゾン」例である。山口幸洋氏は、「感動詞に関する浜名郡新居方言」（『土のいろ』復刊第五号）で、

バー 何ダン 誰ダトモツタゾン（女）（知らぬ間に誰かそばに立っていた。）

あれ、誰だと思つたよ。

などの記述を示していただける。

※ ※ ※

本県下の、「ズ」に関する複合形の文末詞に、「ダズ」がある。御前崎例は、

○ト^トット^トッタ^トッテ^ト エー^ト ダズ。

とってたっていいぞ。 (中学生男→弟小学生六男)
 などである。

長野県

本県下にもやはり、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれている。「ゾ」は「ド」ともある。

○イマ ソコデ イキヤッタ ズ。

今そこで行きあったぞ。

は、県西北での、告知の「ゾ」の一例である。『信州方言読本 語法篇』には、「そーなっちゃいすど (そうなってしまいますよ) (埴科一帯)」の記事が見える。なお、この書には、「いまやるこっつおー (ことそー) (今やるよ) (下水、水内)」ともある。

陳思の「ゾ」は、北信では、

○先生に セツテ ヤル ズ。

先生に言ってやるぞ。

などとおこなわれている。『上伊那方言集』には、「それは無理どー」などとある。『信州上田附近方言集』には、

ド (助) ズの転だらう。一般に信州に使用せられる。感歎的、勧誘的の意。「行くだド。」(行くのだぞ)「キカネード。」(許さぬぞ)

などとある。陳思の「ゾ」は、「ド」でおこなわれることが多いのか。

「ゾイ」形がある。『信州方言読本 語法篇』には、「信州一帯に見られまして、単に『ぞ』で止めた場合よりずっと丁寧な心持が」とある。「ドイ」もある。

『信州方言読本 語法篇』には、「ジョ」も見え、南佐久地方の「とってきたじよ (取って来たぞ)」などがとりあげられ、「幾分感動的な気持をこめて用いられませんが、敬意とか親愛感というものは伴っていません。」とある。

山梨県

本県下にも、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれており、しかも「ド」の、かなりつよいものがある。

私が、県下西南部一地での一週間調査のさい聞きとめた「ゾ」「ド」には、[dzo:]音のものがあった。

○カズー。ハヨ イケー。オソイ ドー。

かずよ。早く行けよ。(学校へ)おそいよ。(中女→子小学生二男)での「ドー」など、「ゾ」に近い「ド」で、「ゾ」に[d]がはいったもののように聞かれた。この種の発音が、しばしば聞かれたのは、私のめずらしい経験である。(p. 322)

『奈良田の方言』に見える「ふってこまりどー 雨の日の挨拶。『雨が降って困りますね』」での「どー」は、どういうものなのであろうか。

問いの「ゾ」もある。

○サムイニ 下コイ イク ゾ[dzo]ー。

さむいのどこへ行くのか。

は、県下、西南部での一例である。

土橋里木氏の「昔話に見る富士北麓の方言」(『NHK国語講座 2・3月』昭和33年1月)には、

「やらんじょ」(やろう——やらんずの変化か)

との記事が見える。「ジョ」とはあるが、ここのは、おそらく、上来の「ジョ」文末詞ではなからう。石川緑泥氏の「山梨県河内方言」(『方言と土俗』第四巻第九号 昭和9年1月)にも、「俺は早く行か^ンヂョ……私は早く行きませう」というのが見える。

中部地方の、「ゾ」のおこなわれかたには、かなり整一的なものがある。さ

ほど複雑な状況は見られないのが一般であるか。「ゾ」に関する複合形のものも、さまでのことがない。

八 関東地方の「ゾ」ほか

告知・陳思の「ゾ」が主流をなしており、当地域での「ゾ」の用法は比較的単純である。複合形も、言うほどのものがない。

大橋勝男氏の『関東地方方言事象分布地図』第二巻〈表現法篇〉の Map 17「おこられるぞ。」と、Map 19「おれではないぞ。」とでは、「ゾ」類の、全域によく分布するさまが見られる。

以下、各県について見よう。

神奈川県

告知・陳思の「ゾ」のおこなわれかたが、比較的単純であるか。「ゾ」「ド」、両々おこなわれている。

○ジャー オジーチャン イッチマウ ゾ。

じゃあ、おじいちゃんは行くよ。(孫の幼男を、そこにあそばせておいて去る。)

は、陳思の「ゾ」の一例である。

東京都

やはり告知・陳思の「ゾ」がよく見られる。伊豆諸島には、「ド」もある。

○オラー シヤ シネー ド。

わしはしやしないよ。

は、新島での陳思の「ド」の例である。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条には、

f オッカネーカッケゾー マッタク

恐ろしかったものですね、 まったく。

とある。『東京方言集』には、「生きなことをイオーモンナラ、第一おれが承知しないぞ。」と見える。飯豊毅一氏の「八丈島方言の語法」に見える、

アッテ ジョオブドオ? どうして丈夫なのか?

での「〜ドオ」は、ものが、形容動詞の連体形であるという。

新島のことばには、「タノム 下ーイ。」(たのむぞ。)の言いかたもある。

『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条には、

f ダッテ マー イエジャー シンパイシテンノオジョ

だって、 まあ 家では 心配しているでしょうから。

とあり、「ジョ」が見えはするが、解説は上掲のとおりである。おなじく「神着」の条に、

f ビチヨヌレテモ アダジョー

びしょぬれになっても あれですね、

というもある。同書の「東京都三宅村坪田」の条には、

m アリャ スブクダッケジョー

あれは 引くんだったね。

とあり、また、

f ヒダカラモンダンノジョ

それですからね、

ともある。「ジョ」「ジョ」がいろいろに見られる。「坪田」の条にはまた、

f …… イー シャーシダジョー マー

いい あんばいですね、 まあ。

ともある。同書の「東京都利島村」の条には、

f …… ソー コマランダジョ

そんなには 困らなかったものですよ、

などが見える。同書の「東京都八丈町中之郷」の条には、

*m*ヨペァーニ ミコジョー

夜ばいに 歩こう

などが見える。以上、ともかく、「ジョ」（あるいは「ジョ」）形のもを、とりたてて見ておいた。

千葉県

告知・陳思の「ゾ」が、よくおこなわれている。

『千葉方言 山武郡篇』には、「落チッど」「オッコツルぞ」などが見える。本県下でも、「ゾ」「ド」が、ならびおこなわれている。

○ナーニ, ツクリツケテワ アリマセン ゾー。

なあに、つくりつけてはありませんよ。（この仏壇は）

は、香取町での告知の「ゾ」の一例である。

『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

*m*デ タノムド

じゃあ 頼むよ。

などとする。

○コンチキショー。フンバダグ ドー。

こんちくしょう。ぶんなぐるぞ。

は、銚子での、陳思の「ド」の一例である。

○アレマデ アルッタ ゾー。

あそこまで歩いたぞ。

は、県南での一例である。

※ ※ ※

『千葉方言 山武郡篇』には、「つど」の指摘があり、「来ルッつど 来る
とき」とある。

埼玉県

本県下でもまた、告知・陳思の「ゾ」がさかんである。

○ナ[↑]オンネ ゾー。

直らないぞ。

は、県東部での、告知の「ゾ」の一例である。

○イ[↑]ッチャウ イ[↑]ッチャウ。イ[↑]ッチャウ ゾー。

行ってしまう、行ってしまう。行ってしまうぞ。

は、県東部での陳思の「ゾ」の一例である。池ノ内好次郎氏の『埼玉県入間郡宗岡村言語集』には、「ぐず〜こきやがるとブチノメスぞ」などとある。

県下で、「ド」もおこなわれている。諸方言文献にも、それが見える。

『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条には、

fソ[↑]ンナドコジャ ネーゾイ マー

そんなところでは ありませんよ、ほんとうに。

とあり、「ゾイ」形が見える。昭和三十一年十月に、NHKからラジオで放送された“秩父山奥”での会話にも、“……というものは、ツライ[↑] モンダゾイ。”(女性)というのがあった。

群馬県

告知・陳思の「ゾ」のほかには、今、言うべきものを、私は持たない。

○そんなに早くは、シ[↑]タクンテ ネーゾ。

そんなに早くはしたくしてないぞ。

は、県中部での告知の「ゾ」の一例である。

○ヤ[↑]ッタール ゾー。

やってやるぞ。(冗談)

は、おなじく県中部での、陳思の「ゾ」の一例である。

県下に「ド」もおこなわれている。『村のことば』には、「オラア行かネエド」がある。

有川美亀男氏の「上州ことば」(『言語生活』第二十号)には、

珍しいのは女兒の用語で成人にもしばしば使われているのであるが、「見せりい」「降りりい」のように、動詞連用形+「りい」の形で甘つたれた命令の意味をあらわすもの、および、「……したんだよ」の「だ」の母音が落ちて、「……したんじよ」となるものなどがある。

との記事が見える。「ジョ」形が注意される。——これは「ぞ」に近いものか。

栃木県

告知・陳思の「ゾ」が見られる。

「先生が ク[ü]ッ ツォ (来るぞ)」では、「ツォ」形が見られる。これは、県東北辺の黒田原で聞いたものである。「ツォ」は、「ぞ」を考えしめるものではないか。大橋勝男氏の、さきの分布地図では、Map 18 に、栃木県下の(ならびに茨城県下の)「ツォ」の広い分布が見られる。(やはり、両県北に、よりつよいものようではある。なお、福島県下二地点の「ツォ」も、この図に見られる。)

陳思の「ゾ」の、宇都宮市での例は、

○コレ ヤル ズ。

これをやるよ。

などである。

○ハナシ シ[i]ーシ[i]ー アルクンジャ ネー ズー。

話ししながら歩くんじやないぞ。(おや→子)

は、県東北での一例である。

「ゾ」とともに「ド」もおこなわれている。

「ゾイ」もある。
○ソーダ [↑]ゾイ。

“そっだよ。”

は、宇都宮市での一例である。

茨城県

やはり、告知・陳思の「ゾ」の通用が指摘される。「ゾ」とともに、「ド」もまたよくおこなわれている。

○オゴラレッ [↑]ゾ。

叱られるよ。

は、県北での、陳思の「ゾ」の一例である。上例の「ゾ」のかわりに、「ツォ」[↑] [tso] も言われ、「ゾォ」[↑] [dzo] も言われる。私の当地方の調査で、[tso] もかなり出たし、[dzo] も多く出たように思う。

○ピンポン デキッ [↑]ツォー。

ピンポンができるよ。

というのも聞いた。

陳思の「ゾ」の北方例には、
○モー ウチー イグ [↑]ゾ。

もう家へ帰るよ。(ともにあそんでいて、帰ろうとする時のことば。)

(小男間)

などもある。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条には、

m…… ナガドマリ シネーガ イーゾ ンー
長滞在を しないほうが いいぞ。 うん。

とある。

比較的単純な関東状況を受けて、東北地方は、どのようであろうか。

九 東北地方の「ゾ」ほか

福島県

県下に、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれている。

佐藤喜代治氏の「福島県方言の敬語法」(『文化』第二十二卷第四号 昭和33年7月)には、

相手に言い聞かせる場合、文末に附する助詞は、普通の表現では「ド」と「ゾ」の二つである。ただし、「ド」は主に浜通りにだけ「ゾ」と併用の形で見受けられる。

浜通りでは、「ド」「ゾ」に対する丁寧表現は認められず、無理に言わせると共通語風の「ヨ」しか出て来ない。

中通りの日和田町では「ゾ」に対する丁寧語として「ゾエ」が圧倒的である。

との記述が見える。福島市のことばを、かつて放送で聞いた時には、女の人も「ゾ」をつかっていた。飯豊毅一氏は、「福島県における文末助詞—岩瀬郡天栄村を中心として—」(『方言研究年報』第一巻)で、

「ゾ」は、対等以下に用いられる。対等では、したしいあいだがらるときにおおい。ぞんざいさもあるが、むしろ、したしさがあらわれている。と言われる。

告知の「ゾ(ド)」は全県下に見られる。いわゆる浜通りでは、「ド」になることも多い。『相馬方言集』には、「アレーヤなんちだべまず、今ちんととこで汽車たつちまつたど」などとある。大橋勝男氏教示の、浜通り南部での、

○アードワ コーカイ スツ ト。

あとでは後悔するぞ。

は、「ド」が「ト」とあるのだろうか。

『福島県棚倉町方言集』には、「^{ふるしき}風呂敷に財布包んでえっと、つっぽぬけつお」など、「ツォ」の例が見られる。磐城の他の方言文献にも、「ツォ」例が見られる。飯豊毅一氏は、さきの「福島県における文末助詞一岩瀬郡天栄村を中心として一」で、

○はいえク シねート オコラレツ ツォ。

はやくしないと、しかられるぞ。(少年, 兄→弟)

と記述していられる。「ツォ」に「ゾ」を認めていられようか。「ツォ」が、県下になりに広く認められるようである。さて会津では、

○ソレ、カバヤン ネー ツ〔ü〕ー。

それは、カバヤンではないぞ(よ)。(中女→子小男)

などと、「ヅ」がよく聞かれる。やはり「ゾ」に属するものであろう。『会津方言集(増訂版)』にも、「マダダズー(句)未だですよ。」などとある。『福島県方言辞典』にも、

ズー〔助〕よ、ぞ。○「そーだこと嘘だずー」(そんなことは嘘だよ)北会津などとある。

陳思の「ゾ」もまた、県下に広くおこなわれている。やはり、県東部には、「ド」もよく見られ、『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条にも、

フンジェ タノムド

それでは 頼むよ。

などとある。会津にはまた、陳思の「ヅ(ズ)」が見られる。『会津方言集(増訂版)』には、「ヤンダズー(句)否です。」などともある。県下に、陳思の「ツォ」もある。

「ゾ」相当の「ゾン」があり、『福島県方言辞典』にも、「ソダゾン〔句〕さうですよ 北南中」などの例が見え、なお、「ゾン」に関しての、

ゾ・ゾエ・ゾシ・ゾン これ等は文語助詞のゾの系列の分化であつて、(中略)ゾンは中通地方に多く用ゐられる。

との説明も見える。『福島方言集』には、「あ、こらんしよ、待つてんぞん（い、お出なさい、お待ちします）」とある。

「ゾン」とともに、「ゾイ」も県下におこなわれている。やはり、『福島県方言辞典』には、「ソデネィゾイ [句] さうでないです 中会南北」などとある。県下の東西に、「ゾイ」がよく見られる。

*m*タノムゾイ インデナー イソガシ……

頼みます。 それでは 忙し……

は、『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条に見られるものである。『福島方言集』にも、「うちでも、けさ上方見物から、けエって来たぞい（私方でもけさ上方見物から帰宅しましたよ）」などとある。

さてまた、県下に「ツォイ」もある。福島市方面で私が聞いたものは、

○ハヤグ[ü] シ[i]ネート, オソグ[ü] ナッ ツォイ。

早くしないとおそくなるぞ。

である。

宮城県

本県下でも、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれている。

告知の例は、「ホイチンダ ズ。」(そんなんだぞ。)などである。「ゾ」が「ド」にもなっている。

陳思の「ゾ」の例は、『仙台の方言』の、「なにっこの、もいっぺん言ってみるこの、だまっていねぞこの。(なに、この野郎も一度言ってみる。こやつ只ではおかないぞ)」などである。県北の松島湾岸での一例は、

○ガンバンネク[ü]チャ ワガンネー[↑] ズ。

がんばらなくちゃあいけないぞ。

である。

菊沢季生氏は、「宮城県方言文法の一斑」(『国語研究』第二巻第四号 昭和

9年4月)で、

格助詞の「ぞ」は、此の地方では往々ゾエ、ツォとなり、ドとなり、甚だしきはデとなる。

と述べていられる。氏の「ツォ」例は、「ワガリエンツォ (いけませんぞ)」である。

『仙台の方言』には、「つお」例が多く見え、「こっちでおしょしくなるよなものがすつおまづ (こちらで恥しくなる様なもありますよ)」などがある。

「がすつお」の「がつつお」となったものも見える。「あの人とってもわめぎりな人だがつつお (あの人はとても利己主義な人ですよ)」などもある。

「ごめんしいんつおおら、わざにしたんだいっちゃ」(ゆるさないよ。故意にしたのではないか)

とある「つお」も、ここにあげてよいものであろう。

「ゾ(ド)」の「ト」もあるか。私は松島湾岸で、

○トーチャン クット ゴットジャカレツ ト。

父ちゃんがくると、叱られるぞ。

などを聞いている。「ト」の直前に促音がある。これと「ト」音とは、一定の発音機構内にあるものだろう。

県下に、「ゾン」形も見いだされる。

山形県

本県下にも、告知・陳思の「ゾ」がよくおこなわれている。

告知では、「ゾ」にあたる「ド」も見られる。

mキシュー ¹⁾シュエツド

きれいに しているぞ。

1) 前後の f のことばと重なっている。

は、『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条に見られるもの

である。

陳思で、「ヅ」のよくおこなわれる中に、「ヅ（ズ）」もある。

○コ^ーコ^ーデ マ^ーワ^ーラ^ーネー ツ[ü]。

ここでは廻らないぞ。

は、私が、山形市近くで聞いたものである。『山形県方言集』には、

やんだず yandazu 連続語 いやですよ 最上 村山
置賜

とあり、また、「づ dzu 感動詞 よ 最上 村山」などともある。同書に、

んだんさけえこんな事すんなづ。(さうでございますからこんな事する
なよ。) 最上

などの実例も見える。「ヅ（ズ）」は、だいたい県下の全域に見えるようである。

三矢重松氏は、『荘内語及語釈』で、

ぞ は大体は鄙しい言葉、又は暴い、又は態と威厳を作る場合に指示
警告の用をなすので、ぜとなると少し投げ遣りの趣が加はる。やさしくい
ふ時はずとなつて東京のヨに通ふ。

と述べていられる。

県下に「ツォ」もあるか。『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条に見える、

fエヌワ クーツォ

犬は 食うそうだよ。

は、ここにあげてよいものだろうか、どうだろうか。

県下に、「ゾン」形もある。『笛吹き掣 最上の昔話』に見える「舌切って飛ばしたじゃん。」の「じゃん」は、「ゾン」に通うものなのかどうか。『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条に、

fナンジョーダッテ

なんということでしょう。

とある「ジョー」は別ものであろう。さきの『笛吹き掣 最上の昔話』には、
「ほの日がら三日経ってから行く、との約束して、その立派な兄様も帰ったじ

ゆん。」というのも見える。ここには「じゅん」がある。私が、新庄市で聞いたものには、「いやだ。」の意の「ヤンダ デュー。」などがある。「デュー」は、「ゾ」相当のものか。新庄弁で、人は、「アベ デュー。」（“いっしょに行きましょう。”）との言いかたもしている。『山形県方言集』には、「じゆ ju 感動詞 よ ^{最上} 籠賜」との記述が見え、「ほだぢゆ hodaju 連続語 さうです 最上」などともある。

秋田県

本県下にも、告知・陳思の「ゾ」がよく見られる。

告知の「ゾ」が、「ド」[△]ともある。『秋田方言』には、

こゝにも沢山あるど（[△]であ）（此処にも沢山あるぞ（ぜ）
が見える。

陳思のばあいにもまた、「ド」が見られる。

○ハナッビ[i]・アッゲダ ドー。

花火を上げたぞ。

は、県東南での一例である。——これは老男の発言であったが、老女が、“「ゾ」でも「ド」でも。”と説明してくれた。

問いの「ド」もあるか。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

mオメー ドキ ヤシタド

おまえ、どこへ 行ってきたのだ。

というのが見える。

県下に、「ゾン」形が、かなりよく見られるようである。寺田伝一郎氏の「平鹿郡昔話」（『昔話研究』第二巻第八号 昭和12年6月）には、「昔々ある所に、福太郎ふくとろびつぎ蛙と猿がゐるたけぢよん。」とあって、「ぢよん」が見える。都竹通年雄氏の「日本語の方言 東日本の巻」（『日本語の種々相』 昭和30年11月）にも、

「北奥羽方言」での「ソダヂョン（そうだと言うことだよ。そうだとき）」が見える。これらの「ヂョン」は、すぐには「ぞ」を考えさせないものであろう。都竹氏は、「ヂョン」に「オン（もの）」の複合を見ていられる。

岩手県

本県下にまた、告知・陳思の「ゾ（ド）」がよく見られる。（伝聞の表現での、「ト」文末詞の「ド」となったものと、「ゾ」の「ド」とは、ときにまぎらわしいことがあるか。）

『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条に見える、

fアデア ナガッタダモノエー コメモ サガナモドー

あてが なかったんですものねえ。 米も 魚もね。

は、告知の「ド」をとらえしめるものか。

○シ[i]ラネー ドー。

知らないぞ。

とあれば、これは明らかに、陳思の「ド(ぞ)」である。私は、県中央の東北部の内、

○フ[ü]ンナグ[ü]ッテ ケッ ズ。

ぶんなぐってくれるぞ。

は、陳思「ゾ」の例である。

県下に、「ヅ」の形が見える。『岩手方言』第二輯（方言絵はがき）には、「セノビ スルト ベコ ミエルヅ。」との文が見える。「ヅ」は「ゾ」に近いものか。県下に、「じ」の形も見える。『岩手県南昔話集』（『伝承文芸』第六号）には、「……始めだったじ。」「そう言って寝たんじ。」などの言いかたが出ている。ところでこの「じ」は、「ゼ」に近いものか、「ゾ」に近いものか。

私が、県中央の東寄りで聞いたものには、

○どうどうして ケッ ツォー。

どうどうしてくれるぞ。
 というのもある。調査時、「ケッ ツォー」が、土地人によって、「ケッ ゾ」
 に対置された。

県下に、「ジョ」形もある。「ソーダ ジョー。」は、土地人の解説によると、
 “そうですよ。”である。県北の軽米弁でも、「ソーダー ジョー。」「コーダー
 ジョー。」などと言われているという。高橋藤作氏の『西和賀方言之研究』にも、
 「今度ッ降ルジョ 降ルド 降ルッタ」など見え、

ドが最も普通に使はれ、 ッタは命令型に附いて多く使はれ、 ジョは割合に
 少ない。

とある。『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条にも、

fキシエーエナカッタジョー ハイ

着せられませんでしたよ、 はい。

などとある。「ジョ」は、「ゾ」と対比することができるものか。

複合形の言うべきものはほとんどない。

青森県

やはり、告知・陳思の「ゾ（ド）」が、よくおこなわれている。

県下の津軽・「南部」にわたって、「ゾ（ド）」が見られる。瀧野沢栄一氏の
 「津軽方言の語法」（『方言』第五卷第二号）には、「ド。標準語の『ぞ』にあたる
 」とあり、「モーワラハドガッコガラクルド。もう子供等が学校から来る
 ぞ。」「コレオオモスレド。これは面白いぞ。」などの文例が見える。多く、
 「ド」形がおこなわれているようか。

上の「ド」があって、しかも別に、問題の「ド」がある。問いのセンテンス
 に出てくる「ド」である。『五戸の方言』には、「居だど は一すんだど」と
 いうのが、「居るか もう夕飯が済んだか」と言いあらわされている。つまり、
 問いの「か」が、当方言では「ド」になっている。私が、「南部」南辺で聞いた

た例には、

○ドゴサ イグ ドー。

どこへ行きますか。

などがある。昔話の中にも、この種の「ド」が出ており、寺井義弘氏の『青森県南部方言考』に、「これあ 汝 のだ ど?」との記事が見える。『野辺地方言集』には、

ド（助）疑問のカに当る、「行くド」は「行くのか」「ソダド」は「そうか」。

との記事が見える。八戸市で私が聞いた例をあげるならば、

○じいさんに アワナガッタ ドー。

じいさんに会わなかったか。

のようなものがある。人は、この「ドー」を、「疑問」と説明してくれた。下北半島の田名部での一例は、

○コレァ ナー シタバ ドー。

これはおまえがしたんだろう? (“したのにちがいがいるまい。”)

である。十和田湖畔でも、

○デァーモ イネェー ドー。

“だれもいないか。”

というのを聞いたことがある。多く「南部」地方に、こういう「ド」が聞かれるのか。いずれにしても、土地の研究者が「疑問のカに当る」とせられる「ド」である。「だろう」に近い「ド」かと思われなくもないが、「行くド」が「行くのか」であるならば、「ド」は別用のものかとも思われる。「南部」南方の剣吉で聞いた訪問あいさつ（“最下品”）「イダ[↑]ド。」（いるかい?）などを見ると、「ド」は、「ト」に近いものかとも思われてくる。

「南部」地方に、「ぞ」に相当する「チョ」などもあるか。なお、『青森県南部方言考』には、「たのむ じよう。（たのみ ますよ。）」などがある。

東北地方では、「ゾ」の用法に、さほどの複雑さは、まずないようである。また、「ゾ」に関する複合形の言うべきものも、あまりないようである。

「ゾ」の異形の存立、あるいは「ゾ」相当形の存立については、別に注意する必要がある。

十 北海道地方の「ゾ」ほか

告知・陳思の「ゾ(ド)」が、大約、全道的におこなわれているのか。鈴木淳一氏によるのに、函館市では、「実際には『ゾ』か『ド』か明瞭に聞きわけられぬくらい、発音があいまいである。」さまが聞きとられるという。

○ス[○]ソ[○]ソッチ [○]ズッタ [○]ゾ。

少しそっちへ動いたぞ。(50女→嫁)

は、『礼文島言語調査報告』に見える、告知の「ゾ」の一例である。

mオーエ エマ カエツテキタゾー

おうい、いま 帰ってきたぞ。

は、『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条に見える、陳思の「ゾ」の例である。『北海道風土記 童戯と方言』にも、「えてくるぞー 行つて来るぞ」というのがある。

鈴木淳一氏教示の、十勝本別町での一例、「バンゲドゴサモ イガネゾオー(オレ)」(今晚はどこへも行かないぞ。＜わしは＞)は、目下への言いかたのものであるという。同氏教示の、小樽での一例には、「タノムゾ、オイ。(男)」がある。なお、氏は、小樽ことばについて、

○オレ[○]テンカ(ナンテ) シネ [↑]ド。

おれなんかしないぞ。

というのも教示せられた。

『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

mキョー スコシ ダイリョ シテクド

きょうは ちょっと 大漁 してくるぞ。

というのが見えている。

十一 おわりに

「ゾ」文末詞の全国的な優勢は、以上に明らかであろう。「ゾ」の「ド」となったものが、また、全国的にそうとうつよいきおいを見せている。「ゾ」の頻用につれて、わけなく、「ド」音化がひきおこされたか。

「ゾ」は、単純に、文表現の敬卑感・敬卑相を色づけている。「ゾ」の効果は、つねに端的である。

良品位のものとは見がたくなった「ゾ」が、ものとしては古来のものである点は、とくに注意される。「ゾ」は、今後、どういう運命をたどっていくものであろう。しきりにこれが運用されるようにはならないのではなからうか。

第五節 「ソ」について

第四節「ゾ」の属の「一 はじめに」の中で、私は、疑問とされる特別の「ソ」に言及した。この節では、その「ソ」をとりあげてみる。

「～です ズ」からの「～でっ ソ」, 「～ます ズ」からの「～まっ ソ」は、ここの問題ではない。「ゾ」が「ソ」となったと考えられるものは、今、すべて論外とする。

山口県下や九州豊前などで聞かれる「それ」系の「ソ」文末詞もまた、今は、論外とする。(のちに、代名詞系の転成文末詞の条でこれを取りあつかう。)

今とりたてたいのは、起源不詳の、しかも形は「ソ」とあるものである。

池辺用太郎氏の『熊本県方言音韻語法』には、

それから、此の「見サイ」に「ソ」を附けて「見サイソ、コギーヤンソ・テ、ナツテ シマツタ タイ」(見よ、遂にこんなことになつて仕舞つた)

と、事の意外に驚く……………。

とある。これでの「見サイソ」の「ソ」が、今は問題の一事象としてとりあげられる。

つぎに、『大分県方言の旅』第2巻の「東国東郡国東町の」条からは、

チョイト マチヨ ソー。 マダ ソコン トコロガ ハッキリ
 ちよっと 待ってちょうだいよ。 まだその ところが はっきり
 ワカランネー。 モチ[△]ット オシエチ オクレ ソー。
 分からないのに。 もう少し 教えて ちょうだいよ。

との記述を見いだすことができる。「オクレ ソー」などとある「ソー」が、いま注目される。

九州では、上記二事項が、今、私のとりたてうるものである。「ソ」が、文末詞なみのものであることはたしかであろう。

中国地方や四国地方・近畿地方には言うべきものがなくて、中部地方に問題の事象がある。『信州上田附近方言集』には、

ソーヨソ 左様にて御座りますよ「マス」の略

との記事が見える。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号)にも、

ソウヨソ (さうだよ)

ダメヨソ (駄目だよ)

ウソヨソ。

との記事が見える。これらからは、「ソ」文末詞をとりだすことができるのではないか。起源がどのようなものであろうとも、今は、「ソ」が、「よ」と言いかえられるものになっている事実が、明らかなようである。ところで、大分県下の「マチヨ ソー」や、信州での「ソーヨソ」など、「ソ」は、「ヨソ」の複合形で出がちのようでもある。

ところで、『分類方言辞典』の「小詞」の所からは、「食エソ、食えよ。越後

北部。」との記事を見いだすことができる。この「ソ」は、どういう「ソ」であろうか。——文末詞とされるものには相違なからう。辞典にあっても、「ソ」が「よ。」とされている。押見虎三二氏は、昭和三十二年、越後の中魚沼郡に「ソ」が多いと語られ、「ソシテ ソ。ソレカラ ソ。」などの言いかたを教示された。新潟県下に問題の事象のあることは、以上のとおりである。

関東地方には、問題の事象がなさそうであり、東北地方にもまたなさそうである。

斎藤義七郎氏の「山形県北村山郡東根町」（国立国語研究所報告16『日本語の記述的研究』）に、

so 置賜地方（小国方面になし）に特有。強意。[hōdasso]（そうだよ），
[honnesso]（ちがうよ）

というのが見えるが、この「ソ」は、「ゾ」を思わせるものではないか。

秋田県下の角館のことば、

○アア モセア。ヨソバン セア。アツ[ü]マリ アルソ。

あのねえ。今晚ね。集まりがありますよ。

の最後に見える「ソ」も、「ゾ」的なものかと思われる。（——どうも単純な「ソ」ではなさそうである。）

起源も不明瞭で、ただただ「ソ」の音形が認められるのをとりたてるとすれば、そのものは、上の少事項に限られるようである。ともあれ、もはや単純に「ソ」音形が認められるのみとなったものは、「ソ」文末詞と言うことができる。

第六節 「ゼ」の属

一 はじめに

「ここにおいとく ゼ。」（ここにおいとくよ。）などと言われている「ゼ」

を、ここにとりあげる。私はこれを、ザ行音文末詞の一つとして処理したく思う。

永田吉太郎氏は、「終助詞私見、シを中心として」(『方言』第四卷第十一号)で「ゼ」をあげられ、「厭だぜ。男のことばで、目下、又は遠慮のない間でなければ使へない。」と説明していただける。

「ゾ」と「ゼ」とは、あい似た文末詞と見ることができよう。

「ゼ」に関しては、従来、起源論の諸説がある。山田孝雄博士は、『日本文学概論』で、「ぞや」>「ぞえ」>「ぜ」のお考えを示していただける。池上禎造氏は、国語学会編『国語の歴史』(秋田屋 昭和23年10月)の中の「第四篇 近世」で、「ゼ」について、

ゾに似て少し軽く主に江戸に用ゐられたといふが、上方のゾヨ・ゾイと関係があらうが上方にはゼはなかつたかなども今後に残す。

と述べていただける。「ゼ」を「ゾイ」などからの転訛と見ていられようか。

「ゾイ」>「ゼ」は、音訛上、ありうることである。しかし、[oi]連母音の相互同化をきらう地域では、「ゾイ」>「ゼ」はおこりにくかったろう。近畿地方や四国地方は、「ゾイ」>「ゼ」をおこしにくかったろう。私の郷里方言(内海大三島)などでは、「ゾイ」は頻用されているけれども、これに密着した「ゼ」はない。[oi]>[e:]もない。

「エ」文末詞の成立を「ヤイ」文末詞から説くむきもあつたりするか。抽象的にはそう考えることが可能である。しかし、[ai]連母音の相互同化があり得ない地域では、まず、「ヤイ」>「エ」はあり得なかったろう。

関西の「ゾイ」が、他の[oi]連母音相互同化地域に流伝したとしたら、ここでは、「ゾイ」は「ゼ」になり得たでもあろう。

「ゼ」は、一般的には、「ゾイ」からもおこり得たろうし、また、「ゾエ」からもおこり得たろう。

前田勇氏は、「終助詞『ぜ』、江戸・上方のそれについて」(『国語学』40)で、

例えば「さあ、行こう」といっただけでは方処性は弱い、これに終助詞を付けて「さあ、行こうぜ」というと、たちまち東京弁となる。終助詞「ぜ」は、東京弁の特徴形の一つだといってよからう。

しかし京都弁・大阪弁にも、これがある。ただ東京形「ぜ」がまれて、一般にはその訛形「で」の方が優勢なために、他郷の人が気づかないだけである。

としていられる。また、「すなわち『ぜ』の原形は『ぞえ』であり、その音訛は $zoe > ze > ze$ であったろう。」と説いていられる。氏の、「ぜ」が「デ」に転化したとのお考えは、他者にも見られるものであろうか。私はしばらく、「デ」は「ぜ」と区別しておきたく思う。また私自身の郷里方言によるが、私どもは、「ぜ」を全然言わなくて「デ」を頻用している。しかも、東京弁などでの「ぜ」用法にくらべると、郷里方言での「デ」は、いくらか品位の上まわったものようである。少年たちがおとなに東京弁の「ぜ」のようなかっこうで「デ」を言うと、これは一種の愛らしいもの言いになる。この「デ」は、「で」助詞起源のものではなからうか。(——四国地方では「ホーデー。」(そうなの。)と応答する「デ」がさかんにおこなわれているが、この「デ」も「で」助詞からのものであろう。)「ぜ」が「デ」に転化したことがあったかもしれない。が、これを無条件に広く考えることは危険であろう。「ぜ」と「デ」とは、語形上、対応関係にあるようでもあるが、用途・品位いかんは、精細に追究してみなくてはならないことである。

「ぜ」を「ゾエ」起源と見る考えかたが、なかんずく多くおこなわれていようか。

考究のために、あえて一案を付記しておこうか。「ザイ」>「ゼ」も考えられなくはない。「サ」文末詞の変形「サイ」についても、「サイ」>「セ」が見られたことである。(p. 211, 241 など)「ザ」文末詞をさきにとりあつかったさいにも、田中勇吉氏の『越佐方言集』に「ざい」「ぜ」を見ることができた。(p. 266)また、剣持隼一郎氏の「粟島浦村の言語(一)」にも「ぜ・ザエ」を見るこ

とができた。(p.267)

起源はともかく、「厭だぜ。」など、「ゼ」が単純に文末詞としておこなわれていることは、今日のあらそえない事実である。私どもは、現実には即して「ゼ」という文末詞を受けとることができる。このものは、音相が「ゾ」などにも類していて、現実にははなはだ感声的でもある。この点で、いわば共時論的処置により、私どもは「ゼ」を、「ゾ」などととも、ザ行音の感声的文末詞とすることができる。「ゼ」には「ジェ」音のものもあり、また、「ゼイ」「ゼン」となったものもあり、関連する「ジ」もある。これらいっさいが、現用の感声的「ゼ」文末詞とされる。

(以上のような受けとりかたをするので、「デ」文末詞はここにはとり合わない。)

「ゼ」文末詞の用法としては、男ことばともされている点、さまで上品な言いかたにはならない点が特色視されよう。局面をかえて言えば、「ゼ」には「あてきめ」の意味作用があるとも言えようか。——押しのややつよいところがあるとも言える。こういう点では、「ゼ」文末詞と「デ」文末詞とを併置することもできなくはない。「あてきめ」の意味作用は、「ゾ」文末詞にもよく認められるものであろう。こうなると、「ゾ」や「ゼ」をまとめたの、ザ行音感声系文末詞という受けとりかたが容易になる。

「ゼ」が用いられるうちに、「セ」ともなっている。「何々です ぜ。」が「何何でッ セ。」ともなっている。「ありまッ セ」「行きまッ セ」などの告知の言いかたが、関西内で、よく聞かれよう。(「いくらですか。」とたずねる「ナンボデ オマッ セ。」は、「～ます エ」をとらえしめるものであろう。)
「～ダス ゼ」の「～ダッ セ」もあるのか。(「～ダス ゾ」の「～ダッ ソ」のように。)ともあれ、結果の「セ」をとらえて、これも共時論的に処理して、「セ」を、「ゼ」に対応する、文末詞の一現実形とすることもでき

なくはない。この時は、サ行音ザ行音文末詞に、「サ・ザ」「セ・ゼ」「ソ・ゾ」の対応関係が認められることになる。

二 南島方言の中の「ゼ」

南島地方には、通常、「ゼ」文末詞はおこなわれていないのか。

ところで、旧年、私が奄美諸島の方言を、鹿児島市内で調査した時には、沖永良部島のことばに、つぎのような、文表現末尾の「ゼ」を見ることができた。

○ワ^カキヤ^チ ッ^モー^チ クリラ ゼー。

“わたしたちの家へ来てくださいますか。”

(「…………… ッ^モー^チ クリラ^ン カ^ヤー。」は、「……………来てくださいますでしょうか。」で、このほうが敬意がより深いとのことである。)

○ウ^リヤ ナ^タガ^ド ッ^ク シャ^ーブ^タ ム^ナ ゼー。

これはあなたがしなざったんでしょう？

(「シャ^ーブ^タ ム^ナ ゼー」のくぎりかたがわからない。今は、文末の「ゼー」に注目して、これをここにかかげる。)

○タルム ウ^ラダ^ナ ア^ヤブ^タ ム^ナ ゼー。

だれもいらっしゃらなかったでしょう？

(やはり文末の「ゼー」に注目して、この例をここにかかげる。教示者は、「ア^ヤブ^タ ム^ナ ゼー」を、敬語で、「でしょう」だと語った。)

不可解ながら、ともかく「ゼー」の言いおさめがなされているのに注意したい。

沖永良部島の田皆という集落では、他集落の「ゼー」に対する「ヂー」の言いかたがなされている。(この表記は、教示者の示されたものである。)

○ウ^リヤ ウ^イガ^ド ッ^ク シャ^ーム ア^ヤブ^ラ ゼー。

これはあなたがしなざったんでしょう？

は、「ヂー」の見える一例である。

解釈困難の用例であるが、ともかく、「ゼー」「ヂー」のこのような現実態を

とらえ得たことは、回顧して、幸運であったと思う。

南島諸方言の内部に、「ゼ」関係のものが精査されることをこいねがう。

三 九州地方の「ゼ」ほか

おおぐりに言っ、九州の、だいたい各地方に、「ゼ」が見いだされるようである。

鹿児島県下に、「ジェ」が、

○ロクジゴオ デテ イッタ ジェ。

六時ごろ出て行ったよ。

などとおこなわれている。小説、獅子文六氏作『南の風』には、「うんね、あん家^{からかへ}、唐帰りの家ぜえ」などの「ぜえ」が見える。——これは、女中が客に言ったことばである。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」の条には、

*m*オラー センダイー イタテ クーゼ

おれは 川内に 行って 来るぜ。

とあり、「ゼ」が見える。

宮崎県下の事象としては、例の椎葉村のうちの「うそじゃじい＝うそだ」というのをひくことができる。「じい」は「ゼ」に相当するものか。

熊本県下には、ことに県南・県西に、「ゼ（ジェ）」の、いちじるしいものがある。白石寿文氏は、「熊本県八代市二見町方言の文末詞について」『国語教育研究』第二号）で、「ゼ」は「ゾ」に似て強調性があるとせられ、「品位は上とはいえない。」と言われる。——自己の意をつよく言う「ダイガ イヤー ゼ。」（だれが<するものか>いやですよ。）などがおこなわれているようである。斉藤俊三氏は、『熊本県南部方言考』で、

ゼ, ゾイ zoi が e 音化してゼになる。水俣附近に少く球磨川沿岸地から八代に在る。

と述べていられる。

天草に「ジェ」がおこなわれており、

○ヨカッ ジェー。

いいですよ。

などとある。「スッ トジェー。」は、“自分の意志を言うばあい”であるという。

熊本市方面でも「ゼ」が聞かれる。「デクル ゼー。」(できるよ。)は、かつて土井忠生先生の採録せられた、熊本市方言での一例である。先生は、この表現について「下層」との注を加えていられる。渋谷多文氏は、熊本市を出ての南域の事象、「マタ クッ ジェー。」(また来るぜ。)を報ぜられ、「ジェー」を「卑しい云い方」とせられた。

熊本県下では、「ジェ」は、総じて、中等度の品位にもおよばない程度の品のものなのか。

長崎県下では、まず島原半島に「ゼ」がある。『嶋原半嶋方言の研究』には、家中語として、「そら ぢぢはが よろこび なはるぜ。(それは、お祖父さんが喜びなざるよ、) <叔母→子供>」などの例があげられている。

『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対馬町鰐浦」の条には、

fトボッタジェ トボッタジェ

ついたぜ ついたぜ

というのが見える。

五島列島をはじめとして、長崎県西域には、「ゼ」があまりおこなわれていないのか。

県下に、「芝居を見に行こう ジー。」というような言いかたがあるらしい。

佐賀県下には、「ゼ」が比較的良好におこなわれているようである。県西南部、長崎県寄りでの「ゼ」例は、

○モー ヨカ ゼー。サセテモ ヨカ ゼー。

もういいよ。させてもいいよ。 (青男間)

などである。(一ノ瀬和子氏教示) 県東部に関しては、米倉利昭氏の、

目下の者にいうことばは「キャー」「ケー」「ジェー」「ジャー」である。との教示がある。

○ネコカラ イチクワルッ ジェー。

「猫から」(猫に)食われる“ぞ”。

などと言われているという。県東部で、また、「何タスッ ジェー。」は、「何何するぞ。(自分の意志)」である。

県北、唐津では、城内ことばに、「勉強シニャ イカン ゼ。」などが聞かれ、城外ことばに、

○ヤスマジー ハヨ イカニャ イカン ゼー。

やすまないで早く行かなきゃいけないよ。

などが聞かれる。「イカン ゼ」については、“たいそうぞんざい”との説明があった。城外ことばの「ハヨ イカニャ イカン ゼー」については、よい家庭の子に対して、いたわりの意をあらわして”との説明があった。城外ことばで、また、「わしはしてはいないよ。」との陳弁の言いかた、「オリャー シトラン トゼー。」がなされており、この「トゼー」とともに、「トバイ」「トヨー」の言いかたがなされている。三者のいずれもが中等品位のものとのことである。岡野信子氏によれば、唐津市神集島の「イカン ゼー。(いけないよ。)(青女間)」は、「イカン ズ。」よりはやさしいものであるという。

○アンター キップ オレニャ クレトラン ゼ。

あんたは切符をわしにはくれているよ。

は、私が、唐津市内のバスで聞いたものである。六十歳以上と思われる老女の発言であった。

福岡県下に関しては、加来敬一氏の「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号)に、

「ゼ」——豊前区小倉、筑前区筑紫、早良、筑後区八女、三井
との記述が見える。ところで、筑前東部の嘉穂郡下にも、

○モ アгент モッテ キテ ヌッチョル トゼ。

もう、あんなのを持って来て塗ってあるんだよ。(老女→中男)
などの言いかたがおこなわれている。(白石美代子氏教示)

筑前太宰府での一例は、「チガ^ーゼ。」(ちがうぞ。)である。

筑後例を、『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条からひくならば、

m………… コゲン シオッタゼ コゲン シオッタゼー
こういうふうに していたぞ、こんなふうに していたぞ

などがある。

大分県下にも、「ゼ」が広くおこなわれているらしい。『全国方言資料』第6巻の「大分県大分郡西庄内村」の条に見えるものは、

mオールゼー

いるよ。

などである。同6巻の「大分県南海部郡上野村」の条に見えるものは、

fイトットゥグライ アルキ ヤルゼ

5個ぐらいなら ありますから あげましょう。

mハッピー ヅンヂョリャ カナリ ツンヂョルヨニ アルヂェ ソゲ

100俵 積んでいれば かなり 積んでいるよう だぜ、 そう

ー ユータチ

は 言っても。

などである。北海部郡で私が聞き得たものは、

○マー タ[↑]ム ジ[↑]ェー。

まあたのむよ。

である。これを聞いた時、人は、「ジ[↑]ェー」の言いかたに対置して「デ[↑]ー」を示した。そうして、“老人はジェが多い。”と説明してくれた。松田正義氏の『大分県方言の旅』第1巻には、玖珠郡北山田村駅東部落のことば、

○コッカラ タカズカマジャ ドレクレーカカルジャロカ。オナゴンアシ
ここから 高塚までは どのくらいかかるだろうか。 女の足で。
ぜ。

が見える。「女の足で。」の「オナゴンアシゼ。」では、「ゼ」が、——あとの会話からするのにな、助詞の「で」と解される。が、別に、文末詞の「デ」もあることは、たしかのようである。

国東半島での「ゼ」の一例は、

○イン[↑]ゲー。ム[↑]コーエ ネラレル[↑]ゼ。

いいえ。むこうの部屋へねられますよ。 (宿の青女→若い男の客たち)

である。

『豊後方言集』第三輯には、「イ[↑]シャドンニ ハヨー ゴロージチ モラウ
ホーガ イーゼ。(……見てもらふ方がいゝでせう。)」の「ゼ」例が見え、
また、「イ[↑]シャドンニ ハヨー ゴロージチ モラウ ホーガ イーデッセ。
(……見てもらふ方がいゝでせう。)」というのも見えている。「〜デッセ」
は、「〜デス ゼ」からのものであろう。

上来のように、現実の「ゼ(ジェ)」(あるいは「ジ」も)は、まさにザ行音
文末詞として、九州内におこなわれている。

四 中国地方の「ゼ」ほか

中国地方では、概して山陰がわに、「ゼ(ジェ)」のよりいちじるしいものが

認められようか。

山口県下の「ゼ」は、広くこれがおこなわれているけれども、さしてのことはなさそうでもある。——陳思の「ゼ」がおもにおこなわれていよう。

広島県下の状勢も、だいたい、山口県下のに近かろう。——いづらか、より多くおこなわれているか。

県下の島嶼部に、

○ワ[↑]ジャー アンター ハチ[↑]ジャーシ ゼー。

わしはあなた、八十四ですよ。

などの「ゼ」が聞かれる。安芸北部にも、

○イ[↑]ツイデ コナサニャー、ユ[↑]キニ アウ ゼ。

いそいでこなさなくては、雪にありよ。

などと「ゼ」がおこなわれている。『全国方言資料』第5巻の「広島県佐伯郡水内村」の条には、

fマー ヨージン シマヒョーゾヨ

まあ 用心 しまししょうよ。

に対する「mマー ヨージン シマヒョーゼヨ」が見える。備後中部では、「ゼヨー」とともに「ジヨー」がおこなわれている。

『三原市大観』の記事には、

えかるーぜ } よろしうございしょう。
えーわいのー }

というのがある。「わいのー」に対置されている「ぜ」である。——陳思の「ゼ」である。

岡山県下にも、南北に「ゼ」が認められはするものの、北域に、「ゼ」の、おちついた存在が見られるようである。——山陰、鳥取県下の「ゼ」の優勢な分布に関係があるろうか。

○ヨー デキトルダロー ゼー。

よくできているものか。（“そんなにできとるものか。”）

（自分の田の稲のことを、人の評価に抗して言う。）

は、美作西部での一例である。この「ゼー」には「デー」も併置されるという。

鳥取県下は、中国で、わけても「ゼ」のさかんな所か。諸文献も「ゼ」をとりたてており、「ゼ」「デ」を合わせ見ているむきも多い。——「ゾ」もそこに考えよそえられたりしている。

因幡・伯耆の「ゼ(ジェ)」には陳思・告知の用法が多く、命令表現になるものも（禁止命令も）あり、問いの表現になるものもある。

○ウチノ オトツツァンモ オーケ カンジャード[↑]ゼ。

うちの父さんもひどいかんしゃく持ちだよ。（青男問）

は、因幡中部での陳思の「ゼ」例である。同地で、老女も、

○スキデ ゴザンシタデショ[↑]ーゼ。

すきでござんしたんでしょうよ。

などと言っている。「ゼ」はわるいことばとはされていない。

「鳥取県倉吉市国分寺」（『全国方言資料』第5巻）での一例は、

fサー シューゲンダットコデ ミニイッタジェ⁵⁾

さあ 祝言だと言うので 見に行ったんだよ。5) イントネーションは↗

である。おなじく「国分寺」の条には、

fダイジ シトカニャ ナランゼ

大事に しておかなければ いけませんよ。

ともある。「ゼ」が命令表現に役だっているか。伯耆西部の例として私が聞き得ているものには、

○オーカタ テンキダラッ[↑] ジェー。

おおかた天気だろうよ。

などがある。

鳥根県下にも、鳥取県下のにつづく状況が見られる。(ただしその勢威は、鳥取県下のには、いささか下まわるのではないか。)「オラ ナグッ ゼ。」(おれはなぐるぜ。)
 「マンダダ ゼ。」(まだだよ。)は、神部宏泰氏教示の、出雲での例である。『全国方言資料』第5巻の「鳥根県大原郡大東町春殖畑嶋」の条には、

*m*タノンマスゼ

頼みますよ。

などに見える。

私が出雲奥で聞き得たものには、

○サー、イカー ジ[i]ー。

さあ、行こうよ!

などがある。「ゼ」ではなくて、およそ「ジ」とされるものが見られる。これも、やはり「ゼ」の属ではなかろうか。加藤義成氏の「中央出雲方言語法考」(『方言』第五巻第四号)にも、「エキタテテ ツィマランズィ (行きたつてつまらないぜ)」というのが見える。「ズィ」が「ゼ」とされている。ところで、加藤氏の同論文には、「タカケラトズィカンズィ (高ければ届かないぞ)」との記述も見える。(なお、p. 302 参照)

隠岐にも「ジ」が見られ、『全国方言資料』第8巻の「鳥根県周吉郡中村伊後」の条には、

*m*マグレタジー ミズダ

気絶したぞ、水だ

とある。

「ジ」とされている文末詞の本源は何であろう。

石見地方は、山口県下ならびに広島県安芸に類して、「ゼ」を存するようである。千代延尚寿氏の「石見ことばの種々相」(『方言』第六巻第十二号)には、「しつかり勉強しヨウゼ」などの文例が見える。

中国地方内において、山陰がわに「ゼ」がよりいちじるしいのは、なんらかの史的事情によるものであろうか。

五 四国地方の「ゼ」ほか

四国地方には、総体に、「ゼ」がさかんであろうか。

愛媛県下を見る。陳思の「ゼ」が、全県下におこなわれている。(ただし、県北の内海島嶼には、これがあまり見られない。)

○ガ^ーイ^ナ ビョ^ーキ^ワ シマ^ヘナン^ダ ゼ^ー。

私は今まで、ひどい病気はしませんでしたよ。

は、南予での一例である。県下のどの地方でも、「ゼ」は、わるい言いかたにはなっていないようである。

「[〜]マス ゼ」が「[〜]マッ セ」になってもいる。——おもには南予でか。南予には「[〜]ダッ セ」の言いかたも見える。

告知・説明の用法の「ゼ」も、南予などにおこなわれている。問いの「ゼ」が、中予方面によく聞かれる。この「ゼ」が、問いの「デ」にも対応している。

南予に聞かれる、

○ソ^コ ト^ーラン ゼ[。]

そこを通らないのよ。(そこを通ってはいけないのよ。)

などは、命令表現の一種とも見られる。

「ゼ」に関する複合形の文末詞としては、まず、「ゼ」の上接した「ゼヨ」が注意される。「ゼヤ」もある。

○ア^ノ カー コ^ン ガゼヨ^ー。

あの子は来ないのだよ。

は、伊予南隅での、「ゼヨ」の見られる一例である。

南予内に、

○イケン ガト[↑]ーゼー。

いけないんだってよ。

など、「ガト[↑]ーゼ」の言いかたが聞かれる。土地の識者は、私のこの調査カードに、「男子の場合は イケンガ トーゾヨになる場合極めて多し。」と注記せられた。「ゾヨ」の「ゾイ」となったものからは、「ゼー」がおこりやすい。そうなのではあるが、土地に〔oi〕連母音の相互同化はおこっていない。「ゼー」は、やはり特定の「ゼー」であろう。

高知県下を見る。県下に、陳思の「ゼ」が、各階層にわたってよくおこなわれている。西部幡多郡下の一例は、

○ドッコイモ イカ[↑]ンゼ。

どこへも行かないよ。

である。——これは、対等のものか、すこし目上のものかへの言いかたであるという。県下で、「ゼ」は、わるい言いかたにはなっていないであろう。

告知の「ゼ」もまた、よくおこなわれている。しぜん、念をおすような言いかたにもなる。問いの「ゼ」もある。浜田教義氏は、「幡多方言における敬卑表現」で、「わりゃいつ行きゃーヨ（ゼ）。（卑）」という例をあげられ、

卑の場合の「ゼ」は局部的にしか用いられていないが、「ヨ」よりやゝ気分が軽く、親愛の情が深い。ねんをおす場合の「ゼ」（敬）とは全く別で、アクセントもちがっている。

と説明してられる。変わった「ゼ」である。

「どうどうしないと イカ[↑]ンゼ。」（どうどうしないといけないよ。）との「ゼ」もよくおこなわれているが、これは、陳思の「ゼ」としてもよく、また、命令表現のばあいの「ゼ」としてもよい。

土佐弁に、「コレヲ ヤッチョイト[↑]ーゼ。」（これをやっておいておくれ。）というような言いかたがさかんである。末尾に「ゼ」が見えるが、これは、今の問題の「ゼ」ではない。「〜て オーセ」（「〜ておくれ」）の表現法から

きた「〜トーセ」「〜トーゼ」に関するものである。

県下西辺に「ゼン」の形が見える。「ゼ」の一態である。

○ドッコイモ イカン ゼン。

どこへも行きませんよ。（“目上に”）

などと言われている。「ゼン」が、おおかたは、よい言いかたになっている。

「ゼ」に関する複合形には、まず、「ゼ」の上接した「ゼヨ」があり、これが県下によくおこなわれている。

○ドーシテ ナキウ ゼヨ。

どうして泣いてるの？（「ナキウ」は「ナキヨル」である。）

は、県中部での一例である。「ゼヨ」とともに「ゼヤ」もおこなわれている。

諸方言文献には、「ノーゼ」文末詞の指摘が見える。『土佐方言集』には、「のーえ」「のーせ」「のーぜ」についての、

三語共＝前項の[○]ー[○]し＝同ジ。

との説明が見える。「のーせ」は、「ノーシ」という「ナモン(ノモシ)」系の文末詞におなじものである。したがって、「のーせ」「のーぜ」での「せ」と「ぜ」とは、まったく別個のものと考えられる。それにしても、用法の類していることは、上説のとおりである。

○コリャー ワシ ンガゼ。

これはわしのよ。

では、「ンガゼ」の複合形が見られる。「ンガゼン」もある。

『全国方言資料』第8巻の「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」の条に見られる、

fスミゴヤ ミタヨナ モンジャットウロゼナーシ

炭小屋 みたいな ものだったでしょうねえ。

では、「ゼナーシ」が注目される。

徳島県下を見る。陳思の「ゼ(ジェ)」がよくおこなわれている。「また、来てくれよ。ほんまぜー。」は、私が県南の人からもらったはがきの中の二文で

ある。

金沢治氏は、「伊島言語調査レポート」(『阿波方言』第三卷第一号)で、「行くよ——行くぜ(じえー)」「来るよ——来るぜ(じえー)」について、

これは上郡では“行くぞ”“来るぞ”に当り徳島市の“じょ”に当る。伊島では“ぜ”を用いる。

と述べていられる。「じょ」が「デヨ」的なものであることを思えば、伊島での「ぜ」が徳島での「じょ」にあたるとせられるのは、もっともと思われる。

告知(しぜんに、念をおすことにもなる。)の「ゼ」もよくおこなわれている。鳴門市で聞いたことばには、

○所によっては、ことばを、ムツカシュー ユー トコガ アル ジュー。

所によっては、ことばを、むずかしく言う所があるよ。

というのがある。県南でも、こういう「ジェ」がよく言われている。

問いの「ゼ」もある。県南では、

○アレ ナンチュー モン ジュー。

あれは何というものだね？

などと言われている。(金沢浩生氏教示)

命令表現をささえる「ゼ」も見られる。

本県下にも、祖谷に「ゼン」がある。

○コーチケンノ ホーカラ オイデタ ゼン。

高知県のほうからいらっしゃいましたか。

は、この地の人の、私への問いのことばであった。県下に「ゼイ」もあるのか。『方言資料抄 助詞篇』には、

「ぜい」 徳島県海部郡、那賀郡 ○sozei (徳王親吉氏)

との記事が見える。

「ゼ(ジェ)」に関する複合形の文末詞では、「ンゼ(ジェ)」がよくおこなわれている。

香川県下を見る。やはり、全県下に広く、陳思・告知の「ゼ」が見られるようである。女性がわに、これのおこなわれることが多いのか。県東部では、

○ガッコガ オクレル ^ノゼ。

学校に遅れるよ。——（「ゾ」と言えば男ことば）

との説明を聞いたことがある。ところで、県東部で私が中年男子から聞いたことばには、

○ハリワ ヨー キータ ^ノゼ。

針はよくきいたよ。（神経痛治療）

がある。

『讃岐方言之研究』には、

コレヲ書クンヤゼ 大・木・香・三ノ一部云ふ。男女。

「書クンゼ」ともなる。「ぞ」の変転したものである。尚「デ」ともなる。との記事が見える。本書にはまた、「ドーゼ」など、問いの「ゼ」も見える。

草薙金四郎氏の『讃岐の方言』には、「きつきよろぜ（句）聞いて居りなさいよ。」の文例が見える。

県下での、「ゼ」に関する複合形の文末詞には、「ンゼ」がある。

六 近畿地方の「ゼ」ほか

近畿地方もまた、「ゼ」文末詞のよく見られる地域である。ただし、京都府下・滋賀県下は、やや事情を異にするのか。

兵庫県下には、「ゼ」のおこなわれることのさかんなものがある。淡路島に、陳思・告知の「ゼ」がよくおこなわれている。（「ジェ」もある。）服部敬之氏の『淡路方言における一事象』（『国文学攷』第二十七号）には、

○ハチジニ オキラナンダラ オクレッ ゼ。

<八時に起きなかつたら遅れるよ。>

との言いかたが見える。「オクレッ ゼ」が目される。島南に、「アッ ゼ」

(あるぜ。)などの言いかたもある。

播磨にもまた、陳思・告知の「ゼ」がよくおこなわれており、但馬地方にもまた、同様な状況が見られる。この状況は、鳥取県下に「ゼ」のよくおこなわれているのへよく連続している。

県下の摂津・丹波域にもまた、「ゼ」が見られる。

県下に（主としては山陽がわに）、「アリマス ゼ。」の「アリマッ セ。」、「〜デス ゼ」の「〜デッ セ」、「〜ダス ゼ」の「〜ダッ セ」、「オマス ゼ」の「オマッ セ」が見られる。壁谷真蔭氏は、「兵庫神戸の方言小纏」（『方言』第五卷第十一号）で、

セ、ゼ（助）意味を和げ穏当にする語。のだよ。ソナイユーンデッセ

そう言ふ風に言ふのですよ。又デに変訛する事がある。

とするしてられる。

本県下に、問いの「ゼ」もよくおこなわれている。

○ドコイキ ゼー。

どこへ行きますか。

は、淡路北部での一例である。

但馬には、「ンゼ」複合形もよくおこなわれている。

大阪府下にもまた、「ゼ」がよく見られる。『方言と大阪』には、「ぜ」についての「下級な命令調」との説明があり、「座ってるのんやぜ・見たらいかんぜ・喰べたらいかんぜ」の実例が見える。ところで、「よっしや、もうこれから無い無い云いな、ぎょうさんわたしとくぜ」との例文も見える。

『大阪弁』第二輯にも、「ゼ……よ、下品な命令語である」とあり、「するのんやぜ、そんなことしたらあかんぜ」の例が見える。やはり、この種の用法の「ゼ」がさかんなのであろうか。（友人教示の例には、「心配しましたぜ。」「大探しましたんやぜ。」などもある。）

『大阪弁』第一輯には、

「今貞男さんから、お電話だつせ、……………」叔母→弓子（今貞男さんから、お電話なのよ、）

という例が見える。「～ダス ゼ」の「～ダッ セ」が認められるものであろう。大阪弁の「タノンマッ セ。」（たのみますよ。）などの「～マッ セ」も、「～マス ゼ」からのものか。（「～マス エ」からのものがあるとしても。）「～ダッ セ」にも「～ダス ゼ」からのものがある。

阪神地方に「～マッ シェ」もある。

『和泉郷荘村方言』には、「ドーヤッセ どうですか」というのが見える。和泉地方に「ゼ」のおこなわれることは、別文献に明らかである。

いわゆる上方にも、「ゼ」文末詞のおこなわれていることは、上記のとおりである。

和歌山県下にも、おおよそ全県下に、「ゼ」が見わたされるのであろうか。『和歌山県方言』には、中部以北での「カサンゼ 貸しませんよ」が見え、西牟婁郡の「イラマエゼ 要りますまいよ」が見える。どちらかといえば、中部以北に、「ゼ」が、より見られやすいのか。与田左門氏の「^{紀北}方言一段活用動詞の未然形」（『方言』第八卷第二号）には、

お前達は、六時前に、起きなけりゃ、いけないよ。

オマエラ、六時マエニ、オキヤニャ（或はオキヤナ）イカンゼの例が見える。私が、田辺市からはいつての奥地で聞き得たものは、

○ドーセ キツイデス ゼ。

どうせ難儀ですよ。

などである。

県下南部の東牟婁郡下に、「ゼ」相当の「ジ」があるか。国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』に寄せられた、村内英一氏の「和歌山県東牟婁郡高池町」の条には、

コノ ゴハン スエカカッタルケド マダ タペラレルジー。

(この 御飯は くさりかけているが、まだ 食べられるよ。)
とある。

三重県下では、佐藤虎男氏の「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)に、「志摩・紀伊におおい『ジェ』は、」とあり、

○フロ アイタ ジェー。オーキニー。

風呂あいたぜ。ありがとう。(青男→同)〔曾根浦〕

との例が見える。志摩の神島の事例を、三島由紀夫氏の『潮騒』について見るならば、

「けふ浜で美え貝ひろて、汝にやらうと思つて、もつて来たぢえ」「おほきに。見せてなア」

などがある。「ぢえ」とあるのは、「ジェ」というのに近いものではなからうか。

県下に、陳思・告知の「ゼ」が見られるが、どちらかといえば、伊勢北部に、「ゼ」が多いのであろうか。佐藤虎男氏教示の員弁町での一例は、

○イク ゼー。ネー。トコヤエ イク ゼー。

行くよ。ねえ。床屋へ行くよ。(小男→母)

である。桑名地方にも、「ゼ」がよくおこなわれているらしい。佐藤氏によれば、鈴鹿市では、「ゼ」が男子のことばであるという。

志摩などでは、問いの「ゼ」もおこなわれている。

福田学氏の「熊野方言における文末辞について」(『三重県方言』第8号)には、

ソナコトシタラ アカンゼ そんなこと しては いけませんよ。

とある。「アカン ゼ」の言いかたは、命令表現とも受けとられよう。

『三重県方言』には、

アノノイセ あのね 阿田和

との記事が見える。「ノイセ」は、「ノイシ」に近いものではないか。ここの「セ」は、上来の「ゼ」には関係のないものであろう。

奈良県下に、やはり、「…………… イカン ゼ。」などの言いかたがある。

県東南部での、

○広島という人も、ここへ キテマス ゼ。 キテマス ワ。

広島という人もここへ来てますよ。来てますわ。 (老女→藤原)
は、さほど品のわるくない告知の「ゼ」である。県下に、告知・陳思の「ゼ」がおこなわれている。小学生たちも、「アル ゼー。 デッタイ アル。」(あるよ。絶対ある。)などと言っている。——これは、県東南部で聞いたものである。『全国方言資料』第8巻の、「奈良県吉野郡十津川村小原」の条にも、「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条にも、「ゼ」が見える。

本県下で、また、「アリマス ゼ。」の「アリマッ セ。」のような言いかたがおこなわれている。「ありまっ セ」の意の「アッ セ」もあるのか。

「ゼ」の「ゼイ」形が見られる。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

m…………… ゲローモ スズシーゼイ
わたしの家も 涼しいよ。

というのが見える。

京都府下については、しるすべきものを、私はほとんど持たない。

府下北域についても、私は、「ゼ」を聞き得ていない。『丹後網野の方言』には、「『よ』また『ぜ』というべきを『デ』という。」とある。

府下南域ともなれば、いよいよ、「ゼ」の存在はまれなのではなからうか。

滋賀県もまた、総体には、「ゼ」のとぼしい所ようである。——京都府下との一体性がうかがわれる。

井之口有一氏の『滋賀県言語生活実態調査と対策』には、「『ぜ』が『デ』(女)、『ぞ』が『ド』(男)に相当する。」とある。

なお、同氏の『滋賀県言語の調査と対策』には、「セン」というのが見え、「よ」とされており、「25分ヤセン」（甲南）との文例が見える。「セン」は、「ゼン」に近いものなのかどうか。

近畿内に、「ゼ」に近い「セ」が、いろいろに見いだされるのかもしれない。私がかつて、大阪府東南の古市のことばとして聞いたものには、

○ハケデ ハイタラ トレタ セ。

はけではいたらとれたよ。

○となりの人が持ってきてくれた セ。

となりの人が持ってきてくれたよ。

などというのがある。——単純に「よ」の意とされる「セ」がある。さて、これは、「ゼ」からのものなのか、別系のものなのか。

七 中部地方の「ゼ」ほか

中部地方にも、「ゼ」が、まずは広汎に認められる。それにしても、地域によつての、「ゼ」の厚薄が見られる。

福井県下には、「ゼ」が、かなり見られるのか。（「ジェ」ともある。）愛宕八郎康隆氏教示の敦賀市域での例は、

○アノ ヒト マダ ワコ オス ゼ。

あの人はまだ、若うございますよ。

などである。『福井県方言集』には、「敦賀郡」の「ポーラ、ドコニウセサラシタンゼー。子供等は、何処に居たのか。」というのが見える。

越前方面について、石川県下が、「ゼ」をあまり見せないようである。

私が能登半島西岸で聞いた、「ナン ジェー。」との問いかえしのことばは、「何 ゼ。？」にあたるものなのかどうか。

国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』に寄せられた、岩井隆盛氏の「石川県金沢市彦三一番丁」の条には、「取らんゾ(ないぞ)」「取らんジ(ないね)」の記事が見える。「ジ」は、「ね」に相当するものらしい。どういう「ジ」なのであろうか。

富山県下には、陳思・告知の「ゼ」が、かなりおこなわれているのか。古く、『富山県方言』にも「ゼ」がとりあげられており、『『ぞ』の転なるべし』とある。——「弱った^〇ぜ」などの文例が見える。

私が、富山市西北郊外で聞き得たものは、

○ナ^ー ツカイマセン^ゼ。

なんにもさしつかえませんよ。

○ギューニュー キト^ッタ^ゼ。

牛乳がきてたよ。

などである。この地で私が「ゼ」を聞いた時は、たびたび、「ズ」に近くも聞こえた。また、この地で、

○ア^コニ フタ^リ オ^ッタ^ゼ (ベ^ー)。

あそこに二人おったよ。

との言いかたも聞いた。「オ^ッタ^ゼ」と「オ^ッタ^ベ」とが出てきたが、土地の人はこの二者について、“ド^ッチモ オン^テジ イミ。”(どちらもおなじ意味です。)と言い、“居^ったよ。”であると言った。

本県下には、「ゼネ」複合形が、かなりおこなわれているらしい。大田栄太郎氏の『越中の方言』には、つぎの記述が見える。

「あんたヨ、オラ知らんゼネ」などと、自分のことを「オラ」という場合、男か女かわからないが、「あんたヨ」という呼びかけに、一種のイントネーションがつくと、全く女性の香りがブンブンとする言葉である。この場合、実際は知らないのではなく、百も承知で「知らんゼネ」とか「知らんチャ」というのである。

新潟県下には、「ゼ」がさかんのようにである。

陳思の「ゼ」が、「マー タ^マム [↑]ゼー。」(まあ、たのむよ。)などとおこなわれている。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

fウーン デモダ オッカネガッタゼ

ええ、でもさ 恐ろしかったですよ、
などとある。同巻の「糸魚川市砂場」の条には、

mアー イッテ クルゼ

ああ 行って 来るよ。

などとある。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡畑野村後山」の条には、

m………… ソイレ ユーンラゼ バー

それで 言うんだよ、 ばあさん。

などとある。押見虎三二氏の、県南秋山郷の調査結果にも、「ゼ」が見える。

告知の「ゼ」もまた、広く見られる。

○ヤサイノ シマツー シルモンダクレーダ^マジェ

野菜の整理をするぐらいのものですよ。

は、押見氏の秋山郷調査結果に見えるものである。私が聞いた県北での一例は、

○カンヌッサン ソ^ママデ ゴザ^マッタ ゼー。

神主さんが、そのへんまでおいでになったよ。

である。

剣持隼一郎氏の「粟島浦村の言語(一)」(『高志路』第二〇一号)には、「セ」がとりあげられており、「丁寧の終助詞であろう。」とある。文例としては、

ヌケタツセ (ぬけましたよ? 五十嵐源之助氏が調査者に向つて使つたことば)

ダメダツセ (だめですよ? 粟島採取録)

イヤンダツセ (いやですよ? 粟島採取録)

があげられている。「セ」は、「ゼ」に該当するものなのかどうなのか。促音が

問題である。劍持氏の上論には、「ヨムゼ（読むよ 老人→孫）」などの指摘も見える。（p.267）丸茂武重氏の「粟島採取録」（『方言誌』第三輯）には、

ンダァセエイ 嫌です。イヤンダッセとも云ふ。 内浦

との記述が見える。

本県下の、「ゼ」に関する複合形の文末詞に、「ゼネ」の注目すべきものがある。新潟大学方言研究会の『方言の研究』創刊号に見える、「新潟県中蒲原郡横越村川根谷内方言」の一例は、つぎのものである。

○ノーカノ シンダイ テーシタモンダ ゼネ。（農家の身代はたいしたもんだよ。）

岐阜県下にも、「ゼ」が、かなりよくおこなわれているらしい。（「ジェ」もある。）ことに飛驒に、「ゼ」がよくおこなわれているようである。土田吉左衛門氏は、『飛驒のことば』で、

ゼ（助）親しみの気持を添えて意味を強める感動の助詞。（そうや——。）
＝ぜい。ぜいな。ぜな。 参 えな。

と説いていられる。私が美濃北部で聞いた一例は、

○ホントノ コツチャ ゼー。

ほんとのことだよ。

である。飛驒、高山市近在の一例は、

○ウンサー アスコイ イカテモ ズスジャ ゼー。

おまえさんはあそこへ行かれてもるすだよ。

である。飛驒には、上の土田氏の記述にも見えるように、「ゼイ」形がある。また、「ゼン」形もある。土田氏は上記著書で、

一ぜん（助）意味を強める感動の助詞。一に。——ですよ。（あの子が遊びに来た——。）＝ぜえ。

とするしていられる。『岐阜県方言集成』にも、武儀郡の「ままやぜん＝御飯です。」が見える。

「ゼ」に関する複合形の文末詞としては、飛驒の「ゼナ」「ゼイナ」が注目される。私が高山市で聞きとめた一例は、

○ドーカ タノム ジェナ。

どうかたのむよ。

である。

愛知県に、陳思・告知の「ゼ」が、よくおこなわれているようである。『名古屋方言の語法』には、

コノ 本 ワ ヨー 面シロエー ゼー 読ンデ ミヤー

この本はね、面白いよ、読んでごらん

の例が見える。

○サー イク ゼ。

さあ行くよ。

は、渥美半島での一例である。どちらかといえば尾張地方に、「ゼ」が、よりよくおこなわれているのもあろうか。

三河に、「ゼ」の「ゼン」となったものが、かなりよく見いだされる。

○ダイブ ヒヤガツトル ゼン。

だいぶ干あがってるよ。

は、三河西部での一例である。渥美半島で私が聞きとったものには、「ソーダゼン。」(そうだよ。)「ヤット マッタ ゼン」。(ながいことまったよ。)などがある。

○コドモ ネー。ヨカッタ ゼーン。

ああ、あの子ねえ。よかったよ。(けがをしたが、不幸中のさいわい、

ひどくはなかったことを言う。)

などの言いかたもある。尾張の『南知多方言集』にも、

オマインター ワ ロクジメー ニ オキニャ イカン ゼン。

というのが見える。

尾張地方の、「ゼ」に関する特異な複合形に、「ゼモ」「ゼーモ」がある。『名古屋方言の語法』には、

ナエーテ ワ イカン ゼーモ 泣いてはいけませんよ
 などとある。今日は、「ゼーモ」が、若い人にはおこなわれにくくなっていよう。

「ダゼ」の複合形を認めることもできる。山口幸洋氏の「細谷<藤原注 豊橋市細谷>で聞いた『花咲じい』」（『土のいろ』復刊第十号 昭和33年4月）には、

金銀ダー 小判ダー チューモ^フン デ^タダゼ。(〜だ、小判だ、っていうものが出たんだよ)。

との例が見える。『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条にも、

fソースルト ソイデ カワクムンデ ソイデ ワリト ヒューメジャー
 そうすると それで かわくから それで 割合に ひえめしは
 ウマイダゼ
 おいしいですよ、
 というのが見える。

静岡県下にも、陳思・告知の「ゼ」が、よくおこなわれているらしい。早く、『静岡県方言辞典』にも「ゼ」の指摘があり、「ソコニ待ッテ居ルゼ」も、「語気をつよめていふ語遣」とされている。遠江にも駿河にも伊豆にも、「ゼ」が見える。伊豆北寄りでの一例は、

○ニャンナンテ イワネー ゼー。

「ニャン」なんて言わないよ。

である。

「ゼン」の形も見える。『静岡県方言辞典』にも、「来るぜん」などが見え、『静岡県島田方言誌』にも、

ナイゼン ないよ 無いよ

などとある。寺田泰政氏の「大井川流域方言の概観」（『国語研究』第6号）にも、

オレダッテ ソンナジ ヨ○メ○ールゼシ（俺でもそんな字読めるよ）

というのが見える。

ところで、御前崎近くで私が聴取したものに、

○メーシンダ ジー。

“迷信だ。”

○イッショダ ジー。

“おなじ。”

などがある。（「ジ」は、[dzi] とも [zi] とも聞かれた。）この「ジー」の言いかたは、「ゼ」の言いかたに該当するものか。私が「メーシンダ ジー。」について「迷信だろう。」の意でしょうかとたずねたところ、“メーシンダ（迷信だ）というのだ。”と答え、一座の人々が、“はっきりしている。”と述べた。

長野県下にまた、陳思などの「ゼ」が、かなりよくおこなわれているふうである。

○チガウ [↑]ゼー。

ちがうよ。

は、中央部での一例である。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法（上）」には、「オカツイゾイ。柿が沢山ナッテルゾイナ。」とともに、「ソウスルゼ（さうするよ）」というのがあげられている。

『上伊那方言集』には、「じー（助動）ですよ（敬語）（そーだじー）」の記事が見え、佐伯隆治氏の「信州東筑摩郡方言集」（『方言』第六卷第十一号）にも「ジ」があげられていて、「ますといふことを長上に向つて云ふ敬語」とあり、「学校へ行くジ、行きますジ」の例文が見える。松本市方面には、

○イタ [↑]ジ。

行きますよ。

などの言いかたがあるという。——目上の人へのことばとのことである。「敬語」とあるのが注目される。

本県下に、いま一つ、注意すべき「セ」がある。福沢武一氏は、『信州方言風物誌 第二』で、つぎのように言われる。

僕の子供は二人とも上伊那中部に生れた。(中略)言葉のはしはしに中信言葉が飛びだす。(中略)たとえば、ソーセ(そうですよ)なども、その一つ。アルカヤ(あるのかね)なども同様。

氏は、なお、『信州方言風物誌 第三』で、

こうして質疑応答の中に、北条氏はソーセをしばしば使う。標準語になおすならばソーデスネ。松本平に愛用される言葉遣い。

と言われる。『信州方言読本 語法篇』にも、「セ」があげられていて、

ありゃ [・]せー (あれはさ)

さよー[・]せ (そうですねあ)

などの例がある。これらに見える「セ」は、上来の「ゼ」には無縁のものか。——むしろ、「サ」系のものかとも思われる。

私が、県北の八坂村で聞いたものには、

○シゴトモ シナイダッ セー。

(“しごともしないということ。”)

がある。この「セ」は、どういう「セ」なのだろう。

山梨県下については、かかげるべき資料がない。

八 関東地方の「ゼ」ほか

関東地方にも「ゼ」は見わたされるが、その、おこなわれる頻度は、低いようである。

神奈川県下では、日野資純氏の「方言文法論の実践——相模方言を例として

——」に、

- 「ジェー (ジェン)」(断定) = 「ロクジ[○]ジェ[○]ー (六時だ)」(久里浜[㊤]) 「ヨク[○]テ[○]ン[○]ジェ[○]ン (よく似ているよ)」(衣笠[㊤]) 等。三浦半島地方一帯にある。
(註10) これは「ジャンカ」の弱まり形式であるらしい。(以下略)

との記述を見ることができる。

東京都下では、まず伊豆諸島に、「ジェ」が見られる。大島のことばには、
 ○ヤスマズニ ハヤク イッタラ ヨイ ジェー。

やすまないで早く行ったらいいよ。(ぞんざい)

との言いかたがある。大島一郎氏の「伊豆諸島方言における意志と推量の形」(『日本方言研究会第5回研究発表会 発表論集』昭和42年11月)には、「大島方言の意志の形」, 「イッショニ カフベ^ージェ^ー (一緒に書こうよ)」との言いかたがあがっている。これの「ジェー」も、本題の「ゼ」に属するものであろうか。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f オジサン オバサンガ ナクナッタチュ^{ジェー}

おじいさん、あばあさんが なくなったそうですね。

とあり、また、

m………… アーノー ミシダダ^{ジー}

あわ〔粟〕の 飯だったよ。

ともある。この「ジー」は、「ジェー」に該当するものであろうか。

『東京方言集』には、「それやあ桁が違ふ^ぜ」というのが見えている。今日、都内では、どの程度に「ゼ」が聞かれるのであろう。ことによると、「ゼ」は、さほど品のよい言いかたとはされていないかもしれない。

千葉県下に、

○アメダラ ヤスマダ ゼ。

あす雨ならやすみだよ。

などと「ゼ」がおこなわれており、「～だ ゼ」の習慣も見られる。「ゼ」の「ジェ」もあるか。

埼玉県下の東西に、「ゼ」が見られるようである。やはり、品位の高いものではないらしい。東部で私が聞いた実例の一つに、

○マルモーケノ サンカクソソデ イコー ゼー。

「まる儲けの三角損」でいこうよ。

（「まる儲けの三角損」については、土地の識者が私のカードに、「ヤミ商人の合言葉ではないでしょうか？」と注せられた。）

というのがある。県西部の秩父については、『全国方言資料』第2巻「埼玉県秩父郡両神村」の条の、

fオラー コドモト ヤッテ キタンダゼ

わたしは こどもと やって 来たんですよ、

などをひくことができる。

県下に、「ンゼ」複合形もおこなわれている。

群馬県下にも、「～だ ゼ」などと、諸方に「ゼ」のおこなわれるのが見える。『桐生地方方言訛語調』には、

いゝぜ（句） 前条、前々条の「いゝがあ」「いゝが」と同意。「よいですよ」の意。「ぜ」はまた桐生地方特有の言葉にして使用範囲頗る広し。「加減はどうだ?」「もういゝぜ」の如く使用す。勿論「いゝが」と同様使用の箇所によつては相手に対して敵意を示し「ふんならいゝぜ」（それでしたらよろしうございます、当方にも考へがあります）の如く使用する場合もあり。「いゝが」と同様品なきこと論を待たず、改めたし。

との記述が見える。「品なきこと論を待たず」との考えかたが、注目をひく。

栃木県下にもまた、「ゼ」が見られる。北域で私が聞きとめたものには、

○アノ トージノ ゴセンエント 言ったら デカイ ゼァ。

あの当時の五千円といったら大きいよお。

というのがある。「ゼァ」とあるのが、一種、東北的でもあろうか。

大橋勝男氏教示の宇都宮市域でのものには、

○マーッツグ コゴエ クンダ ゼー。

まっすぐここへ来るんだよ。

○デッケー ウヂダッタ ンセー。

大きいうちだったんですよ。

などがある。ここに「ンセー」とあるのも、「ゼ」関係のものか。

茨城県下では、田口美雄氏の「茨城県方言の考察」に、「ヒドグ 降ツテルゼ」などが見られる。ところで、県北で私が若い男の人から聞いたことば、

○オレモ メー ワルインダ ゼ。

おれも目がわるいんだぜ。

については、土地の人が、「「ゼ」はこのことばではない。」と説明してくれた。

「茨城県方言の考察」には、「ソーセ（「さうさ」よりも丁寧）」「ソーオモーノセ（さう思ふのですよ）」との記述も見える。「ゼ」相当の「セ」ではない「セ」もあるので、私どもは、しばしば、「セ」の受けとりかたに困難をおぼえる。

九 東北地方の「ゼ」ほか

東北地方一帯には、「ゼ」が活発ではない。だいたい、関東地方の状況につづいたものが、本地方にも見られるということか。

福島県下では、主として東部域に、いくらかの「ゼ」が見られがちなのであろうか。野元菊雄氏の「みちのくの巻(2)」(『方言の旅』)での「福島市・会津若

松市」の条には、福島市での女性のこ と ば、「イヤタイシタ大雪ダナイ。道路歩く人ワホントニヒドイヨーダゼ。」というのが見える。

会津弁にも、「ゼ」がありはする。

○オタノミシヤス ゼー。

おたのみしますよ。

は、その一例である。

宮城県下に関しては、『全国方言資料』第1巻「宮城県宮城郡根白石村」の条の、

*m*ナーンニァ ネテランネーゼ イソガスクテヤ

どうして 寝てなんかいられないよ 忙しくてね。

というのを、今、私は、あげることができるばかりである。

山形県下が、ややよく「ゼ」（「ジェ」も）を示して出色である。県下の各地域に、陳思・告知の「ゼ」がおこなわれているようである。

*m*ケサー カリダ カマー モッテキダゼー

けさ 借りた かまを 持って来たよ。

は、『全国方言資料』第7巻の、「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条に見えるものである。

齋藤義七郎氏は、国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』に寄せられた「山形県北村山郡東根町」の条で、

d3e 山形市の女性が用いる。強意ぜに当たる。[honnaeke d3e]（そうでなかったぜ）

dze 庄内で用いる。イロメゼ（いらないだろうよ）

などとしていられる。外村繁氏の作品「東北」（『中央公論』昭和25年5月）には、「ずいこずいこと、切らつたじえ。」などの会話文が見える。

宮良当壮氏の「東北方言と南島方言との比較研究」（『帝国学士院紀事』第三

卷第二号)には、

so:da-jo (然うだよ) nda-zi: [尾花沢]

との文例が見える。「so:da-jo」にあたる「nda-zi:」の「zi:」は、「ゼ」に関係のあるものなのかどうか。

本県下の、「ゼ」に関する複合形の文末詞としては、「ゼ」の上接する二形を、外村繁氏の作品「東北」から引用することができる。

「馬車の仕度、出来あんしたぜや。」

「……。なあ、おてちやん、それでも去年は、供出さ、百八十俵出したぜす。」

「ぜす」とあるのは、「す」が「もし」の「し」にあたるものであろう。「ぜす」などができているところは、いかにも東北的である。

秋田県下に関しては、『秋田方言』の「ぜぁ」(「ぞよ。」)を見ることができる。文例には「山へ行くぜぁ。」があがっている。(平鹿郡)県下に、なにほどこか、またどんな範囲にか、「ゼ」がおこなわれているらしい。——「ぜぁ」の「ぁ」は、「ゼ」を発音するさいの文末訴え音であろう。

渡辺喜恵子氏の「馬瀬川(秋田県能代北)」(『文芸春秋』昭和34年9月)には、女性の、昔話の語りの、

そしたらそれを見ていた姉様も鳥になってしまいあんしたじあえ。それが杜鵑でがんすじい。

とのことばが見える。最後に「じい」とあるのが、「ゼ」に相当しようか。

岩手県下となると、このほうには、陳思・告知の「ゼ」(「ジェ」も)が、全県的におこなわれている。東北地方では、山形県下と岩手県下とが、対蹠的であるか。「ゼ」が、文末訴え音をともなって、「ゼァ」ともなっている。

方言関係の諸文献には、「ヂェ」と受けとられるものも見える。『釜石町方言誌』には、

「ぜ」——「チエ」, 「チエア」, 「ヂエア」

念を押し指定する意を表するもの。この助詞は対話の場合、相手によつて多少の差異が出来る。

面白いぜ——オモシレーヂエア (同等又は下位に) (他略)

との記事が見える。

県北、「岩手県九戸郡種市町中野」(『全国方言資料』第7巻)には、

*m*ババエー エマ キタゼア

ばあさんよ、いま 帰ったよ。

などがある。

私が、盛岡市南方の郡下の例としてとらえているものには、

○ドーカ タ[↑]ム ジェ。

どうかたのみますよ。

などがある。陳思の「ジェ」である。県下、中ほどの東部内で聞いたものには、

○ンダッケ ジェー。

“そういうことであつたねえ。”

というのもある。

『岩手方言』第二輯(方言絵はがき)には、「……窓皆開けた^とんぢえい」というのが見える。「ヂエ」の「ぢえい」か。

同第二輯内には、「増産で頑張つてるんぢえ」というのも見え、「ンヂエ」複合形が認められる。

青森県下では、「南部」地方にも、「ぜ」はあまりおこなわれぬのか。佐藤政五郎氏の「南部方言訛語序説」(『郷土号』第四号 昭和11年4月)には、方言「ど」が「口語」の「ぜ」とされており、「そろ〜来るど」も「そろ〜来るぜ」と「口語訳」されている。ところで、寺井義弘氏の『昭和37年度^と青森県研究資料1 青森県南部方言考』には、「おらほのやつこあ落第したじ」とある。「ジ」文末詞が聞えるのか。——とはいっても、東北発音下でのことである。「ぜ」も、「ジ」と聞

こえるものになりやすいことではある。

津軽に、「ジ」が見いだされるのかどうか。

『青森県方言集』にある「それは岩木山せ。」は、「ソレハ岩木山サ」と言いかえられている。ここの「せ」は、問題外のものであろう。

十 北海道地方について

道内の諸調査物には、問題の「ゼ」が見いだしにくい。

『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

f………… ホゴ カンナクテ トッタゴドモ アルナー トルゴ
 そこは 食べられなくて 取り除いたことも あるね、 取り除
 ドモ アッタゼー
 くことも あったよ。

とある。

十一 おわりに

「ゾイ」>「ゼ」も、所によってはあったかもしれない。しかし、そういう土地であろうとなかろうと、「ゼ」が存立するところには、「ゼ」の、「ゾイ」とは語感を異にするものが見られる。「ゼ」は、多く、中品程度の表現にかかわるものであろうか。(関東と関西とをくらべると、関東方面に、「ゼ」の用法のやや低品位ぎみのものが認められるか。)

「ゾイ」のおこなわれる所に、[oi]連母音の相互同化もおこなわれていて、「ゾイ」から「ゼ」ができたとする。そういう所では、「ゼ」がおこなわれがちで、「ゾイ」は、まれなものになっていよう。「ゾイ」と「ゼ」との両立している地域の「ゼ」は、今、「ゾイ」からはなれて、比較的自由に、これを、ザ行音文末詞の「ゼ」形と考えることができる。

ナ行音文末詞で言うならば、「ナイ」と「ネ」との両存する所については、比較的自由に、——「ナイ」からはなれて、「ネ」の本来的な存立を考えることができる。

「ゼ」に、陳思・告知の用法がいちじるしく、これは、「ゾ」のばあい似

ている。両者、いわゆる濁音の文末詞が、ともに、受けとりやすいザ行音文末詞である。

「ゼ」文末詞の将来性は、どうであろうか。命脈が、よく保たれるのではなからうか。〔e〕母音をふまえた「ゼ」である。訴えの声の大きさの加減が、穏当なのではないか。——「ネ」も、ここに思いあわされる。

しかしながら、濁音詞の効果には、特異なものがある。「ゼ」が、対人表現の訴えに広く活用されるようにはならないであろう。

※ ※ ※ ※ ※

ナ行音文末詞・ヤ行音文末詞に対して、サ行音ザ行音文末詞の、等しく感声的なものがとりたてられるのは、興味ぶかいことである。前者の〔n〕子音・〔j〕子音に対して、後者の〔s〕子音・〔z〕子音（〔d〕破裂音のあるもの）は、別趣である。

しかしながら、〔s〕〔z〕の方向に訴え専用の特定詞が成立したのは、これもまた、自然の理にかなったことであつたように思われる。

サ行音ザ行音文末詞にも、単純な「ス」音のものがなく、また、「ズ」がない。

サ行音ザ行音文末詞とは言うが、濁音詞のザ行音のものは、一種特異である。その訴えかたに別格のもののあることは、上来の記述にほぼ明らかであろう。

このようにして、訴えの文末詞が多彩化されている。自然の風物に造化の妙が言われるが、わが文末詞領野の中にも、まことに造化の妙とも言うべきものが見られる。

第六章 感声的文末詞「ダ」

一 はじめに

ザ行音文末詞のとりあつかいについて考究すべき文末詞に、感声的文末詞「ダ」がある。

ダ行音に、「ダ」以外のものは見いだされない。したがって、今は、ダ行音文末詞の名は、用いることをはばかる。(もっとも、「ゾ」の転じて「ド」となったものを取り、助詞系の文末詞「デ」をここにとってくれば、ダ行音のもの三者をまとめることもできるが、それは、特別のたちばで成しうることである。)

いわゆるダ行音に、「ダ」のほかの感声的なものがないのは、意味のあることではなからうか。(「ゾ」の「ド」となったものが、やはり、感声的であることは言うまでもないけれども、本源が「ゾ」であることは、見うしなうことができない。)よびかけの(文表現冒頭の)「ッダー(ッダ)(ダ)(ダー)」というのがある。主として四国東部域に見いだされ、東予内にも土佐内にもこれが見いだされる。人によびかけようとして〔d〕音を用いようとする時、母音は、いきおい、〔a〕母音のとられたのが自然ではなかったか。このよびかけ音が、また、しぜんに、文表現末尾での訴え(訴えかけ)音になった。(文頭のもものが、また文末に生かされることは、ありがちのことである。「モン、どうどう。」の言いかたから、「どうどう モン。」の言いかたもできた。)

限られた方言域においてはあがあるが、この文末「ダ」音が、方言習慣の中に、一定的な生きかたをしており、「ダ」が、文末要素としての安定性を見せている。これはもはや、感声的文末詞「ダ」と見うるものである。

二 分布と生態

四国東部域と近畿西南部域とに、つまり、この対蹠の両地域に、感声的文末詞「ダ」の存立が見られる。

ここでまた、ただちに、私どもは、一つの疑問をおぼえる。指定断定の助動詞「ダ」「ジャ」のばあいには、近畿四国は「ジャ」をきらって「ヤ」におもむいている。そのような傾向を有する地域に、なぜ「ダ」音の文末詞が存立し得ているのであろう。(指定断定の助動詞も、文末に立ちがちのものである。) ここがまた、文末詞のおもしろいところとも言えよう。こと、文末の特定の訴え要素ともなれば、これは、指定断定の助動詞とは別個別格の要素である。そこには、文末詞の諸形の、きわめて自由な発生があり得たのではないか。「ヤ」助動詞の地域に、「ダ」感声的文末詞がうまれているのを見るにつけても、私どもは、感声的なものの、文末詞への、もっとも自在な定着が、当然のようにおこり得たことを了解することができる。

四国東部域では、徳島県下に、感声的文末詞「ダ」の存立がいちじるしい。県下も南部方面に、これがよく生きているか。

私が、南部山地、平谷を調査したところによるのに、まず、「ダ(ンダ)」が、間投詞になっているのが注目される。文表現冒頭に立ちうる感声的なものは、やがて文末詞としても定着するとともに、文中間投の特定詞にもなっているのが、当然のことかと考えられる。さて、間投詞の「ダ」が認められるのは、つぎのようなばあいである。

○リョーホーカラ マワッタラ、ダー、なにになに センナランケンド、……
…。

両方からまわったら、ダー、何々をしなくちゃならないけれど、……
…。

○ムカシデモ、ンダ、ヒョー イレテ ドンドン オドッテ ナニ スルの
も あるし、……。

むかしでも、ンダ、費用を入れて、どンドン踊って、あれするのもあ

るし、……………。

人は、「ダ」を、“調子ことば”と言っている。中年以上の人に、これがよく聞かれる。

ところで、この地の、「ダ」感声的文末詞としうるものは、老若男女におこなわれている。「ダ」が、文末詞として定着せしめられている証拠は、

○モミ ア^ールン^ージャ ^ーダー。

(このひえの中には)もみがあるんですよ。

などに見ることができよう。——「ジャ」と言いきって、そこまでの表現を「^ーダー」としめくくっている。小男間のことば、

○コノ ツ^ーギ, オマ^ーエヤ ^ーンダ。

このつぎはおまえの番だよ。

○ソーヤ ^ーンダ。

そうだよ。

にも、「ンダ」の文末詞が明らかである。土地の「ダ」文末詞と「ンダ」文末詞とには、表現価上の差異はなさそうである。「ンダ」が出てくるのは、直前の音との関係にもよっているか。直前が「ヤ」であるばあい、また、「カ」文末詞と「ダ」とがむすぶばあい、「ダ」の前に「ン」がおこりがちである。

○ソーヤン カ^ーンダ。

そうじゃないかよ。

は、「カンダ」の一例である。

○ソレワ マ^ーコトニ, ヨ^ーワットル ^ーワダ。

それはほんとに、よわってるよ。(老女→大男)

は、「ワダ」複合形である。

当地で、「ンダ」は、おとなの、ことに男性たちの会話によく出ている。したいものどうしの、こだわりのない会話の席ともなると、だれもがよく「ンダ」を言っている。加えて、若い人たち、子どもたちも、男女ともに、「ダ(ンダ)」を言っているのは、私どもに、この文末詞の、現在も、かなり優勢であ

ることを思わせる。

(平谷の事象については、拙著、『昭和日本語の方言』第2巻の、『四国三要方言 対照記述』＜三弥井書店 昭和49年10月＞のp.171以下で、いくらか述べている。)

徳島県南東部での調査結果から例をひくならば、まず、

○ホー[↑]デ ナイ デ[↑]ダー。

そうではありません？ (初老女→藤原)

がある。「ホー[↑]デ ナイ [↑]デ。」(そうではありません?)との言いかたが、一つ、通用のものであり、かつ、上文の言いかたも、ふつうにおこなわれている。「デ」文末詞に後接する「ダー」は、いかにも、つけそえことばの面目の明らかなものである。他例をあげてみよう。

○マ[↑]ー イ[↑]ー ワ[↑]ダー。マ[↑]ー イチネン[↑]グライ イ[↑]ー ワ[↑]ダー。

まあいいさ。まあ一年ぐらいいいさ。 (青男→母初老女)

○マ[↑]ダ サ[↑]ゲガ アル [↑]ン[↑]ダー。

まだサゲがあるの？ (青男→母初老女)

(「サ[↑]ダ」は、手さげ袋のことであったか。)

などがある。おとなの男女に、「ダ」が聞かれる。

四国東部では、香川県下にも、なにほどかの「ダ」分布が認められる。私自身の、県中部での調査例は、上掲の拙著のp.280にかかげている。その二例は、

○ア[↑]ッチ イ[↑]ケ [↑]ダ[↑]ー。

あっちへ行けよ。

○ア[↑]ッチ イ[↑]キマイ [↑]ダ[↑]ー。

あっちへ行きなさいよ。

である。この地に、間投詞「ダ(ンダ)」も見いだされる。文末詞・間投詞のどちらも、おもには、年長の人に見いだされるもののようである。香川県東部で調査し得たものには、

○コノ テガミ ヨン[↑]デ クレ [↑]ダ[↑]。

この手紙を読んでおくれよ。

○ソナン シーマスナ ダ。

そんなにしなさんなよ。

などがある。『讃岐方言之研究』には、「来い」を言う「コイダ」などが見える。

香川県下での、感声的文末詞「ダ」の存立の状勢は、徳島県下での、現在かなり優勢な「ダ」生態には比すべくもないようである。

四国東部と近畿西南部の和歌山県地方との間に介在する淡路島に、しかもその南域内に、感声的文末詞「ダ」が認められるのは、はなはだ興味ぶかいことである。今は、淡路東南岸の由良での調査結果をかかげるならば、以下のとおりである。

まず、「ダ」間投詞が指摘される。

○ソノ ヒトガ ダー ナニ ヨー。

その人が、ダー、あれですよ。

○イク サキノ ダー、…………。

嫁に行くさきの、ダー、…………。

などと言われている。「ダ」文末詞の受けとられる例は、

○コーペ イトッタ ヌヨダー。

神戸へ行ってたのよ。

○「ナンナラー。」テ ユーノヤ ダナー。ココワ。

「ナンナラ。(何だい?)」って言うんだよねえ。この土地は。(方言表現の説明)

などである。「ヤ」助動詞のあとにくる「ダ」の、文末詞であることは、明らかであろう。この地には、「ツライ モンジャ。」(つらいことだ。)
「ブンカクジャ。」(特別だ。)などと、「ジャ」助動詞もよくおこなわれている。——むしろこれが、ふつうのものが。「ダ」助動詞は存在しない。それでいて、上掲例のように、文末に「ダ」が見られる。文末詞「ダ」である。

“淡路も、南になるほど、徳島とことばが近い。”とは、土地人の言うところである。

つぎには、問題の近畿西南部，和歌山県地方を見よう。『和歌山県方言』には、「アルエダ 居るのにまあ」「アルユダ 居るのにまあ」(東牟婁郡)などの事例が見える。私が、日高郡下で聞き得た例は、

○アタリマイヤ ダー。

あたりまえだよ。

○アタリマイヤ ダヨー。

(“「ヨ」がつくのは、ことばによつての調子だ。”)

○マタ エー 下キモ アラ ダヨー。

またいい時もあろうよ。

○カシンノ コダ イッコモ ナイ ワダー。

菓子なんてちつともないわよ。

などである。もとより、当地方は、「ダ」助動詞のおこなわれる所ではない。上諸例の「ダ」は、「ダ」助動詞ではない「ダ」である。

つぎには、南紀の田辺市奥(西牟婁郡下)で聞き得た事例をあげて見る。

○アッチー イケ ダー。

あっちへ行けよ。

○オマエ チョット ハイッテ コイ ダー。

きみ、ちょっとは行ってこいよ。

○シン下イ ワダー。

つらいよお。

○カワゴシ タベ ヨシダ。

皮のままたべなさいよ。

(「ヨシ」も文末詞である。)

○コッチ コイ ダヨー。

こっちへ来いよ。

○シンドイ ワダヨー。

しんどいわよ。(つらいわよ。)

などがある。

佐藤虎男氏は、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」の中で、三重県下、尾鷲の、

○ニサンチョー イクト ユート エキー デッ ダイ。

二三町行くと駅に出るよ。〈中男による方言訳〉

をとりあげていられる。この「ダイ」は、感声的文末詞「ダ」に関係のあるものだろうかどうか。いったいには、「ダ」文末詞は、和歌山県下に見られるようである。もっとも、三重県南部の南牟婁・北牟婁の二郡は、紀州に属するので、この方面も、問題視すべき地域とされる。私は、南牟婁郡下での調査でも、「チイ ワダ。」(“ないわね。”)などの「ダ」文末詞例を聞いている。

四国・近畿の地方を出て、そのそとに問題事象の在否をたしかめてみよう。

一つに、九州内に、

○トイチャモソ ダイ。(鹿児島県下例)

とりつきましようよ。

○ヤマノ カミサマデッショ ダイ。(長崎県下例)

山の神様でしようよ。

などの言いかたがある。「ダイ」文末詞が、九州西がわに広く認められる。また、『全国方言資料』第9巻の「長崎県南松浦郡新魚目町浦桑」の条には、

fへ サヅカシ オチカラ オトシタデショーダー

さぞかし お力を 落としたことでしょうね。

などがある。「ダー」などとあると、これは、上述の感声的文末詞「ダ」かとも見られようか。しかし、上の「ダー」は、「ダイ」の変形にほかなるまい。さて、その「ダイ」は、九州弁の特色項目「タイ」文末詞からのものと見る考

えかたもあるとおり、感声的文末詞「ダ」とは、本源を異にするものようである。

九州に、おそらく、感声的文末詞「ダ」は存在していないだろう。

二つに、中部地方に、「下— シタ ダ。」(どうした?)などの「ダ」どめの言いかたが、かなりさかんである。この「ダ」は、すでに文末詞であることが明瞭で、今、これが、感声的文末詞「ダ」かともうたがわれなくはない。が、この「ダ」は、おそらく、指定断定助動詞「ダ」にもとづくものであろう。

関東地方にあっても、たとえば神奈川県下で、

○オーイー— ダネー。

多いよね。

などの言いかたが聞かれる。「ダネ」と言われている「ダ」も、指定断定助動詞「ダ」の、もはや、文末詞化したものと見てよかろうか。

東北地方域にも、助動詞「ダ」本源の「ダ」文末詞は見られる。

このようではあるが、純粹の感声的文末詞「ダ」は、広く中部地方以東に、見いだしがたいのではないか。してみると、四国・近畿での、感声的文末詞「ダ」の存立は、——ことにそれが、「ジャ」「ヤ」助動詞域内でのことであるだけに、まことに注目すべきものとされる。

現地では、「ダ」感声的文末詞が、かならずしも劣勢化しようとはしていない。土地の特定の、ものの好みとも言うべきものか。人間の言語生活上の約束には、ふしぎとも見るべきものがある。(——もとより、人は、そのふしぎさの中に、——語音上の安定感をもおぼえつつ、よく安住しているのであろう。)

付 記 「ヒー」 「ヒャー」

南島地方内に、「ヒー」「ヒャー」などの文末詞があるらしい。高橋恵子氏は、沖縄本島内での言いかた、

○マーサ ミ ヒー

おいしいネ。

○ドーシ ウトウチャーシヤ ルークル トゥレーヒャー

自分で落したのは自分で取れヒャー。

などを教示せられた。

この「ヒー」や「ヒャー」は、どういうものなのであろうか。あるいは、感声的とも見られるものかもしれない。——そう見てよいとなったら、これらも感声的文末詞とされる。

参考までのことであるが、『沖縄語辞典』には、

hii◎ (感) ⊖ (母音が鼻音化する。[çiĩĩ]) 目下に呼ばれて応答する語。

ああ。はい。え。 ⊖ (鼻音化しない) 目下に呼ばれてぞんざいに応答する語。ああ。何だ。

hija① (感) 威勢をつける時に発する語。えい。それ。

との記述が見える。感声的文末詞としてよい「ヒー」や「ヒャー」が、認められるのか。

※ ※ ※ ※ ※

本書に上来かかげてきたもののほかには，昭和日本語方言上，感声的文末詞とされるものが，あまり見いだされないのではなかろうか。

第七章 「カ・カイ」の属

第一節 総説

一 「カ・カイ」文末詞

上来の感声系文末詞に接して存立するものに、「カ」がある。(その発展形に「カイ」がある。)[カ]は、準感声的なものを思わせもするが、また、その作用性からして、非感声的とも見られる。「カ」が本来、文末詞であることは明らかであろう。

こういう「カ」(→「カイ」)は、今、感声的なものの次位の段階でとりあつかうのが適當である。

今日の現実では、「カ」と「カイ」とが、よく対応して存在している。二者は同格的とも見えるほどである。これらは、「カ・カイ」の属としてとりあげてよかろう。(——両者の意義・用法がよく関連していて、二者が一体的でもあることは、多く言うまでもない。)

「ゾ」と、その転訛形の「ド」とも、両々あいならぶほどの広勢力のものである。だとしたら、これらに関しても、「ゾ・ド」の属というまとめかたをしてもよかったか。否である。「ゾ」と「ド」とでは、前者から後者への転訛が明らかである。この点を重視するかぎり、「ゾ」と「ド」との対比とりたては、できかねる。「カ」と「カイ」とは、おのおのがそれぞれに転訛をおこしてもおり、「カ」からは「コ」が、「カイ」からは「ケー」ができたりもしている。こういう点からも、「カ」と「カイ」とは対称的とも見ることができる。したがって、この両者は、「カ・カイ」の属としてまとめることができる。

二 原 態

「カ」は、国語史上、古くから存在するもののようである。私どもに可能なかぎり、古くさかのぼっても、「カ」の、本来的な文末詞のすがたが見られる。

「今か咲くらむ。(「今や咲くらむ。」とくらべて見うるもの)」とあったのなどからすれば、「か」助辞に感動表示のはたらきもあったかと察せられるが、文表現末尾に特定のにはたらいた、古典の「カ」は、文献をどのようにさかのぼっても、ほぼ非感声化した「カ」である。

非感声化とはいいいながら、「カ」はあまりにも特定のなものであって、古文獻上でも、その風貌は、感声の文末詞とされるものに近くもある。私は、旧来、この「カ」を、原生単純形文末詞とよんだりしてきた。その感声みとでも言うべきものは、なおいかよいか解釈しうるかもしれないとしておく。

「もうすんだのか？」とたずねる時の言いかたに、方言上、「モー スンダ ンカイ。」というのがある。広島県地方などでは、このような言いかたをするとともに、また、「モー スンダ ンネ。」との言いかたもしている。後者の言いかたにうちかさねて観察しうる前者の言いかたは、「カイ」が、問いとはいいいながら、「問うて納得する」意に用いられている。単純な問いではない「カイ」には、「ネ」とも言いかえられるとおりの、ややちがった情調がある。いわばここに、「カイ」の感動みが感じられなくはない。

「カ」にどのような感動みが認められることがあっても、それは、ナ行音文末詞などのばあいの感動みとは、比較にならないものである。すなわち、文末詞「カ」は、たとえば「ナ」と、おおいに性質を異にする。この点を深く理解するとすれば、「カ」については、ほぼ、非感声化が言えることになる。

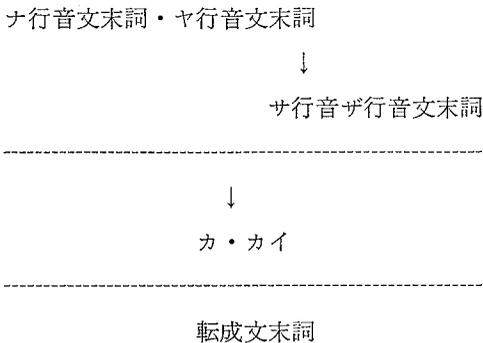
三 今日の段階での「カ・カイ」

「カ・カイ」は、明らかに、問いの語義を示すことを本体としている。

ちなみに、『岩波古語辞典』巻末の「基本助詞解説」の条には、「か（疑問・詠嘆）」についての「表現者自身の内心の疑問を自分自身に投げかける意が原義と思われる。」との説明が見える。

「カ」のはたらきは、「自分で思う気もち」を、ただそれとして全的に吐露するというようなものではない。これゆえ、非感声的ともされる。ここに、文末詞に関しての、言語機能の一進歩があるともすることができようか。

「カ・カイ」の地位を図示してみたい。



「カ」が、次下の転成諸文末詞と大きく境されることは、言うまでもない。さりとて、「カ」は、サ行音ザ行音文末詞に直接するものでもない。サ行音ザ行音文末詞およびナ・ヤ行音文末詞には、原義的なものがなく（意義素をとりたてやすくはなく）、「カ」には、問いの原義がある。（今日は、「カ・カイ」は、疑問指示を本体とするものである。）

この「カ」に関して、時枝誠記氏が、「対人関係を構成する助詞、助動詞」（『国語国文』第二十卷第九号 昭和26年12月）で述べていられるところを引用しておきたい。氏は、「どうだ、欲しいか。」（いま一例は略）のもとで、つぎの記述をしていられる。

右の例の「か」は、勿論、「欲しい」（他略）というような詞について、それに対する疑ひを表現してゐることは事実であるが、同時にそれは、聞手に対して話手が疑問を投げかけて居ることを表現してゐるものであることも、無視してはならないことである。

四 特定詞

考えてみると、「カ（→カイ）」は、ずいぶん特定のなものである。——特定詞である。一個の「カ（→カイ）」が存立するだけであって、類縁形がない。（「ナ」「ノ」「ネ」というようではない。）分化をおこすことなく（あるいは、分化のおこりようもなくか。）ひとり[kɑ]音が疑問表現にはたらいてきたのは、思えば、異とすべきことである。（→正常とすべきことでもあったか。）——[k]音に、ことの奥妙さが認められるようでもある。

もとより、「カ・カイ」は、詞である。「ヤ」などとおなじく詞である。（ちなみに、『岩波古語辞典』には、「ヤ（質問・命令・反語）」についての「最も古くは感動詞として、掛け声に用いられた語である。」との説明が見える。）方言上の「カ」に、文構造内での承接の約束はない。「カ」が、遊離孤立の成態としてはたらいている。

五 「カ」形態の展開

「カ」は古来のものであって、現代のたいせつな文末詞である。これの利用されることは、絶大である。

展開形「カイ」のことは、すでに述べた。——この「カイ」も、まったく一個の成態なので、これに相互同化もよくおこっている。（「ケ[~]」や「キャ[~]」など。）

成態「カイ」に、「カ+エ」からのものもありうるだろうか。ただ、私の郷里方言などでは、「エ」文末詞はなくて、「カイ」がある。

「カ」の「カン」もできている。「カー」からは、「カイ」も「カン」もでき

やすかったであろう。「カン」は、四国地方内などでは、「カ」というのよりはよい言いかたになっている。「カ」「カー」に対する「コ」「コー」は、品位差を示すことが、あまりないであろう。

「カ」「コ」につらなる「キ」もある。

転訛形「ク」は、見いだしがたいのではないか。

六 用法

「カ」形態の展開の結果の各相ごとに、その用法の吟味されるべきは、言うまでもない。「ケ」は、おおよそ、品位が低くなっていようか。「カイ」そのものも、一般には、上品に用いられることが、あまりないだろう。もっとも、北海道などで、「ネ」「ネ」と言われる中で「カイ」と言われるのなどは、品位の低い言いかたではないのだろうと想察される。——「カイ」がずいぶん耳だつのであるが。

「カ」そのものの基本的な用法は、だいたい、つぎのようにまとめてみることができる。

- ① 単純な問いに用いる。(単純問尋 例「どちらへいらっしゃいますカ。」)
- ② 合図・うなずきの意味で、あるいは愛想の表現で、つまりは納得の気もちで「カ」の問いかたをする。(納得問尋 例「やあ、お出かけですか。」)
- ③ 勧誘の意をもって「カ」の問いかたをする。(勧誘問尋 例「いっしょにいらっしゃいませんか。」)
- ④ 反問反駁の意をもって「カ」の問いかたをする。(反問反駁問尋 例「だれもいないじゃないですか。」)
- ⑤ 叱責や否定の意をもって「カ」の問いかたをする。(叱責否定問尋 例「だめじゃないカ。」)

- ⑥ 告知の意をもって「カ」の問いかたをする。(告知問尋 例「熱がある
じゃありません カ。」)
- ⑦ 自得の意をもって「カ」の問いかたをする。(自得問尋 例「さあ、出
かけるとする カ。」)
- ⑧ 詠嘆の意をもって「カ」の問いかたをする。(詠嘆問尋 例「‘おれは河
原の枯れすすぎ’ カ。」)

ありうるばあいを、ややこまかく整頓してみようとした。さらにこまかくと
なれば、諸項目のあいだに新項目を加えることもできるようである。ひるがえ
って、上の八項目の簡素化を考えることも、またできる。

「カイ」に関しても、用法上の諸項目の考えられることは、上のに類したも
のがある。

七 「カ」に関する複合形

「カ」の後接する複合形態は、あまり見られない。ナ行音文末詞の「ナ」や
「ノ」に「カ」が接着して、「ナカ」や「ノカ」ができたりはしていない。(「知
らない ノカ。」などの「ノカ」の「ノ」は、転成の助詞系文末詞である。能
登方面に「ノーケー」というのががあるが、これの「ケー」は「コレ」系の文末
詞かと思われるので、この文末詞も、やはりここにとりたてることはできな
い。) ヤ行音文末詞の「ヤ」や「ヨ」に「カ」が接着して「ヤカ」や「ヨカ」が
できたりも、また、していない。

助詞系の転成文末詞「ノ」あるいは「ン」に「カ」の接着した「ノ(ン)
カ」、おなじく助詞系の転成文末詞「ト」に「カ」の接着した「トカ」(「トカ
イ」なども)が、まずは、「カ」後接の複合形文末詞の代表者であろう。

「カ」が前接した複合形文末詞は、多彩である。疑問・問尋を原義とする
「カ」文末詞のことである。複合形は、このがわにできているのが自然であろ
う。

まず、ナ行音文末詞との関連では、「カナ」「カネ」「カノ」などができており、ヤ行音文末詞との関連では、「カヤ」「カヨ」などができている。「カイ」も、ナ行音文末詞とのむすびつきで、「カйна」「カイン」などとなっている。ヤ行音文末詞とのむすびつきでは、「カイヤ」「カイヨ」などとなっている。——転訛形の話は、言うまでもない。

「カ」がまた、「ワレ」形の文末詞「レ」と結託して、「カレ」文末詞をおこしてもいる。「モシ」系の文末詞とむすびあって、「カシ」などにもなっている。「カ」も「カイ」も、じつによく他文末詞と結合している。

「カ」が、前接するものにせよ後接するものにせよ、複合形については、一般にその緊縮度が考えられることは、もちろんである。このことは、ただに、今の問題にとどまるものではない。

一般的な立論であるが、複合形文末詞は、話し手の意識にたよってばかり認定してよいものではなかろう。かといって、研究者の私意ばかりで複合形を把握しきってよいものでもない。ここには、いわゆるメンタリズムといわゆるメカニズムとの調和をはかることが、要請されている。それにしても、複合形のアクセント相に、ときに問題があったりして、妥当な複合形把握が、しばしば困難である。

第二節 「カ・カイ」の存立と活動

一 南島地方の「カ・カイ」ほか

南島方言下には、問いの「ガ」のおこなわれるのが注目される。それはのちに述べることとし、まずは、「カ」形のもの存立をたずねてみる。

先島の与那国島では、つぎのような「カヤ」がおこなわれているという。

○ツーニャイハムリャヌ ナイヤ アマイアラヌ カヤー。オー。

長浜の苗は余りがないかしら。 (初老男→中男)

これは、高橋俊三氏の、表記して示されたものである。「カヤ」がよくおこなわれているらしい。

不羈庵すなわち宮良当壮氏の「風雪(3)」(『^{月刊}琉球文学』第1巻第3号昭和35年3月)には、

方良老人は簡単に「ン、ワーヤ シム カイ」(左様、お前は下へ行くのか)とやや横柄に答えていた。 <八重山>

との記事が見える。これには、「カイ」が見える。

沖縄本島に関しては、その属島伊江島の方言についての、生塩睦子氏の報告「沖縄伊江島方言の文末表現」(『方言研究叢書』第5巻)に、「カ」「カヤ」の記述を見ることができる。氏は、

自問の意をあらわすもう一つのいい方に、「-カー」,「-カヤ(-)」におわる場合がある。

○キーグルマ マー ヌ ティッコーサン ナタカー。
< 木車は 馬 が ひきこわさ なかったらうか。>

○アレー ジューニ カヤ。
<あれは《あの子は》十二かなあ。>

としていられる。(あげられている四例のうちの前二例を引用した。)なお、「老人層においては『-カー』と『-カヤ(-)』に使いはないが、中年層以下では『-カヤ-』は肯否をたずねる質問法としてふつうに使われている。」と説明していられる。

沖縄本島で「ガ」が「カ」同然に問いに用いられている実例をあげてみる。高橋恵子氏教示の、コザことばでの実例は、

○ウヌ ワラベー マーヌガ。

この子供はどこのか。

などである。氏は、問尋の「カナ」の意の「ガヤ-」ほかも示していられる。大橋勝男氏は、昭和五十年に、新幹線車中で、那覇市の高校女生徒とその姉君

とから那覇ことばを聴取し、その結果を私に教示された。その中から、「ガ」の例をとり出してみる。

○ヌー シチョー ガ。

何してるの？＜普通品位。友だちに。＞

○ナマ ナンジ ガ。

今何時だい？＜友だち、年下に＞

○マーンカイ メンソータ ガ。

どこへいらっしゃったのですか。

「ガヤ」の例は、

○マーンカイ ガヤー。

どこへ行くのかなあ。

である。

以下には、与論島以北の「カ」系のものを見ていく。与論島には「ワーサーアラン カヤー。」（私のではないのかねえ。）などがある。

沖永良部島にも、「カヤ」の言いかたがある。「私のうちへいらしてくださいませんか。」との、目上への言いかたが、

○ワキヤヤチ ッモーチ クリラン カヤー。

などとなっている。「…………… タポユン カヤ。」などとも言われている。「そらかしら？」は、

○ガンディロ カヤ。

である。

徳之島については、今、私は、言うべきものを持たず、奄美大島について、つぎのようなものをあげることができる。

○ヤーチ イモン クリ [i] ンショリョロ カイ。

うちへいらしていただけますでしょうか。

○ナンヤ ダーチ イモリンション カイ。

あなたはどこへいらっしゃるんですか。

「カイ」がよくおこなわれているらしい。単純な「か?」の問いの時にも、「カイ」がよく言われている。「今晚は雨が降るだろうか。」などの「…………… 降るだろうか。」の時も、「フ^リョーラン ^カイ」「…………… フラン ^カイ。」である。ところで、『方言学講座』第四巻に見える寺師忠夫氏の「奄美大島」に関する記述には、「ワガ シロ カイ (私がしようか。」「タッカ スル カヤー (誰がするかね。)」などが見え、「ワガ シロカ (私がしようか。」「タッカ スルカ (誰がするか。)」などが見える。「カイ」と「カ」とがならびおこなわれているのであろう。私が聞き得た「カヤ」例もあげておく。

○ウガシ イッパイ キ [i] リンシヨレ [e] バ アツサヤ アリョーラ
ン ^カヤ。

そんなにたくさん着なさったら暑くはございませんか?

喜界島にも、「カ」が見える。『喜界島方言集』には、「^カ」についての、疑問の助詞。か。であらうかと問ふ語で、自問的にも用ひられる。汝はするか、汝はであるか及び汝はしないか、汝はでないかの形で問ふ場合には用ひないのが普通であり、又動詞過去形の「チ」「ヂ」「ティ」「ディ」形語尾にはナを用ひ^カは用ひない。しかして^カは疑辞、不定称が上に来る場合に用ひる時は、ヨより問ひかける意が弱くなる。

藤原注 △の符号をつけたものは、“その子音 [k] [t] が無気音なる事を示す。”

という説明がある。一つの例を引用しよう。

ウレー イシ ^カ

それは、石、だらうか。「ウレー イシ ^カ ヤー」とすれば、自問の形となる。

二 九州地方の「カ・カイ」ほか

鹿児島県

本県下に、「カ・カイ」のおこなわれることはさかんである。総体には、“疑

問の語”と見られる。

はじめに、「カ」について見よう。もとよりのこと、「問いの用法」が普遍的である。「カ」は、ぞんざいにもていねいにも用いられている。

○ニュッケ ナイゴッ カー。

“暑いのに何の用か。”

これは、普通度の言いかたであろう。

○コン テガンヌ ヨンデ ミヤッタモハン カ。

この手紙を読んでみてくださいませんか。

は、ていねいな言いかたになっている。薩摩南部の、

○モー ネッガ デン モン カー。

もう熱が出ないものだろうか。(もう熱は出はすまい。)

の言いかたは、方言みゆたかなものとされるか。「カ」が、応答・受けひきの言いかたにも役だてられている。反語法をささえるばあいもある。「どうどうしないか。」と言って叱るばあいもある。

さて、薩隅地方には、「カイ」のおこなわれることが、いちだんとさかんのようである。非九州では、「カイ」の用法に「カ」の用法とはちがったものがありがちで、用法上では、両者の、区別されることが多い。しかし、薩隅地方では、「カイ」がしばしば、「カ」同然におこなわれている。この点、「カイ」での、薩隅方言の特色が大である。「カイ」の例を見よう。種子島の一例は、

○オト ーサンナ ドケー イカッタ カーイ。

お父さんはどこへ行かれたかね。

である。『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県枕崎市鹿籠」の条には、

fハイ ナニユ アゲ モソカイ

はい、何をあげましょうか。

というのが見える。私が大隅南部で得た例の一つは、

○オヤ ドンナ ドケー オサイ チャシタロ カイ。

お父さんはどこへいらっしゃったでしょうか？

である。「だろろうか」の「〜ロ カイ」が、「〜ド カイ」ともなっており、この「〜ド カイ」が、よく、薩隅方言を特色づけている。

○アタイガイ オサイチャッタモンド カイ。

わたしのうちへいらしていただきますか。

などは、よく聞かれるものである。

○アメド カイ。

雨だろろうか。

というのでは、「カ」同然の「カイ」が明らかであろう。問いの「カイ」が、上品の表現にもよくおこなわれているのは、注目される。本県出身の井上親雄氏は、「カイ」について、“老幼男女が目下や目上に対して用いる。”と教示された。「カイ」の用法には、応答・受けひきの用法もあり、さそいの用法もあり、自己の意志を種々に表明する用法もあり、いわゆる反語の用法や命令の用法もある。叱るばあい、反駁するばあいなどなど、「カイ」の用いられることが自由である。しかも、この自由さが、広く県下に（島嶼部にも）見わたされる。

わたしが、教へて上げよう。〔オイガ、オシュウカイ。〕（宝島）

は、吉町義雄氏の「吐噶喇諸島方言」（『旅と伝説』第十三卷第四号）に見えるものである。

つぎに、「カイ」の転訛形「ケー（ケ）」を見よう。上村孝二氏は、「鹿児島県下の表現語法覚書」で、

薩隅方言的な疑問の助詞は、ヤとケであろう。共に既述のナよりも丁寧度が薄く、むしろ親しみを表すと言つた方がよい。（中略）ケは、カイの転訛であるから自答にも用いるは勿論で甑島ではキャー・ケーという。

と述べていられる。瀬戸口俊治氏は、

「カイ」がこうした自問的な面をもつものに対し、純粋な質問の形をとる場合に「ケ」或は「ケー」が現われる。

○アゲンジャイヤイ ケ。

“そうでありなさいますか。”

とされる。「ケ」は、一般に、同等以上の人につかわれるようである。井上親雄氏は、北薩の、氏の郷土弁について、“日常最も多く用いられるていねいな言い方である。老幼男女がどんな人に向っても用いる。相手との距りが遠い時は高く、或いは高い調子で長く、近い時は低い音調で用いられる。”と言われる。県下で「ケ」の短呼がふつうであるが、「ケー」も、ときに、しぜんに生起している。甌島の「ケー」の例は、「エイシ ケー。」(江石かい。)などである。山下光秋氏の「鹿児島県鹿児島郡谷山町方言集 下」(『方言誌』第八輯)には、

ヂヤイケー そうなんだよ

——タイケー ——だもの、(例) オモシトナカタイケー (面白くないんだもの)

などの例が見える。ここに、変わった「ケー」がある。

県下に「カ」+「オ」の複合形が見え、薩南では、「ド^カ イッ カオ。」(どこへ行きますか。)などと言われている。この「カオ」が「コー」に転化している。薩南で、

○オマヤ ナイ スイ コー。

あんたは何をしますか。

などとある。この例について、瀬戸口俊治氏は、「カオ」>「コー」を説明せられた。「コー」は、短く「コ」ともある。ただし、

○ソーダ ミヨッカ ^コ。

まあ、きれいだこと。

は、また瀬戸口氏教示の、薩摩半島東南部での「コト」例である。上村孝二氏は、前記論文で、

なお薩摩半島の南端や甌島、口永良部島ではカナという助詞を丁寧な疑問に使う。

と述べていられ、さらに、

やはりカナの行われている右の地方と出水郡、それから大隅の沿岸部ではカオ・コー・コを疑問に使う。

と述べていられる。福里栄三氏は、「大隅方言概観」(『方言』第四卷第五号)で、「アガン トヲ ノマセン コ あなた のの(乳)を飲ませなさいな」などを示していられる。薩隅の「コ」は、「カオ」からのものであろう。他地域の、ことには中国地方以東では、「カオ」からではない——「カ」からの単純変化かと思われる——「コ」が認められる。

※ ※ ※

本県下の、「カ」に関する複合形の文末詞としては、なお、「カ」上接の「カヤ」「カヨ」「カイナ」「カイン」などが指摘される。

「カ」下接のものでは、「トカ」(「トガ」も)が優勢である。——これは、全九州的なものでもあろう。

○チャンナ ドケ イタ トカ。

父さんはどこへ行ったのか。

は、硫黄島での一例である。

○オアンチャッタ トカ。

会いはしなかったのか。

は、大隅高山での一例である。「トカ」が「トカヨ」ともある。

「トカイ」もおこなわれており、「トケ」もある。

○ワッコドマ[↑] ドキ イッ トケ。

おまえたちはどこへ行くのか?

は、大隅東岸での、疑問の「トケ」の一例である。

○カマワ[↑] ドケ ヤッタ トケ。

鎌はどこに置いたのかなあ。(中男→中女)

は、薩摩半島東南部での、瀬戸口氏教示例、よわい質問の「トケ」である。

「トカイ」が「ツカイ」にもなっている。薩摩半島の南辺での一例は、

○オトツッテンナ ドケ イカシタ ツカイ。

お父さんはどこへいらっしゃったのかい？

である。

「ドカイ」がある。

○ヨカ テンキ ゴアン 下カイ。

いい天気ですね。

などと言われている。「ドカイ」は、「ゾカイ」か。それにしても、この「カイ」の用法は、独特である。

宮崎県

「カ」は、問いによく用いられるとともに、推量・おしあて・抗弁・命令・依頼・感嘆などに用いられる。問いの、県中部西奥での一例は、

○トトワ ドケ イカイタ カ。

父ちゃんはどこへ行かれたか。

である。

○オッ トコジャ ネー カ。

“おるどころじゃない。かならずおる。”

は、抗弁というほどではない、つよい応答の一例である。

○ドーイ リッパナ モン カ。

なんときれいなものだろう！

は、同地方での、感嘆の一例である。県中部東での感嘆文の一例は、

○ソーン。下シタ ケビ ムン カ。

うーん。何というけむいものか。 (青男)

である。(橋口巳俊氏教示)「カ」は、県下で、同輩以下に対して、らくな気もちでふつうにつかわれていよう。

東臼杵郡下に、「ドー シタ トカン。」(どうしたのか?)の言いかたがあると、かつて教えられたことがある。『全国方言資料』第6巻の、「宮崎県日南

市飯肥町」の条には、

f ソークワーン

そうですか

というのが見える。「クワーン」は、何だろうか。

県下にまた、「カイ」がよくおこなわれている。

○ナンゴツチャロ ^カイ。

何ごとだろうか？

は、県中部西奥での、問いの「カイ」である。この地方で、「あれは鳩だろうか？」という単純な問いにも、「アラ ハ下ジャロ カイ。」と言われている。

○アシター アメジャロ ^カイ。

あしたは雨だろうか。

は、県中部東での、推想疑問の「カイ」である。応答の「カイ」もあり、さそいの「カイ」もある。「カイ」が「カーイ」ともなっている。「カイ」「カーイ」は、やはり、同等の人などに気がるくつかわれていよう。

「カイ」の転訛形「ケー」「ケ」もおこなわれている。主としては、県西南部域にこれが多かるうか。橋口巴俊氏教示の県中部での一例は、

○エー。ソー ケ。

ええ。そうかい。 (青男問)

である。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県東臼杵郡南方村」の条に見える、

f コレヤ コメオー モー モ ウル ホーガ イーワツツチカリ オマ

「これは 米を 売る 方が いいよ」と言って あな

ヤ チヤンタチノ イヨライタツチャッキャ

た じいさんたちが 言うておられたね。

の「キャ」は、何であらうか。延岡家中弁には、——これは、他からはいちおう無関係としうるかもしれないが、

○サムカ ^ネケー。

さむくはないかい？

のような、「ケー」が認められる。

私はかつて、宮崎市北方の佐土原のことば、

○イ^ータッ コ。

行ったか。

○イ^ータッ コイ。

行ったか。

などを聞いたことがある。「アソビニ イカン コ。」(あそびに行かないか。)というのもあった。

※ ※ ※

本県下の、「カ」に関する複合形の文末詞としては、まず、「トカ」が指摘される。

○ワ^ラ 下^ニ イク ト^カ。

おまえはどこに行くのか。

は、県南部での、「トカ」の一例である。「トカ」に相当する「ノカ」に関して、岩本実氏は、『日向の高千穂方言』で、

文末にくる疑問辞として「ノエ」と「ノカ」とを敬意差をつけて区別しているのも面白い。例えば、アルノエは丁寧で、アルノカはぞんざいな言い方なのである。

と述べていられる。

「トカイ」もおこなわれている。「トカーイ」ともある。「トケ」が県北にあり、「ツケ」が県の南北に見いだされるようである。「ドゲン シタ ッケ。」(どうしたんだ?) などとある。

「ツカ」もある。

○ド^ー シ^ナッタ ツ^カ。

どうなさったんですか。

は、青島近くの一例である。「ツカイ」も認められる。「ツカーイ」ともある。「ツケー」「ツケ」もある。

熊本県

もっともふつうにおこなわれる問いの「カ」は、天草でならば、

○アンター ドケー イキナス カ。

あんたはどこへ行きなされるか。

などとおこなわれている。カ語尾形容詞の言いかたを「カ」文末詞がむすぶと、「おまえは何がいちばん恐ロシカ カ。」のような言いかたになる。「カ」は、了解して、「そうですか。」と受けひくばあいにも用いられ（「ソガンダス カ。」など）、また、反語にも用いられる。

○ドギャン アロー カ。

“どんなにであろうか。遠慮するな。”

は、天草で聞いた一例である。「カ」は、自己の否定の意を表白するのにも用いられ、他に対して命令するのにも用いられる。

○ネラン カー。

ねないか！（早くねろ。「モー オツカデ ネロ。」もうおせいからねる。）

は、命令表現の一例である。

県下に、「カイ」もまた、よくおこなわれている。——県南に、よりよくおこなわれていようか。（薩隅方面との関連が思われる。）

○オーイ ドケ イク カイ。

おおい、どこへ行くかい？

は、鹿児島県近くでの一例である。八代市でも、「オジッテ アスビ イコーカイ。」（おりて遊びに行こうか？ 老女→小女）のような言いかたがなされている。（白石寿文氏教示）「行こうか？」の問いの、「イコーカイ」となっているのが注目される。天草でも、「どこへ行ったのでしょろ カイ。」などと言われている。以上のようにあるが、県下の中部北部にもまた、「カイ」が

よくおこなわれている。熊本市近くの南郊での「カイ」例は、

○オルガエン ヂーサンニ アヤセンダッタ カイ。

うちのじいさんに会いにはしなかったかい？

などである。阿蘇山南麓でのものには、

○アガラン カイ。

“まあ上がらんか？”

がある。「カイ」は、問い以外にもよく用いられており、さそい（諸態がある）・相談・応諾・反駁その他の用法が見られる。『全国方言資料』第6巻の「熊本県上益城郡浜町」の条に見られる、

*m*アアーユー コツチュワ アローカイ マー
あんな ことが あるものか、まあ。

は、言主が、反語的表現をしている。

○パンバ パン カイ。

“菓子を食わんかい。”

は、天草下島西岸での、奨めの言いかたになるものである。「熊本県本渡市佐伊津」（『全国方言資料』第9巻）の、自己の意を言う「カイ」の一例は、

*m*キテミユカイツチュ ゴタル フーナ マ チョーシジャッタガネ
「着てみようか」という ような ふうな まあ ぐあいだったかね。

である。

「カイ」の転訛形も、よくおこなわれている。「ナン キャーイ。」（何かいな。）は、天草での一例である。天草には、「キャー」がさかんである。なお、天草をもふくめて、県南には、「キャ」が聞かれる。「ナンチュ イワシタ キャ。」（何んておっしやったかね。）は、八代市域でのものである。（白石寿文氏教示）「オータ キャー。」（会ったかい？）は、県北でのものである。『全国方言集』に、熊本県天草郡に関しての、「キャ・キャー」の指摘がある。——例は「ドゲンシタツキャ」など。能田太郎氏の『肥後南ノ関方言類集 用言篇』（『方

言と土俗』第四卷第八号)には、

殊に幼者に対する老人語には^キャとも云、(例)熊本さん一緒に来る^キャ
(カイ)。

の記述が見える。「キヤ」と、文字どおり短呼になることの、分布上の委細は、
今、定かではない。

転訛形に、「ケー」「ケ」もある。天草下島には、さかんな「キヤー」に対す
る「ケー」をおこなう所がある。下島東北岸で教示されたところによると、こ
のほうに、

○お煮しめを ナメン ケー。

お煮しめをたべないかい。

などと言う所がある。斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』には、

ケ (カイ kai が, ケ ke になる)

但し八代以北で「キヤ」になる。「キヤ」は品位がなく「ケ」はそんな感
じがしない。鹿児島県でもケになっている。

ソラ何ケ (それは何か) ドゲンシュケ (どうしようか) イタチクルット
ケ (行って呉れるのか)

との記事が見える。

県下に、「カ」の「カン」形も見いだされる。早く、『肥後方言集』に、「ク
ワンカン 食はないか」というのが見えている。「カン」は、天草ほかの県
南に見いだされがちのものか。

○ヤスマデン ハヨ イカン カン。

やすまないで早く行かないか。(“うながす気もちがつよい。”)

(○フツーフ ショクニンヨリカン。
ふつうの職人よりか！)

は、天草での例である。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の
条には、

fン ユーカラ アブルカ メシカラ クーカン

ええ、湯から(先に) 浴びますか ご飯から(先に) 食べますか。
とある。上掲の斎藤氏の書には、「カン(カにンがつく) 目下に 漁村部落
イカンカン(行かぬか) トランカン(取らぬか)」とある。

本県下に、「コ」形が見られる。『全国方言集』には、「イッタコ 行きました
た 下益城郡」「イカンコウ 行かないか 麻本飽託郡」などが見える。『熊本
県方言音韻語法』にも『熊本方言の研究』にも、「コー」の指摘がある。私が
天草下島南部で聞いた一例は、

○アガラ^ン コー。

上がらんかい。

である。(相手のこの言に答えての土地っ子青男の返事は、「ちっと 上ろう
カイ。」であった。) さきの能田氏の「肥^後、^南方言会話誌(二) (『方言と土俗』第
三卷第二号) には、

「居るかう(又は、居^ッたかう) 何しよるかう」

とのあいさつことばが出ており、「かう」文末詞が見える。『熊本方言の研究』
にも、「カウ(文末助詞)」がある。「カウ」は「コウ」に近いものか。——(「コ
ー」は、なるほど、「カイ」に近い「カウ」から転化したものかもしれない。)

※ ※ ※

本県下の、「カ・カイ」に関する複合形の文末詞には、「トカ」「ツカ」「ツッカ」
も・「トカイ」「ツカイ」「ツカイ」「トキヤー」「トキヤ」「ツキヤー」「ツキ
ヤー」「ツケー」「ツケ」も)の諸相が見られる。なお、「トカン」「ツカン」
「ツカン」も)もある。複合形の成立に、諸相のきれいな分化が見られる。一・
二の例をあげよう。

○チ^ン シニ キタ^ッ ッカ。

何をしに来たのか。

は、天草での「ツッカ」の一例である。——とはいいいながら、「ト」の変貌の
「ッ」は、発音上、上の「タ」に副属して、私どもは、現実には、「ツッカ」形を
取得しかねる。

○モシ^ーモー。ナンジゴロ クッ ト^ーキヤー。

もしもし。いく時ごろに来るのかね。 (男性 電話)

は、天草下島西岸での「トキヤー」の一例である。

長崎県

単純な問尋・疑問の「カ」がよくおこなわれていることは、言うまでもない。例は、まず長崎市のだと、

○ソ^ン カエルバ ビッ^ージャガシユッ^ー カー。

その蛙をおしつぶすことができるか。

などがある。佐世保市西海橋畔で聞いた一例は、

○ド^ーガイン ヒテ ツナ^ーガスヤロ^ー カ。

どんなにしてつなげるのだらうか。(架橋の最後のつなぎについて言ったことば) (中男)

である。『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条に見える一例は、

mオー アガ キタ^ーチャン ドヤンバカ³⁾

ああ あなたが 来たんだね。何しに来たか。

3) 「どういうぐあい」の意。

である。五島列島中部での一例は、

○ナ^ージマン^ー モン^ー カー。

奈留島の者か?

である。

五島福江島で聞いたことであるが、「ソ^ー カ。」(そうか。)は単純に聞くものであり、「ソ^ー カナー (ネー)」は慎重に聞くものであるという。

林田明氏の、長崎市方言の文末助詞についての教示によるのに、“よく聞かれる男ことばに「ヤッ カ」がある。”という。

○オイガ ソイバ ヤッタヤッ カ。

俺がそれをやったじゃないか。 (青男間)

などがその例である。

○ソゲン シェンチャ ヨカヤッ カ。

そんなにしなくてもよいじゃないか。 (小男→青男)

というもある。

県下に、命令の意となる「カ」、さそいの「カ」、否定の気もちをあらわす「カ」もよくおこなわれている。

「カイ」のおこなわれることがまたさかんである。問尋・疑問の「カイ」が、南北によくおこなわれている。『長崎方言集覧』の著者は、「カイ」を、“現今寧ろ卑語となつてゐる。”としていられる。ところで、林田氏の教示には、

○ソギャーン シュー カイ。

そんなにしようかね。 (中男間)

○ゴヒャクエン、カワランヤロ カイ。

五百円札がかかわらないだろうか。 (青男間)

などの例もある。「カイ」は通常品位のことばともされるのだろうか。愛宕八郎康隆氏は、「カイ」が長崎市で“いちじるしく劣勢”であると言われる。

私が以前に平戸で聞き得た、問いの「カイ」には、

○オトツァンナ ドチラ イラッシャッタロー カイ。

お父さんはどちらへいらっしゃったですか。

○キテ イタダカリヤッショ カイ。

来てくださいますか。

○ウチノ オヂサンニ アワヤ [wea] シェンジャッタロ カイ。

うちのおじさんに会いはしなかったかね。

などの実例がある。「カイ」は自由に、よい言いかたにも用いられている。——古来の九州の「カイ」の用法であろうか。西彼杵半島北部での一例は、

○イツゴロ キタ モンデッショ カイ。

いつごろ来たものでしょうか。

である。当地方で「〜デッショ カイ」は、かなりていねいな言いかたである。(「これでよかるうか?」の意で「コリ³⁾デ ヨカ³⁾ロ カイ。」などと言われたりもしている。) 通常品位あるいは低品位の「カイ」の表現も、もとより広く見わたされることである。対馬での、通常品位の言いかたの一例は、

○コンバンワ ユキガ フロー カイ。

今晚は雪が降るだろうか。

である。『嶋原半嶋方言の研究』には、「こり ば おれー くれんかい (これを已に呉れないか)」などの例が見える。『肥前千々石町方言誌』には、「ソリャドケーガスカイ、(それはどこにありますか、)」などの例も見える。五島列島で私が聞き得たものには、

○コンヤヤ ユッノ フッジャロ カイ。

今夜は雪が降るだろうか。

○ママー クワソ³⁾ カイ。

めしを食わないか。

などがある。

『全国方言資料』第6巻の「長崎県北松浦郡中野村」の条には、「カイ」相当の「クワイ」が見える。

mアイ イクラジャロク³⁾クワイ

はい、いくらだろうかね。 3) 「クッ」は、「カ」が直前の「ロ」の母音に影響されたものか。

とある。

「カイ」の用法に種別のあることは、「カ」のばあい同様である。肯定的な気もちの「カイ」、さそいの「カイ」、命令気分の「カイ」などが注目される。

「カイ」には、転訛形「キヤー」ほかも見られる。

○ニッポンバレ キヤー。

日本晴かい?

は、西彼杵半島での一例である。

○コリ^ャ ナン^フ ザマ^キ キャー。

これはなんのざまだ（ざまかい）？

は、五島列島での一例である。五島内に、「キャー」「キャ」は、いちじるしいものがあるか。「キャーことば」などというのも聞かれる。島原半島方面にも、「キャー」「キャ」がよくおこなわれている。県下の南北で、「キャ」の短呼も、かなりおこなわれているらしい。「キャー」「キャ」となったものは、良品位のものとはされていまい。

「カイ」の「ケー」「ケ」となったものもある。老岐島では、「ウナー ウシヒーチ ドケ イタッ ケー。」（おまえは牛をひいてどこへ行ったか。）などの言いかたがされているという。——「イタッ ケー」は、「イタ トケー」からのものであろう。長崎市周辺での言いかたには、

○ナンジゴロ カイェランバテ イヨータ ケ。

何時ごろ帰らなくてはと言っていたかね。 （中女→老女）

というのがあつた。（長崎大学学生教示）

本県下に、「カ」相当の「カン」もおこなわれている。山本靖民氏の『島原半島方言集』には、

ワラ ナンバ シュットカン あなたは何をするのですか。 湯江村
（普通）

などの例が見える。島原半島方面には、「カン」がさかんなようである。『長崎方言集覧』には、

モー、ゴハンバ、タイテモ、ヨカジャンカン。 もう御飯をたいてもよいではないか。

などの例が見える。——なお、

ジャンカンと云へば、「ではないか。あなた」を意味するのである。

との説明も出ている。私が西彼杵半島で聞き得た例をひくならば、

○メシバ クァ^シェン^ン カン。

めしを食わせないか。

などがある。(この言いかたは「中の言いかた」であり、「メシバ クッセン ナー。」は「下の言いかた」であるという。ちなみに、「上の言いかた」は、「オメシバ クッシン サー。」であるとされた。) 五島列島で聞き得た一例は、

○ソケ スワレバ ヨカッジャ カン。

“そこへすわれればいいじゃないか。”

である。

※ ※ ※

本県下の、「カ・カイ」に関する複合形文末詞には、「トカ」(「ツカ」も)・「トカイ」(「トキヤ」(「ツキヤ」)も)・「トカン」(「ツカン」(「チカン」)も)などが見られる。

○トツツァ ドケ イタッ カー。

父さんはどこへ行ったかね。

は、五島での「ツカ」の一例である。

○イタッ キヤ。

行ったかい？

は、おなじく五島での「ツキヤ」の一例である。

○オマヤー ドケー イク トカン。

あんたはどこへ行くの？

○ドガン ヒタッ カン。

どんなにしたかね。

は、西彼杵半島での「トカン」(「ツカン」)の例である。山本靖民氏の『島原半島方言集』には、「モチキタチカン(持つて来たのかね) 大正村 湯江村」というのなどが見える。『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条に見える、

fナノ タメシテー ソン オンゴダッ ドダッ スットチカ

なんの ために おがんだり どうしたり するのでしょうか。

の「スットチカ」での「トチカ」は、どういうものであろうか。(「トチカ」が文末詞になってはいよう。)

「ノカ」「テカ」や「ノカイ」「ンカイ」「モンカイ」もおこなわれているか。

佐賀県

「カ」の諸用法が県下一般に見られることは、前諸県のばあいと同様である。「……………する カ。」は「スッ カ」となる。

「カイ」もまた、県下によくおこなわれている。県南での一例は、

○ウジニ クラ^ニシエ^ニタ カイ。

牛に食わせたかい。(問い)

である。唐津城外ことばを調査した時は、“目下へのことばづかい「ア^ニソ^ニカイ。」(ああそうかい。)”などが聞かれた。県下で、「カ」に対する「カイ」を、“どちらかといえば、ていねいな言いかた”と見るむきもある。まずは中等度の品位になる「カイ」の言いかたが、よくおこなわれているのではなからうか。「カーイ」の形も見られる。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

fイッサ^ニキヤ^ニ ドンクリヤ^ニ スルカーイ

いさきは どのくらい しますか。

とある。岡野信子氏は、唐津市の神集島の方言を調査されて、「カイ」につき、“「カ」よりもしたしみあるふんいき”と言われる。

「カイ」からの転訛形「キヤ^ニ」もまた、よくおこなわれている。どちらかといえば、県東部域にこれがよりつよいのか。中部域にも、「キヤ^ニ」が聞かれる。

○ナン ショ^ニツ キヤ^ニ。

何をしているか。

は、佐賀市弁での一例である。

「キヤ^ニ」の異形「キャン」もあるのが注目される。県東方での一例は、

○ホンニ コノゴ^ニロノ オナガ^ニー ナンチュ^ニー カッコ^ニーヤイ キャン。

“ほんとうに、このごろの女は、なんというかこうだろうかのう。”である。——おもに東方に認められるものようである。

「ケー」の訛形もある。県東部出身の米倉利昭氏は言われる。“「「キャー」と「「ケー」と二語とも今は混用されているが、私たちの子どものころは「「ケー」のほうが優勢であった。”と。「「ケー」は、唐津地方にも優勢か。唐津市の城内城外では、「「ケー」がよく聞かれる。

○スマンバツテン コン テガソバ イッチョ ヨーヂ クレン ケー。

すまないけど、この手紙をひとつ読んでくれないかね。

は、唐津市城外ことばでの一例である。

○ハヤク ゴハン タベヨー カ。マーダ ケ。

早くごはんをたべようよ。まだね？

は、城内ことばでの一例である。いわゆる城内弁の人たちが、「「ケ」をよくつかう。”と言っている。“唐津ことばは「「ケ」をつける。”と言う人もあった。唐津市城内弁のばあい、「「ケ」は、「そんな表現にも出ており、ややていねいな表現にも出ている。「「ソソナ シテン ケー。」は、“「そんなにして（みんかい？）ごらん。”である。

「「カイ」に対する「「カン」が、県下の広くでよく聞かれる。県南西辺の嬉野町について調査した一ノ瀬和子氏によれば、「「カン」は、男ことばとされているという。男の人たちがつかっている「「カン」は、おそらく「「カンタ（カ+アント）」の「「タ」略の「「カン」ではなかろう。「「カイ」に対応する「「カン」、「「カ」の変転形「「カン」であろう。県南部に、「「カン」が「「カイ」とともによくおこなわれている。水上田鶴子氏は、筑後河口あたりの方言を調査して、「「カン」や「「バン」などをとりあげ、“「あられずり・粗野の「「カン」”としていられる。氏教示の「「カン」の一例は、

○ジソベニ コエノ セン オモイヨッタラ、フレー ヒヤートッタ カン。

殊勝にも声がしないと思っていたら、風呂にはいついたのかい。

（中女→中男）

である。ところで、武雄弁の「ウチー オイゴザー カン。」など、「カン」が「〜ござる」ことばにつれそっている。『佐賀県方言語典一斑』にも、「ヨミ マッスンゴザアカン（ヨミマスカ）」などの言いかたが見える。この書には、

「カン」は疑問の「カ」に「ナ」を添へたものらしいが、「カ」と同様に用ひらるゝ。併し幾分か調子を柔かにする様にある。

との説明が見える。唐津地域には、「カン」がないのか。県南には「カーン」もあるらしい。

ここで、米倉利昭氏の教示を引用しておく。「「カイ」は普通語「かい」と同じく、「カー」「カン」は「か」の延音と思う。」

「カン」の「かの」起源は、考えなくてもよいのではないか。

本県下にも「コー」の形が見られて、興味が深い。どちらかといえば、これは、東部域に見られがちなのであろうか。佐賀市域での例は、

○アスバンデ ベンキョー セン コー。

あそばないで勉強しないか！

○ナン ショッ コー。

何をしているか。

などである。（“唐津弁なら「ケー」”であるという。）『佐賀県方言辞典』には、

こーう〔助〕 カ。（疑辞）「行カンこーう」

とある。『佐賀県方言語典一斑』には、「カーウ（kō）」とあり、「あれも ヒトカーウ。」などの例が見える。

カーウはカンの訛らしい。「カン」と同じ意に用ひらるゝが、多くは東部地方に通用するものにて幾分か下品にして荒い様な口気を含みてゐるとの説明も見える。ともあれ、「カ」に通じる「コー」のおこなわれているのがたしかであろう。さきの水上氏によるのに、筑後河口方面には、

○コン コーン。

来んかい。（ややぞんざいな言いかた）（青男間）

なども聞かれるという。

※ ※ ※

本県下の、「カ」に関する複合形の文末詞には、「トカ」「ツカ」「ツッカ」も
があり、「トカイ」「トキヤー」「ツカイ」「ツキヤー」も）があり、「トケー」
（「ツケー」も）があり、「ッコー」がある。

○アサン ドガイ ショーッ コー。

あんたはどんなにしてるのね。（したい人に言う。）

は、佐賀市弁での「ッコー」の一例である。

ほかに、「ノカイ」「モンカ」などもある。

福岡県

問尋・疑問の「カ」はもちろん、肯定問尋・さそい問尋・命令表現その他の
「カ」が、全県下によくおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の「福岡県
福岡市博多」の条に見える、

m ジューゴロククライジャッツローカ

15, 6歳ぐらいだったろうか、

は、疑問をあらわしたものである。『福岡県遠賀郡中間町附近方言集』には、

	知つとるやか	
やか	（	食べるやか
		（だらうか）
	いゝやか	
	知るやか	
やか	（	食べるやか
		（ものですか）
	走るやか	

などが見える。筑前糸島半島で私が聞いた命令表現の例は、

○ゴーゴト セン カー。

早くしないか。

○ガマト セン カー。

“精出してやれ。”

などである。

「カイ」もまた、県下によくおこなわれている。どちらかといえば、筑後に、「カイ」がより安定的であろうか。——九州南部このかたの、連続した「カイ」の存立が思われる。

○トミチャー^ン オル カイ。

トミちゃん、いるかね。 (母→娘)

は、筑後南部での一例である。(トミちゃんの答えは、「ナーイ。」であった。) 筑前にも「カイ」がよく見られ、つづく豊前西部にも「カイ」が見られる。

つぎに、「カイ」の転訛形「キャ」が指摘される。筑後にも筑前にも「キャ」がある。筑前での、

○ドヤンスル [↑]キャ。

どうしますか？

など、総じて短呼ぎみの「キャ」が聞かれて、注目される。豊前西部の田川郡に関しては、太田省三氏の『『ぶうきゃ』と『来よんなる』』(『言語生活』第五十四号)を見ることができる。

田川郡特有の方言の中で、特に直方市の人の耳に響くのは、「キャ」という言葉である。「風で花が皆散っちゃるとキャ。」(皆散ったのだよ)と、こん風に言うと、彼等は、「キャ」「キャ」と言葉尻をとりはじめる。

とある。氏の説明には、なお、

この「キャ」に当る語が直方では、「ヤガ」である。「彼奴はウソばかり言うとかやが。(うそばかり言うんだよ。)(中略)「ヤガ」も田川でも使われないことはないが、主として女だけが使い、男は「キャ」を使う。

ともある。等しく「キャ」と発音されているものではあるが、この「キャ」は、どういふものであろう。

「カイ」の「ケ」も見いだされる。——筑後に「そりゃ なん ケ。」などとある。(「ケー」ともあるか。) 筑前にも「ケー」が見いだされる。

「カン」が筑後にさかんのようにある。大牟田弁などでは、「カン」がよく聞かれる。——人は、「ドコイ イク カン。」(どこへ行くかね。)
「ドコイ イク トカン。」(どこへ行くのね。)について、“こんなのが大牟田弁じゃないかと思う。”と言う。大牟田弁で、「ソ— カン。」は、「そうですか。」の応答ことばであり、“男はふつうこれをつかう。”とのことである。おなじく大牟田弁での、

○ハヨ オキラ^ン カン。

は、「早く起きろ。」の命令表現になるものである。大牟田弁では、「ヨカ タン。」などともあり、「カン」などの尾文末詞が榮えているらしい。柳川ことばでは、「ソ—デス カン。」(そうですか。)などの言いかたが、“目下に”のものであるという。(“目上には「カンモ」”であるという。——「カンモ」の「モ」は、「モン」の「モ」であろう。)加来敬一氏の「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号)によるのに、

「カン」——豊前区京都、筑後区柳川

とある。「カ」からの発展形「カン」が、とりわけ筑後方面によくおこなわれているのは、なぜであろう。——「カンモ」の流行も、ここに、あわせ考えられる。(「カンモ」の「モ」略で「カン」が成立したということなど、あるかどうか。)筑後内に、「カーン」の長呼の言いかたも見えている。「ドガン ショ ヌッ ^{カーン}。」(“どうしているかい。”)などと言われている。

※ ※ ※

本県下の、「カ・カイ」に関する複合形の文末詞には、「ノカ」「ソカ」「トカ」「ツカ」「トケ」「ツケ」「トカン」などがある。「モンカイ」もある。

○ゴハン^ナ タベン トカ。

ごはんはたべないのか? (中男→子幼男)

は、筑後での「トカ」の一例である。

大分県

「カ」の流行は、本県下にあっても、だいたい福岡県のに等しいものが見られる。だいたい、気をはらない言いかたの中で「カ」の用いられることが多かろう。「行く カー？」と言って「行きますか。」の意であることなどは、ごくすくなかろう。県南部の一例をあげる。

○ムカシンシガ キリョッタチャ ネー カ。アゲナン。

“昔の人が着ていたじゃないの。あんなの。” (中女→老女)

県東南隅での、小野米一氏の指摘される、

○ダヤ、オマヤー ナニ カーナ。

まあ、あなたはあれかね。

では、「カーナ」の形が注目される。

県下に「カイ」もおこなわれている。——問いの「カイ」が多かろう。県西奥の日田郡には、「カイ」のおこなわれることがいちじるしいのか。そのの、

○ドコン シェンシェンジョー カイ。

どこの先生だろうか。 (青女)

は、単純な問いの「カイ」の一例である。催促する意味で「クレン カイ。」などとも言われている。県下に「カエ」もおこなわれており、これと「カイ」とがまぎらわしくもある。国東半島では、「ソー カイ。」などを聞いたが、土地の識者には、“「カエ」だ。”と言う人があった。(「スイチョル カエ。」は“「すいていますか。」で、いいことば”であるとのことであった。) 豊前中津市での「カイ」例は、

○ウチー オッタ カイ。

うちにいたかい？

である。

東南部に、

○フ^リャ ^ドー^{ジャ}ッタ ^ンケー。

おまえはどうだったのかい。 (初老女)

などの言いかたも聞かれるけれども、総体には、県下に「ケー」や「キャー」などが聞かれにくいありさまである。「カン」もない。「コー」もない。

※ ※ ※

複合形のおこなわれることも簡素である。「ノカ」「ンカ」「モンカ」などがある。

三 中国地方の「カ・カイ」ほか

本地方にも、もとよりと言いうべく、「カ」文末詞がよくおこなわれている。その用法も、単純問尋をはじめとして、応答・強否定・反問・命令・叱責など、多岐にわたっている。

「そうか。」(それですか。)と応答する料の「ソ^レ カ。」は、とくに山口県下に見られるものである。——長門地方にこれがよくおこなわれていようか。男女にこの言いかたがおこなわれている。(女性が「ソ^レ カ。」と言うのは、「そうか。」と気がるに応答するばあいである。)鳥根県下の、石見東北部で聞き得ている、

○フ^ン、ソ^ガー カ。

ふうん、そうか。 (初老男)

の言いかたも、——本県下の広くにこの種のものが聞かれるであろうが——中国地方での、一つの特異なものとされよう。

岡山県東部ともなると、敬態ぬきの表現法を問いの「カ」でむすんだものが(「何々 カ?」といったような言いかたが)、わるい言いかたではなく、目上の人にも言うものになってもいようか。これは、近畿地方での「カ」の用法との関連を思わせるものである。

中国地方に、「カイ」のおこなわれることもまたさかんである。ところで、

本地方には、「カイ」の言いかたが上品のものになることは、まずない。中等度以下の表現性のものであるのがつねである。九州地方内で、「カイ」の用法に注目すべきものがあつたのとは異なる。さて、「カイ」にも、問いや反駁、うたがいや命令、叱責や応答、その他の諸用法が見られる。

山口県下には、「カエ」文末詞もよくおこなわれている。「カイ」と「カエ」との隣接が見られる。

広島県下は、比較的よく「カイ」を見せる所である。

○カーカー、マタ チョー ヤカセル カイ。

やれやれ、また手をやかせるのかなあ！

は、安芸北部での、一種詠嘆の「カイ」である。備後島嶼での「カイ」例、

○ソリャー アンタ ハナシガ アル カイ。

そりゃあんた、話しにならないさ。

は、反語法の言いかたになっている。

岡山県下の備中備前は、[ai] 連母音相互同化のいちじるしい所である。しかし、その内海島嶼部で、「コン カイ。」(来ないか。命令)「フンマ カイ。」(ほんとうかい。“そうかい。”)などと言われており、「カイ」の「チャー」は、さほど聞かれないようである。

島根県出雲にあっても、たとえば、

○チンゾ ニャ カイ。

何かないかい？

などと言われており、「ナイ」は「ニャ」とあっても「カイ」はそのままである。

西谷登七郎氏は、「郷土方言小識（島根県那賀郡下府村）」(『方言』第二卷第八号)で、

小早う去なうかい。…(決意)

西瓜が食いたいかい。…(希望)

あの人は早うかけるかい。…(感嘆)

との指摘をされている。これに類した「カイ」用法は、中国地方内に、広く

見ることができよう。

島根県下にも鳥取県下にも、「カイ」に隣る「カエ」が見られる。島根半島北岸での「カエ」「カイ」例は、

○ソガ^ーカエ^ー。(ソギヤ^ーカエ^ー。)

そうかい。

○コガ^ーカイ。

こうかい。

である。

「カイ」の「キャ^ー」となったものは、「コレギリ^ーキャ^ー。」(これだけかい?)など、山口県下に比較的多く見られるようである。ついでは、広島県下で、これがかかなり聞かれるようである。——備後南部地方では(島嶼部とも)、

○シル^ーキャ^ー。

知るかい!(知らない!)

など、「キャ^ー」が比較的よく聞かれる。福山弁の、

○シラ^{ンス}キャ^ー。

は、“知らないの!”“知るものかい。”であるという。一備後人の教示に、

「イラン(いら^{ない})キャ^ー。」は目上にも言うが、「イラン^{カー}。」

は目上には言わぬ。

というのがある。

出雲地方や鳥取県下にも、いくらか「キャ^ー」がおこなわれているか。『鳥取県方言辞典 後編』には、「ソー^きャ^ー・ソー^けー」が見える。私が、鳥取県因幡中部で聞いたものは、

○クワ^{トリ}キャ^ーイ。

桑とりかい?

などである。

「カイ」の「ケー」は、中国地方では、おもに山口県下に認められるもののようである。かつて私は、長門北部で、

○ホント ケー。

ほんとかい？

○ソー ケー。

“そうですか。”

などの言いかたを教示された。周防にも、比較的よく「ケー」がおこなわれているか。東部では、「今、いく時ですか。」が、

○イマ ナンジデス ケー。

と言われている。

広島県下にも、「ケー」がなくはない。

○ドー シタ ンケー。

どうしたのかい？

など、島嶼域に、比較的これがよく見いだされるか。

岡山県下では、私は、北部の作州西部で、

○ミエタ ケー。

見えたかい？（炭の検査をする人が）

などを聞き得ている。

「カ」の変相「カン」に関しては、中国地方に、言うべきことがほとんどない。ただ、山口県下で、

○アー ソレ カーン。

ああ、そうか。

などとも言われていようか。私の知友は、昭和三十五年に、高等学校女生徒間でこの言いかたがよくなされている、と教えてくれた。

私がかつて出雲西岸地域で聞いたものには、

○ドギャ シェー ダーカン。

どうしようかしら。(どうしたらよいかなあ。)

○イー ダンカン。

いいかしら？

などというのがある。自分で何かを思うばあいに限って、「カン」の言いかたがなされるようであった。

「コ」関係の言いかたは、中国地方では、まず見られないようである。

※ ※ ※

中国地方での、「カ・カイ」に関する複合形文末詞のおこなわれかたは、さほど多様ではない。

ところで、山口県下には、「ノカ」「ンカ」「ソ(ホ)カ」「ンカイ」「ンキヤー」「ンケー」「ソキヤー」などが見られる。——「ソ(ホ)カ」は「ノカ」に相当するものである。「ソキヤー」も「ノカイ」に該当する。

○ソラン ソキヤー。

知らないのか。

は、山口県下での「ソキヤー」の一例である。

広島県下には、「ノカ」に対する「ノンカ」もあり、「ノカイ」に対する「ノンカイ」もある。

島根県下・鳥取県下の複合形では、「ダカイ」が注目される。

○ホチ ドギヤーン ナー ダカイ。

そんならどんなになるのだ？

は、島根半島北岸での一例である。「ダカイ」に対する「ダーカン」も見られることは、前記のとおりである。

なお、私は、出雲西岸地域で、

○松江へ ウツラッシャッタ ツカイ。

松江へおうつりになったって？

というの聞きとめている。「ツカイ」の「ツ」は、「と言う」に相当するもの

か。

四 四国地方の「カ・カイ」ほか

「カ」の諸用法が四国に見られる。

愛媛県下では、命令の「ヤメン カー。」(やめないか。)、叱責の「ソコニ アルジャ ナイ カ。」(そこにあるじゃないか。)などの特色用法が目される。「カ」の言いかたが、かなりていねいなもの言いにもなっている。中予例の、

○ナガイ コト トマルン ジャロー カ。

長いこととまるんでしょうか。(中女→中男)

など、本文のことばづかいに敬語法めいたものはないけれども、「カ」どめは、かなりよい表現をかもしている。

○オモド[↑]リタ カ。

お帰りなさいましたか。(お帰りなさい。)

などという、松山市方面でのあいさつことば(よそから帰ってきた人をむかえての慰労気分のあいさつ)には、「オモド[↑]リタ」の敬語法があって、その言いかたを「カ」が受けている。当然、この全体は、よい言いかたである。

高知県下でも、足摺岬近くで聞かれた幼女のことば、

○カー チャーン。ナニ シヨル カー。

母ちゃん。何してるの?

は、わるくはない「カ」を示すものであろう。一般的な、敬卑無記の問いの「カ」の、県下に広くよくおこなわれていることは、言うまでもない。「何々しようか(しましようか)」にあたる「〜ロ カ」か、「何々だろうか(でしようか)」にあたる「〜ロ カ」かは、県下によく見られる。

○スミマ[↑]セン ケンド、コレオ ドーズ ミテ ツカサイマ[↑]セン カ。

すみませんけど、これをどうぞ見てくださいますか。

は、県東部での一例であり、同地で、

○ゴハン タペロ カ。

ごはんたべようか。

と言うのは、自分がひとりきめてたべるばあいである。「ゴハン タペロ カ」は、たべませんかと人をさそうばあいのものである。以上のような「ロ」の用法は、愛媛県南部にもある。『全国方言資料』第5巻の「高知県幡多郡大方町」には、

fマー ソンデモ イッパイ ツケロカノージ

まあ、それでも いっぱい つけましようかねえ。

というのが見える。私が幡多郡下で聞き得た事例には、

○ソソナ コトー イーマ[↑]スロー カ。

そんなことを言いますでしょうか。

というようなものもある。

徳島県下の「カ」に関しては、金沢治氏が、『柊のうた』で、

徳島県では北方は「カ」海部は「ケ」山分のずっと奥に一寸「コ」がのこっています。

と述べていられる。ところで、県南の海部郡下でも、

○ウチー キテクレル カー。

うちへ来てくれるか。

などの「カ」の言いかたが、聞かれもする。——「カ」とともに、「カイ」も聞かれる。海部郡下での、

○コソヤ ヌキガ フルダロ カー。

今夜、雪が降るだろうか。

の言いかたは、「〜ダロ カ」の言いかたを見せており、このほうには、もはや、高知県下に見られた「〜ロ カ」は見られない。当県下では、「カ」の言いかたが、——敬語法の本文を受けて、ていねいな表現をささえることは、あまりなさそうである。

香川県下の「カ」では、ていねい表現支持(本文に敬語法はないばあいで)

の用法とまで言いうるものは、なさそうである。『讃岐方言之研究』には、

ソナナコトシタッテイッカ

といった“反語”の「カ」が見える。(「イッカ」は「いくか」であろう。) この種の用法の色濃いものが、愛媛県東部地方にも認められる。

○ハヨー セン カー。

早くしないか。

との、命令表現とも言うべきものは、香川県西部に聞かれるものである。この種の「カ」の用法が四国の諸方に見いだされるのは、当然のことでもあろう。

つぎに、「カイ」を見る。四国に、「カイ」のおこなわれることはさかんである。

愛媛県下には、「カイ」の用法の多彩なものが見られ、そのこと自体が、一つの特色にもなっている。報告の「カイ」があり、「何々が あった カイ。」(何々が あったよ。)などの言いかたなども、慣用的である。述懐の「カイ」もまた、よくおこなわれている。

○ワタシ ソー オモイマス カイ。

私、そう思いますわ。

は、松山弁での、中年女性の表現である。この述懐の「カイ」に、「……………
〜ジャ カイ。」との、特異な言いかたがある。内海島嶼での一例は、

○コップデ ノンダノト イッショジャ カイ。

コップで飲んだのとおんなじなんだよ。(「まったく。」といった気もちがそわる。)

であり、県南での一例は、

○カバン ワスレテ キタンジャ カイ。

私はかばんを忘れてきたよ。(みずから気づいた時のことば)である。

○オット、イケル カイ。

おっと、これはたいへん。

これは、南予地方に聞かれる慣用文であって、ことの不ぐあいを独話ふうに言いあらわすものである。——男性のがわにより多い言いかたか。

○カモ カイ。

かまうものか。

これも南予の慣用文である。——やはり、男性がわにより多く聞かれようか。

○わしでも 行カイ（行くよ）。

などと、動詞本位の「～カイ」が県下によく聞かれるが、この種のもの、
「書カイ」であれば「書く ワイ」であるから、問題外の事象である。

愛媛県下の「カイ」の用法で、これが、とくに、上品表現をささえるようなことはない。中等品位以下の、むしろ気らかなもの言いに、「カイ」の用いられることが多かろう。

愛媛県下での「カイ」の変形には、内海島嶼部に、いくらか「キャー」が見いだされる。が、県下に、「キャー」は、あまり聞かれぬ。伊予本土中部域に、——松山市域中心に、よく聞かれるのは、「カイ」の、「ケー」「ケ」である。

○ナンゾ ヤリヨル ケ。

何かやってるね？ （小学校長→同校教員）

は、松山弁での一例である。「そうかい。」は、「ソー ケー。」あるいは「ホーケー。」と言われている。（「ソー ケ。」「ホー ケ。」もある。）——これらは、共通語の「そうかい。」なみの言いかたというよりは、もうすこしていねいみがあって、「そうかね。」とでも言いかえられる程度の表現になることが多かるか。「ケー」と言ったひょうしにしたしみ。」と言う人もある。松山弁に、「ホー ケヤ。」（そうかい。）との言いかたがあり、これはまた、東予内の一部でも聞かれる。

高知県下もまた、「カイ」をよく見せる地域である。別に「カイン」のあるのが注意される。土居重俊氏の『土佐言葉』には、中村市に属する旧山奈村の

ことばの、

アレ モッテ キチョルカイン (あれもってきているの)

というのが見える。「カイ」に相当する「カエ」も、県下によく見られるか。

県下西南部でとくに注目されるものに、「カアイ」がある。私が西南辺で聞き得た一例は、

○ソー カアイ。

そうかい。

である。一知識人は、この「カアイ」の「ア」について、“ごくかるくはいる。はいらないことは絶対でない。”と語った。浜田数義氏の「幡多方言における敬卑表現」には、

特に婦人層は、郡下全般にわたって、敬卑の区別なく「かアイ」「かーアイ」を使うことが多い。「かイ」は「か⁽⁶⁾アイ」の約言であるが、敬意の方もかなり薄くなっている。

との記述が見られる。なお、氏が注とせられた、つぎの一文も引用しなくてはならない。

(6) アイは感動詞。女性の応答のことばであるが、「もし」というような意味の呼びかけ語としても用いられる。

高知県下でも、「カイ」の「ケー」が見られる。——県下にふつうのものであろう。「おまえ、見たかい？」は、「オマン ミタ ケヨ。」などと言われている。「ケー」も「ケ」もおこなわれていて、「ケ」のあらわれることがすくなくない。

○あんたさんたちも ハイラン ケ。

あなたがたもはいりません？ (中女→藤原ら)

は、県東辺での「ケ」の一例である。

○イカン キヤ。

行かないかい？ (同僚間)

これは、土佐中部の沿岸で聞いたものである。「イカン キヨ。」というのも聞

かれ、このほうは、よりよい言いかた（“敬語”）であるという。「キヨ」「キヤ」の「キ」は、「ケ」にあたろう。——単純な音訛に成ったものかどうか。ともあれ、「キヤ」は、「キヤ」にまぎれそうであるが、ものは、「キヤ」である。高知県下に、「ケー」に相当する「コー」もある。土居重俊氏の『土佐言葉』に、

ガッコーエ イカンコー（学校へ行きませんか）

ソーコー（そうですか）

アッコノ ムスメワ キレーナコー（あそこの娘はきれいですか）

コーは土佐村旧森村や大方町田野浦で使用。

とある。

高知県下の「カイ」用法としては、問いやたのみの「カイ」その他が、比較的よく目につくものであろうか。

徳島県下もまた、「カイ」のさかんな所である。ところで、金沢治氏には、
但し徳島市では「かい」は用ひない。

との説明もある。（『阿波方言の語法』 『方言』第二卷第一号）「カイ」相当の「カエ」も見られる。県下に、「カイ」の変化形「ケー」「ケ」のおこなわれることが、またさかんである。——主として県南に、これが見られようか。

○ア^ー ホ^ー ケ。

ああそうなの。（中男→父老男）

○ミ^ーヨコチュータ ケ。

みよ子といったかい？（名まえ談義）

などは、「ケ」の手ぢかな例である。

県南東部での言いぐさに、

ホ^ー ケ^ー。コ^ー ケ^ー。ナニ コ^ー ケ^ー。トナリノ ハンボ^ー カッ
タ ンケ^ー。

（そうかい。こうかい。何を買うかい？＜何にしましょ^うか。＞隣りのハ
ンボ^ー＜小さい桶＞を借りたのかい。）

というのがある。「ケー」ことばは、当地方の人々にも、熟知のものらしい。疑問の用法のことが多かるう。一知友は、

○カカヤン ゴハン タベン ケー。

母ちゃんごはんをたべない？

○カカヤン ゴハン タベン カイ。

(“ともにたべようじゃないか。” “ねだる意味。”)

の「ケー」「カイ」について、“「タベン カイ」よりも「タベン ケー」のほうがちょっと上だ。”と語った。「ケー」の用法に、「知らないって言うの？」の「シラン テケー。」というようなものもある。(金沢浩生氏教示)「ケー」が反語にもつかわれている。「ケー」の「ケイ」という形も見られる。やはり、県南でのことである。

○ネーヤン。オル ケイ。

ねえちゃん。いる？

などと言われている。

さて、つぎには、徳島県下の「コー」を指摘しなくてはならない。四国四県下諸地方では、別して本県下に、「コー」がさかんのようである。まず、県南諸地に、これが見られる。

○イク コー。

行くか？

○アル コー。

あるかい？

○ソウ コー。

そうかい。

などがある。県南西奥山地の「ホー ゼコー。」は、「そうですか。」であるという。祖谷方面にも、「イカン コー。」(行かないか?)などの言いかたがおこなわれているが、どちらかといえば、県南域に、「コー」がよりよく聞かれるのであろう。

「コー」「コ」は、何から来たものであろうか。

高知県下には、「ケ」の「キ」もあった。方言上での自由な音転訛という点では、「ケー」>「コー」も、ありうることであろう。

徳島県下の「カイ」一般の用法としては、問いないし疑問、受けひき・勧誘・反語その他があげられる。問いの例を県西北部の祖谷からひくならば、

○ウチー マー キテ オヤリル カイ。

うちへまあ来ておくれますか。

などがある。受けひきの言いかたでは、「ホー カイ。」(そうかい。)
「ホーデカイ。」(そうかい。)などの言いかたが注意される。

香川県下もまた、「カイ」のよく見られる所である。「カイ」に相当する「カエ」もある。「カイ」の形が、「キヤー」になってもいる。——まず、県西部に見られがちのものであるか。その一例は、

○アア ニヤー。メシ クワン キヤー。

あのねえ。めしをたべないかい？

である。ところで、小豆島にも「キヤー」があるか。陸田稔氏の「讃岐特殊方言」(『方言』第四卷第二号)には、小豆島草壁町の、

ソーキヤ (さうですか)

というのが見える。桂又三郎氏の『小豆島方言』にも、

アツタナイ ホーキヤ ありやそうですか

とある。本県下に、「カイ」からの「ケ」も見られる。小豆島にも「ケ」がある。草薙金四郎氏の『讃岐の方言』には、

あるけ(句)あるか?「金毘羅の神さん云うてお前逢うた事があるけ?」
という記事がある。『讃岐の方言』には、なお、

そうこう(句)左様です。

ともあって、「コー」の存在がうかがわれる。

香川県下での「カイ」の用法としては、一つに、

○九時までに 帰らにゃ イケル カイ。

などの言いかたのあるのが注目される。——「イケル カイ」は、愛媛県下にあるのに似たものである。

○ナイント チガウ カイ。

ないのとちがうかい？（ないんじゃない？）

というのは、近畿弁の言いかたに通うものであろう。

四国には、「カイ」の「ケー」「ケ」が、広く見わたされる。しかも、これの品位は、「カイ」の品位に劣るものではない。四国地方は、一般に、[ai] 連母音の相互同化を見せない所からである。なのに、「カイ」([kai]) 文末詞のばあいには、ふしぎに、「ケー」「ケ」([ke:] [ke]) の音訛が成立している。[ai] 連母音の相互同化が見られないことからするならば、この音訛は、特定音訛とも言うべきであろうか。([ai] > [e:] は、音声変化のきわめて自然的な方向でもあろう。[ai]があるならば、そこにはおよそ、[e:]があるはずである。自然音訛としての [ai] > [e:] が、とにもかくにも、「カイ」のばあいにおこったのである。) それゆえ、また、「ケー」「ケ」が、かならずしも、わるい品位のものにはなっていないのであろう。

「カ」の変形「カン」がおこなわれている。第一には、愛媛県下の東予——今治市中心の地域——に、この「カン」のおこなわれることがさかんである。今治市沖の島嶼部での二例は、

○モー ナイ ンカン。

もうないの？

○ハヨ イカン カン。

早くお行きね。

である。今治市での例は、「イラン カン。」(いらないの?) などである。「カン」は、「カナ」からの転というよりも、「カー」からの転に成ったものであろう。

高知県西南部のうちにも「カン」が見いだされる。西南辺での例は、

○ソー カン。

そうなの。

○コノ テガミ ヨンヂ クレン カン。

この手紙を読んでくれない？

などである。高知県下では、なお、室戸岬方面にも、「カン」を見いだすことができる。「イク カン。」(行くかね?) などとある。

愛媛県下・高知県下ともに、「カン」のおこなわれる所には、「ゾ」の「ゾン」などもおこなわれている。室戸例で言うならば、「行かないよ。」は「イカンゾン。」である。

四国地方で、他地域には「カン」が見いだされない。言語習慣の相違とはいいながら、ものの存立と分布とには、ふかしぎとも見られるものがある。

※ ※ ※

四国地方に「ノカ」「ノカイ」「ンカ」「ンカイ」の複合形がおこなわれることは一般的である。——問い・さそい・たのみなどに用いられている。

○ドコイ イク ンカー。

どこへ行くの？

は、小豆島での「ンカ」例である。

「行く モンカ。」(行くものか!) などの「モンカ」のおこなわれることもまた広い。(「モノカ」とは、通常、言われていない。)

愛媛県南部での、特色ある複合形に、「ゾカ」がある。「アルゾカ。」(あるだろうか。) などと言われているものである。「ゾカ」に対応することばに「ロカ」があり、「ロカ」は「ドカ」を思わせる。これらは「だろウ カ」であろうか。だとしたら、「ゾカ」は、それからはなはだしい転化結果と言える。けれども、できた「ゾカ」は、「ゾ」が「おれも行く ゾ。」などの「ゾ」を思わせやすいので、けっきょく、文末詞ふうになったものとも見ることができる。

徳島県下の特色形には、「デカ」がある。——「デカイ」もある。

○ウチノ ヒトニ アヤー セザッタ デカ。

うちの人に会いはしなかったかね。

(これは県西北の祖谷村での一例である。)

○イチバン フルイ デカイ。

いちばん古いの？

(これは鳴門市内での一例である。)

などと言われている。「デカ」「デカイ」は、おもに県北域におこなわれているか。

「デカ」が、いくらかは香川県下にも見いだされるようである。——私は東部の例を得ている。

「ゼカ」複合形が、徳島県南、西部山地にある。

香川県下の特色形に、「カレ」複合形がある。小豆島例は、

○イクン カレー。

行くのかい？ (小男問)

(おとなは「イク カー。」<行くの？>との言いかたをとりがちのようである。)

などである。讃岐中部での一例は、

○メル カレ。メン カレー。

見えるかね。見えないかね。(字引きをひく夫に言う。) (老女
→夫老男)

である。

「カナ」「カイナ」「カヤ」などの複合形は、四国地方によくおこなわれているよう。

五 近畿地方の「カ・カイ」ほか

近畿地方の全般に、問いの「カ」のよくおこなわれていることは、言うまでもない。ほかの用法、さそい・受けひき・反問反駁・叱責・告知などもよくおこなわれている。

兵庫県下の、問いの「カ」を見るのに、ぞんざいな表現にもていねいな表現にもこれがよく出ている。「サヨ^カ。」(そうですか。)は、当県下に限らない、近畿地方の、いちじるしい慣用形であろう。ところで、本県下の言いかたに、

○モ^カー ヒチジゴロ^カ。

もう七時ごろ? (女学生→祖母老女)

などがある。この「カ」は、かなりのていねいな表現をささえるものである。(祖母に孫むすめがぞんざいな言いかたをしているものではない。)播磨中部で、私は、中年の女性が老人に向かって「コ^カノ イタ^カ。」と言っているのを聞いたことがあるが、現場のふんいきから察知せられたのに、これは、「この板ですか?」というのに近いものであった。淡路などでも、単純な「ソ^カー ケー。」(そうかい。)よりは「ソ^カー カ。」のほうが、よいことばのようである。近畿地方では、この種の「カ」の用法が注目される。県下の「カ」のつかいかたに、「ちょうだい カ。」(くださいな。)との言いかたもある。「ユートイテ^カ。」(言っておいてくれない?)との言いかたもある。さて、「です カ」の「デッ カ」、「ます カ」の「マッ カ」などは、また、近畿での特色形式とされる。淡路島東南部で聞いたものには、

○センセー、セー クレツ^カー。

先生、それをくれますか。

というのがある。

「サヨ^カ。」のことばづかいが、大阪商業の生活をよく色どっていよう。(「カ」にささえられて、「さよう」の古語がよく生きている。)[「サヨ^カ。」に相当するものに「ソ^カー カ。」がある。これがまた、多く、わるからぬことばとしておこなわれている。「カ」の、こうした用法を端的に示す実例をあげてみよう。幼男の、母おやに“そんなお金ある?”とあどけなくたずねることばは、

○アル^カ。

である。

○キョ[↑]ジント ハンシン, キョ[↑]ーカ。

巨人と阪神は、きょうなの？ (青女問)

は、大阪市の電車内で私が聞きとめたものであるが、「キョ[↑]ーカ」は、けっしてわるいことばではないように思われた。阪神地方を中心に、広く近畿地方に、こうした「カ」の表現法が聞かれるようである。「～ますカ」の「マッカ」、「～ダスカ」の「ダッカ」などの形態がまた、大阪府下にいちじるしい。

和歌山県下にも、わるからぬ「カ」表現法があり、

○ドコゾイ イク[↑]カ。

どこかへ行く？

などと言われている。

○マッ[↑]チ ナイカ。

マッチはない？

は、田辺市奥で聞いたものである。これは青男から老男へのことばであった。当方では、これがぞんざいなことばではないはずである。『和歌山県方言』には、「行きませうか」の「イキンカ」が見え、「寝ませんか」の「ネリンカ」が見える。「イキ」を動詞連用形としてとりたてれば「ンカ」が残るが、「カエリンカ」「イニリンカ(帰ませう)」などとも言われて、この種の言いかたの慣用が見られることからするならば、ここに「ンカ」の特定用法が見られるともされる。県下の南北に、「イカイデカ。」(行くとも。もちろん行くさ。), 「アライデカ 確かにある時言ふ。」などの言いかたがおこなわれている。「～イデカ」との慣用表現法がある。県南、西牟婁郡下の「イナイカ。」(“帰らないでおろうか。”)は、「イナイデカ。」の「デ」の落ちたものであろうか。

三重県下に、間いやさそい・受けひきなどの「カ」がよくおこなわれている。ところでまた、「カ」を用いてのわるくはない言いかたが注意される。県西南、紀州分の西寄りで聞いたことばに、中年女性の「何々[↑]カ。」というのがあり、この話し手は、ついで「何々デショ[↑]ー。」と言った。「カ」は、けっしてただの

ぞんざいなものではないことが、ここで確認せられたように思う。巖佐正三氏は、「志摩答志の言語調査——中間報告——」（『三重大学学芸学部研究紀要』第八集 昭和27年11月）で、

ikunoka: (目上に)

ikunokai (同輩目下に)

と、しるしていられる。県下の慣用語法に、「〜ヤン カ」がある。「〜じゃない カ」に相当しよう。——これもまた、近畿に広くおこなわれるものである。『田舎』第五号（住吉土俗研究会 昭和9年5月）に見える、横井照秀氏の「津市地方の方言と童謡」には、「行きませんか」の「行キーカ」、「喰ひませんか」の「喰ヒーカ」が出ている。県下に、「ある カ」の「アッ カ」がある。伊賀で聞いたものには、

○ガッ[↑]コイ オイデマヒタンダフ カ。

学校へいらっしゃったんですか？ (老女→藤原)

との言いかたがある。

奈良県下にも「〜ヤン カ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

mジャーカー

そうかい。

というのが見える。同巻「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

fナー シン イクンニャーカ

何を しに 行くんですか。

というのが見える。「〜ダス カ」の「ダッ カ」など、促音化のこともまた、本県下にいちじるしい。

京都弁では、自問の「カ」が、

○ヒルカラ イッペン デンワ カケテ ミョー[↑]カー。

ひるから一度、電話をかけてみようかしら？

などと言われている。女性によってこのように言われた時、「カー」での、ゆ

っくりとした上がり調子が、よく京都弁の情調をあらわすようである。さてまた京都府下でも、「何々 カ。」との、ぞんざいそうであってぞんざいではない言いかたがおこなわれている。母が子に、「アッタ [↑]カー。ミタゲル。」(あった?見てあげるわ。)と言っているのも、わるい言いかたではないようである。京都市で経験したことである。催し場の公衆便所で、一老男が掃除係の婦人に、「もうつかってもいいですか。」らしい気分で(おそらくそうであつたろう。)

○エー [↑]カ。

と言った。これに対する婦人の答えは、「ドーズ。」であつた。丹後半島内で聞いたものには、

○シメサシテ モラオー [↑]カー。

間のふすまをしめさせてもらいましょうか。

との言いかたがある。これは、区長夫人のていねいなあいさつであつた。「〜ヤン カ」のさかんなことは、あらためて言うまでもない。榎垣実氏の『京言葉』には、

そんなんぐらいよまいでか(そんなの位読まなくてどうするものか)というのが見える。

滋賀県立大津高等女学校の『正しい日常語』(昭和18年9月)には、

先生コレデヨロシイカ [↑]先生これで宜しうございますか

とある。「カ」の用法は、近畿にあつてじつに重層的である。

「カイ」のおこなわれることもまた、近畿の全域にさかんである。その用法も、問い・さそい・受けひき・命令・反駁など、多彩なものが見られる。

兵庫県下については、但馬のさそいの一例をあげるならば、

○モー [↑]イア [↑]カイ。

もう帰ろうかね。

がある。播磨地方を大観しても、「カイ」の用いられかたは、敬卑の諸相にわたっている。「行く カイ?」というのであつても、さほどぞんざいではないこ

ともある。和田実氏の「淡路の語法——(1)」(『近畿方言』1)には、

スミデ カキンカイ。「墨でお書きなさい。」(丁寧)

との言いかたが見える。県下に「〜ダス カイ」の「〜ダッ カイ」などが見られることは、言うまでもない。淡路島でも、「…………… アッ カイ。」(……………あるものか。)などと言われている。

大阪府下にも、ことに河内で、「カイ」がよくおこなわれている。府下に「カイ」と「カエ」とがあるか。「カイ」はわるい言いかたにもなるが、さほどではないこともある。河内例の、

○ワガ^レ トコノ ハイモ オイカネテンノニ、ヒトノ コトマデ カモテラ
レ^ル カイ。

自分の所の蠅も追いかねてるのに、人の所までかまっていられるかい。
(対等以下に言う。)

は、かなりぞんざいな言いかたのものである。笑福亭松鶴氏の「^{大阪}落語豆屋」(『大阪弁』第一輯)には、

唄にさらさいでかい。こんな^{とこ}所に何時までいさらすもんか。

との言いかたが見えている。——自分のことに言う、「カイ」の用法がおもしろい。

和歌山県下にもまた、「カイ」がさかんである。県南では、店屋で、主婦の、来客老男に対する言、

○アガル^カ カイ。 ノム^ノ ノ。

お飲みになる？飲むの？(その店で、酒を、である。)

を聞いたことがある。「カイ」がていねいな言いかたにもつかわれる。

○サンビョーグライ デキマシヨ カイ。

三俵ぐらいできるでしょうよ。

は、県中部での一例である。一老女は、私に、「ツー^カ カイ。」(そうですか。)
と言ったが、これは、見るからに品をつくって言ったことばであった。県南では、「カイ」が目上用とも考えられている。串本町で私が聞いた電話のことば

には、

○ヤクバ [↑]カイ。

役場ですか。

○アル [↑]カイ。

いますか。

などがある。『南紀土俗資料』には、

かいはかよりも町疇にして、一種親みの情をあらはす。

とある。本県下の、特色ある「カイ」の類である。「この山は古いもんでしょ
うよ。」というのでも、

○コノ ヤマワ フルイ モンデシヨ カイ。

である。私は、紀州中部の日高郡下で、こうした事例を多く聞いている。

○トットノ センゾンサマデシヨー カイ。

ずっとの先祖さまで“ありましようねえ”。

などともあった。『和歌山方言集』にも、「カイ」に関して、

有(上)ろカイ (有るものか)

と、

有(下)ろカイ (有るだらうよ)

とが見られる。県南、西牟婁郡の、

○マダ イキャー セー カイ。

“まだ行きはせんだらうかね。”

というの、ここにあげておきたい。

三重県下にも、「カイ」(これに類する「カエ」も)がよくおこなわれている。「カイ」は品がわるいものと見られているか。じっさいには、わるくない品位の表現での「カイ」もある。

○イマ ヤスミ [↑]カイ。

今、(広島の学校は) やすみのの？

は、伊賀で、私が小学生六男から言われたものである。馬杉宗伸氏の「御座方

言と敬語的表現」(『三重県方言』第5号)には、あいさつことばの、

主“ムカワソカイ” (〈座ぶとんを出して〉まあおすわりください) というのが出ている。志摩半島東岸で私が経験したことばには、初老女の、村の先生に述べた、

○ゴゼン タベテ キタ ソカイ。

ごはんをたべてきたんですか？

というのがある。県下西南部の紀州分での「カイ」には、つぎのようなものがあって注目される。

○オトシ ワカイ。

“おそろしいわい。”

○コッチ コイ ヤカイ。

こっちへ来いよ。

(「コイ ヤカイ」は「コイ ヤー」よりもよい言いかただという。)

○コリヤ ワシヤ ヨカイ。

これはわたしのよ。(女性)

旧木ノ本町方面では、この種の「カイ」がよく聞かれる。ところで尾鷲町にも、「オワソノ カイワ ヤマラン カイ。」(尾わしの「カイ」はやまらんカイ。)などの言いならわしがある。「カイ ワッタ。」(「カイ、割った。’)などとも言われている。これについては、「カイヤ ナイ ガー。ビンヤ ガ。」(「カイ」じゃないよ。瓶だよ。)との言いぐさもできている。文頭の「カイ」は、その出自はともかくも、一種の感動詞を思わせるものであろう。それと文末詞「カイ」とが両立しているということなのか。文末の「カイ」も、

○アー カイ。ハラタツ ヨーカイ。

ああいまいましい。はらのたつことったら！

などとあるのは、上来とりあつかって来た「カイ」文末詞とはちがうもののようにも思われてくる。——ちがえば、それは、感動詞「カイ」によく通うものとされよう。(出自は「これ」か。)東一郎氏は、「海山町の方言」(『三重県方

言』第8号)で、

カイ 言葉の初めや中間にやたらに使う。(諺)「熊野のカイは止まらんカイ」

と述べていられる。県下に、明らかな「カイ」文末詞の「カイン」もあるか。「ソー カイン。」(そうですか。)など。

奈良県下もまた、「カイ」(これに関連する「カエ」)をよく見せている。県南の東部には、「そうか。」の意の、

○ジャ^ーカイ。

がある。『全国方言辞典』には、

も一めしたかい 訪問の挨拶の詞。御免ください。奈良県吉野郡。との記事が見える。

京都弁そのものでは、「カイ」文末詞はどの程度におこなわれているのであろう。北部方面には、「カイ」のさかんなものがある。

○ドッカラ オイデマシタ カイ。

どこからいらっしゃいましたか。

は、丹後北辺での、一つのていねいな言いかたである。府下で、「ソー カイ。」がかなりよいことばとしてもおこなわれているか。

滋賀県下の情勢も、京都府のに類していよう。

○チョ^{ット} アマケ カイ。

ちょっと雨けかね?

は、湖西での、わるくない言いかたである。井之口有一氏の『滋賀県言語の調査と対策』(昭和27年7月)には、

蒲生郡や甲賀郡では、「きよう着物干したらカイ、風が吹いて落ちた。」のように、間投助詞「カイ」を盛に用いる。

との記述が見える。この「カイ」と、さきの三重県紀州での「カイ ワッタ。」などでの「カイ」とが思いあわされるであろうか。

文末詞「カイ」は、音相上、相互同化によって「キャー」形を見せることにもなっている。ただしこれは、近畿全円に見られるにいたってはいない。淡路にいくらか見え、但馬・丹後の地方には、これがかなりよく見られる。大阪府下・三重県下にも、これの若干の存在が認められる。

淡路北部での一例は、「ソー キャー。」(そうかい。)である。但馬での一例は、

○ヤッパー スクナー ンキャー。

やはりすくないんかい？

である。但馬・丹後の地方には、[ai]連母音の相互同化が、かなりいちじるしい。したがって、「カイ」の「キャー」もよく見られるしだいであろう。井上正一氏の『丹後網野の方言』には、

エエダ ニャァキャァ。イコーイナ。 <高校生女子>

(いいじゃないの。行こうよ。)

の記事などが見られる。

大阪府下に関しては、榎垣実氏の「貝塚市の方言」(『貝塚市史』第二巻)に、終助詞では、疑問の「かい」が次のように変化している。

行くんけ したんぎやあ

との記載が見られる。

三重県下には、紀州にも志摩にも伊勢にも、

○ソー キャー。

そうかい。

などの「キャー」が見られる。

「カイ」の「キャー」が、以上のように、限られた地域に出現しているのはどうしてであろう。但馬・丹後の地方は、近畿アクセント一般の地域ではない。そういうアクセント状況のもとでは、中国地方でも同様、[ai]連母音の相互同化がよくおこっている。近畿アクセント一般の地域での「キャー」分布が、今は問題である。通常、近畿アクセント一般のもとでは、[ai]連母音の相互同化

がきらわれ、「赤い」の「アケー」、「書いて」の「ケーテ」などはおこなわれていない。この点からすれば、「カイ」の「キャー」はおこっていないくて当然でもある。だのになにほどこかの存立が見られるのは、近畿アクセント下であっても、やはり、存在する [ai] 連母音には相互同化の可能性も付随するということなのか。

「カイ」文末詞の「ケー」「ケ」という形になると、これは「キャー」のばあいとはことかわって、近畿全円によく成立している。ここのあたりが、私には、解けないところである。すでに見たように、四国地方にも「カイ」の「ケー」「ケ」が広く存立している。四国東部の「ケー」「ケ」分布は、近畿のものによくつながっているとも見られる。近畿・四国、双方ともに近畿アクセント一般の領域と考えられ、ここは、通常、[ai] 連母音の相互同化をきらっているありさまであるが、文末詞「カイ」のばあいは、ふしぎによく「キャー」ならぬ「ケー」「ケ」相互同化形が遍慢している。どういう特定事情があったのだろうか。——やはり、ことが文末詞関係なので、ここに特定事態もおこりやすかったのか。(なにぶん「カイ」文末詞での [ai] は、一般的に言えば、つねに相互同化に向かってうごいているものではある。)

近畿にさかんな「ケ」文末詞を各県に観察しよう。兵庫県下の淡路や播磨に、「ソーケー。」(そうかい。)などの言いかたがさかんである。但馬でも、

○ソーデス ケー。

そうですかい。

などが聞かれる。問いに短呼の「ケ」を用いることも多い。

○ヒトツダケ ケ。

一つだけかい？

は、淡路での一例である。

大阪府下にも、「ケー」「ケ」の使用がさかんである。「サヨケー。」(さようですか。)(同意の「サイケー。」も。)は、慣用いちじるしいものであろう。

「～じゃない カイ」の「～ヤン ケー」もよく聞かれる。南河内では、「タベタ ケー。」(たべたかい?)「ネタ ケー。」(ねたかい?)など、ことばのおわりに「ケー」が多い。”などの説明を聞いたことがある。府下の泉州にあっても、「ケー」「ケ」がよく聞かれる。

和歌山県下にもまた、「ケ」のおこなわれることがさかんである。串本の例には、

○オマヤ スシ タベル ケー。

おまいはすしをたべるかい?

などがある。『和歌山県方言』には、

スルナケ してはいけません そんな悪いことスルナケ。

との記事が見える。——この「ケ」は、あるいは、別様のものか。

三重県下にも、紀州・南勢・志摩・伊賀に「ケ」がよくおこなわれている。紀州の西方では、生徒も先生に、

○センセ、コレ スル ンケ。

先生、これするの?

などと言っている。「宇久井」という土地がある。この地に関して、「ウグイノ ケーワ ナオラン ケー。」(宇久井の「ケー」はなおらないケー。)との言いぐさがおこなわれている。一知友によれば、「「ソー ケー。」(そうかい。)などの「ケー」は、どこから流れてきたものか。以前には「ケー」とは言わなかった。」とのことである。それにしては、「ケー」のよくおこなわれているのが注目される。『全国方言資料』第4巻の「三重県志摩郡浜島町南張」の条によれば、

f アレモ コマルジャ ネーカイ

あれも 困るでは ないですか。

とある。「ない」が「ネー」になっているのであるから、「カイ」の「ケー」がおこなわれていても、当然とされよう。佐藤虎男氏教示の志摩南岸での一例は、

○ウエンタ コートカン ケー。

(背広の) 上下買っておかないか。 (中男→青男)

である。伊賀での例は、

○イッタ ンケー。ホンマ ケー。

行ったのかい。ほんとかい。

である。

奈良県下に、「ケ」のさかんなようすが見られる。県南で聞いた話しに、

“「ケー」はやまとのことば。そこで、万才師も、「ケー」が出ると、「オマエ ヤマトノ ウマレ ケー。」(おまいは大和の生まれかい?)と言う。”

というのがある。西宮一民氏は、「三重・奈良・和歌山」(『方言学講座』第三卷)で、

共通語の「か」に当るものは、奈良県北部では「カ」(純疑問)、「ケ」(親愛疑問)に使い分け、さらに北部高原地方(山添村)では「コ」(卑蔑疑問)をも使い分ける。ところが、この「コ」は奈良県南部では「尊敬疑問」となる。

と述べていられる。吉野地方でも、「ケ」が敬意表現に用いられているという。

京都府下では、丹波で、男子からも「ソードス ケー。」(そうですか?)などというのが聞かれる。「ソー ケー。」(そうですか?)などは、丹波にとともに、山城にもあるのではないか。京都市内での「暑いね。」にあたる言いかたには、「暑イヤン ケー。」などがある。

滋賀県下にも、湖北を除く、県下の一円に、「ケ」「ケー」がおこなわれているという。(『滋賀県言語の調査と対策』)湖西での一例は、

○イコー ケー。

行こうかい。

である。

近畿地方に「ケ」のおこなわれることがさかんなのは、他地方人から見れば、一種、異様でもある。(四国地方にあっても、たとえば松山弁に、この「ケ」

が異様であるのを、むかし私は痛感したおぼえがある。) [ai] 連母音の相互同化はおこらないのが、近畿地方での原則のようなものであるのに、文末詞「カイ」のぼあいには、[ai] > [e] の相互同化による「ケー」(→「ケ」)がよくおこなわれているのであるから、他地方人の、総合的な方言受容では、そのものが異様とも受けとられることになるのであろう。しかしながら、おもしろいことに、土地っ子は、みな、「ケー」「ケ」の発言にしたがって方言的な安定感をおぼえているはずである。方言人の、言語行動にあってのものごとの選択には、きわめて自在なものがある。

「ケー」「ケ」からの変化形と思われる「キー」「キ」がある。近畿内で、限られたものであろう。私は、和歌山・三重の二県にこれを見いだしている。

○オマイ イク [↑]ンキー。

おまい、行くのかい？

は、和歌山県南の一例である。——「キー」は県南のものか。

○イナタ [↑]ア。イク [↑]ンキヤ。

……きみはね。行くのかい？

は、三重県紀州での一例である。伊勢南部・志摩にも「キー」「キ」が見いだされる。

「キー」「キ」が近畿南傍に見いだされるのは、興味ぶかい事実とされる。「ケ」の[e]母音が[i]母音に転じて「キ」ができたのだとすれば、これは、四国南部に「どうどうして」の「テ」の「チ」がよく見られるのにつながる事象である。「テ」の「チ」などは、さらに九州に見わたされる。

四国、徳島県下には「コ」のかなりいちじるしいものがあったが、つづいて淡路にも「コー」「コ」が見られる。由良町方面に「コー」がさかんである。

○イラン [↑]コー。

いらなにかね？

は、由良の魚売り屋のことばである。「由良コ」(ユラコ)の語があるという。「コ」は「カ」から転じたものとの解がある。そういうこともあり得たのだろうか。

起源はともかくも、文末詞「コー」「コ」が播磨内にも聞かれる。

○だれだれさんを ミヤ ヘナンダ コー。

だれだれさんを見はしなかったかい？

は、中播での一例である。

大阪府下では、「コー」が聞かれないか。

和歌山県南に「コー」「コ」がさかんである。

○ウチー キテ クレル コ。

うちへ来てくれるかい？

は、串本町での一例である。「コ」は、“対等に用い、したしみぶかい言いかた。女も言う。「カイ」はもうちょっとよい言いかた。”とのことである。

三重県下の南勢・志摩にも「コー」「コ」が見られる。伊勢北部にも、あるいは「コ」があるのか。

奈良県下の「コ」に関しては、まず、さきの西宮氏の記述を参照せられたい。(p. 469)氏はまた、「奈良県方言の待遇表現について」(『国語学』36)で、諸地の「ソーコー」を指摘してられる。(—天川村その他では、「ソーコー」が「敬」の表現になるのだという。)岸田定雄氏は、「奈良県吉野郡の方言調査」(『方言』第二卷第二号 昭和7年2月)で、

疑問の助詞「か」にあたるものに「コ」がある。ウチエイクンコ(家へ行くのか)。平坦部にはこの場合崇敬体「ケ」、普通体「ド、ゾ」を用ふ。と記述してられる。私が県南で聞き得た「コー」の一例は、

○ヤマシテ イカン コー。

“雨がやむまでまって行けということ。”(止まして行かないかい。)である。

京都府下では、丹波・丹後に「コー」が聞かれる。「ソー コー。」(そうか

い。) などとある。

滋賀県の湖西には、「コー」と「ケー」との併存が見られる。“「コー」は「ケー」よりもすこしぞんざい。”などともある。男女ともに「コー」を用いている。“だいたい、男に多いか。”と言う人もある。

○アスンドル ソコー。

あそんでるのかい。

は、このほうでの一例である。

兵庫県の播磨中部で聞いたことばに、

○アツイヤ ナイ コイ。

暑いじゃないか。

○イキトモ ナケリャー オラン コイ。

行きたくなければ、ここにいないか（おらんカイ）。

などの言いかたがある。これらの「コイ」は「カイ」からのものか。——「カ」から「コ」への直接変化もありうるのか。

つぎに「カン」がとりあげられる。「カ」からの「カン」は、もっともしぜんにできたものであろう。兵庫・和歌山・三重・京都の諸府県に「カン」が見いだされる。

兵庫県下の、淡路洲本市では、

○コレ カーン。

“これかな？”

などの言いかたがなされている。——女の人のことばであるという。

和歌山県下には、南部に「カン」が聞かれがちか。

○イカン カン。

行かない？

は、新宮市での一例である。

さきに、四国でも南部に「カン」が見られた。紀南でのこの「カン」分布は、

彼我の相関を思わせる。——南海道系派とも言うべきものが認められるか。

その系派的なものは、さらに東にたどることができる。すなわち三重県下の紀州に「カン」があり、南伊勢に「カン」があり、志摩半島に「カン」がある。

○ホー カン。

そうかね。

は、伊勢市域での一例である。

「カン」の分布は、さらに東海道域にもたどられる。

今石元久氏は、京都府福知山市域での、

○イカン トコ カン。

行かないでおこうかね。

○イキマヒョー カーン。

行きましようかね。

を教示せられた。——「カン」のやわらかな表現価がうかがわれる。近畿北域にも、こうして「カン」が見いだされるのか。

※ ※ ※

近畿地方の「カ・カイ」に関する複合形の文末詞を見る。

兵庫県下では、「ノカ・ノカイ」「ンカ・ンカイ」はもとよりのこと、「ノンカ・ノンカイ」もよくおこなわれている。「デカ」もある。さきに、徳島県下などでも「デカ」が見られたが、つづいて、淡路島にも「デカ」があり、

○キョーワ ハマイ イク ンデーカ。

きょうは浜へ行くのかね。

などと言われている。「カナ・カイナ」の形もよくおこなわれている。注目すべきものには、「カレ」がある。（「ンカレ」などとも言われている。）「カレ」は、淡路・播磨に見られる。「カーレ」ともある。なお、壁谷真蔭氏の「神戸方言『あんなにこんな』」（『兵庫方言』2）にも、

イッタルカレエ（行ってやるものか）

が見えている。播磨に「ワレ」もある。山田潤三氏の「赤穂方言の表現法」

(『播州赤穂方言の研究 語法編』)には、

「ハヨ書カンカーレ」(早く書かないか)

「今書クワレ」(今書くわい)ワイ〜コレ以上云ウト、モウ書クカーレ
(もう書くものか)」

というのが見える。壁谷氏の上記論文にも、

メンダルワレエ(こわしてやるからそう思え)

が見える。「カレ」は、「カ」に代名詞の「ワレ」の「レ」のそったものではな
かるうか。「ワレ」は、代名詞「ワレ」そのままのものというよりも、「知らん
ワ。」などという「ワ」に、「ワレ」の「レ」がそわったものかもしれない。

大阪府下にも、「ノカ」「ンカ」「ノンカ」などがよくおこなわれている。「テ
カ・テカイ」もあり、「モンカ」もある。

○イテル テカ。

行ってるって?

は、「テカ」の一例である。「カイナ」のおこなわれることは、いちじるしいも
のがある。「ケナ」「ケヤ」もある。「カレ」も見える。今東光氏の『鬮鶏』に
は、

「どないも、こないも、あるかれ。」

などの言いかたが見える。

近畿弁に、「どうどうシテンカ。」(どうどうしてくれない? どうどうして
くれませんか?)との、たのみの言いかたがある。この「〜テンカ」は、「〜
てくれんか」というような言いかたのものであろうか。ところで、この「〜
テンカ」の言いかたが熟用されているので、人にはしばしば、「〜テンカ」
の「ンカ」がそえもののようにも見えがちか。そうなれば、「ンカ」は、文末
詞ふうのものとも見られてくることになる。

和歌山県下にも、「ノカ・ノカイ」「ンカ・ンカイ」がよくおこなわれている。
県北に、「ネーカ・ネーカイ」が見られる。高瀬軍治氏の「高野口町方言集」
(『方言』第三卷第二号)には、

アノネエカイ。ワイネ、ユナイダネエカイ。

などとある。県南には、「ワカイ」が見られる。『和歌山県方言』には、

スルワカイ　　します

とある。これらの複合形に見られる「カ」「カイ」は、上来見てきた、「カ」「カイ」と等しいものなのかどうか。「スルワカイ」などを見ていると、「カイ」は、「これ」的なものかのようにも思われる。「カレ」が、本県下にもよくおこなわれている。「そんなことを言うたかて 知ル カレ。」（「知るもんか」「知ったことか」）などと言われている。「カシ・カイン」もある。『和歌山県方言』には、

サヨカンノ　　さやうですか

とある。（北部の海草郡のものであるという。）——「カシ」の「シ」は、「もし」の「シ」か。

三重県下にも、「ノカ・ノカイ」、「シカ・シカイ」がよくおこなわれている。たのみの言いかたの、「掃イ^カテンカ。」などの「シカ」ことばもよく見られる。県南の紀州に、問題の「ヨカイ」「ヤカイ」や「ワカイ」のあることは、すでに述べた。（p. 464）「ノーカイ」もあり、『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

mマダ　オリャ　　チャット　　ハヤイト　　オモテノーカイ　　オチツイトンサ
まだ　わたしは　　ちょっと　　早いと　　思ってねえ　　落ち着いている

—

のさ。

などとある。「ノーカイ」の「カイ」も、単純な「カ・カイ」の「カイ」ではなさそうである。——「カイ」は「これ」的なものではないか。私が木本町で聞いたことばには、

〇ツンナニ　　スンナ　　カイ。

そんなにするなよ。

というのがある。こういうのを見ていると、「カイ」は、問いなどに用いる「カ・

カイ」の「カイ」とはちがったものであることがよくわかるように思われる。「これ」から発した感動詞的なものではないか。それが、文末詞にもなっているのかと思われる。「ワカイ」に対する「ワカ」もあり、「ワカイ」にとどまらない「ワカイノシ」もある。佐藤虎男氏の「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、

○ユワンヨーニ ナル ワカイノシ。

(もうそんなこと) いわないようになりますよねえ。 (中男→
老男) [木本]

の例が見える。福田学氏の「熊野方言における文末辞について」(『三重県方言』第8号)に、

ハヨ イコラケ } 熊野市飛鳥町, 五郷町 (早くいきましよう。)
ハヨ イコラケヤ }

とある「ラケ」は、「ラ」文末詞に「ケ」文末詞がそわったものであろうか。「ケ」は、いま問題にしてきている「カイ」からのものであろうと思われる。本県紀州にも、「カレ」が見いだされる。

○ホー カレ。
○ソー カレ。

そうなの?

○ウチー キテ クレル カレー。

うちへ来てくれるかね。

などとある。志摩にも、「カレ」が見いだされるようである。

奈良県下に、「〜テンカ」の言いかたが、よくおこなわれている。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条に見える、

mフナ ジューエン ツリ ヤルワカ
では 10円 つりを あげますよ。

など、また、同巻「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条に見える、

f………… カイラシテ モラ(ウ)ワカ

…………… 帰らせて もらいますよ。

などは、問題の「ワカ」を見せている。「ワカ」は、吉野郡下にいちじるしいものか。

京都府下にも、「〜テンカ」がよく見られる。丹後北部には、「ノカイ」に相当する「ダカイ」が見られ、「ダキャー」などともある。

滋賀県下にも、「〜テンカ」がよくおこなわれている。「ノカ・ノカイ」などのよくおこなわれていることは言うまでもない。湖東に、「トカイ」なども見られる。『全国方言辞典』には、

かし 圃 希望の意を示す。「早く来てカシ」滋賀県蒲生郡。

との記事が見える。「カシ」ということばが注目される。

近畿地方に、「カナ・カイナ」のよくおこなわれていることは、周知の事実であろう。「ほんま カイナ。」などと、これらの文末詞の慣用されているところに、近畿弁の情調はよくにじみ出ているとも言えようか。

六 中部地方の「カ・カイ」ほか

「カ」が、中部地方の全般によくおこなわれていることは、言うまでもない。問いの「カ」、たのみの「カ」、意志表明の「カ」、受けひきの「カ」、納得の「カ」、あるいは命令の「カ」などがよくおこなわれている。

以下、各県について、「カ」常用の中での、注目すべき事例を見ていこう。

福井県下に関しては、佐藤茂氏の「ていねいさのずれ」（『言語生活』第二十九号）に、

身近の敦賀市出身の方や敦賀市のことについて知っている方などにきいた所を総合するとヨロシカはヨロシイカよりもかえってヨロシイデスカに近い程度のていねいさであるらしい。もちろん話し手と聞き手の相違によっていくらかの違いはあるだろうが、少くも、一般の話し手は、そんな風に思っている様子である。

との記述が見える。愛宕八郎康隆氏によれば、越前奥には、

○ナソカ コドモ ワカルソデ ナシ カ。

“何か子どもがわかるのでもあるまいに。” (老女問)

との言いかたがあるという。「ナシ」のあとにおかれた、むすびの「カ」が、詠嘆の気分を出している。

『石川県方言彙集』には、

おいかー ソウダ 卑属ニ対スル詞ナリ 鹿

との記事がある。石川県下にあっても、「ソーカ。」「ソーケ。」はていねいな言いかたであるという。愛宕氏教示の例であるが、奥能登に、

○ハヨー イラッシー カー。

早くお行きなさいな。 (母→子女)

などの言いかたがある。「カ」が見えるが、これは、ただの「カ」ではあるまい。おそらくは、「これ」的なものであろうか。——指示代名詞系の転成文末詞ということになるか。

別に考えるところがありもする。北陸に、「〜コソ (コサ) ……カ」という古態の慣用語法が見いだされる。(いわゆる係結の認められるものである。) こういう言いかたでの「カ」が、「ハヨー イラッシー カー。」というように、とり用いられることがあったかもしれない。「イカッサレカ。」(行きなさいよ。)というのは、能登半島西岸で私が聞いたものであるが、この「カ」がつくと、親愛の情が出るという。(老年層でのことか。) この「カ」と「〜コソ (コサ) ……カ」の「カ」とを、思いあわせて見ることができなくもないか。

「富山県東砺波郡平村上梨」(『全国方言資料』第8巻)には、

fソーカイカー

そうですか。

との言いかたが見える。「カ」のおもしろい用法である。「〜コソ (コサ) ……カ」の言いかたは、いまなお、本県下にも、かなり見られるのか。

○コラレー カ。

おいでなさい。

などの言いかたは、よくおこなわれている。——「カ」はどのような「カ」であろう。文末詞「カ」が「ガ」とも発音されている。東北系発音の見られる富山県下でのことである。

新潟県下には、「何々ではないか。」の「ネ カ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

f シカタ ネー ドーナヤシカ

仕方が ありません, どうにもならないし。

という言いかたが見られる。

岐阜県美濃北部では、「カ」の広範な用いかたを聞いたことがある。中学生女生徒どうしも、会話で、よく、「……ナイ カ。」（何々じゃない？）の言いかたをしていた。ぞんざいではない表現にも、ふつうに「カ」が用いられていたようである。「飯台のところありません？」というの、

○ハンダイノ 下コニ ナイ カー。

であった。『北飛驒の方言』には、

アラスカ あるものか。「主に女」

が見える。『飛驒のことば』にも、「一あらすか」が見える。なお、

あるないか （句）あるではないか。（竹原）＝あるなかい。

というのも見える。

愛知県下には、「イージャン カ。」（いいじゃないか。）など、「〜ジャンカ。」の言いかたがおこなわれており、「〜ジャン。」ともある。三河北部での、

○ホンナ コタ アラー カ。

<そんなことはあるうか。> “ありはしないことになる。”

は、反語の「カ」を示すものである。「アラー カ」とともに、「アラー ス カ」がある。愛知県下の、

○キテ チョー カ。

来てくださいますか。

では、「ちょうだい」の「チョー」を受けて、「カ」がはたらいている。

静岡県下にも、たとえば、御前崎近くでの言いかた、

○イッテ^ーグルカー。

行ってくる？（相談のことば）（青女問）

など、「カ」のはばびろい用途のさまが見られる。

長野県下にも、さきの三河などと同様に、「〜ジャンカ。」「〜ジャン。」が見られる。

山梨県下、西部山地の奈良田方面には、

○コ^ーコ^ーシユ。イ^テ（デ）カ。

この衆。おいでですか。

との言いかたがあるという。清水茂夫氏の「奈良田ことばの語法」（『奈良田の方言』）には、

勧誘や希望を表わす言い方として、共通語で「行こうではないか。」「この絵をくれないか。」など反語的に表現する方法があるが、奈良田では「行カデカ。」「コノ絵ヲ呉レデカ。」などと言う。

との記述が見られる。

中部地方内の「カ」の用法に、一つ、特説すべきものがある。それは、永田吉太郎氏が、「勧誘或は意向を表す形式」とされたものである。氏の「終助詞私見、シを中心として——方言語法の問題（五）——」（『方言』第四卷第十一号 昭和9年11月）には、

ほど、静岡県の西部、長野県の一部から、富山・石山・岐阜・愛知・三重などの諸県に互る分布が認められる。

と、その分布の説明が見える。

以下に、県別で実例をあげてみよう。福井県下にも問題事例があって、『福井県方言集』には、

エコマイカ 行かうか

などの記事が見える。石川県下の『加賀ことば』（方言絵はがき）には、

アンタ、ドツカへ、スズンニイツテ、コマイカ

あなた何処かへ涼みに行きませうか

との言いかたが見える。富山県下の一例は、

団子して食ふまいか。(富山市近在) <永田氏上記論文による。>

である。つぎに、佐渡にも問題の事象が見られて、鈴木棠三氏の「佐渡昔話」(『昔話研究』第十六号 昭和11年8月)には、

「そんなら借りに行つて来まいか」

とある。岐阜県下の一例は、「ハヨー イカマイカ (早く 行こうよ)」である。

(『郡上方言』) 愛知県下の一例は、渥美半島の、

○イカマイ カー。

行きましょうか。

である。(これについて、土地の人は、「「イカマイ。」でもいいんだが、」と言った。) 静岡県下でも、「行カマイ カ。」の言いかたがよく聞かれる。長野県飯田市での例は、

○オカーサマ ハヤク ゴハン タベマイ カ。

お母さん、早くごはんをたべましょう。

である。山梨県下には、「～マイ カ。」がない。

「カイ」もまた中部地方によくおこなわれており、問い・受けひき・意向表明・抗議・反駁・勧誘・依頼・叱責・命令などの諸用法が見られる。

福井県下の例では、若狭の、

○マーン ソーデ ゴザンス カイ。

まあそうでござんすか？

などがある。ていねい表現にも「カイ」が用いられている。『福井県方言集』には、「イヤユワントキナンカイ。(いやと言はずにおきなさいよ。)」というの

がある。(若狭遠敷郡のものであるという。)若狭で、「カイ」が「カエ」に近いものにもなっているか。

『石川県方言彙集』には、

しったかい シツタコトカ { 立腹シタルトキニイフ「おれが 鹿
しつたかい」トイフガ如シ

などとある。

おかんかいか オヨシナサイ 鳳

ともある。——「カイカ」の複合形が注目される。能登での、「イカッシ カイ。」(行きなさい。)などの言いかたに見られる「カイ」は、ただの「カイ」ではあるまい。(「これ」的な「カイ」ではないか。)[「カイネ」はよいことばづかいになるという。

富山県下では、「カイ」が「ガイ」ともなっている。

○パー ナン シトル ガイ。

“おまえは何をしているか。”

などとある。「カイ」が「カエ」に近くなったりしてもいるか。

新潟県下、西南辺の「ソー シマイ カイ。」は「そうしよう。」(賛成の意)である。(p. 480) 押見虎三二氏教示の、県南秋山郷のことばには、

○センセー オチャ ノマネ カエ。

先生、お茶を飲みませんか。

などというのがある。この「カエ」は、「カ」に「エ」がついたものなのか、「カイ」的なものなのか。

岐阜県下の飛驒には、「あらすかい(句)あるものか。(断定的)(男, 卑)」などの言いかたが見える。(『飛驒のことば』)高山市で私が聞いた「カイ」例は、

○何々 セニャー ダチカン ナエ カイ。

何々しなきゃ“つまらんじゃないか”。

である。『岐阜県方言集成』には、恵那郡の、

そうかいん（さう）〔句〕さうですか。

が見える。「カイン」が注目される。（あまり見られない形である。）

愛知県下、三河のことばで、「オッカー マンマ タペマイ カイ。」というのは、「母ちゃんごはんたべようよ。」である。三河奥の「ホンナ トコイ イカース カイ。」は、「そんな所へ“行かない”。（強い否定）」との意のものである。このほうで、「カイ」は「カー」よりもていねいだと言われている。

『静岡県島田方言誌』には、

イカスカイ いかないよ 行かないよ

とある。

ソーダカイ さようですか ほんとにソーダカイ

ともある。県下に、「カエ」も見られる。——「カイ」に近いものもあるか。

長野県下に、「ホー カイ。」（そうかい。）など、かざりけのない「カイ」がよくおこなわれている。「ナシ カイ。」（ないかい。）などの言いかたもあるのか。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条には、

*m*イタカイ

おいでですか。

とある。「イル カイ。」ではなくて「イタ カイ。」とあるのが、まず注目され、つぎに、これが、「おいでですか。」とされているのが注目される。

山梨県下での、私の調査結果には、つぎのことがある。「カイ」や「カ」は、同等以下のものにつかわれる。目上には、「カナ」がつかわれる。

「カイ」からの転訛形「キャー」その他のおこなわれることは、およそつぎのとおりである。

福井県若狭に、

○アー ソー キャー。

あ、そうかい。（老男→老女）

など、「キャー」が見られる。

石川県下にも、「キャー」が見られる。単純な「カイ」の「キャー」は、どちらかというとな登によく聞かれるのか。

富山県下にも、「ケァー」などが聞かれる。

○アンタ シモムラマデ イク ガキャー。

あんたは下村まで行くのね？

などともある。

岐阜県下に「キャー」があり、飛騨で、

○アッチー イク ノキャー。

あっちへ行くのかい。

などの言いかたがよく聞かれる。美濃・尾張にわたって、

○ホー キャ (ケァ) ー。

そうかい。（“そうですか。”）

などの言いかたがよく聞かれる。「カイ」に「もし」の「も」のついた「キャ (ケァ) ーモ」も、美濃・尾張のものである。「ソー キャ (ケァ) ーモ。」（そうですか。）などとある。

静岡県下にも「キャ (ケァ) ー、キャ」がある。

○ウラー ウチー キテ クレル キャー。

わしのうちへ来てくれるかい？

は、伊豆北部での一例である。

○ハヤ ジカン キャー シナエ ケァー。

もうバスの時間が来やしないかい？ （老女→中男）

は、伊豆南端での一例である。ついでに、熱海市初島の例をあげるならば、

○ウチー キテ クレル ケァー。

うちへ来てくれるかい？

がある。

「カイ」の転訛形に、「ケー」となったものもある。転化しきった形の「ケ

ー」「ケ」は、中部地方によくおこなわれている。

福井・石川・富山の諸県にこれがよく見られ、新潟県下にもこれがあり、岐阜県下・愛知県下・長野県下にもこれがある。静岡県下・山梨県下でも、これがよく聞かれる。一般に、「ケー」とともに、「ケ」もまたよくおこなわれている。

中部地方で、「キャー」「ケアー」のおこなわれる範囲にくらべて、「ケー」「ケ」のおこなわれる範囲がより広いのは、注目される。[ai] 連母音の相互同化では、[e:] または [e:] のおちつきを見せることが、より自然で、よりありがちなのか。

福井県下では、若狭にも越前にも「ケー」がよくおこなわれている。越前の「あ、そうかい?」は、「ア、ホーケー。」である。越前に、短呼の「ケ」もよくおこなわれている。越前に、「ケイ」もある。

○ウチ^ア オ^ババ ミ^マヘナンダ ケイネー。

うちのおばばを見ませんでしたかね?

は、越前西岸での一例である。

石川県下で「ケ」「ケー」は、ややていねいにも用いられているか。

○カイスイヨクニ ゴザラン ケー。

海水浴に行きなさらんかね?

は、能登西岸での一例である。短呼の「ケ」が、やはり本県下でも、よくおこなわれているか。加賀に「ケイ」もあるらしい。

奥能登の「アツイ アケー。」(暑いですね。)などの言いかたに見られる「ノケー」の「ケー」は、「カイ」にかかわるものではあるまい。——「これ」系の文末詞だと思われる。

富山県下にも、「ケー」「ケ」のある中に、「カイ」系ではない「ケー」もある。「カイ」の「ケー」が、「ゲー」にもなってもいる。本県下にも、やはり、短呼の「ケ」もかなりよくおこなわれているか。「ソー ケー。」(“そうですか。”)は、富山弁での「ケー」例である。

新潟県下で、佐渡にも越後にも、短呼ぎみの「ケ」が聞かれ、かつ、「ケー」がおこなわれている。「オル ケー。」（おるかい？）は、佐渡での、かんたんな訪問辞である。越後新発田では、

○キョー ー ダイ。キテ クレツ カエイ。
きょうどうだい？ 来てくれるかい？

とも、

○キョー ー キテ クレン ケー。
きょう来てくれない？

とも言っている。

岐阜県美濃での一例は、

○ババヌキー ショー ケー。ババヌキー セン カヤ。ミンチデ。
ばばぬきをしようじゃないの？ばばぬきをしない？みんなで。

である。——子どもたちがこう言っている。

愛知県下では、「ケー」「ケ」は、おもに三河に聞かれがちなのか。

○ハチジュークダトカ ユワレタガ、ホー ナラレル ケ。

八十九歳だとかおっしゃったけど、そんなにおなりなの？

は、三河西南部での一例である。「ケー」の「ケン」もあるか。——定かではない。

長野県下に、「ソー ケー（ケ）。」（そうかい。そうですか。）などは、広く聞かれようか。

静岡県下での、「アー ソー。シランケ。」（ああ、そう。“知らなかった。”）などの「ケ」は、過去追想の形態素「ケ」であって、「カイ」の「ケ」ではない。これとは別に、「カイ」の「ケー」「ケ」が聞かれる。「ソー ケー。」（そうかね。）「ソー ケー。」（そうかい。）などとある。

山梨県下でも、「そうかい。」の「ホー ケー（ケ）。」などが、よく聞かれる。
○コンヤ ウチー アスビー コン ケ。

今夜うちへあそびに来ない？

は、県下西南部での勧誘の「ケ」である。——人は、「ケ」を、よいことばだと言っている。“目上の知らぬ人に、あがめて言う。”などとも言っている。

「カイ」の「ケ」の変転と思われる「キ」がまた中部地方内にある。——石川県下に、これが見いだされるようである。

石川県下は、「ございます」も「ゴザイミス」と言っている所である。単純な「カ」が、すぐに「キ」と言いかえられることもあったのかどうか。ともかく、「ございミス キ？」などの言いかたがおこなわれている。

○ゴッサ エ[ε]ラン キー。

おちまつばはいりませんか。(もの売り声)

は、能登半島西岸での「キー」ことばである。

「キョン」というのが、愛知県下に見いだされる。『名古屋方言の語法』には、

「キョン」「ヨン」敬讓の名詞をつくる「ソン」とともに残る土族語の代表的のものであるが、今は殆ど聞かれない。

ホー キョン さうかえ

読メル キョン 読めるかえ

とある。芥子川律治氏にも、「キョン」のご指摘がある。

「カイ」の「ケー」「ケ」に関係のあるものか、「コー」「コ」というのもできている。

福井県下に、これがいちじるしい。

ついでに、石川県下に、「アル[↑]コー。」(あるかい?)などと、「コー」「コ」がよくおこなわれている。

富山県下にも「コー」がある。

「カ」の「カン」が、また、中部地方にも見いだされる。

南海道・南東近畿を受けて、東海道の「カン」がある。愛知県下は、「カン」のよく聞かれる所である。

○キョーワ トーフワ ヤメタ カン。

きょうは、豆腐をつくるのはやめたかね。（老男 豆腐屋へ電話）
は、渥美半島での一例である。

静岡県下にも、「カン」がある。

転じて、石川県下にも「カン」が見いだされる。『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士町」の条には、

fウン クテ イキャ ドーアルカン⁴⁾

うん、食べて 行ったら どうなのですか。

4) 逐語的には「食うて行き
ゃどうあるか」となる。

とある。

富山県下にも「カン」があるらしいが、定かではない。新潟県下も同様である。

※ ※ ※

中部地方の、「カ・カイ」に関する複合形の文末詞には、注意すべきものが多い。

まず、「カナ」など、その下部に他の要素をとるものを見るならば、「カナ」（「ダカナ」も）「カイナ」（「キャナ」「ケナ」も）「カネ」「カイネ」（「ガイネ」「ガイネ」も）「カノ」, 「カヤ」「カヨ」, 「カサ」, 「カシ」「カイン」（「ケン」も）「キヤーモ」などがある。

『能登木郎方言考』には、「食べたカカ（食べたかよ）」が見える。——「カカ」の重複が目される。

岐阜県下に「ヤカ」がある。

富山県下に「ゾイカ」がある。

「ノカ」（「ノンカ」も）「ノカイ」「ンカ」などは、中部地方に広く見られるものである。「ンコ」は、福井県下に見いだされる。長野県下には「ンク」が

見いだされる。

「トカイ」が新潟県下に見いだされる。

つぎに、「ガカ」(「ガーカ」「ガエカ」も)「ガカ」(「ガーカ」も)が、石川県下・富山県下に見いだされる。「ガンカ」が新潟県下にある。

「テカ」が、長野県下などに見いだされるようである。

「ダカ」(「ラカ」も)が、愛知県下・静岡県下・山梨県下・長野県下・新潟県下などに見いだされる。愛知県下・長野県下などに「ダカイ」もある。

「モノカ」「モンカ」「モンカイ」などは、広く見いだされるものである。

奥能登方面の「ノカイ」「ノケ」などは、別にあつかうべきものであろうと考える。

七 関東地方の「カ・カイ」ほか

関東地方にもまた、「カ・カイ」ほかがよくおこなわれている。——変化形のおこなわれることも、いちじるしいものがある。

「カ」よりも「カイ」のほうが、より一般的におこなわれているのであろうか。(民間日常の会話では、「カイ」が出がちのことかと思われる。)

関東地方の「カ・カイ」に関しては、大橋勝男氏の『関東地方域方言事象分布地図』の第二巻「表現法篇」の Map 24・Map 25 に、その概況を見ることができる。——これには、変化形「ケー」「ケ」の分布相や、「カ・カイ」に関する複合形の分布相も見ることができる。

「カ」について見よう。全般に、これが、問い・受けひき・さそい・反駁などに用いられている。

神奈川県の「相模ことば」(日野資純氏『言語生活』第十八号)には、例の「ツージャンカ」(そうではないか)はかなり有名になったし、とある。

「東京都八丈町大賀郷」(『全国方言資料』第7巻)には、

m…………… ハジガマシク ナカローカ

恥ずかしく なかったですか。

とある。

埼玉県下での「カ」の一例をあげるならば、

○アソ^ンデ^ペー イテ ショ^ーガ^ナイ^ジャ ナイ カ。

あそんでばかりいて、しょうがないじゃないか。

がある。これは叱責の「カ」である。

群馬県下での一例は、

○ハン^ドソ^ン カー。

“半日やすみ”かい? (老女)

である。

関東北部ともなれば、「カ」も「ガ」となりがちである。

○セ^ドノ ホーイ イッ^タン^デ ネー ガ^ー。

せどのほうへ行ったのではないかい?

などと言われている。

「カイ」のおこなわれることは、全域にさかんなものがある。問いや受けひき、さそいなどに「カイ」がよく用いられている。「カイ」がかくべつに上品にも用いられるというようなことなどは、なさそうである。もっとも、朝日新聞昭和53年2月13日の「コトバの整理学」では、百目鬼恭三郎氏が、

また、群馬県の無敬語も有名で、以前は、「そうか」の語尾にイをつけて、「そうかい」というのが唯一の敬語だったといわれている。

と述べていられる。こう説かれてはいるが、この「そうかい」も、すこしくおちついて表現しようとする程度のものであろうか。

神奈川県下での、

○ア^ー, ソ^ー カイ。

ああ、そうかい。

などは、まったく通常体の返事である。

伊豆諸島内にも、「カイ」がおこなわれている。新島の一例は、「ソー[↑]カイ。」(そうかい。)である。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条には、あいさつことばの、

mヤドロ²⁾カイ

よく休みましたか。 2) 朝のあいさつのことば。

が見える。伊豆諸島内で、「カイ」が「カーイ」とも言われている。

東京弁での「カイ」のことは、言うまでもなからう。

千葉県下にもまた、「カイ」がよくおこなわれている。老年人に聞かれる一例は、つぎのものである。

○ドエ イガッシャル カイ。

どこへお行きかい？

埼玉県下の西奥では、

○ハーア, ソーデ ガンス カイ。

はあ、そうでござんすか。 (老女→藤原)

などの言いかたが聞かれる。

群馬県下の一例は、つぎのものである。

○コフ ヘンガ カイ。

このへんがかい？ (問いかえし)

茨城県下でなど、

○イル カーイ。

いるかね。(訪問辞)

のような「カーイ」も聞かれる。

関東東北部内には、「カイ」の「ガイ」も聞かれる。しかし、「カ」の「ガ」にくらべれば、「カイ」の「ガイ」は、よりすくないのではなからうか。

変化形「ケー」「ケ」のおこなわれることが、およそ、関東全域にさかんである。[ai] 連母音の相互同化による [e:] または [ɛ:] は、関東の地によく根づいているか。

神奈川県下の一例は、

○アー ホー ケー。

ああ、そうかい。

である。

『東京方言集』にも、

ソナコトイツタケー そんなこと言つたか

などというのが見える。

伊豆諸島内にも「ケー」がある。

千葉県下では、「ソー ケー。」「ソーッ ケ。」(そうかい。そうですか。)がよく聞かれる。浅野栄一郎氏の「千葉県長生郡一宮町方言」(『方言誌』第十六輯)にも、

さうですか { $\begin{cases} \text{ソッケ} \\ \text{ソッケー} \\ \text{ソーケー} \end{cases}$

が見える。

埼玉県以降の諸県にも、「ソー ケー。」(そうかい。そうですか。)の言いかたが、よく見られる。「ケー」が、まれまれに「ケイ」になることもあるのか。

栃木県下では、「ホー ケー。」(そうかい。)なども聞かれる。

関東東北部では、「ケー」の「ゲー」も聞かれる。

○タベー ゲー。

たべないかい?

○イダ \nearrow ゲー。

いるかい? (訪問辞)

などはその例である。

「カイ」の変化形「キヤー」「キヤ」は、関東に通有のものではなさそうである。主としては、群馬県下にこれの見られるのが注目される。

○ソ^ー キヤー。

そうかい。

は、群馬県南での一例である。——「ケヤー」の言いかたも聞かれるか。『佐波方言之研究』には、「ソーキヤ（ー）」などが見える。『村のことば』には、「キヤア」についての、

カヤアと同じ。主として目下に使う。「クウキヤア」食べますか。

との説明が見える。井口実氏の「上州言葉の『ノオ』と『ナア』」（『言語生活』第二十六号）には、つぎの記述が見られる。

「キヤア」は「ユクキヤア」（行くかい）「キクキヤア」（聞くかい）となり、疑問の形に見られる。

関東域のうちに、「カ」の「カン」があるかどうか。——一般には、これがおこなわれていないのではないか。

ところで、『全国方言集』には、

ソーダカン 左様ですか 群馬県

との記事が見える。今日は、群馬県で、「カン」はどのような状況であろうか。

※ ※ ※

関東地方の、「カ・カイ」に関する複合形の文末詞には、「ノカ」「ノカイ」「ノケ（ゲ）ー」（「ノケ（ゲ）」も）「テカ」「ダカイ」「モノカ」（「モンカ」も）などがある。

○ハコガ^ー イーッ テカ。

箱が“いいのか？”（中男→老男）

は、神奈川県下での「テカ」の一例である。

○キョ^ー ド^ーイ [e] イク ダカイ。

きょう、どこへ行くのかい？

は、千葉県下での「ダカイ」の一例である。

○コラー オメーガ ヤッタ ダカイ。

これはあんたがやったのかね？

は、伊豆諸島の新島での「ダカイ」の一例である。

『全国方言資料』第2巻の「神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村」の条には、

*m*ソーヨ　　タマルモンカー

そうさ、　　たまるものかね。

とある。——「モンカー」が見られる。

「カ」のもとに他の要素のきた複合形、「カナ」「カヨ」などもおこなわれている。

大橋氏の、さきの Map 24・25 には、「カナイ」「カネ」「カイナー」「カヤ」「カイヨー」「ケーヨ」「カノンシ」「カシ」も見られる。

八 東北地方の「カ・カイ」ほか

東北地方にもまた、「カ・カイ」がよくおこなわれている。（「カ」は「ガ（ガ）」ともある。）他地方人である私などには、「カ」よりも「カイ」のほうが、よく耳につくように思われる。

「カ・カイ」が、普通度の品位で用いられており（ぞんざいな言いかたになるものとはかぎらず）、「カイ」はかなり品よく用いられたりしてもいる。

「カ」が、問い・うたがいがい・さそい・受けひき・意向表明・反駁その他に用いられている。

福島県下での例をあげるなら、西部の、

○オマガリ[i] シ[i] タ カー。

おじぎをしたか？

などがある。

宮城県下での一例は、

○シ[i]ッテッ カー。

知ってるか？ (小学生五女間)

である。

山形県下での一例は、

○フンベ ガ。

“降るだろうか。”

である。

秋田県下での一例は、

○ヤー，テデ イタ カ。

やあ、亭主はいるか？

である。

岩手県下での一例は、

○ヨシ[i]ハル[ü]チャンダッタ カ。

好春ちゃんだったか。(中男→幼男)

である。——これは、小さい坊やに対する、いたわりぶかい言いかたになっている。

青森県東部での一例は、

○イグ ガ。

“帰るか？”

であり、同県西部での一例は、

○イーンシ[i]タ ガー。

いますか？(訪問辞)

(“すこし他人行儀”だという。)

である。県東南部で、私は、女性が男性に、いわゆる無敬語の文表現をし、それを「カ」でむすぶのをよく聞いた。この種のことが、ふつうの会話法のようなものである。県西部でも、いわゆる無敬語の、男女差なしのことばづかいがよく聞かれ、そこに「カ」のむすびもよく出ている。——「カ」のむすびが、多く、さ

ほど下品ではない気分のものになっていよう。県西部で、「“やりなさい。”」の「ケ[e]へ[e]ン ガー。」など、「カ」が「ガ」になっており、また、「ガ」にもなっている。

「カイ」が、問いや受けひきその他に、よく用いられている。——かなりていねいなことばづかいになることもあるのが注意される。

福島県下に、「カイ」はさかんである。私が県西北辺で聞いた例には、

○スポンジ[i] ナイ ホー イー [↑]カイ。

敷ぶとんはスポンジでないほうがいいですか？

がある。これは民宿の主婦が大学生たちに聞いたことばであった。「イー [↑]カイ」が注目される。福島市で、私が宿の人から言われたことばは、

○ソー [↑]カイ。

そうですか？

である。

宮城県下でも「カイ」がよく聞かれ、

○アイツ[ü] [↑]カイ。

あいつかい。(納得) (老男)

などがある。県南方面には、「カイン」の言いかたがある。

○アンダ コノ ス[ü]シ[i] ク[ü]ー [↑]カイン。

あんたこのすしを食うかい？ (“おとなのしたい人に”)

などと言われている。鼻音がともなえば、いちだんとしたしみぶかい言いかたになる。

山形県下での一例は、

○ホーゲン アル[ü] [↑]モンダ カイ。

やはりここにも、方言があるんですか？ (中男→藤原)

である。

秋田県北で聞いたものには、

○エー オテンキ [kçi] ダ ネ カイ。

いいお天気ですね。

がある。——人はこれを“よいことば”だとしていた。県南で聞いた、

○アキタマワリ [i] デ オカエイリ [i] カイ。

秋田まわりでお帰りですか？

は、わかりやすい、よいことばづかいである。

「岩手県九戸郡種市町中野」(『全国方言資料』第7巻)には、

mイッカンメカイー

1貫匁かね。

とある。

青森県下での例をあげるなら、

○ソー カイ。

そうかい。(中女→中男)

○コンヤ ク[ü]ル[ü]=[i] イ ガイ。

今夜“来てくれるか”。

がある。

「カイ」の訛形も、なにほどか見られる。

ところで、「キヤー」は、おもに秋田県下に見いだされる程度か。

○オメラ イガネ キヤー。

あんたたち、行かないかい？

などとある。

「カイ」の「ケー」(「ゲー」)が、福島県下に見られる。

○ア ソー ゲー。

ああ、そうかい。

などとある。『福島県方言辞典』には、

アッケイ [句]あるかい 浜北南会

というのが見える。宮城県下でも、「ケー」(「ゲー」)が聞かれる。——「ケ」(「ゲ」)の短呼もある。山形県下にも「ケー」があり、秋田県下にも「ケー」がある。

○何々 エガッ[↑]タ ケー。

何々はいいですかあ？

は、秋田県北での、野菜売りのことばである。県下で、「ゲー」もよく聞かれる。岩手県での好例を、今、私は持たない。青森県下での一例は、

○オト[↑]サン ○○マ[↑]デ ナンジ[↑][i]カン カカル[ü] ケー。

お父さん、○○までいく時間かかるかね？

である。津軽弁での、

○シャ[↑]ジ[i]ン デキ[kçi]タ ケァ。

写真できたかい？(写真できましたか?) (青男→写場主中男)

など、「ケァ」とあるのは、「カイ」の「ケ」に文末訴え音「ァ」のそえられたものである。

福島県下に、「カ」の「カン」がある。「ソー[↑]ガン。」(そうかね。)などと言われている。大石初太郎氏は、「悪いことば、いいことば」(『言語生活』第百四十号)で、

また、この地方(藤原注 福島県安達郡東和町針道)では、ソーダナ、コネーカはぞんざいないい方、ソーダナイ、コネーカイはていねいないい方である。年よりなどを大事にしていっそうていねいに話しかけるときはソーダナシ、コネーカシとなる。ところが、近ごろの子どもたちは、親にむかってもソーダナ、コネーカと平気でやる、とこぼしている母親もあった。

と述べていられる。県下の、東西に「カン」があるらしい。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条にも、

fアー ソーカン

ああ そうですか。

とある。

※ ※ ※

東北地方での、「カ・カイ」に関する複合形の文末詞には、「ノカ」「ダカ」「テカ」「テケ」, 「カナ」「カヤ」「カヨ」「カワ」「カシ」などがある。

「ノカ」の例は、
○アワネー ノガ。

あわないのか？

などである。

文政年間の『方言達用抄』〈仙台弁〉には、

こふだか。 こふかへ如此なるか
と云義。

とある。

「テカ」は「テガ」ともある。『野辺地方言集』には、「テガ」についての、

「といふのか」の約。「行つたテガ」は行つたのか。

との説明が見える。

宮城県下には、「カワ」が目だっている。『仙台の方言』には、

「おゆーわりであらんすかわ」（よなべでいらつしやいますか）

などがある。

「カシ」は、福島県下・山形県下によく見られる。（「カシ」の「シ」は「もし」の「し」であろう。それゆえ、「カシ」はよいことばになっている。）（『会津方言集（増訂版）』には、別の「カセ」形が見える。）山形県下では、「カシ」が「………… ガッス[ü]。」のようにもなっている。

「カイン」の訛形なども、諸方に見いだされるのか。

九 北海道地方の「カ・カイ」ほか

北海道にも、「カ・カイ」がよくおこなわれている。

「カ」は、「何々べ（推量の助動詞）カ。」などともある。

『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

fンダカー

そうかい。

などの例が見られる。

「カ」は「ガ」にもなっている。

「カイ」がよくおこなわれており、「カーイ」も聞かれる。

「カイ」で注目されるのは、これがやはり、ぞんざいではない言いかたになっていることである。私どもも、道内を旅行すると、方々で、たとえばタクシーの運転手から、敬語ぬきで「カイ」（問い）と言われる。

○ンタラ サンジョー カイ。

そしたら、三条かい？ （中男→私の友人）

は、東北海岸での一例である。土地っ子の、子どもがおやにも「カイ」をよく言っている。車中で私が聞きとめた一例は、

○ロクジッキロジャ ナイ カイ。

60キロではないかね？（母おやが、乗っている汽車のスピードについて、“いくらスピードを出してるかしら？”と言ったのに対する、小学生四女の返事である。）

である。無敬語での言いかたを「カイ」でむすぶのが、女性にもふつうなのを、私どもは注目せざるを得ない。

「カイ」は、ときに「ガイ」ともあり、「カイ」「ガイ」が道内に優勢のようである。

「カイ」の「キャー」もあるのか。『北海道風土記 童戯と方言』には、

やたきやーやつたか。与えたか

とある。

「カイ」の「ケー」もある。『北海道奥尻島方言の研究』には、

○リョーコチャン キテヤンノケ。

りょう子ちゃん来てたのかい。(40代*f*→30代*f*) <バス中にて>

などというのが見える。

※ ※ ※

北海道の「カ」に関する複合形の文末詞には、「テカ」「ダカ」「ノケ」「テケ」、
「カナ」「カネ」などがある。

十 おわりに

「カ・カイ」は、言語生活上、じつに有用の具である。これがにわかには除去されたと考えてみるか。私どもの表現生活は、その時、どうなるか。

「カ・カイ」の頻用のうちに、また、その用法の展開もいちじるしいものがあつた。複合形の形式にも、自在が見られるありさまである。

「カ」についても「カイ」についても、表現上でのその役わりに、かならずしも下品ではない表現をささえるはたらきが認められるのは、注目すべきことである。

「カイ」はともかく、「カ」が、必須の具として、今後も人々に活用されていくことは、多く言うまでもなかろう。

付 章 命令表現文での「ロ」と 禁止命令表現文での「ナ」と

一 はじめに

動詞の命令形に「受ケロ」などの「～ロ」形がある。また、動詞を用いての言いかたに、「受ケルナ」などの「～ナ」形がある。

私は、「受ケロ」などを、このまま一活用形——命令形——として認める。さらにはまた、「受ケルナ」などの「～ナ」形を、このまま動詞の一活用形、禁止形と見る。

しかし、「ロ」や「ナ」が、ときに終助詞ともされてきたであろうか。

いわゆる終助詞は、私の考える文末詞<文末助詞>である。私の、文末詞をその全体にわたって問題にしようとする場では、終助詞ともされることのある「ロ」や「ナ」についても、いくつかの考説をかかげておく必要がある。

二 「ロ」について

「受ケロ」「起キロ」など、「～ロ」を見せるのは、東国地方方面と九州内とである。

九州内では、熊本県下・長崎県下・佐賀県下に、これが見いだされる。念のために、実例をあげておこう。

○ハヨ シタク セロイ。

早くしたくをせい。

(「セローイ」となることもある。このばあいも、文末詞の問題になるのは「イ」である。)

は、熊本県天草下島で聞いた例である。

○ソア クッシバ イッチョ クイド。

その菓子をつくれろ。

(この例では、「クイロ」が「クイド」になっている。)

は、長崎県西彼杵半島での一例である。——佐世保市で聞いたことであるが、「セロ。」は、目下に言い、また同輩にしたしく言うとのことである。「シロ」とも言うが「セロ」が多い。”とのことであった。

○ナゲロー。

“なげなさい。”

は、佐賀県西南部での一例である。山口麻太郎氏の「佐賀県^{マダラ}馬渡島の方言」(『方言』第二巻第十号)には、「オイ本バドイカトツテクイロ。(おい、本を、どれか、とつて呉れ。)」などの例が見える。

いずれにもせよ、九州内の「〜ロ」には、動詞命令形という一活用形の様相の明らかなものが見られる。「セローイ」などの言いかたの成りたっているところには、そのことが、ことに明らかであろう。

天草での「モー オキロイ。」などは、じっさいに、「もう起きろよ。」といった心もちに近いものであろう。「オキロー」からの発展形「オキロイ」ができていところにも、よびかけ気分の「イ」が認められそうで、それゆえ、「オキロ」の動詞命令形定立が明らかである。

中国地方にも、たとえば周防大島の安下庄で、牛を操作することば、「左へ。」の「アッセ。」とともに、「右へ。」の「出ロ。」が聞かれるという。(国安功氏の調査による。)「出ー」命令形を通常とする中国地方に「出ロ。」があるのは、異数のことである。こういうさいには、とくに、「ロ」文末詞をとりたててもよいのかもしれない。

土居重俊氏の『土佐言葉』には、

高知市近辺では、ロはつかぬ。ただし物部村旧上葦生村や大豊村旧豊永村では、七十才以上の老人が、

モー オソイケン ヤスメロ（もうおそいから休みなさい）

マー チャー ノメロ（まあ茶を飲みなさい）

ネーヨ マー クエロ（ねえさんまあ食べなさい）

ソレホド イニタケリャ カッテニ イネロヤ（それほど帰りたければ勝手に帰れ）

のような言い方をする。主として目下に対して言う場合である。また中村市や大方町の三、四十才台の男子で、受ケロ・下ゲロ・交ゼロ…の言い方をする者が若干ある。

との記述が見える。さきには、「〜ロ」活用形分布の大勢を述べて、高知県下のことにはふれなかった。しかし、今、土居氏によれば、以上のことが注意される。「イネロヤ」とあるのでは、「ヤ」が明らかなよびかけことばであるだけに、「イネロ」のまとまりがとらえやすかろうか。ところで、「イネロ」の「イネ」も、すでに命令形である。「飲メロ」「食エロ」など、みな、「飲メ」「食エ」などの命令形のあとに「ロ」のついたものである。こういう点では、ことによっては「ロ」文末詞を分別することができるかもしれない。（とは言っても、「飲メロ」の完結性が感得せられる。）一私見であるが、「飲メロ」「食エロ」などの「ロ」は、「飲メレ」「食エレ」など、「ワレ」系の「レ」がそわって、やがてそれが「ロ」に転化したというものであるかもしれないと思う。——その「レ」がそわったのだとしたら、それは文末詞「レ」が最初にはたらいたと考えられるわけである。（「レ」が「ロ」に転化しては、やがて活用語尾ふうにもなったであろう。）

近畿地方の三重県下には、特別の残存、命令形の「〜ロ」がある。巖佐正三氏は、「平古に残る桑名武家ことば——アクセント・語法について——」（『三重県方言』第3号）で、「命令形（一段、サ変動詞）にロが現われる。」として

いられる。——「桑名市在住の旧土族」のばあいも同様のようである。

ついでに一般論を試みれば、転封によって、東国の藩主が西に移ったばあい、そこに、言語島ができたりするのは当然であろう。したがって、そこには、「～ロ」ことばが温存されたりもしたことであろう。

私が十津川域で聞いたことばに、

○ハ[↑]ヨ イケ[↑]ロ ヨ。モッテ。

早く行けよ。持って。

というのがある。これの「イケ[↑]ロ」は、前出の、高知県下の「ヤスメロ」などに等しいものである。私は、ここの「行ケ[↑]ロ」に関して、早く、「行ケ[↑]レ」ではないかと思ってきたのだった。紀州方面は、「ワレ」系の文末詞「レ」「ラ」のさかんな所である。関連する十津川域も、しぜんに、「レ」「ラ」を示して、かつはそれが、「ロ」に転化することにもなったかと考えられる。それはともかく、このばあいも、「行ケ[↑]ロ」が一完結形であることはたしかであろう。「行ケ[↑]ロ ヨ」とあるのからしては、もはや「ロ」文末詞はとりたてることができない。

中部地方のほぼ東半から、いわゆる東国的な「～ロ」命令形が見えはじめる。

新潟県西南辺での言いかたには、

○シ[↑]ッカリ ベン[↑]キョ シ[↑]ロ ヤ。

しっかり勉強しろよ。

などがある。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条にも、

fマメデ イッテ カワレロヤー

「元気で 行って 飼ってもらいなさい」

というのが見える。こうした「ヤ」文末詞でのよびかけのセンテンスに「～ロ」形があるので、「ロ」は文末詞とすべきものでないことが明白である。

関東地方にあっても、たとえば埼玉県秩父では、

○ハイグ オキロ ヨー。

早く起きろよ。

などと言っており、「ヨ」のよびかけが明らかで、「起キロ」の、活用形としての一完結形のありさまもまた受けとりやすい。茨城県下例にも、

○カッテ キテ クロ ヨー。

買ってきておくれよお。 (主婦→夫)

などがある。

「クレロ」が「クンロイ」となっても、ものは、依然として命令形である。

上野勇氏の『ことばのスケッチー利根のことば一』には、

来ナーロ、見ナーロというのが目についた。どれもイ段から、ナーロとつづいて、命令の意を表わすという。

この記事が見える。これはどういう「ロ」なのであろうか。(「来ならう」という、一種の命令表現法のものかとも思われるが。)

東北地方一般に、「〜ロ」命令形がおこなわれており、「ロ」文末詞は受けとられない。

「〜ロ ヨ。」のような言いかたは、別によくおこなわれている。

私が津軽で聞いたことばに、

○ハヤグ〔ü〕 イゲロー。

早く行ゲロ。

というのがある。この「イゲロー」はどういうことばなのか。聴取したさいの私の気もちは、「ロー」は「ト」のような? というものであった。

以上、要するに、日本語諸方言上では、今日、明確な「ロ」文末詞は認められないようである。文末に「ロ」のあらわれるばあいには、それが、'終助詞'ではなくて、命令形語尾である。

この解は、中等学校文法教科書の、動詞活用表にも見える。すなわちその命令形表示の欄には、「〜よ」と「〜ろ」との併記が見られる。文語動詞の活用表にも、命令形の欄に、「〜よ」形があげられている。「よ」を命令形にこめて考えるのと同様に、「ろ」が命令形にこめられている。

三 「ナ」について

「ナ」もまた、ときに終助詞とされたりもしてきたであろうか。

私は、「行クナ」「起キルナ」などのそれぞれを、そのまま完結の禁止命令形と見る。すでに、「起キロ」などを、完結の命令形と見た以上、これとの対比で、「起キルナ」などを、完結の一活用形、禁止命令形と見ることが合理的である。

「行クナ ヨ。」などと言われているのは、「行クナ」の完結性をよく示すものである。

「そんなに しなサンナ。」「もう、しなさいますな。」など、助動詞の活用にも、「〜ナ」禁止命令形が見られる。「ナ」は、文末詞とはとれない。

「モー シナサイマスナ ヨ。」などともあって、「〜ナサイマスナ」の類は、特定の訴えことばをふくむものでないことが明らかである。

否定形要素の「ナ」にしても、単純命令形要素の「ロ」にしても、もともとは、今日、見られるような低卑のはたらきを示すものではなかったのではないか。それはさておき、現用の「〜ナ」や「〜ロ」は、文表現を、上品ではない、きつい効果のものにすることが注目される。したがってと言おうか、これらの言いかたをとるセンテンスをむすぶ文末詞の来着には、おのずから限られたものがある。

以下、下巻につづく。

索引

○二種の索引を設定する。

○語句排列は、アイウエオ順によらないところもある。

I 方言事象索引

- [ア]
- [a] 音……………242
- [ai] 連母音……………362
- 「あの ヨー。」……………101
- 「あの ヨー。」式の言いかた……………101
- [a] 母音……………2, 270
- アンサ……………229
- [イ]
- 「イ」の属……………158
- 南島地方の「イ」ほか……………161
- 九州地方の「イ」ほか……………164
- 中国地方の「イ」ほか……………171
- 四国地方の「イ」ほか……………176
- 近畿地方の「イ」ほか……………178
- 中部地方の「イ」ほか……………184
- 関東地方の「イ」ほか……………190
- 東北地方の「イ」ほか……………193
- 北海道地方について……………196
- 「イ」文末詞…… 102, 158, 159, 160, 162,
165, 166, 171, 172, 178, 180, 181,
182, 183, 185, 190, 191, 195, 196,
197
- イ……………159, 160, 161, 163, 164, 165, 167,
170, 171, 172, 174, 176, 177, 178,
180, 181, 182, 186, 189, 190, 191,
193, 194, 197
- イ [ji]……………162
- イー……………196
- イ[↑]……………180, 181
- イー……………179
- イイー……………163
- イイッサ……………228
- 「イ」訴え音……………184
- イエ……………120
- イエイ……………130
- イ_エー……………145
- イ_エー……………103, 152
- イ_エン……………135
- 「イ」音……………164
- [i] 音……………157, 164
- [i] 音効果……………161
- [j] 音効果……………3, 4
- [ji] 音の文末詞……………162
- 「イ」音尾 ……4, 171, 172, 175, 176, 185,
188, 189, 195
- 「行コイ」式のもの対「イコー イ」
 式のもの……………167
- イナ……………168, 171, 173, 175, 176, 177, 178,

	179, 180, 183, 185, 187, 188, 189, 193
イヂー	175
イナー	173
イネ	173, 179, 184, 185, 186, 189, 193
イネー	173
イノ	171, 173, 175, 179, 184, 185
「イ」の訴えの効果	159
イノー	169, 173
「イ」の効果	167
「イ」の待遇効果	167
「イ」の文末詞らしさ	192
「イ」文末訴え音	186, 187, 192, 193, 195, 197
「イ」文末詞化	171
イヤ	168, 171, 173, 182, 185, 192
いや	176
イヤナ	189
イヨ	5, 9, 12, 61, 173, 178
イン	164
いん	187
「イン」形	162

〔ウ〕

ウェー	103
受けひいての「エ」	113
受けひきの「エ」	109

〔エ〕

「エ」の属	102
南島地方の「エ」ほか	103
九州地方の「エ」ほか	103
中国地方の「エ」ほか	111
四国地方の「エ」ほか	115
近畿地方の「エ」ほか	119
中部地方の「エ」ほか	132

関東地方の「エ」ほか	145
東北地方の「エ」ほか	148
北海道地方の「エ」ほか	156
「エ」文末詞	102, 124, 139, 197, 412
エ	157, 160, 197, 362
エ→イ	112, 157
えぁ	153
エア	153
エイ	141
エー→ウェー	103
エーン	104
エシ	135
エッ	109
エナ	122, 137, 189
エノ	137
「エ」の分布	157
〔e〕母音	124, 242
エモ	139
エン	131, 136, 139, 153
エンシ	137

〔オ〕

〔oi〕連母音	362, 375
〔o〕母音	2, 3
起きよ	4

〔カ〕・〔ガ〕・〔カ〕

「カ・カイ」の属	409
南島地方の「カ・カイ」ほか	415
九州地方の「カ・カイ」ほか	418
中国地方の「カ・カイ」ほか	442
四国地方の「カ・カイ」ほか	447
近畿地方の「カ・カイ」ほか	457
中部地方の「カ・カイ」ほか	477
関東地方の「カ・カイ」ほか	489
東北地方の「カ・カイ」ほか	494

北海道地方の「カ・カイ」ほか…499
 カ・カイ…409, 411, 412, 418, 434, 440,
 446, 473, 488, 489, 493, 494, 499,
 501
 カ…409, 410, 412, 415, 416, 418, 423,
 426, 430, 435, 438, 441, 442, 447,
 448, 458, 459, 461, 469, 489
 「カ」に関する複合形…414
 カ—ガ…479, 490, 500
 カ—ガ(ガ)…494
 カ—コ…472
 ガ…416, 417
 カアイ…451
 カーイ…435, 491, 500
 カーエ…107
 ガーカ…489
 ガーカ…489
 カーナ…441
 カーレ…473, 474
 カーン…437, 440, 472, 473
 カイ…159, 177, 196, 197, 409, 410, 412,
 416, 418, 419, 420, 426, 431, 435,
 439, 441, 442, 443, 448, 449, 450,
 452, 453, 454, 455, 461, 463, 464,
 465, 481, 483, 489, 490, 500
 カイ→カーイ…424
 カイ→ガイ…491
 「カイ」「ガイ」…500
 カイ→ガイ…482
 ガイ…177
 カイ→クワイ…432
 カイ←カエ…112
 ガイエ…121
 カイカ…482
 カイカー…478
 カイサ…221, 225
 カイシ…475, 488, 499
 カイナ…415, 422, 457, 473, 474, 477, 488

カイナヨ…49
 カイネ…422, 482, 488
 カイナー…494
 ガイネ…488
 ガイネ…488
 カイノ…415
 カイヤ…415
 カイヨ…5, 12, 15, 53, 55, 59, 72, 415
 カイヨ…49, 494
 ガイヨ…5, 63
 ガイヨ—ガイヨ…57
 カイン…450, 465, 483, 496
 カウ←コウ…429
 カエ…104, 105, 107, 110, 113, 114, 116,
 117, 118, 119, 121, 122, 123, 125,
 127, 130, 131, 132, 133, 134, 136,
 137, 140, 141, 143, 144, 145, 146,
 147, 148, 149, 150, 441, 443, 444,
 451, 452, 454, 462, 463, 465, 482,
 483
 カエ [je]…112
 カエ(ガエ)…151, 153, 155
 かエ…157
 カエ←「カヨ」「カヤ」…118
 ガエ…104, 111, 118, 119, 121, 123, 125,
 127, 133
 ガエ…134
 カエ…111, 113
 ガエカ…489
 カエン…111, 137, 138, 140
 カオ…422
 カオ→コー…421
 カカ…488
 ガカ…489
 ガカ…489
 カ語尾形容詞…279
 カサ…219, 224, 225, 231, 236, 488
 カ(ガ)サ…249

ガ (ガ) サ	225
ガサセ	249
カサン	225
ガサン	225
カシ	415, 475, 477, 488, 494
カシ—カセ	499
カセ—カシエ	237
ガゾ	310, 312, 328
ガゾナー	310
カッチャヨ	62
ガト—ゼ	375
カナ	415, 416, 457, 473, 477, 483, 488 494, 499, 501
カナイ	494
カナエ	110, 143
カナヨ—	20
ガナヨ—	58
カネ	415, 488, 494, 501
カノ	415, 488
カノンシ	494
カヤ	415, 416, 417, 418, 422, 457, 488, 494, 499
ガヤ	417
ガヤ—	36
ガヤ—	416
カヨ	5, 12, 15, 17, 20, 24, 27, 31, 38, 41, 47, 53, 55, 57, 60, 62, 63, 67, 69, 72, 77, 80, 81, 84, 86, 88, 97, 415, 422, 488, 494, 499
カヨ (ガヨ)	92, 94, 95
ガヨ	5, 12, 13, 15, 27, 31, 35, 38, 41, 43, 47, 53, 55, 57, 62, 64, 75, 86, 310
ガヨ—ガヨ	57
カヨイ	64
かよい	41
ガヨ—	36
カヨ—イ	41

カレ	415, 457, 473, 474, 475, 476, 499
カン	412, 428, 429, 433, 436, 437, 440, 445, 455, 472, 473, 488, 493, 498
カンエ	123
ガンカ	489
感声の文末詞「ダ」	339, 400, 403, 405, 406
間投詞「ダ (ンダ)」	402
関東性の「サ」←関西性ないし西国 ふうの「サ」	250
願望のばあいの「エ」	133
カンモ	440

〔キ〕

キ	413
キ←ケ	452, 470, 487
キ←ケ—	470
キヤ	452
キヤ	427, 428, 433, 439, 493
キヤ—	427, 433, 435, 444, 450, 454, 466, 483, 485, 493, 497, 500
キヤ (ケア) —	484
キヤ—ケ—	420
きヤ—け—	444
キヤ—イ	444
キヤ—モ	488
キヤ (ケア) —モ	484
キヤナ	488
キャン	435
キヨ	452
共通語の「よ」	101
キョン	487
禁止命令表現文での「ナ」	502

〔ケ〕・〔ゲ〕

ケ	413, 420, 421, 424, 428, 433, 439,
---	------------------------------------

448, 450, 451, 452, 454, 455, 467,
469, 470, 485, 489, 492

ケ (ケ)498
 ケ→キ454, 470
 ケァ498
 ケァー484, 485
 ケイ485, 492, 497
 ケー409, 420, 421, 424, 428, 433, 436,
 439, 445, 450, 451, 452, 455, 467,
 469, 470, 472, 484, 489, 492, 501
 ケー→ゲー492
 ケー→ゲー485
 ケー (ゲー)497, 498
 ケー→ケイ453
 ケー——コー452
 ケー>コー454
 ケーヨ62, 63, 494
 ケシ488
 ゲゾー333
 ケナ474, 488
 ケヤ474
 ケヨ5, 41, 57, 84
 ゲヨ5
 げよ57

〔コ〕

コ409, 421, 422, 429, 448, 454, 469,
 470, 471, 487
 コ——コイ425
 〔コ〕〔コー〕413
 コイ——カイ472
 コー421, 429, 453, 454, 470, 471, 472,
 487
 コー→コーン437
 コテサ225
 コトエ138
 コトヨ28, 29, 34, 38

〔サ〕・〔ザ〕

サ行音ザ行音文末詞199
 「サ」の属200
 「ザ」の属251
 「ゾ」の属270
 「ソ」について359
 「ゼ」の属361
 サ行音ザ行音文末詞200, 365, 398
 サ行音系——ザ行音系273
 ザ行音文末詞252, 256, 259, 261,
 362, 397, 398, 399
 ザ行音感声系文末詞364
 サ行音199, 248
 ザ行音199, 270
 「サ」音系250
 「サ」音系文末詞211, 212
 「サ」の属200
 南島地方の「サ」音形文末詞201
 九州地方の「サ」ほか204
 中国四国地方の「サ」ほか212
 近畿地方の「サ」ほか215
 中部地方の「サ」ほか221
 関東地方の「サ」ほか230
 東北地方の「サ」ほか236
 北海道地方の「サ」ほか249
 「サ」音形203, 204
 「サ」音の文末詞201
 「サ」音形文末詞201
 「サ」文末詞211, 214, 230, 250
 サ76, 199, 200, 201, 202, 203, 204,
 205, 206, 207, 212, 213, 214, 217,
 221, 226, 229, 232, 270
 サー203, 205, 215
 サ——サイ158, 238
 サ——サエ158, 229
 サ→エ220

さ—た ……………240
 「サ」の文末表現……………3
 「サ」の用法……………250
 「サ」の機能……………251
 「サ」の関東性と関西性……………251
 「サ」の属—「ザ」の属 ……………251
 「ザ」の属……………251
 九州地方の「ザ」ほか ……………252
 中国地方の「ザ」……………259
 四国地方の「ザ」ほか ……………261
 近畿地方の「ザ」ほか ……………262
 中部地方の「ザ」ほか ……………264
 東国地方の「ザ」ほか ……………268
 「ザ」文末詞……………270
 ザ ……………199, 251, 252, 263, 266, 269, 270
 ザー ……………251, 255, 264, 266, 268, 269
 ザ—ザイ ……………158
 ザ—ゾ ……………252
 ザ—ダ ……………260
 サ—イ ……………209, 216
 ザ—イ ……………255, 256, 258
 サ—ン—サン ……………212
 ザ—ン ……………256
 サイ ……170, 201, 202, 203, 205, 209, 212,
 217, 218, 225, 228, 236, 240, 244,
 246
 サエイ ……………246
 サエー ……………246
 サエアー ……………241
 サイ—セー, セ ……………211
 サイ—セ ……………236, 363
 サイ—セ, シェー, せあ ……………241
 さい ……………206
 サイ—クサイ ……………210
 ザイ ……170, 199, 251, 252, 253, 254, 255,
 256, 257, 258, 259, 261, 265, 269,
 272, 288, 297
 ザイ, ジャー, ゼー, ジェー, ゴー

……………257
 ザイ—ゼ ……………363
 ザイ—ゾヨ ……………257
 ザイ—ダイ ……………266
 ザイナ ……………260
 サエ ……127, 137, 141, 153, 155
 「サエ」の「セー」……………125
 ザエ ……136, 151
 ざえ ……………151
 ザエ ……268, 269
 さそいや命令の「エ」……………105
 サッ ……………238
 サナ ……………230
 サナー ……………218
 サヨ ……5, 55, 57, 75, 87, 97, 99
 サン ……208, 224, 228
 ザン ……251, 252, 254, 256, 261, 262, 263
 「ザン」「ジャン」……………254

〔シ〕・〔ジ〕

「シ」文末詞—「セ」文末詞 ……248
 シ〔Ī〕—ハ……………248
 —セア……………248
 ジ ……373, 384, 389
 じ ……………355
 シア—セア ……………248
 じー ……………389
 シエ ……………242
 ジエ ……391, 392
 ジエ—ヂエ ……………396
 シエー ……208, 238
 ジエー ……370
 ジエー—ジエー ……391
 ジエー (ジェン)……………391
 自己主張の「ドエ」……………116
 指定断定助動詞「ジャ」……………50, 316
 指定断定助動詞「ダ」……………406

助動詞「ダ」本源の「ダ」文末詞
406

指定断定助動詞「ヤ」50, 218

じゅん354

じゆ354

シヨ53

シヨ95

ジヨ33, 34

ジヨ5, 44, 48, 272, 290, 293, 299,
 303, 304, 321, 323, 327, 329, 333,
 336, 339, 341, 345, 347, 356

ジヨ——ヂヨ285, 325

ジヨ——ジョイ326

ジヨ——デヨ314, 319, 326

ジヨ——ゾ320, 323

じょ377

じょう357

[ズ]

ズアエー154

ズイ303

ズイヨ33

ズエ108

ズヤ34

ズ(ヅ)ヤ303

ズヨ34

ズン339

[セ]・[ゼ]

セ 199, 236, 238, 247, 249, 364, 383,
 385, 393

セ247

「ゼ」の属361

南島方言の中の「ゼ」365

九州地方の「ゼ」ほか366

中国地方の「ゼ」ほか370

四国地方の「ゼ」ほか374

近畿地方の「ゼ」ほか378

中部地方の「ゼ」ほか383

関東地方の「ゼ」ほか390

東北地方の「ゼ」ほか393

北海道地方について397

ゼ120, 199, 266, 267, 303, 362, 363,
 371, 372, 374, 375, 378, 379, 380,
 385, 387, 388, 392, 393, 395, 397

ゼ——ジエ, ゼイ, ゼン, ジ364

ゼ——ジエ, ゼン, ゼイ377

ゼ——ジエ, ジ367

ゼ——ジエ, じい366

ゼ——ジ370, 380, 396

ゼ——ジ, ズイ373

ゼ——ジー389

ゼ——ジイ395

ゼ——ZĪ395

ゼ(ジエ)366, 370, 372, 376, 394, 395

ゼ(じえー)377

ゼ——ジエ381, 383, 386

ゼ——ジエー368

ゼ——ゼイ382

ゼ——セ364

ゼ——デ372

ゼ——が392

セア242, 244, 247, 248, 249

セア242

セア242

セア393, 395

ゼイ386

ぜい386

ゼイナ387

ぜいな386

「セー」「ゼ」246

セー——ヘエ241

ゼー——ヂー365

ゼー(ペー)384

ゼー→デー372
 ゼカ457
 ぜす395
 ゼナ→ジュナ387
 ぜん386
 ゼナーシ376
 ゼネ384, 386
 ゼモ→ゼーモ388
 ゼヤ41, 374, 376
 ぜや395
 ゼヨ 5, 38, 41, 57, 73, 81, 374,
 376
 ゼヨ→ジョー371
 ゼン376, 386, 387, 388
 ぜん386
 ゼン→セン383

[ソ]・[ゾ]

[ソ] 音形361
 [ソ] について359
 ソ225, 227, 270, 336, 359, 361
 ソ→ソー360
 —ヨソ360
 「ゾ」の属270
 南島地方について273
 九州地方の「ゾ」ほか278
 中国地方の「ゾ」ほか298
 四国地方の「ゾ」ほか305
 近畿地方の「ゾ」ほか318
 中部地方の「ゾ」ほか330
 関東地方の「ゾ」ほか343
 東北地方の「ゾ」ほか349
 北海道地方の「ゾ」ほか358
 ゾ5, 199, 200, 253, 264, 266, 270, 286,
 287, 288, 291, 292, 294, 295, 296,
 298, 299, 300, 301, 302, 304, 305,
 306, 307, 310, 311, 313, 319, 322,

324, 325, 327, 328, 329, 330, 331,
 332, 335, 337, 339, 341, 342, 343,
 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351,
 354, 361, 364, 372, 378
 ぞ353
 ゾ→ド316, 317, 318, 319, 409
 ゾ(ド)355, 356, 358
 ゾ→ド→ロ271, 313, 321
 ゾ(ド)→ト352
 ゾ→ヅ350
 ゾ→ヅ(ズ)353
 ゾ→バイ294
 ゾイ158, 170, 271, 272, 287, 299, 301,
 303, 304, 307, 308, 311, 313, 314,
 317, 319, 327, 329, 333, 334, 335,
 337, 338, 340, 341, 346, 348, 351,
 362, 389, 397
 ゾイ→ゾエ314
 ゾイ→ソイ314
 ゾイ→ゼ289
 ゾイ→ドイ312, 322, 325
 ゾイ(ドイ)177
 ゾイカ488
 ゾイシ323
 ゾイナ271, 389
 ゾイヤ271
 ゾ(ド)イヨ5
 ゾエ110, 113, 116, 117, 118, 119, 120,
 125, 127, 130, 132, 137, 143, 147,
 149, 150, 151, 271, 272, 309, 312,
 316, 349, 362
 ゾエモ271
 ゾエーモ339
 ゾー→ドー286
 ゾーイ325
 ゾーカイ289
 ソ(ホ)カ446
 ゾカ271, 456

ソキヤー446
 ソセア249
 ズナ.....271, 301, 309, 312, 316, 318, 320,
 337
 ズナー306
 ズナン271
 ズネ271, 309, 312
 ズノ271
 ズノー305
 ズハ271
 ズマイ271
 ズヤ271, 309, 312
 ズヤネ271
 ズヨ27, 29, 31, 36, 38, 40, 44, 47, 55,
 57, 59, 60, 61, 64, 67, 69, 73, 77,
 271, 305, 309, 312, 316, 337
 ゾヨ38
 ゾヨ308
 ズ(ド)ヨ5
 ズヨ→ソヨ43
 ズヨ→ゾイ272
 ズヨ>ゾイ>ザイ252, 259
 ズヨノ41
 「それ」系の「ソ」文末詞359
 ズン.....271, 272, 295, 307, 308, 311, 337,
 338, 340, 350, 351, 352, 354, 456
 ズン—ドン290
 ズン—じゃん353
 —ぢよん354
 —ヂョン355

[タ]・[ダ]

「ダ」文末詞 「ンダ」文末詞401
 「ダ」文末詞403, 405
 ダ399, 400
 ターエ107
 ダーエ144

ダーカン446
 ターヨ17
 ダーヨ77
 「タイ」文末詞405
 タイ201, 202, 203, 232, 255, 259
 タイエ—タエ106
 だい159
 ダイ→ダー405
 「ダイ」の「ダー」207
 ダイ→ダン159
 タエ105, 106, 107
 ダエ107, 115, 130, 140, 141, 144
 ダエナー141
 ダカ489, 499, 501
 ダカイ446, 477, 489, 493
 ダカナ488
 「ダ」感声の文末詞401, 406
 「ダ」間投詞403
 ダキヤー477
 ダゼ388
 ダゾ340
 ダゾン339
 タナヨ20
 ダネ406
 タヨ18, 20
 ダヨ72, 75, 77, 80, 84, 86, 92, 97
 ダヨ—エ143
 単純よびかけ性の「エ」140
 単純よびかけ性の「アノ ヨー。」式
 の「ヨ—」86
 単純よびかけ性の「ヨ」80, 83, 87,
 88, 89, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 99
 →よびかけ性の「ヨ」65, 67, 81

[チ]・[ヂ]

ヂェ395
 チカン434

チャヨ	64
ヂュー	354
チヨ	90
チヨ	357
ヂヨ	30
ぢょい	337
長呼を受けての「イ」	166

〔ツ〕・〔ヅ〕

ヅ (ズ)	350
ヅ→ゾ	355
ツァ	336
ツーヨ	87
ツエ	105, 106
づエ	156
ツオ	336
ツォ	347, 350, 353
つオ	352
ツォ→ゾォ	348
ツォイ	351
ツォー	356
ツカ	425, 429, 434, 438, 440
ツカ	429, 438
ツカイ	429, 446
ツカイ—ツカーイ	425
ツカイ	429, 438
ツカエ	104
ツカヨ	41
ツカン	429
ツカン	429, 434
ツキヤー	429, 434
ツキヤー	429, 438
ツケ	425, 440
ツケ	429
ツケー	429, 438
ツコー	438
ツサ	209

ツゾヨ	41
ツド	287
つど	345
ツヨ	5, 15, 16
つよ	84

〔テ〕・〔デ〕

「デ」文末詞	124, 402
デ	301, 314, 327, 329, 331, 363, 364, 374, 378, 382
デー	370
〜て オーセ	375
→〜 トーセ	376
→〜 トーゼ	376
テカ	435, 474, 489, 493, 499, 501
デカ	456, 457, 473
テカイ	474
デカイ	456, 457
テケ	499, 501
テサ	232, 251
「〜ですイ」式の言いかた	171
「〜ですイ」「〜ますイ」	171, 174, 175, 177
「〜ですイ」や「〜だい」	197
デゾ	316, 324
デゾヨ	43
デド	323
テバサ	232
テバヨ	88
テヨ	5, 60, 77, 90, 100
てよ	84
デヨ	5, 27, 29, 30, 34, 43, 47, 57, 58, 60, 61, 67, 330
デヨ←ジョ	315
「デヨ」からのものかと思われる「ジョ」	5

[ト]・[ド]

ト349, 414
 ド273, 275, 278, 279, 282, 286, 287,
 288, 295, 299, 301, 302, 304, 319,
 322, 324, 325, 327, 329, 330, 331,
 332, 335, 337, 339, 341, 342, 343,
 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351,
 354
 ド——ドッ278
 ド——ロ279, 283
 ド→デ319
 問いの「か」が、当方言では「ド」
356
 ド(助) 疑問のカに当る357
 ドイ271, 272, 299, 301, 302, 307, 317,
 319, 321, 327, 330, 331, 341
 ドイエ120
 ドイシ271
 ドイナ271
 問いの「エ」104
 問いの「ガ」415
 問いの「ヨ」(問いの表現を完結させ
 る効果の「ヨ」)101
 ドイヤ271, 327
 トイヨ31
 ドイヨ73
 トエ106, 123, 125
 ドエ116, 122, 271
 ドエノ271
 ドエヤ271
 ドー271, 274, 276, 277
 ドーイ325
 トーエ127
 トーゾヨ375
 トカ13, 425, 429, 434, 438, 440
 トカ(「トガ」も)422
 トカ(「トカイ」なども)414

トカイ422, 429, 434, 438, 477, 489
 トカイ——トカーイ425
 トカイ→ツカイ422
 ドカイ——ゾカイ423
 トカエ104, 111
 トカヨ422
 トカン423, 429, 434, 440
 トキャ429
 トキャー429, 434, 438
 特定文末部の「イ」165
 トケ422, 440
 トケ——ツケ425
 トケー438
 トコトヨ62
 トサ208, 209, 225, 227, 228, 231, 234,
 239, 241
 ト(ド)サ204, 237, 240, 242, 245
 トサイ206
 トザイ254, 258
 トサナ206
 トジョ293
 「(ド)ス エ」——「(ド)ッ セ」
129
 トゼ369
 トゼー368
 トセー210
 とセエ241
 トゾ290, 293, 296
 トゾ——トジー291
 ドゾ294
 トゾイ290
 ドチン328
 トド287, 296
 トナ13
 ドナ271
 ドノ271
 ドヤ271
 ドヤナ271

トヨ	5, 12, 13, 15, 16, 17, 20, 21, 22, 24, 31, 62, 63, 67, 69, 77, 86, 87, 90, 282
トヨ・ヨ	10
トヨ←トイ	272
トヨ>トイ>タイ	259
トヨ←タイ	22, 24
トヨ(トヨ)	94, 95
トヨ——トヨ	100
ドヨ	13, 16, 27, 29, 38, 44, 55, 57, 271, 327
ドン	271, 272, 307

〔ナ〕

ナ行音	199
ナ行音文末詞	2, 157, 161, 200, 397, 398
ナ	2, 6, 171, 199
ナーイ	170
ナーエ	106, 107, 110, 112, 113, 116, 119, 120, 123, 125, 127, 130, 131, 137, 143
ナーエー	113, 125, 146
ナーヨ	12, 27, 47, 55, 57, 59, 75, 77, 80, 84, 86, 89
ナーレ	47, 120
ナイ	158, 170, 197
ナイエ	133
ナイヨ	52
ナエ	110, 112, 116, 117, 119, 121, 123, 131, 132, 136, 137, 142, 143, 147, 149, 151
ナエー	143
ナエン	149
ナェ	127
ナサ	244, 248, 249
ナサッ	245

ナシヨ	5
ナスェエ	106
ナゾ	326
ナヨ	5, 26, 47, 51, 55, 56, 59, 64, 67, 75, 77, 80, 84, 86, 89, 94
ナレ	47
ナン	272
ナンエ	105
ナンヨ	5

〔ニ〕

〔ニ〕 文末詞	161
ニ	157
ニーヨ	5, 52
〔ニーヨ〕の〔ニヨ〕	5
ニヨー	57

〔ネ〕

ネ	157
ね	4
ネ——ネイ	158
ネーエ	137, 148
ネーカ	474
ネーカイ	474
ネーヨ	27, 52, 55, 75, 80, 84, 86, 87
ネサ	208, 242, 243, 248, 249
ネシ	243
ネハ	243
ネハ——ネサ	243
〔ね〕や〔よ〕と言いかえてもよい〔エ〕	104
ネヨ	5, 19, 52, 55, 60, 61, 69, 80, 84, 86

〔ノ〕

ノ	2, 158, 199
---	-------------

ノイ158, 170, 181
 ノイシ——ノイセ381
 ノイヨ5, 73
 ノエ105, 112, 113, 116, 123, 126, 143,
 155, 425
 ノーイ170
 ノーエ112, 116, 119, 127, 139, 141
 ノーエ——ノーヤ116
 ノーカイ475
 ノーケー414
 のーせ——ノーシ376
 ノーゼ376
 ノーヤヨイ。37
 ノーヨ57
 ノカ425, 435, 440, 442, 446, 456, 473,
 474, 475, 477, 488, 493, 499
 ノカイ435, 438, 446, 456, 473, 474,
 475, 477, 488, 493
 ノカヨ77
 ノカンエ123
 ノケ501
 ノケ (ゲ)493
 ノサ217, 231, 237, 245, 251
 ノサ——ノッサ239
 ノシエ125
 ノシヨ5, 53
 ノジョ320
 ノセ250
 ノゾ309, 318, 328
 ノゾヨ38, 43
 ノド328
 ノヨ5, 15, 23, 27, 31, 41, 52, 59, 60,
 72, 75, 77, 81, 84, 86, 88, 92, 94,
 95, 99
 ノヨ・シヨ49
 ノヨナー24
 ノヨノー24
 ノンカ414, 446, 473, 474, 488

ノンカイ446, 473
 ノンゾ309
 ノ (ン) ド300

[バ]

バーエ107
 バイ209, 255, 256
 バイエ105, 106
 バイイェー106
 バエ105, 106, 107
 バヨ5, 20
 バンタ——パン255

[ヒ]

ヒー407
 ヒャー407

[ブ]

文末訴え「ア」音152, 153
 文末訴えイ音166, 171
 文末訴え音の「イ」180, 181, 182
 文末訴えかけ用の「イ」164
 文末特定音としうる「イ」187
 「文末訴えイ音」の待遇効果167
 文末「ダ」音399

[メ]

命令表現文での「ロ」502
 命令表現文での「ロ」と禁止命令表現
 文での「ナ」と502

[モ]

モーサ225

「モン」系の文末詞	415
モノエー	152
モノカ	489, 493
モンカ	438, 442, 456, 474, 489, 493
モンカイ	435, 440, 489
モンカナー	494
モンサ	204, 209
モンヨ	87

〔ヤ〕

ヤ行音	199
ヤ行音文末詞	2, 3, 102, 161, 164, 197, 200, 398
ヤ	2, 3, 4, 6, 39, 66, 76, 131, 165, 171, 197, 199
ヤー	3
ヤイ	158, 362
ヤエ	147, 149, 151
ヤェ	147
ヤカ	488
ヤカイ	475
ヤヨ	5, 97

〔ユ〕

「ユ」形	162
ユ	7, 12

〔ヨ〕

「ヨ」の属	2
南島地方の「ヨ」	6
九州地方の「ヨ」ほか	9
中国地方の「ヨ」ほか	24
四国地方の「ヨ」ほか	36
近畿地方の「ヨ」ほか	44
中部地方の「ヨ」ほか	59

関東地方の「ヨ」ほか	75	
東北地方の「ヨ」ほか	90	
北海道地方の「ヨ」ほか	97	
「ヨ」の用法	4, 10	
よびかけの「ヨ」	10	
感嘆の「ヨ」	10	
推量の「ヨ」	10	
説明の「ヨ」	10	
自己の意を言おうとする「ヨ」	10	
命令の「ヨ」	10	
さそいの「ヨ」	10	
問いの「ヨ」	10	
「ヨ」文末詞	4, 5	
ヨ	2, 3, 6, 66, 100, 101, 157, 167, 197, 199, 271, 375	
ヨー	ヨイ	158
ヨー	エ	117
ヨイ	4, 15, 19, 24, 26, 29, 35, 37, 40, 55, 59, 61, 63, 66, 73, 80	
ヨイ	ヨー	5
ヨイ	3	
ヨイ	37	
ヨイナー	175	
ヨウヨ	52	
ヨエ	117, 143	
ヨー	4, 6, 7, 8, 89	
「ヨー」の文末表現	3	
ヨー	オー	84
ヨー	3, 26	
ヨーイ	80	
ヨーネ	28	
ヨーノー	28	
ヨー	ヨー	26
ヨカイ	475	
ヨサ	5, 230	
ヨシヨ	5, 54	
「よ」と言いかえうる「イ」	170	
「よ」と言いかえてよいような「エ」		

.....105

ヨナ5, 18, 38, 46, 65, 87, 99

ヨナエ143

ヨネ5

ヨネア99

ヨノ5

ヨア29

よびかけ性の「ヨ」.....65, 81

よびかけ性の「アノ ヨー。」67

よびかけの「エ」.....110

ヨヤ5, 40

ヨヨ39, 73

 ↗
ヨヨ69

ヨヨ18

ヨン5, 12, 59, 66, 69, 74, 86, 97, 139

〔ラ〕

ライ176

ライエ124

ライヨ49

ラエ124, 125

ラカ489

ラケ476

ラケヤ476

ラニヨ49

ラヨ5

 ラヨ49

ラヨ→ヨラヨ53

〔リ〕

リョ——デヨ30

リョよ64

〔レ〕

レ——ラ53

〔ロ〕

ロ (ド)328

ロ280, 291, 292, 296, 298, 300, 322, 331, 332, 335

ロー283, 288

〔ワ〕

ワ207, 216

ワイ215

ワイエ123, 133

ワイショ49

ワイヨ5, 62, 92

 ワイヨ49

ワエ105, 111, 117, 118, 124, 125, 127, 131, 133, 134, 136, 138, 145, 147, 149

ワエゾ333

ワカ477

ワカイ475

ワカイ——ワカ476

ワカインシ476

ワサ217, 219, 220, 225, 227, 230, 251

ワサエ128

ワシテヨ49

ワシヨ54

ワダ219, 401

ワダヨ——ワラヨ55

ワダヨ——ダヨ53

ワヨ5, 41, 43, 47, 53, 55, 57, 67, 72, 75, 81, 84, 88, 90, 92, 95

ワヨイ80

ワレ473, 474

 ワレ474

「ワレ」形の文末詞「レ」415

「ワレ」系の文末詞「レ」「ラ」505

〔ン〕

ン	170
〔n〕音効果	3
ンエ	118, 119, 121, 123, 126, 130, 144
ンカ	440, 442, 446, 456, 473, 474, 475, 488
ンカイ	435, 446, 456, 473, 474, 475
ンカエ	110, 111, 116, 117, 121, 122
ンガゼ	376
ンガゼン	376
ンカヨ	41
ンカレ	473
ンキヤー	446
ンク	488
ンケー	442, 446
ンコ	488
ンサ	217, 219, 225, 236
ンジョ	316, 320, 323, 326

ンゼ	378, 379, 392
ンゼ (ジェ)	377
ンヅ	301, 309, 316, 320, 326, 328, 339
ンヅ (ド)	296
ンゾイ	309, 316, 320
ンヅエ	118, 119
ンヅヤナー	309
ンヅン	309
ンダ	401
ンヂーエ	125
ンド	309, 320, 322, 323
ンドー	6
ンドイ	320, 323
ンドエ	116
ンナノエ	123
ンナノー	123
ンナノシ	123
ンニョー → ノヨー	42
ンヨ	5, 24, 27, 29, 38, 43, 44, 47, 49, 67, 87

II 事項索引

[ア]

[ai] 連母音相互同化……443, 455, 466,
467, 470, 485, 492

アクセント……33, 279

アクセント形式……38

アクセント状況……466

アクセントの高音……249

[イ]

意義素……411

異形……271

異形分化……271

出雲弁……34

一体者・一完結形……159

意味作用……364

伊予弁……36

[ウ]

訴え音……157, 270

訴え（訴えかけ）音……399

訴え効果……160, 170, 242

訴え効果の拡充……244

[オ]

[oi] 連母音の相互同化……397

沖縄方言……203

男ことば……364

[o] 母音の文末詞……271

音韻……32, 314

音訛……271, 362, 452, 455

音形……5, 204, 252, 269

音形態……199

音効果……161, 188, 271

音作用……251

音声効果……200

音声特徴……135

音相……197, 201, 270, 466

音調……159

音転訛……454

音尾……174

[カ]

「カ・カイ」の存立と活動……415

係結……478

関西系……71, 157

関西性……251

感声……272

感声系の文末要素……53

感声系文末詞……2, 409

感声的……157

感声的なもの……199, 200

感声的文末詞……100, 198, 199, 200, 399,
407, 410

感声的な単純文末詞……102, 161

感嘆詞……33, 137

間投句……74, 85

間投詞……400, 402

感動詞……164, 476

感動表示……410

関東弁……57

関東性……251

完了表現法……71

〔キ〕・〔ギ〕

機能的価値	29
疑問表現	412
九州弁	232, 405
九州方言	169, 170, 173, 297
九州方言域	170
旧東京語	81
共時論的見地	199
共時論的処置	5, 159, 364, 252, 261
共通語	101, 210, 215, 247, 279
共通語知識	101
京都ことば	130, 157, 183
京都弁	114, 128
近畿ことば	131
近畿四国弁	119
近畿弁	45, 122
近畿弁の情調	477
禁止形	502
禁止表現法	284
禁止命令形	507

〔ケ〕・〔ゲ〕

系脈	132, 261, 270
言語音	153
言語機能	272, 411
言語行動	470
言語習慣	456
言語生活	100, 501
言語島	505
言語表現	160
言語風俗	232
現実音体	272
原生単純形文末詞	410
原生的な感声文末詞	199
原態	410

現代語	251
現代語の共時面	251
現場での一体者としての存立	159

〔コ〕・〔ゴ〕

効果	157
広母音	157
語詞	314
「語」次元	160
古態の慣用語法	478
ことば調子	31, 57
ことばの男女差	76, 226

〔サ〕

サ行音ザ行音	199
サ行音ザ行音文末詞	411
薩隅地方	419
薩隅方言	419

〔シ〕・〔ジ〕

指示作用	251
指示性	200, 251
指示代名詞系の転成文末詞	478
自然音訛	455
指定断定助動詞	93, 218, 250, 400
「ジャ」「ヤ」助動詞	406
終助詞	502
純感声的	293
準感声的文末詞	199, 212
準感声的なもの	409
純粹感声音	164
承接	412
助辞	410
助詞系の転成文末詞	414
女性系のことば	157

女性ことば131, 197
 女性的な表現法119

〔セ〕・〔ゼ〕

接尾辞208
 漸強摩擦音161

〔ソ〕

相互同化362, 375, 412, 466, 467, 470
 尊敬法助動詞46, 281

〔タ〕・〔ダ〕

待遇効果135, 160, 167
 待遇上の表現効果197
 待遇品位167
 対称代名詞37
 対人表現の訴え398
 胎生173
 対話の文表現201
 濁音詞398
 濁音の文末詞398
 短呼179, 215
 単純感声272
 単純感声的な文末詞272
 単純感声的なもの199, 201, 272
 単純よびかけ42, 65
 単純よびかけ性100

〔チ〕

長形の文末詞123
 長呼166, 167, 168, 169, 172, 173
 長呼習慣170

〔テ〕

転訛409
 転訛形279, 409, 413, 415, 427, 428,
 432, 435, 439, 483, 484
 転成の助詞系文末詞414
 転成文末詞359, 411

〔ト〕・〔ド〕

東京語41, 70, 210, 212
 東京ことば157
 東京弁210, 231, 232, 363
 東国系71
 動詞未然形261, 262
 動詞命令形161, 503
 動詞連用形48, 50, 459
 動詞連用形の敬意表現法39
 動詞連用形用法23, 42
 動詞連用形利用69
 動詞連用形利用の勸奨表現法87
 特異な命令表現法244
 特定音訛455
 特定詞412
 特定文末部160, 171, 172, 191
 独特の訴え形式242
 土佐弁41

〔ナ〕

ナ行音文末詞410, 411, 415
 南海道系脈473
 南島方言164, 204, 273, 415
 南島方言状態と九州方言状態274

〔ハ〕

八丈島方言	233
発音基底	171
発音基底<音韻地盤>	174
発音習慣	171
発音の強調形	191
発言活動	242
話し手	415
反語法	306, 311

〔ヒ〕

比川方言	164
非感声化	410
非感声的な文末詞	200
表現効果	197, 271
表現生活	200, 501
表現品位	271
表現法	160
表現領野	271
品位	157, 413

〔フ〕・〔ブ〕

複合形	4, 168, 197, 271, 310, 343, 358, 429, 442, 456, 475, 501
複合形のアクセント相	415
複合形文末詞	12, 171, 173, 204, 219, 230, 309, 312, 316, 318, 320, 323, 326, 328, 333, 339, 340, 414, 415, 429, 434, 438, 440, 446, 473, 488, 493, 499
文アクセント	113
分化	412
文表現	160, 164, 201
文表現末尾	410
文表現末尾での訴え(訴えかけ)音	399
文法	314
文末訴えイ音	170

文末訴え音	160, 167, 168, 169, 170, 178, 181, 189, 190, 197, 247, 272, 395, 498
文末詞	2, 101, 157, 160, 179, 400, 402, 409, 412, 467, 476
文末詞<文末助詞>	502
文末詞に関する複合形	158
文末の特定の訴えことば	242
文末の特定の訴え要素	185, 400
文末の特定の話部	173
文末部	170

〔ホ〕・〔ボ〕

母音効果	157
母音の広狭	102
方言	314
方言事象の存立	269
方言上の風土差	177
方言人	470
方言の風土	212
方言の「ヨ」に直結した共通語の「よ」	101

〔ミ〕

未然形	261, 262
宮古西里方言	203
未来化表現法	19, 66, 69
未来表現化	71

〔ム〕

無敬態→敬態	281
--------	-----

〔メ〕

命令→勸奨	96
-------	----

命令←—ていねいな命令 (勸奨).....101
 命令←—禁止命令.....96, 101
 命令形..... 4, 14, 19, 39, 161, 179, 292,
 502, 506
 命令表現161, 293, 305, 372
 命令表現法66, 69

[モ]

問尋413
 問尋法163

[ヤ]

ヤ行音文末詞411, 415

[ヨ]

「ヨ--」のよびかけの美しさ.....101
 よびかけ音399
 よびかけ性の「ヨ」.....65
 よびかけの効果162
 「ヨ」文末詞利用.....101

[レ]

連用形.....14, 39, 42, 45, 48, 50, 69

[ワ]

話者の意識167
 話者の意図167

藤原与一(ふじわら・よいち)

略 歴

明治42年 1月 愛媛県に生まれる
昭和12年 3月 広島文理科大学卒業
昭和47年 3月 広島大学文学部教授を退官
現在 広島方言研究所をいとなむ
広島大学名誉教授・文学博士

主要著書

『方言学』(三省堂・昭和37年)

『方言研究法』(東京堂出版・昭和39年)

『方言研究の回顧と展望』(方言研究叢書第1巻)

(三弥井書店・昭和47年)

『昭和日本語の方言』第1・2・3巻(同上・昭和48・49・51年)

『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻・説明書

(東京大学出版会・昭和49・49・51年)

昭和60年 5月20日 ©

著 者 藤 原 与 一

発行者 和 田 欣 之 介

発行所 東京都中央区 株式会社 春陽堂書店
日本橋3-4-16

印刷所 三協美術印刷・製本所 丸山製本